鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（41）

国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

上野原遺跡

第1分冊

（第2～7地点：縄文時代早期編1）

2002年3月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

3類土器

巻頭図版 2

上野原台地航空写真

2・3地点縄文時代早期遺構検出状況（1）

2・3地点縄文時代早期遺構検出状況（2）

2・3地点縄文時代早期遺構検出状況（3）

4号竪穴住居跡検出状況（埋土パターンB）

16号竪穴住居跡（埋土パターンB）

13号竪穴住居跡①（埋土パターンB）

13号竪穴住居跡②（埋土パターンB）

38号竪穴住居跡（埋土パターンA）

1・2号竪穴住居跡（埋土パターンC）

2号連穴土坑

11号連穴土坑内の焼土等

46号竪穴住居跡と15・16号連穴土坑

巻頭図版 8

縄文時代早期中葉の土器（貝殻文系）

縄文時代早期中葉の土器（押型文系）

序　文

この報告書は，国分上野原テクノパーク造成工事に先立って県立埋蔵文化財センターが実施した上野原遺跡第４工区の縄文時代早期に関する埋蔵文化財発掘調査の記録です。

上野原遺跡は，今からおよそ9,500年前の集落遺跡で，平成９年度の現地公開以来多くの見学者が訪れ遺跡への関心が高まっています。また，平成11年１月には国の史跡に指定されました。現在，遺跡は「上野原縄文の森」として整備中で，平成14年度秋には埋蔵文化財の拠点施設としてオープンします。

この報告書が，本県の縄文文化を広く情報発信するとともに，文化財保護のために活用される事を願っています。

最後になりましたが，発掘調査から現地公開・報告書作成まで多くの方々の御支援・御協力をいただきました。心から感謝いたします。

平成14年３月

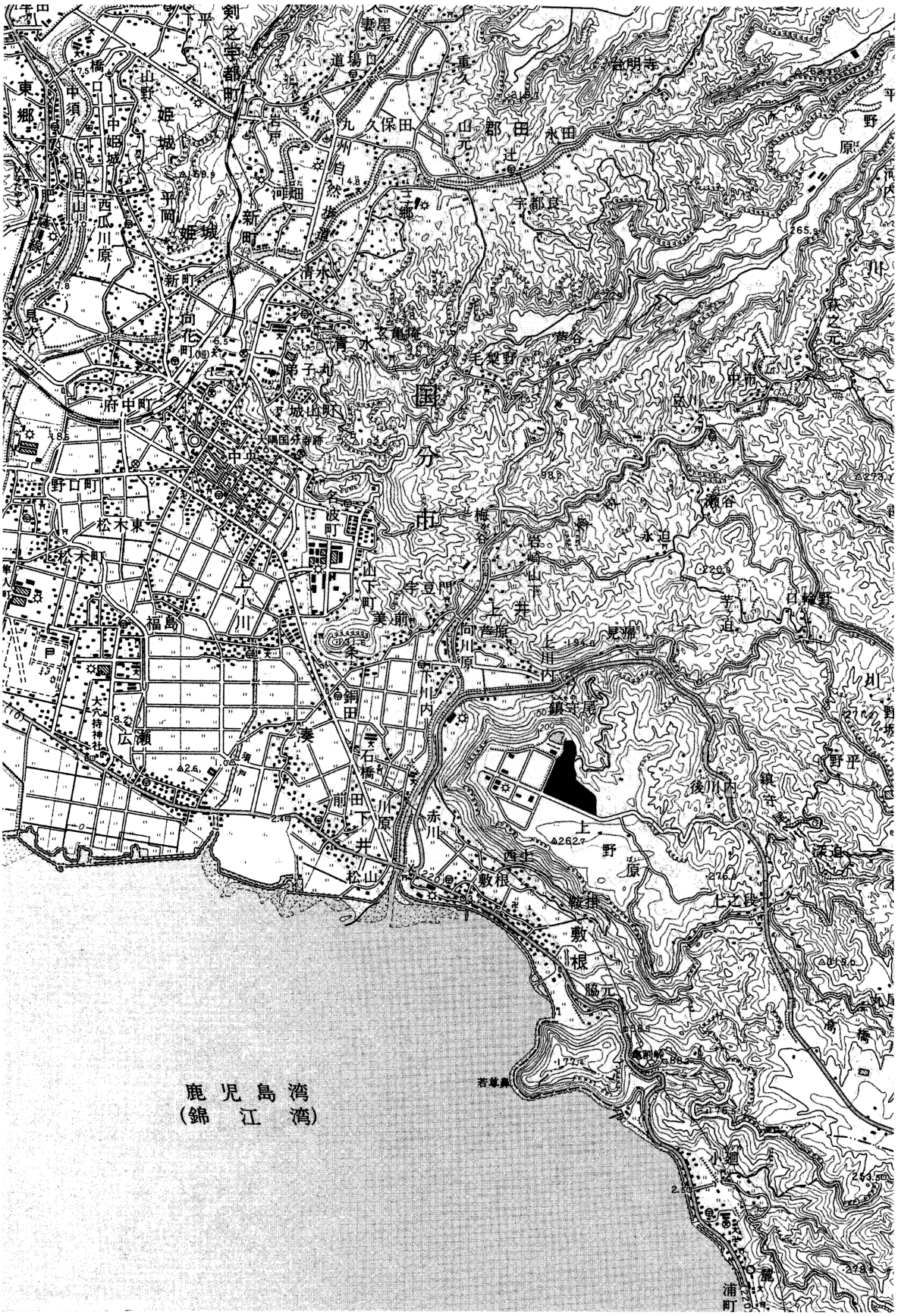
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　井上　明文

報告書抄録

ふりがな	うえのはらいせき
書名	上野原遺跡
副書名	国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	41
編著者名	森田郁朗・今村敏照・中村和美・黒川忠広
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-5652　鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地　TEL0995-65-8787
発行年月日	2002年3月29日

フリガナ 所蔵遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積㎡	調査原因
上野原遺跡（うえのはらいせき）	鹿児島県国分市（かごしまけんこくぶし） 川内（かわうち）字田吹 鍋迫 堂ケ尾・駒迫 十文字	462128	10-16	31° 42′ 39	130° 48′ 10	1995.4.24 ～ 1997.9.14	59,160	国分上野原テクノパーク第4工区造成工事

所蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野原遺跡	集落跡	縄文時代早期	竪穴住居跡52基 集石140基 連穴土坑16基 土坑約270基 道跡２本	前平式土器 加栗山式土器 吉田式土器 石坂式土器 下剥峯式土器 桑ノ丸式土器 押型文土器 中原式土器 平栫式土器 塞ノ神式土器 石鏃 石斧 礫器 磨石 石皿	



遺跡位置図（50,000分の１）

例　言

1　本書は，国分上野原テクノパーク第４工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち縄文時代早期に関する報告書である。
2　本書は，４つの分冊で構成される。
3　発掘調査は，鹿児島県地域振興公社の依頼を受けて鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4　発掘調査における測量・実測・写真撮影等は，平成７・８・９年度の調査担当者がおこなった。
5　整理作業は県立埋蔵文化財センターでおこなった。
6　本書掲載の測量・実測図，出土遺物の実測及び浄書は，整理作業員の協力を得て整理担当者がおこなった。なお，出土遺物の実測及び浄書の一部は，(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
7　出土遺物の写真撮影は，黒川忠広がおこない鶴田靜彦・横手浩二郎の協力を得た。
8　遺物番号は，本文及び挿図・図版の番号と一致する。
9　先に刊行された概要報告書との番号などの相違は，本書が優先される。
10　遺構実測図に用いたスクリーントーンは未調査部分を示す。
11　本書に用いたレベル数値は全て海抜絶対高である。
12　本書の執筆分担は以下の通りである。

第１章…… 黒川忠広
第２章　第１・２節 …… 森田郁朗
　　第３節 …… 今村敏照
第３章…… 森田郁朗
第４章…… 黒川忠広
第５章　第１・２節 …… 黒川忠広
　　第３節 …… 森田郁朗・今村敏照・黒川忠広
　　第４節 …… 黒川忠広
第６章…… 黒川忠広
第７章…… 中村和美
第８章…… 森田郁朗
第９章　第１～５節 …… 黒川忠広
　　第６節 …… 森田郁朗・今村敏照・中村和美・黒川忠広

13　本書各分冊の編集は県立埋蔵文化財センターでおこなった。

総目次

第１分冊
第１章　調査の経過と組織
第１節　第４工区の調査に至るまでの経過と経緯
第２節　調査の組織
第３節　調査の概要と経過
（1）調査の概要
（2）調査の経過
第２章　位置と環境
第１節　位置
第２節　歴史的環境
第３節　周辺地域における縄文時代早期の遺跡
第３章　層位
第４章　縄文時代早期の調査概要
第１節　調査の概要
第２節　整理作業の方針
第３節　遺構の概要
（1）竪穴住居跡
（2）連穴土坑
（3）集石
（4）土坑
（5）道跡
第４節　遺物の出土状況とその概要
（1）土器
（2）土器加工品
（3）石器
（4）軽石
第５章　縄文時代早期（２・３地点）の調査
第１節　２・３地点縄文時代早期の概要
第２節　グリッドごとの遺構概要
第３節　遺構
（1）竪穴住居跡
（2）連穴土坑
（3）集石
（4）土坑
（5）道跡
第２分冊
第４節　遺物
（1）土器
（2）土器加工品
（3）石器
（4）軽石
第３分冊
第６章　縄文時代早期（４地点）の調査
第１節　４地点縄文時代早期の調査概要
第２節　遺構
第３節　遺物
（1）土器
（2）石器
（3）軽石
第４節　小結
第７章　縄文時代早期（７地点）の調査
第１節　７地点縄文時代早期の調査概要
第２節　遺構
第３節　遺物
（1）土器
（2）石器
第４節　小結
第８章　追加調査
第１節　追加調査の概要
第２節　残地林地域の調査
第３節　国分市有地の調査
第４節　追加調査のまとめ
第９章　縄文時代早期の調査のまとめ
第１節　縄文時代早期の遺構について
第２節　縄文時代早期の土器について
第３節　縄文時代早期の土器加工品について
第４節　縄文時代早期の石器について
第５節　軽石及び軽石製加工品について
第６節　総括
付編１　科学分析
付編２　遺物データ
第４分冊
写真図版

第１分冊目次

第１分冊本文目次
第１章　調査の経過と組織……15
第１節　第４工区の調査に至るまでの経過と経緯
第２節　調査の組織……17
第３節　調査の概要と経過……21
（1）調査の概要……21
（2）調査の経過……23
第２章　位置と環境……27
第１節　位置……27
第２節　歴史的環境……29
第３節　周辺地域における縄文時代早期の遺跡……33
第３章　層位……37
第４章　縄文時代早期の調査概要……42
第１節　調査の概要……42
第２節　整理作業の方針……42
第３節　遺構の概要……43
（1）竪穴住居跡……43
（2）連穴土坑……43
（3）集石……43
（4）土坑……44
（5）道跡……45
第４節　遺物の出土状況とその概要……45
（1）土器……44
（2）土器加工品……49
（3）石器……49
（4）軽石……51
第５章　縄文時代早期（２・３地点）の調査……52
第１節　２・３地点縄文時代早期の概要……52
第２節　グリッドごとの遺構概要……52
第３節　遺構……63
（1）竪穴住居跡……63
（2）連穴土坑……136
（3）集石……141
（4）土坑……167
（5）道跡……167

第１分冊挿図目次

第１図　上野原テクノパーク造成区画及び地点……16
第２図　３・４工区のグリッド図……22
第３図　周辺遺跡地図……31
第４図　錦江湾奥部の縄文時代早期の遺跡……35
第５図　土層柱状図……37
第６図　E－５・７区土層断面図……38
第７図　F－９・10区土層断面図……39
第８図　G－10・11区土層断面図……40
第９図　H－14区土層断面図……41
第10図　２・３地点縄文時代早期遺構配置図……53
第11図　G－７・８区遺構配置図……54
第12図　F－７区遺構配置図……55
第13図　F－６区遺構配置図……56
第14図　E－７区遺構配置図……57
第15図　E－６区遺構配置図……58
第16図　E－５区遺構配置図……59
第17図　C・D－７区遺構配置図……60

第１８図　C･D－６区遺構配置図 …… 61
第１９図　C･D－５区遺構配置図 …… 62
第２０図　１・２号竪穴住居跡 …… 64
第２１図　１・２号竪穴住居跡内遺物 …… 65
第２２図　３号竪穴住居跡 …… 66
第２３図　３号竪穴住居跡内遺物（１） …… 67
第２４図　３号竪穴住居跡内遺物（２） …… 68
第２５図　４号竪穴住居跡 …… 69
第２６図　５号竪穴住居跡 …… 70
第２７図　５号竪穴住居跡内遺物 …… 71
第２８図　６号竪穴住居跡 …… 71
第２９図　７号竪穴住居跡 …… 72
第３０図　８号竪穴住居跡・住居跡内遺物 …… 73
第３１図　９号竪穴住居跡 …… 74
第３２図　包含層資料との接合関係 …… 75
第３３図　９号竪穴住居跡内遺物 …… 75
第３４図　10号竪穴住居跡 …… 76
第３５図　10号竪穴住居跡内遺物 …… 77
第３６図　11号竪穴住居跡 …… 78
第３７図　包含層資料との接合関係 …… 79
第３８図　11号竪穴住居跡内遺物（１） …… 79
第３９図　11号竪穴住居跡内遺物（２） …… 80
第４０図　12号竪穴住居跡 …… 81
第４１図　13号竪穴住居跡 …… 82
第４２図　14号竪穴住居跡 …… 82
第４３図　15号竪穴住居跡 …… 83
第４４図　15号竪穴住居跡内遺物 …… 84
第４５図　16号竪穴住居跡 …… 85
第４６図　16号竪穴住居跡内遺物 …… 86
第４７図　17号竪穴住居跡 …… 87
第４８図　17号竪穴住居跡内遺物 …… 88
第４９図　18号竪穴住居跡・住居跡内遺物 …… 89
第５０図　19号竪穴住居跡 …… 90
第５１図　19号竪穴住居跡内遺物 …… 91
第５２図　20号竪穴住居跡 …… 92
第５３図　21号竪穴住居跡 …… 93
第５４図　21号竪穴住居跡内遺物 …… 94
第５５図　22号竪穴住居跡 …… 94
第５６図　23・24号竪穴住居跡 …… 95
第５７図　23・24号竪穴住居跡内遺物（１） …… 96
第５８図　23・24号竪穴住居跡内遺物（２） …… 97
第５９図　25号竪穴住居跡 …… 98
第６０図　25号竪穴住居跡内遺物 …… 99
第６１図　26号竪穴住居跡 …… 100
第６２図　26号竪穴住居跡内遺物 …… 101
第６３図　27・28号竪穴住居跡 …… 101
第６４図　27・28号竪穴住居跡内遺物 …… 102
第６５図　29号竪穴住居跡 …… 103
第６６図　29・30号竪穴住居跡内遺物 …… 104
第６７図　30号竪穴住居跡 …… 104
第６８図　31号竪穴住居跡 …… 105
第６９図　包含層資料との接合関係 …… 106
第７０図　31号竪穴住居跡内遺物（１） …… 106
第７１図　31号竪穴住居跡内遺物（２） …… 107
第７２図　32号竪穴住居跡・住居跡内遺物 …… 108
第７３図　33号竪穴住居跡 …… 109
第７４図　包含層資料との接合関係 …… 110
第７５図　33号竪穴住居跡内遺物（１） …… 111
第７６図　33号竪穴住居跡内遺物（２） …… 112
第７７図　34・35号竪穴住居跡 …… 113
第７８図　34号竪穴住居跡内遺物 …… 114
第７９図　35号竪穴住居跡内遺物 …… 114
第８０図　36号竪穴住居跡 …… 115
第８１図　36号竪穴住居跡内遺物 …… 116
第８２図　37号竪穴住居跡 …… 116
第８３図　37号竪穴住居跡内遺物 …… 117
第８４図　38号竪穴住居跡・住居跡内遺物 …… 118
第８５図　39号竪穴住居跡・住居跡内遺物 …… 119
第８６図　40号竪穴住居跡 …… 120
第８７図　40号竪穴住居跡内遺物 …… 121
第８８図　41号竪穴住居跡 …… 122
第８９図　42号竪穴住居跡・住居跡内遺物 …… 123
第９０図　43号竪穴住居跡・住居跡内遺物 …… 124
第９１図　44号竪穴住居跡 …… 125
第９２図　45号竪穴住居跡 …… 126
第９３図　45号竪穴住居跡内遺物 …… 127
第９４図　46・47号竪穴住居跡 …… 128
第９５図　46・47号竪穴住居跡内遺物 …… 129
第９６図　48号竪穴住居跡 …… 129
第９７図　49号竪穴住居跡・住居跡内遺物 …… 130
第９８図　50号竪穴住居跡 …… 131
第９９図　50号竪穴住居跡内遺物 …… 132
第100図　51号竪穴住居跡 …… 133
第101図　51号竪穴住居跡内遺物 …… 134
第102図　52号竪穴住居跡・住居跡内遺物 …… 135
第103図　連穴土坑（１） …… 136
第104図　連穴土坑（２） …… 137
第105図　連穴土坑（３） …… 138
第106図　連穴土坑内遺物 …… 139
第107図　集石（１） …… 143
第108図　集石（２） …… 144
第109図　集石（３） …… 145
第110図　集石（４） …… 146
第111図　集石（５） …… 147
第112図　集石（６） …… 148
第113図　集石（７） …… 149
第114図　集石（８） …… 150
第115図　集石（９） …… 151
第116図　集石（10） …… 152
第117図　集石（11） …… 153
第118図　集石（12） …… 154
第119図　集石（13） …… 155
第120図　集石（14） …… 156
第121図　集石（15） …… 157
第122図　集石（16） …… 158
第123図　集石（17） …… 159
第124図　集石内遺物（１） …… 160
第125図　集石内遺物（２） …… 161
第126図　集石内遺物（３） …… 162
第127図　集石内遺物（４） …… 163
第128図　集石内遺物（５） …… 164
第129図　集石内遺物の接合関係 …… 165
第130図　集石内遺物（６） …… 166
第131図　土坑（１） …… 168
第132図　土坑（２） …… 169
第133図　土坑（３） …… 170
第134図　土坑（４） …… 171
第135図　土坑（５） …… 172
第136図　土坑（６） …… 173
第137図　土坑（７） …… 174
第138図　土坑（８） …… 175
第139図　土坑内遺物 …… 176

第１分冊表目次

第 １ 表　遺跡地名表 …… 30
第 ２ 表　縄文時代早期の遺跡地名表（錦江湾奥部） …… 36
第 ３ 表　各グリッドの遺構概要表 …… 63
第 ４ 表　竪穴住居跡一覧表 …… 63
第 ５ 表　２・３地点集石一覧表 …… 142
第 ６ 表　竪穴住居跡内出土土器観察表（１） …… 177
第 ７ 表　竪穴住居跡内出土土器観察表（２） …… 178
第 ８ 表　竪穴住居跡内出土土器観察表（３） …… 179
第 ９ 表　竪穴住居跡内出土土器観察表（４） …… 180
第１０表　竪穴住居跡内出土石器観察表 …… 180
第１１表　連穴土坑内出土土器観察表 …… 181
第１２表　集石内出土土器観察表 …… 181
第１３表　集石内出土石器観察表 …… 181
第１４表　土坑内出土土器観察表 …… 181

第１章　調査の経過と組織

第１節　第４工区の調査に至るまでの経過と経緯

昭和57年３月に「通商産業政策のあり方」に関する産業構造審議会の答申がなされ，昭和58年７月に「テクノポリス法（高度技術工業集積地開発促進法）」が施行された。鹿児島県ではこれを受けて，鹿児島市を母都市とし国分・隼人地区を中心とした２市12町が対象地区として指定された。

この構想を基に，鹿児島県は上野原台地において国分上野原テクノパークを計画し，先端技術産業の中核工業団地として企業の誘致を計画した。計画では，上野原台地の86haを４分割して実施することになる。

鹿児島県教育委員会では，テクノポリス構想の事業推進と文化財保護の調和を図るために，事前に該当地区全域の遺跡分布調査を昭和59年から３ヶ年にわたって実施することとした。この結果，国分市については昭和59年５月９日から５月24日にかけて分布調査が実施され，新たに34ヶ所の遺跡が確認された。

上野原台地では，事前の分布調査で遺跡を確認できなかった。そこで，昭和61年から造成工事が着手されたが，第１工区工事中に工事用道路等で複数の遺跡の存在が確認され，急遽発掘調査が実施された。これに併せて第４工区の確認調査を実施し，約57,000㎡に及ぶ遺跡の範囲が確認された。

平成３年度には，第３工区の確認調査を実施し約90,000㎡に及ぶ遺跡の範囲が確認され，平成４年度から６年度にかけて全面調査がおこなわれている。

第４工区の調査については，鹿児島県開発公社（現鹿児島県地域振興公社）と県教育委員会・県立埋蔵文化財センターの３者で協議し，埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るために記録保存を前提とした発掘調査を実施することとなった。発掘調査は，平成７年度から８年度にかけて全面調査を実施し，遺跡の重要性が判明した段階で方針を変更して実施した。また，平成９年度には遺跡の範囲確認のため，残地林部分及び国分市有地内において追加調査を実施した。

第１図　上野原テクノパーク造成区画及び地点

第２節　調査の組織

【確認調査】

昭和61年度

事業主体	鹿児島県開発公社		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	桑原　一廣
	〃	課長補佐	川畑　栄造
	〃	主幹	中村　文夫
	〃	主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長	立園多賀生
調査担当者	鹿児島県教育委員会文化課	文化財研究員	戸﨑　勝洋
	〃	主事	長野　眞一
	〃	文化財研究員	冨田　逸郎
調査事務担当	〃	主事	川畑由紀子

【全面調査】

平成７年度

事業主体	鹿児島県開発公社		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	内村　正弘
	〃	次長兼総務課長	川原　信義
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	彌榮　久志
	〃	〃	西園　羊二
	〃	〃	寺師　孝則
	〃	〃	冨田　逸郎
	〃	文化財研究員	中村　和美
	〃	〃	有馬　孝一
調査事務担当	〃	主査	成尾　雅明
	〃	主事	追立ひとみ

平成８年度

事業主体	鹿児島県地域振興公社		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉元　正幸
	〃	次長兼総務課長	尾﨑　　進

	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎
調査担当者	〃	文化財主事	彌榮　久志
	〃	〃	西園　羊二
	〃	〃	森田　郁朗
	〃	文化財研究員	今村　敏照
	〃	〃	黒川　忠広
調査事務担当	〃	主査	成尾　雅明
	〃	〃	前屋敷裕徳
	〃	主事	追立ひとみ

【追加調査】

平成９年度

事業主体	鹿児島県地域振興公社		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉元　正幸
	〃	次長兼総務課長	尾﨑　進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
調査担当者	〃	文化財主事	彌榮　久志
	〃	〃	森田　郁朗
	〃	〃	今村　敏照
	〃	〃	黒川　忠広
調査事務担当	〃	主査	前屋敷裕徳
	〃	〃	政倉　孝弘
	〃	主事	追立ひとみ

平成７年～９年度

調査指導者（職名は当時）

鹿児島県考古学会長　河口　貞徳
鹿児島大学教養学部教授　新田　栄治
鹿児島大学法文学部助教授　渡辺　芳郎
鹿児島大学法文学部教授　上村　俊雄
鹿児島大学法文学部教授　森脇　広
鹿児島大学法文学部助手　本田　道輝
鹿児島大学理学部助教授　小林　哲夫
鹿児島大学埋蔵文化財調査室主任　中村　直子

鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査員　　大西　智和
別府大学文学部名誉教授　　賀川　光夫
別府大学文学部教授　　橘　昌信
小郡市教育委員会　　片岡　宏二
福岡大学文学部教授　　小田富士雄
福岡大学文学部助教授　　武末　純一
大阪府教育委員会文化課係長　　広瀬　和雄
國學院大学文学部教授　　小林　達雄
國學院大学文学部教授　　加藤　晋平
東京国立文化財研究所　　宮本長二郎
文化庁記念物課主任文化財調査官　　岡村　道雄
文化庁記念物課文化財調査官　　西田　健彦
文化庁記念物課文化財調査官　　小池　信彦

【報告書作成】

平成11年度

事業主体	鹿児島県地域振興公社		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永　和人
	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事	中村　耕治
調査担当者	〃	文化財主事	中村　和美
	〃	文化財研究員	黒川　忠広
調査事務担当	〃	総務係長	有村　貢
	〃	主事	溜池　佳子

平成12年度

事業主体	鹿児島県地域振興公社		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上　明文
	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	青﨑　和憲

	〃	主任文化財主事	中村　耕治
調査担当者	〃	文化財主事	中村　和美
	〃	文化財研究員	黒川　忠広
調査事務担当	〃	総務係長	有村　貢
	〃	主事	溜池　佳子

平成13年度

事業主体	鹿児島県地域振興公社		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上　明文
	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	青﨑　和憲
	〃	主任文化財主事	中村　耕治
調査担当者	〃	文化財主事	森田　郁朗
	〃	文化財主事	中村　和美
	〃	文化財研究員	黒川　忠広
調査事務担当	〃	総務係長	前田　昭信
	〃	主事	池　珠美

平成11～13年度

調査指導者(職名は当時)

鹿児島大学法文学部助教授　本田　道輝
鹿児島大学理学部助教授　小林　哲夫
鹿児島大学法文学部教授　森脇　広
鹿児島大学埋蔵文化財調査室主任　中村　直子
福岡市教育委員会　山崎　純男
大分県教育委員会文化課　坂本　嘉弘
福岡県総務部　水ノ江　和同
熊本大学文学部教授　甲元　眞之

なお，発掘調査中並びに現地公開・復元公開，報告書作成に関し，多くの方々のご指導をいただいた。この場を借りて感謝いたします。

発掘調査作業員

愛場光男　阿多石幸雄　阿多石ヨリ子　有村純彦　有村章　有村アツ子　有村サチ　有村ミチ

碇山ツル　池田政雄　池田一義　池田義光　池田姫子　池田ノリ子　池田ヨシノ　石野ヨシ子
市山基則　磯脇ハルエ　指宿藤郎　犬童英子　祝園綱　岩切顕三　岩切信次　岩崎幸夫
岩元和子　大田チリ子　大庭ノリ子　大山秀男　岡留秀男　大人トシ子　小原良治
川畑エツ子　神村久美子　勝山敏子　神崎タミ　神崎直秋　唐鎌虎男　川越恵子　神田昌子
神崎スミ　魏季栄　久保チヨ　久米村美穂子　高野義徳　是枝逸雄　是枝キミ子　栄利徳
栄千代子　阪元一志　阪元進　阪元玲子　粢田セツ子　笑喜ミチ子　下深迫豊　下大迫政雄
末満レイ子　末永タミエ　瀬戸早子　園田ミフ子　谷村志乃恵　多持ミエ　土寄シゲ子
寺園ヒサ子　寺園ヌイ子　東郷澄子　徳田照子　徳満マユミ　泊ケ山トミ子　長迫ツナ
長迫フミ子　永里アヤ子　永里ツル子　野崎ミエ　野間口　男　野村秀雄　橋口イトエ
橋口ツヤ　濱田竹彦　濱田エミ子　反田千代子　東中園ヒサエ　平野　侃　平川廣安
福丸勇　福丸富子　藤田静雄　藤山国弘　藤山ツギ　藤山ミネ　藤山フジエ　藤元早苗
古川正文　福元セツ子　朴木道男　朴木辰二　朴木二男　福重登　福徳トシ　堀之内芳子
堀切ミチ子　堀切リツ子　堀切萩子　堀川真貴　前田止　前平達夫　松枝貞子　松尾竹二郎
松崎ミチ子　松元昇　松元喜憲　松元瑞枝　満田千枝子　宮永勝　山内進　山内和子
山口泰憲　山口ヒサ子　山元クサ子　山下俊美　山下博　山口ミヨ　山下キクエ　山下シヅ子
四元　誠　四元寿光　四元康秋　六反博久　和田まり子

整理作業員
厚地ゆう子　岡部安代　鎌迫美千代　川畑裕美子　細田保子　坂元昭子　篠原香代子
新村洋子　末廣みゆき　田ノ上輝美　竹ノ内礼子　立山理子　鶴留玲子　徳永郁代　富満由美
堂崎美雪　西清子　橋口まゆみ　前田裕子　前原順子　安田静香　山元順子

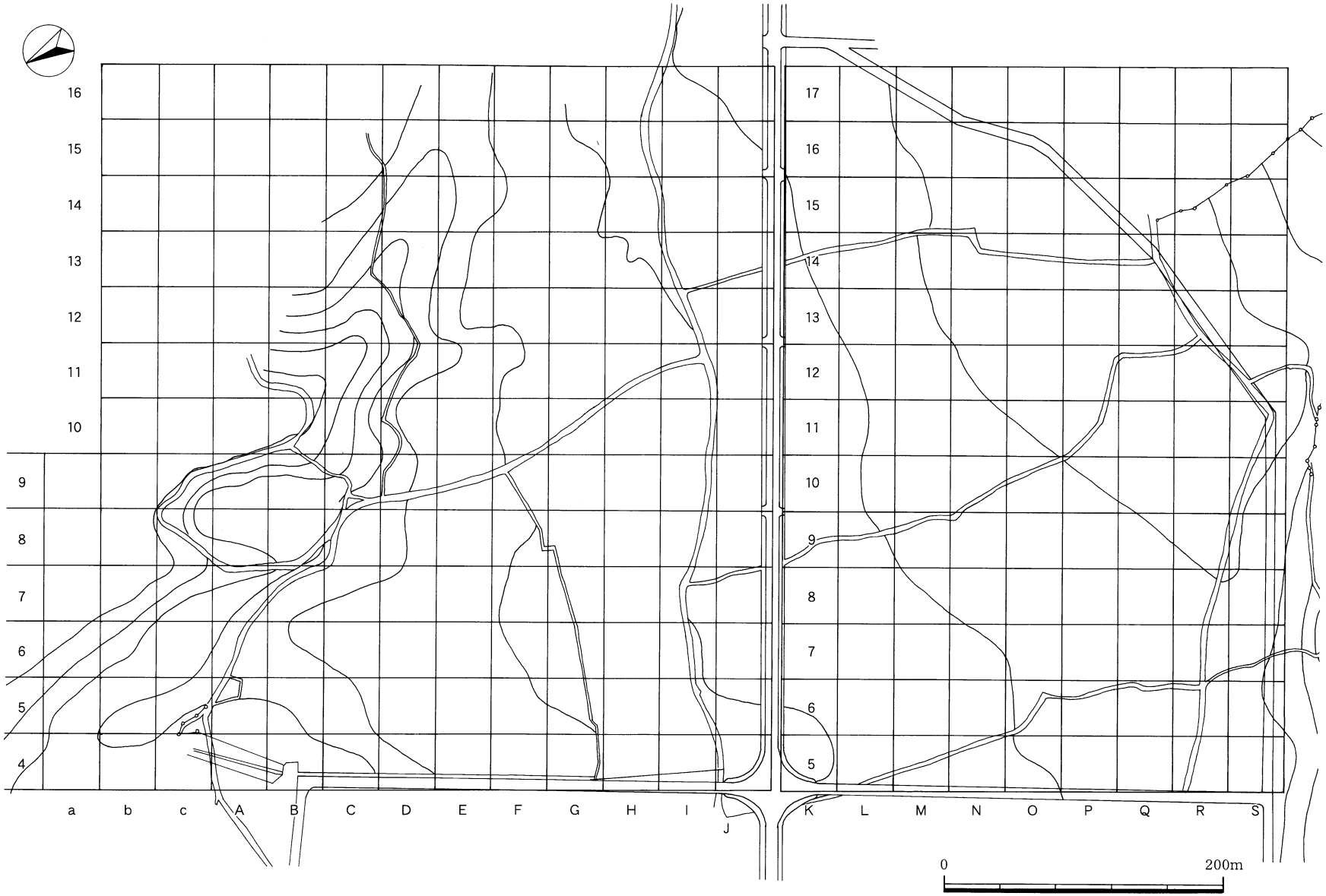
第３節　調査の概要と経過

（1）調査の概要

上野原遺跡のある国分上野原テクノパークは，大きく４つの工区に区分され今回は第４工区の発掘調査について報告する。この第４工区は，さらに２～７地点に細分されている。これは，確認調査時に設定されたものであり，全面調査時においては，いくつかの地点において時代によっては遺跡の連続性が窺われた。発掘調査は，工区内の東側部分の７地点から着手し，最終的に２地点で調査を終了した。

調査の方法は，３工区と同様40mグリッドを基本に調査区を設定した。ただし，計画図面等の変更などから３工区と４工区とでは調査区が一致しない状況が生じている（第２図参照）。

人力による調査は，表土を重機で除去したのちⅡ層からⅣ層にかけておこなった。Ⅱ層中からは，近世から古代の遺構・遺物が出土し，Ⅲ層中からは弥生時代を中心とした遺構・遺物が出土した。Ⅳ層中からは，縄文時代晩期の遺構・遺物が出土し４工区のほぼ全面に渡って出土している。これらⅡ～Ⅳ層は，部分的に近現代の削平や畑の耕作等で攪乱されている部分も多かった。なおこれらの調査成果については，『縄文時代早期編』刊行以降に報告・刊行していく計画で進



第２図　３・４工区グリッド図

めている。Ⅴ層は，いわゆるアカホヤ火山灰層で無遺物層である。場所によっては，厚く堆積しており重機を用いて除去した。Ⅵ層以下の調査は，先に実施した確認調査の結果を基に行い，範囲の広がりが見られる部分については適宜拡張をした。Ⅵ層以下の調査は，２・３・４・７地点で行い，Ⅹ層上面まで人力で掘り下げをおこなった。遺物は，Ⅵ層からⅩ層上面まで満遍なく出土している。遺構は，集石については包含層中において確認できたが，それ以外の遺構についてはⅩ層上面で検出した。なお，５・６地点は先行トレンチでⅥ層以下の確認調査を実施し，遺物等が確認されなかったため，面調査はおこなっていない。また，地点によって層の堆積は一様でない。

(2) 調査の経過

発掘調査は，全面調査を平成７年４月～平成９年３月まで，追加調査を平成９年４月～平成９年７月までおこなった。その間の調査経過については，発掘調査日誌を整理して以下日誌抄で述べることにする。なお，第８章で述べる追加調査の経過についてもここに一括して掲載する。

平成７年度

＜４月＞　24日より７地点（G～I－13～16区）調査開始。重機及び人力による表土剥ぎ。
28日国分南小学校発掘体験を実施。

＜５月＞　○７地点の調査　G－13区，H－13・14区，J－15区表土剥ぎ（重機）。Ⅱ～Ⅳ層の調査。周溝状遺構，古道検出。土層断面実測。○４・５地点　表土剥ぎ（重機）。
長期研修生現場実習（18日～）

＜６月＞　○７地点の調査　F－13区/周溝状遺構，1号竪穴住居跡（弥生）の調査。
アカホヤ火山灰層を重機で掘り下げる。H－13・14区/Ⅵ層の調査。
○４・５地点　表土剥ぎ（重機）。行政基礎講座実施（８日）。
来跡者/坂井秀弥氏（文化庁調査官・９日）

＜７月＞　○７地点の調査　F－12区/２号竪穴住居跡（弥生）の調査。
来跡者/上村俊雄氏（鹿児島大学教授・18日）。台風後の後始末（24日）。

＜８月＞　○７地点の調査　下層確認トレンチ設定・掘り下げ。
○４地点（E・F－９～11区），５地点（G～J－９～11区）の調査開始。
E－９・10区/Ⅲ，Ⅳ層の調査。炭化した木の実集中出土。
○５地点の調査　表土剥ぎ。Ⅲ・Ⅳ層の調査。周溝状遺構を検出。
○３地点　表土剥ぎ
来跡者/鹿児島県地域振興公社10人（３日），成尾英仁氏（串木野高校・７日），羽生氏（マッギール大学院生・10日），三浦氏（東京国立文化財研究所保存科学部長11日），万福氏ほか（国分西小学校教諭・21日），垂水市文化財少年団，江坂輝彌氏，李清圭（済州大博物館長）（22日）・長期研修現場研修終了・鹿児島市青少年地域リーダー育成研修発掘体験（60人）

＜９月＞　○３地点の調査　表土剥ぎ。

○４地点の調査　Ⅱ・Ⅲ層を中心に調査。E－９区/炭化種子出土状況実測。
○５地点の調査　表土剥ぎ。Ⅱ・Ⅲ層の調査。
○７地点の調査　航空写真撮影（27日）
＜10月＞　○３地点の調査　表土剥ぎ。
○４地点の調査　Ⅲ層を中心に調査。土坑掘り下げ，地形測量等を実施。
○５地点の調査Ⅱ・Ⅲ層の調査。地形測量。土坑・竪穴住居跡（縄文晩期）の調査。I－９～11区/トレンチ調査の準備。
○７地点の調査　F－13区/周溝状遺構実測。断面実測。H－14・15区/Ⅵ層の調査。
来跡者/河口貞徳先生（12日），武末純一氏（福岡大学助教授・24日）
＜11月＞　○３地点の調査　I－８区/Ⅱ層の調査。
○４地点の調査　Ⅲ層の調査。土坑・ピット群調査。
７地点と４地点の間をトレンチ調査。
○５地点の調査　Ⅲ・Ⅳ層の調査。地形測量・遺構検出等を実施。拡張部掘り下げ。J－９～11区/範囲確認のためトレンチ設定，掘り下げ。
○７地点の調査　土層断面実測。ベルトくずし。
来跡者/岡村道雄氏（文化庁主任文化財調査官・９日），鈴木氏（国分市教育委員会），武田・岡崎氏（県立視聴覚センター・16日）
＜12月＞　○３地点の調査　Ⅱ・Ⅲ層の調査。
○４地点の調査下層確認トレンチ掘り下げ。Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ。E－９・10区，F－９・11区/杭痕跡にライン引き。
○５地点の調査遺構の調査を中心に実施した。３号竪穴住居跡の調査。I－10区/杭痕跡列断面掘り下げ。I－11区/焼土断面写真。杭痕跡列断面掘り下げ。
４・５地点航空写真撮影（７日）。柵内腐食土サンプリング。
○７地点の調査　F－12区/２号竪穴住居跡柱穴検出作業。
作業員健康診断（１日）。調査指導/小田富士雄（福岡大学教授・14日）。来跡者/加藤晋平（国学院大学教授・11日），小林達雄（国学院大学教授）・馬場ちひろ・小池氏（黎明館15日），指宿市文化財保護審議会委員（29日）
＜１月＞　○３地点の調査　Ⅱ・Ⅲ層の調査。
○４地点の調査　Ⅵ・Ⅶ層の調査。F・G－11区/円形杭痕内柱穴裁ち割り。
○５地点の調査　H－９区/杭痕実測。I－９区/周溝状遺構脂肪酸分析試料採取。
調査指導/広瀬和雄氏（大阪府教育委員会・22，23日）。
来跡者/杉山真二氏・早田勉氏（古環境研究所・24日）
＜２月＞　○３地点の調査　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層の調査。G－６区/竪穴住居跡（古墳）の調査。
○４地点の調査　Ⅵ・Ⅶ層の調査。Ⅷ層上地形測量。F－10区/Ⅶ層の調査。
○５地点の調査　杭列検出及び実測。
○７地点の調査　E・F－12～14区/Ⅱ，Ⅲ層の調査。
調査指導/河口貞徳先生（鹿児島県考古学会長・５日），片岡宏二氏（小郡市教育委

員会・８，９日），新田栄治氏（鹿児島大学教授・14日），上村俊雄（鹿児島大学教授），渡辺芳郎（同大学助教授），本田道輝（同大学助手）（15日），小林哲夫（鹿児島大学助教授・20日）古環境研究所サンプル採取（５日）。

＜３月＞　○２地点の調査　表採。E－７区/Ⅱ層掘り下げ。

○３地点の調査　G－５区/Ⅱ・Ⅲ層の調査。杭痕跡裁ち割り。G－６区/竪穴住居跡の調査。杭痕跡断ち割り。精査。航空写真撮影（７日）

○４地点の調査　F－9～11区/杭痕跡検出痕跡のうち１割断面裁ち割り。

○５地点の調査　縄文時代晩期の竪穴住居跡・２号周溝状遺構・３号周溝状遺構の調査。航空写真撮影（14日）。

○７地点の調査　E－12・13区/Ⅲ層の調査。

現地説明会（10日・見学者150名）。調査指導/中村直子氏（鹿児島大学埋文調査室・４日），大西智和氏（鹿児島大学埋文調査室・５日）。来跡者/奥野正男氏（宮崎公立大学）他20名（１日），野邉盛雅氏（国分中教諭・８日），白山まゆみ氏（日本共産党），遺構保護のためシート被覆作業，事務所整理，現場清掃，図面整理。

平成７年度の調査終了（25日）。

平成８年度

＜４月＞　○２地点の調査　22日より調査再開。杭打ち並びに表土剥ぎ。Ⅱ・Ⅲ層の掘り下げを中心に実施。遺物取り上げ。

＜５月＞　１日作業員詰め所移転。E～F・７区のⅢ・Ⅳ層遺物取り上げ。E～F・７区の弥生１～３号住居検出・掘り下げ。主に古代～縄文時代晩期までの遺物取り上げを実施。

＜６月＞　○２地点の調査　C～D－６・７区のⅢ・Ⅳ層掘り下げ。C～D－６区の弥生４・５号・古墳２号住居検出・掘り下げ。E～F－７区杭列検出・写真撮影等。G－８区縄文晩期土坑群掘り下げ。

＜７月＞　○３地点の調査　G－８区縄文晩期土坑完掘。

○４地点の調査　前年度未着手部分についてアカホヤ火山灰層を重機で除去。Ⅵ層以下の縄文早期の調査にはいる。

30日埋文センターの職員研修実施。

＜８月＞　○２地点の調査　Ⅴ層上面航空写真撮影/８日。地形測量。アカホヤ火山灰の除去。

○４地点の調査　縄文時代早期中～後葉の集石検出。集石の写真撮影及び実測・計測をおこなう。22日をもって第４地点の掘り下げを終了。

＜９月＞　○２地点の調査　D－５区溝状遺構実測。

○３地点の調査　H－７区縄文晩期土坑より種子炭化物出土。

＜10月＞　○２地点の調査　縄文時代早期の遺物取り上げ。E－７区より縄文時代晩期の掘立柱建物跡並びに種子炭化物等検出。29日縄文時代早期の土坑検出。

＜11月＞　○２地点の調査　竪穴住居跡・土坑・集石などの遺構検出が相次ぐ。

＜12月＞　○２地点の調査　縄文時代早期の各竪穴住居跡検出写真撮影。土層断面図作成。

P－13火山灰と思われる黄色パミスが竪穴住居跡の埋土中に確認される。
作業員健康診断を実施。

＜１月＞　○２地点の調査　７日より調査開始。縄文時代早期の遺構配置図作成。22日河口貞徳氏（鹿児島県考古学会会長）現地指導のため来跡。27日全体精査作業に取りかかる。竪穴住居跡の総数が46基になる。28日第２地点の縄文時代早期の航空写真撮影。30日発掘調査指導委員会が開かれる。

＜２月＞　○２地点の調査　縄文時代早期の遺構検出作業が続く。12日小林達雄氏（國學院大学）現地指導のため来跡。マスコミ関係者の来跡が相次ぐ。26日岡村道雄氏（文化庁記念物課主任調査官）現地指導のため来跡。

＜３月＞　○２地点の調査　７日芹沢長介氏来跡。10日本田道輝氏（鹿児島大学法文学部）・森脇広氏（鹿児島大学法文学部）現地指導のため来跡。14日第２地点の航空写真撮影。コンター図並びに遺構配置図の作成。17日より埋文センター職員の実測応援体制が組まれる。24日をもって遺構実測を終了する。遺構にブルーシートを掛ける。

平成９年度

＜４月＞　21日より第２地点北側に３本のトレンチを設定する。Ⅵ層からⅩ層上面にかけて遺物出土。適宜写真撮影をおこなう。

＜５月＞　26日２地点の縄文時代早期に関する記者発表。翌日より遺跡の現地公開が始まる。

＜６月＞　１日より第１回目の現地説明会が開催される（～20日まで）。

＜７月＞　８日より国分市有地に９つのトレンチを設定。縄文時代早期の広がりが北側まで及んでいることが判明する。20日より第２回目の現地説明会が開催される（８月31日まで）

＜８月＞　19日，見学者数が10万人を突破する。

＜９月＞　１日より遺構埋め戻し作業を開始。Ⅹ層上面および遺構上面を精査しながら埋め戻す。
この段階でも竪穴住居跡・連穴土坑の検出が相次ぐ。
14日をもって遺構埋め戻し作業を終了する。概報作成に着手する。

（３）報告書作成

報告書作成は，平成11年度より実施している。11年度は遺物の水洗い・注記・接合・図面整理などの基本的な作業をおこない，遺物の実測・拓本等の作業は主に12年度から実施した。報告については，年次的に刊行することとし，縄文時代早期編を13年度に，それ以降の時代については14年度以降刊行していく。

参考文献

鹿児島県教育委員会1985「国分･隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書－昭和59年度－」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(33)
鹿児島県教育委員会1986「国分･隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書－昭和60年度－」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(37)
鹿児島県教育委員会1987「国分･隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書－昭和61年度－」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(40)

第２章　位置と環境

第１節　位置

上野原遺跡第４工区は，国分市川内字田吹・鍋迫他にある。遺跡の所在する国分市は，九州島の南部で，南に開けた長さ約80㎞の鹿児島湾の最深部，桜島と霧島の両火山を結ぶ直線上に位置する。北は姶良郡霧島町，東は姶良郡福山町と曽於郡財部町，西は天降川を挟んで姶良郡隼人町，南は鹿児島湾に面している。

国分市の地形は，大きく山地・台地・平地に区分される。北部から東部にかけては霧島火山群，高隈山地があり，シラス台地を多く持つこと，広い沖積平野と海岸干拓地を持つことが大きな特徴である。

国分平野は，天降川（新川）と検校川によって形成された広さ約1500haの鹿児島湾沿岸最大の沖積平野である。

両河川の源となる北部の霧島火山群・東部の高隈山地は標高1200mを越える峰を有している。高隈山地は，九州山地や国見山地・日向山地と共に日本外帯山系に属し，鹿児島湾の西壁をなす金峰山地と対照的な山地で，「鹿児島地溝」のために生じた傾斜ブロックである。主に中生層の地質から成り，一部安山岩も見られるが，かなりの高さまで熔結凝灰岩やシラスなどの火山灰に覆われている。

「鹿児島地溝」は霧島火山群の加久藤盆地から始まり，鹿児島湾入口で終わっている。この地溝は中央部で約1000mにわたって階段状に土地が落ち込んでできたもので，陥没はおおよそ300万年前に始まったとされている。

この地溝の中では火山活動が繰り返し起こっており，これまでに膨大なテフラが噴出している。このなかで，国分平野と桜島の間にある鹿児島湾奥部は姶良カルデラと呼ばれ，東西約24㎞・南北約23㎞のほぼ円形をした巨大カルデラである。最近の研究では姶良カルデラはいくつかの小カルデラが集合したものと考えられ，シラスの噴出口は上野原台地の南にある若尊カルデラではないかと想定されている。

シラスの堆積による台地は，国分市の約70％をしめている。シラス台地は，基盤の四万十累層群の上に堆積した火砕流堆積物，姶良層と呼ばれる砂礫層・凝灰岩層・シラスからつくられている。シラスは，中・細砂程度の粒子が多いため透水性が大きく，台地面上における永久性河川の発達は悪く，下位の不透水性の部分まで浸食された場合のみ，かなりの水量を保持する河川が生まれる。またシラスは水の浸食に対して弱く，谷頭や台地周辺では降雨時にはしばしば浸食を受けて崩壊し，大洪水を起こす場合がある。

国分市は姶良カルデラのカルデラ壁とその外輪山，及びカルデラ原に相当し，地質は複雑で変化に富んでいる。国分市の地質は大きく，基盤をつくる中生代の四万十累層群，第四紀の堆積岩類，第四紀の安山岩類，カルデラからの噴出物，沖積層の五つに区分できる。

国分市内では四万十累層群は北部・東部の山地や台地の縁辺部にあり，白亜紀の砂層や頁岩及び砂岩頁岩相互層，それに玄武岩質の塩基性岩類からできている。

第四紀の堆積岩類はシラス台地の裾野に分布し，未固結～弱固結の砂岩・凝灰岩・礫岩などか

ら成り，普通は水平または緩い傾斜で堆積している。

第四紀の安山岩類は孤立した丘陵や台地をつくり，分布は断片的で限られている。いずれも柱状節理のはっきりした輝石安山岩類で，上野原台地や城山では垂直な崖をつくっている。

カルデラからの噴出物は台地の主要な構成物となっている。第四紀更新世中頃の噴出物である加久藤火砕流堆積物からシラスと呼ばれる火砕流堆積物まで数多くの火砕流堆積物がある。

シラス台地の上ではこれらの堆積物を覆って，桜島火山や鬼界カルデラ起源の噴出物が薄く堆積している。

沖積層は国分平野をつくる堆積物で，そのほとんどが浸食により削られたシラス台地の堆積物で未固結のルーズな砂層，及び礫層・シルト層から形成されている。

上野原遺跡は，国分市の南東側，福山町に接する台地上にある。

上野原遺跡のある上野原台地は，標高約250mのシラス台地である。台地の南は鹿児島湾に接し桜島を遠望できる。北と西を検校川の支流である鎮守尾川が走り深い谷を形成し，独立丘陵状の台地を呈している。遺跡は南に桜島，北部に霧島連山が連なり，穏やかな鹿児島湾と広大な国分平野が眼下に眺望できるすばらしい景観と環境に恵まれている。陥没地形である「鹿児島地溝」の東端が上野原台地付近に現れており，上野原台地付近より東側には四万十累層群が堆積するがその西側には見られない。

上野原台地は柱状節理の発達した安山岩を基盤とした台地で，沖積平野からほぼ垂直に急な崖が続いている。この安山岩の上に通称「シラス」と呼ばれる入戸火砕流堆積物が堆積している。約2.5万年前に姶良カルデラ内で起こった一連の噴火は，大規模なプリニー式噴火から始まり，「大隅降下軽石」と呼ばれる大量の軽石を噴出している。続いてその直後に大規模な水蒸気マグマ爆発が起こり，「妻屋火砕流堆積物」の噴出があった。妻屋火砕流の噴出後しばらくして破局的な大噴火が発生し，「入戸火砕流堆積物」が噴出している。入戸火砕流の噴火は地下深くでマグマが泡立ち，基盤の岩石を破壊しながら噴出することから始まった。この噴火による噴出物は「亀割坂角礫層」と呼ばれている。入戸火砕流堆積物をつくった噴煙柱は高さ数キロ上空の成層圏に達するまでになったと推定されている。この火山灰が「姶良Tn火山灰，一般にAT火山灰という」であり，現在確認されている最も遠方は，北部で青森県，南部で沖縄諸島近海の海底である。

このように上野原遺跡は，面積約100haの安山岩を基盤としたシラス台地上に立地する遺跡である。

また上野原遺跡第４工区は，国分上野原テクノパークの建設地として造成工事が行われた工事区画の一区画である。霧島の峰々を望む台地の北東側に面している。

第２節　歴史的環境

研究史

国分市周辺は，以前より地元の研究者や鹿児島県教育委員会，国分市教育委員会などによる分布調査や発掘調査により多数の遺跡が確認されている。

旧石器時代の概要

国分市においては今のところ旧石器時代の遺跡は発見されていない。国分市においてこれまでに旧石器時代の遺跡が発見されなかったのは，平野部の調査が多く台地上の発掘調査の機会が少なかったためであると思われる。国分市を取り巻く台地の北西部の溝辺台地には，長ヶ原遺跡・柳ヶ迫遺跡・石峰遺跡と，隣接して旧石器時代終末期の遺跡が存在している。また上野原台地の北部を流れる検校川の上流に位置する前原和田遺跡では，旧石器時代の礫群が発見されている。このような状況から，今後国分市内の台地上で旧石器時代の遺跡が発見される可能性が高い。

縄文時代の概要

縄文時代前期では今よりも暖かく，「縄文海進」が起こっている。アカホヤ火山灰の堆積状況から海岸線の境目は現在の標高15mの位置で確認できる。国分平野はほとんどが海底となり，海岸線はかなり奥深くへ進入していたと考えられている。国分市では，縄文時代早期の遺跡は全て標高15m以上の場所に位置し，標高15m以下の低地には前期以降の遺跡が存在している。この15mの標高差は海進海退のみでなく，地殻変動による隆起現象とされている。

縄文時代の遺跡

縄文時代草創期の遺跡は発見されていない。

縄文時代早期前葉では，平栫貝塚や城山山頂遺跡で前平式土器や吉田式土器が出土している。平栫貝塚は昭和46年に河口貞徳氏によって発掘調査され，前平式土器や吉田式土器が出土しているが，平栫式土器の標式遺跡として著名である。城山山頂遺跡では中九州を中心として出土する円筒形条痕文土器も出土している。

縄文時代早期中葉になると，城山山頂遺跡で桑ノ丸式土器が出土し，平栫貝塚で押型文土器や変形撚糸文土器が出土している。

縄文時代早期後葉には，平栫貝塚や上野原遺跡10地点で平栫式土器などを中心に大量の土器や集石遺構が出土している。

国分市内においては，前期から中期にかけての遺跡はほとんど見られない。縄文時代前期の遺跡として，上野原遺跡の10地点で曽畑式土器が僅かに出土しているのみである。

縄文時代後期の遺跡としては，矢根前遺跡や鍛冶屋馬場遺跡で岩崎上層式土器が比較的多量に出土している。また鍛冶屋馬場遺跡では市来式土器も出土し，上野原遺跡10地点では，この時期の陥し穴が多数発見されている。

縄文時代晩期の遺跡には妻山元遺跡がある。黒川式土器や突帯文土器が出土しており，南九州の晩期後半の編年を解明する良好な資料も見られる。

第１表　遺跡地名表

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	備　　考
1	上野原	川内字田吹他	縄・弥・古・歴	本報告
2	鍋迫	鍋迫	縄・古	
3	堂ヶ尾	堂ヶ尾	古	土師器・成川式土器
4	水ヶ迫	水ヶ迫	古	土師器・成川式土器
5	中原	中原	古	土師器・成川式土器
6	後川内	後川内	古	土師器・成川式土器
7	東原	東原	古	土師器・成川式土器
8	藤ヶ尾	藤ヶ尾	古	土師器・成川式土器
9	矢祢前	下井矢祢前	縄	
10	大王坂	敷根大王坂	古・歴	土師器・青磁
11	敷根城跡	敷根	中世	
12	平栫貝塚	上井201	縄	平栫式土器
13	中囲貝塚	上井一条	縄	押型文・石器・土師器・人骨
14	桶脇	桶脇	古	土師器・成川式土器
15	上井城跡	上井一条	中世	上井氏居城
16	山下A	山下町鎮守	弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
17	山下B	山下町高田宇都	古	昭和55年新田栄治氏調査
18	名波A	名波町小波谷	弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
19	名波B	名波町小平原	縄・古	昭和55年新田栄治氏調査
20	大平	上小川大平	弥	土器
21	城山山頂	上小川新城	縄・古・歴	昭和52・53年国分市調査
22	園田	上小川園田	弥	土器
23	妻山元	中央二丁目2819	縄・古	昭和59年国分市調査
24	本御内	中央二丁目8-1	弥・古	土器・水田跡・住居跡・破砕鏡
25	舞鶴城跡	中央二丁目5-1	近世	島津義久居城
26	大隅国分寺跡	中央一丁目237	歴	瓦・層塔
27	鍛冶屋馬場	中央一丁目3590	縄・歴	昭和62年国分市調査
28	国府（小路）	中央一丁目1930	歴	昭和62年国分市調査
29	坂下	中央一丁目坂下	歴	瓦窯跡
30	鼻連山城跡	中央一丁目10	中世	
31	清水A	清水堤田	縄・弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
32	清水B	清水トチメ田		昭和55年新田栄治氏調査
33	清水C	清水九万田	弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
34	弟子丸A	清水平等寺	弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
35	弟子丸B	清水溜池	弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
36	弟子丸C	清水寺馬場	弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
37	弟子丸D	清水畑井田	弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
38	智尾岡	弟子丸乳尾	弥	土器
39	玄亀庵	清水玄亀庵	弥・古	
40	忠将屋形跡	清水外城	中世	
41	清水城跡	中央外城	中世	山城
42	白蔵原	白蔵原	古	土師器・成川式土器
43	鷹原	川原鷹原	古	成川式土器
44	弥勒寺	野口弥勒寺	古	成川式土器
45	大隅国府跡	府中亀甲亀里	歴	瓦
46	気色の杜	府中天神坊	弥	土器・石斧・祭器
47	岡見山	府中塚脇	弥・歴	昭和59年国分市調査
48	亀甲土坑	府中亀甲亀里	古	昭和29年寺師見國氏調査
49	こがの杜	姫城木ヶ森	弥	
50	竹下	姫城竹下	古・歴	土師器
51	姫木城跡	姫城城山	中世	
52	橘木城跡	重久吉永	中世	
53	郡田小城跡	郡田小城	中世	
54	立山原	重久立山原		
55	白蔵原	重久白蔵原	古	土師器・成川式土器

第３図　周辺遺跡地図

弥生時代の概要

西北九州に根付いた弥生文化は日本列島を北上して波及しているが，九州南部へは金峰町下原遺跡・高橋貝塚などの西海岸沿いや末吉町上中段遺跡などの内陸部へも伝播している。国分市内では，前期に口輪野洞穴がある。

弥生時代の遺跡

口輪野洞穴は，海岸部より約４㎞も山間部へ入った標高200mの山地で，シラス台地の絶壁に開口した洞穴遺跡である。弥生時代前期の甕形土器や小型壺形土器の出土が報告されている。

本御内遺跡では弥生時代中期の竪穴住居跡が確認されている。また，方格T字鏡と思われる破砕鏡とともに東九州系の安国寺式土器が出土している。その他，山下遺跡・園田遺跡などで遺物の発見が報告されている。

古墳時代の概要

国分市では，現在のところ畿内型の高塚古墳も隼人の墓制といわれる地下式板石積石室墓・地下式横穴墓・立石土壙墓も発見されていない。しかし，古墳時代の遺跡は数多く見られ，国分市全域から成川式土器が出土している。特に，シラス台地上と台地にかけての山麓付近に多く，矢祢前遺跡・城山山頂遺跡・妻山元遺跡などがある。

古墳時代の遺跡

城山山頂遺跡では，在地系の成川式土器とともに畿内系の布留式土器が出土している。また，52基の竪穴住居も検出されている。

妻山元遺跡では，古墳時代後期に位置する笹貫式土器の竪穴住居13基・土壙13基・溝状遺構７条が検出された。また，土壙１基からは古墳時代初頭に位置づけられる土器がセットで出土し，住居跡からは精錬鍛冶炉にみられる椀形滓が出土している。

歴史時代の概要

奈良平安時代には，大隅国の国府が置かれ，国分寺・国分尼寺が創建された。近年大隅国分寺に関する遺跡について発掘調査を通じてある程度の成果を得たが，寺域・伽藍配置等詳細については不明のままである。大隅国府・大隅国分尼寺等とともに，今後の調査が期待される。

歴史時代の遺跡

鍛冶屋馬場遺跡では，国分寺の築地壁に伴う外濠と思われる大規模な溝と内濠，雨落溝と思われる溝状遺構が検出された。また溝状遺構に隣接する形で摺鉢型の土壙が検出されている。これらの遺構からは多量の布目瓦が出土している。

国府（小路）遺跡では，溝状遺構が20条，土壙が２基検出された。いずれも出土遺物から大隅国分寺跡や鍛冶屋馬場遺跡で検出された遺構とほぼ同時期であることがわかっている。

第３節　周辺地域における縄文時代早期の遺跡

本節では，上野原遺跡において特に重要な成果が得られた縄文時代早期に注目し，本遺跡周辺に分布する同時期の遺跡について概観してみたい。

南九州における早期の遺跡は本県全域に数多く分布しているが，ここでは本遺跡が姶良カルデラ外輪山の縁辺に位置することを考慮し，鹿児島湾奥部に流入する河川と同一水系に属する地域（11市町）内の遺跡を主体とした。

また，今回取り上げた遺跡は調査が行われたもの，報告書が既刊のもの，若しくは周知の遺跡として記載されているものの中で，上野原遺跡と同形態・同型式の遺構・遺物（縄文時代早期）が出土している遺跡に限定した。

〔国分市〕

上野原遺跡の所在地であるが，早期の遺物を出土する遺跡は少ない。代表的なものとしては，前節でも触れた平栫貝塚が挙げられる。これらの遺跡は，本遺跡を含め姶良カルデラを臨むシラス台地の縁辺部に位置しており，この時期の典型的な遺跡の立地条件に該当するといえる。

〔隼人町〕

町の大部分が平地であるためか，古い時期の遺跡は少ない。鹿児島神宮貝塚は全面的な調査はされていないが，丘陵斜面に形成された貝塚として知られている。条痕文土器等が出土しており，国分市平栫貝塚と性格的共通点が多くみられる。

〔溝辺町〕

九州縦貫自動車道建設に伴い，多くの早期遺跡が調査されている。石峰遺跡は石峰式土器の標式遺跡であり，吉田式・石坂式をはじめ縄文時代全般を主体として数多くの遺構・遺物が出土している。桑ノ丸遺跡は，上野原遺跡でも良好な資料が得られた桑ノ丸式土器の標式遺跡であり，吉田式・前平式土器など早期前葉の遺物を主体とする。この２遺跡に代表される溝辺町内の早期遺跡群は，その立地や出土遺物の構成において上野原遺跡と共通する部分が多い。旧国分平野湾を挟んでほぼ標高を同じくするこれらの遺跡の資料は，土器型式や遺構・遺物形態の比較研究を通じ，鹿児島湾奥部周辺の地域性を明らかにするうえで極めて重要なものである。

〔加治木町〕

早期の遺跡は北側の台地上に集中しており，加栗山式土器が出土した高峠遺跡・下市来原遺跡などが知られている。前述の九州縦貫自動車道関連では，三代寺遺跡が注目される。町のシンボルである「蔵王嶽」山麓に立地し，塞ノ神B式土器を主体として特徴的な集石群が検出された。他にも前平式・吉田式土器をはじめ桑ノ丸式・押型文土器など，早期全般にわたって豊富な資料が得られた。

〔姶良町〕

早期の遺跡としては，これまで昭和21年に栫木野遺跡が調査されたのみで，わずかに散布地がみられる程度であった。平成12～13年度にかけて町の公園整備計画に伴い建昌城跡の調査が実施され，竪穴住居群・連穴土坑群に伴って加栗山式土器が出土している。標高100mの台地端に立地し，旧国分平野湾とは加治木峠で分断され，旧姶良湾に臨む。加栗山式以外にも前平式・石坂式など早期前葉の遺物を多数出土している。詳細については報告書を待たねばならないが，

この地域においては上野原遺跡に続く早期定住集落跡の発見であり，今後の研究のうえで重要な指標となる遺跡である。

〔福山町〕

上野原遺跡とは同一台地の延長部に相当し，河川の浸食作用によって形成された鋸歯状台地端に遺跡が集中する。近年では東九州自動車道建設に伴い，多くの早期遺跡の調査が実施された。特に城ヶ尾遺跡では，塞ノ神式の完形壺や，深鉢の埋設遺構などこれまでに類例のない重要な発見がみられた。また，今回は割愛したが，隣接の財部町にも耳取遺跡・桐木遺跡など重要遺跡の発掘が相次いだ。これら一連の成果は，宮崎県南部との関連も含め，今後の南九州縄文時代早期文化の様相解明に大きな役割を果たすものと思われる。

〔霧島町・牧園町・横川町〕

相対的に発掘件数が少ないものの，今後の調査によって資料の追加が期待される地域である。前平式土器のみられる横川町中尾田遺跡・星塚遺跡・牧園町七曲Ⅱ遺跡や，平栫式土器が出土した牧園町界子仏遺跡・高天原遺跡・霧島町法ケ崎遺跡など，霧島連山山麓の沖積台地上に立地する遺跡が多い。

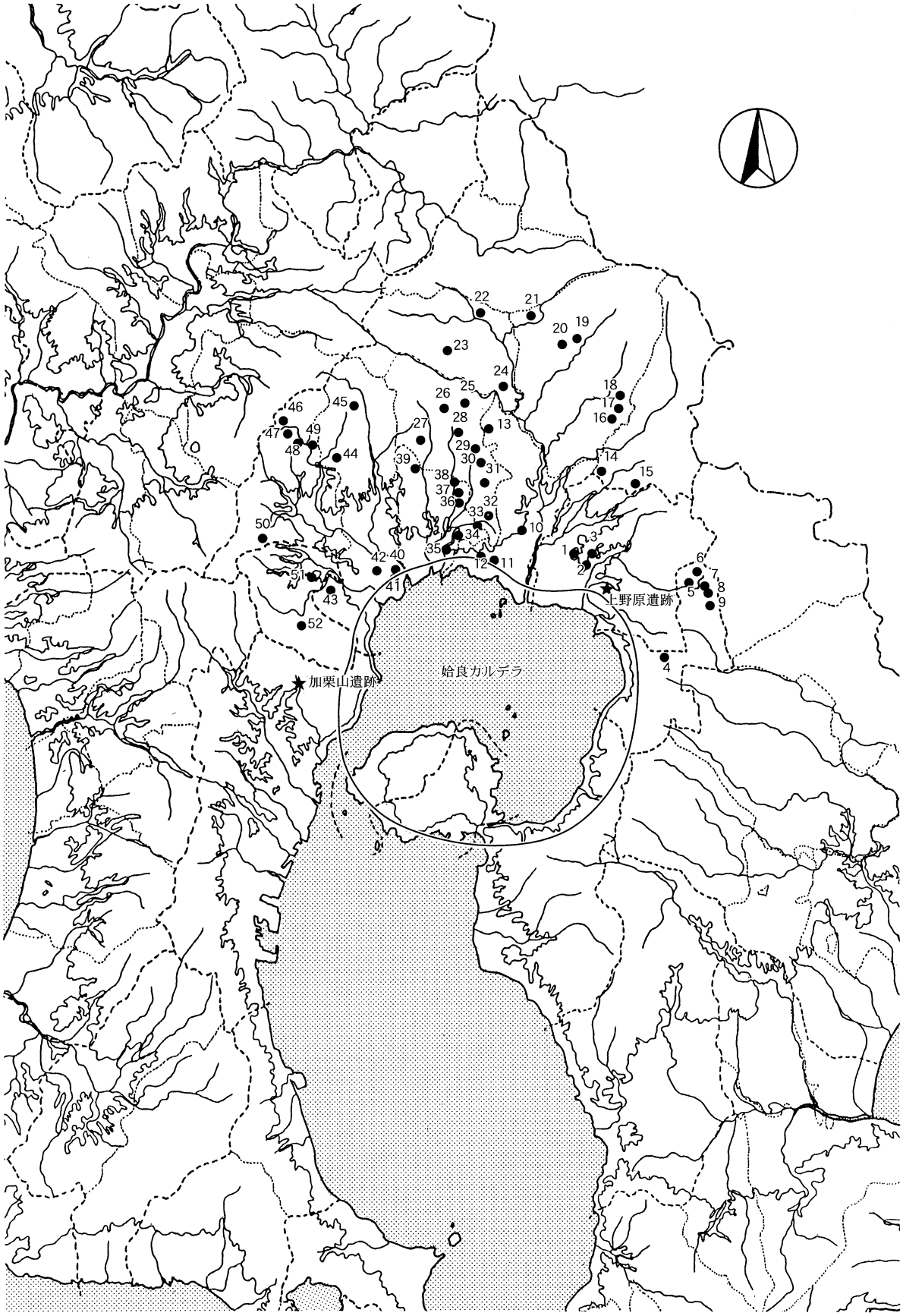
〔蒲生町〕

発掘調査された遺跡が少なく，現時点ではすべて散布地としての記載のみである。台地上や丘陵端に石坂式・押型文・貝殻条痕文・塞ノ神式土器の散布が報告されている。

〔吉田町・鹿児島市〕

昭和27年に河口貞徳氏によって調査された大原遺跡には，早期前葉の吉田式土器がみられる。昭和57年度に報告書が刊行されている小山遺跡は，他の早期遺跡とは異なり谷底平野に立地し，吉田式・石坂式・貝殻条痕文・塞ノ神式土器等が出土している。

大原遺跡の南側約10㎞の台地上に，鹿児島市加栗山遺跡が所在する。加栗山遺跡は，周知のように上野原遺跡とほぼ同時期の定住集落跡であり，縄文時代早期研究上極めて重要な遺跡である。姶良カルデラ周辺遺跡とは地域を異にするものの近接しており，立地的にも共通点が窺える。その遺構・遺物に関して近年多くの研究者が検討を進めており，土器編年や遺構形態分類等において多くの情報が得られている。今後はさらに，上野原遺跡・姶良町建昌城跡・伊集院町永迫平遺跡・松元町前原遺跡など早期集落遺跡の資料との比較研究のなかで，当該時期の生活様相解明に大きな進展が期待されるものである。



第４図　縄文時代早期の遺跡（姶良カルデラ周辺）

第２表　縄文時代早期の遺跡地名表(姶良カルデラ周辺)

番号	遺　跡　名	所　在　地	地　　形	遺　物　等	備　　考
1	城山山頂	国分市上小川新城	台　地	前平・吉田	S60年報告書
2	平栫貝塚	国分市上井	丘陵斜面	前平・吉田・押型文・平栫 塞ノ神	S46年　河口貞徳氏調査
3	中囲貝塚	国分市上井一条	丘陵斜面	押型文・人骨	
4	鳥　越	福山町東牧之原	台　地	押型文	
5	城ケ尾	福山町比曽木野	台地端	吉田・押型文・塞ノ神	
6	上　村	福山町比曽木野	台地端	押型文・平栫・塞ノ神	
7	前原・和田	福山町比曽木野	台地端	吉田・塞ノ神	H14年報告書
8	供養之元	福山町比曽木野	台地端	手向山・平栫・塞ノ神	H14年報告書
9	永　磯	福山町比曽木野	台地端	塞ノ神	
10	鹿児島神宮貝塚	隼人町宮内	丘陵斜面	吉田・条痕文	
11	小　田	隼人町小田	微高地	塞ノ神	
12	塚ノ原	隼人町小田	微高地	塞ノ神	S54年報告書
13	十三塚原1	隼人町十三塚原	台　地	手向山・塞ノ神	空港内(S45年調査)
14	松ケ原	霧島町永水	台地端	押型文	H６年報告書
15	法ケ崎	霧島町法ケ崎	台　地	円筒形土器・塞ノ神	H元年報告書
16	高天原	牧園町持松	台　地	平　栫	H元年報告書
17	アカハゲ頭	牧園町持松	台　地	貝殻条痕文	
18	界子仏	牧園町持松	台　地	石坂・押型文・平栫	H元年報告書
19	赤子Ⅰ	牧園町三体堂	平　地	押型文・塞ノ神	
20	内之野	牧園町三体堂	平　地	押型文	
21	七曲Ⅱ	牧園町万膳	畑	前平・石坂・押型文	
22	中尾田	横川町中ノ	台地端	前平・吉田・手向山・平栫	S56年報告書
23	北園崩丸	横川町上ノ	山　麓	石坂・塞ノ神	散布地
24	星　塚	横川町下ノ	台　地	前平・押型文・手向山	H５年報告書
25	木佐貫原	溝辺町木佐貫	台地端	押型文・手向山・塞ノ神	S54年報告書
26	麦牟田	溝辺町有川	山　地	塞ノ神	
27	竹　山	溝辺町有川	山　麓	吉　田	
28	据石ケ岡	溝辺町据石ケ岡	山　地	押型文	
29	石　峰	溝辺町麓	台地端	吉田・石坂・条痕文 押型文・手向山・塞ノ神	S55年報告書
30	長ケ原	溝辺町麓	台地端	前平・桑ノ丸	S53年報告書
31	木屋原	溝辺町麓	台　地	前平・石坂・条痕文	S53年報告書
32	東　原	溝辺町崎森	台地端	石坂・条痕文	S53年報告書
33	桑ノ丸	溝辺町崎森	台地端	前平・吉田・桑ノ丸 押型文・平栫・塞ノ神	S53年報告書
34	楠原C	加治木町日木山	台　地	桑ノ丸	
35	三代寺	加治木町日木山	山　麓	前平・吉田・石坂・条痕文 桑ノ丸・押型文・塞ノ神	S54年報告書
36	下市来原	加治木町下市来原	台　地	前　平	H12年報告書
37	高　峠	加治木町高峠	台　地	前平・押型文・貝殻条痕文	
38	笹　原	加治木町笹原	台　地	石　坂	
39	木　原	加治木町木原	台　地	塞ノ神	
40	小瀬戸	姶良町西餅田	平　地	前　平	S46年調査
41	西ノ妻	姶良町西餅田	平　地	吉　田	
42	建昌城跡	姶良町西餅田	台地端	前平・吉田・石坂・下剥峰 条痕文・押型文・桑ノ丸	H12～13年調査
43	鍋　谷	姶良町重富	斜　面	塞ノ神	
44	栫木野	姶良町木津志	台　地	吉田・石坂	S21年調査
45	内　甑	姶良町北山	台　地	押型文	散布地
46	楠ケ宇都	蒲生町漆	山　腹	石坂・押型文・貝殻条痕文	散布地
47	竹牟礼	蒲生町漆	台　地	塞ノ神	H５年報告書
48	大嶺前	蒲生町漆	丘陵端	押型文・貝殻条痕文	散布地
49	広　木	蒲生町漆	台　地	塞ノ神	〃
50	高牧第二	蒲生町久末	丘陵端	塞ノ神	〃
51	小　山	吉田町東佐多浦	谷底平野	吉田・石坂・貝殻条痕文 塞ノ神	S57年報告書
52	大　原	吉田町本名	台　地	吉　田	S27年　河口貞徳氏調査

第３章　層位

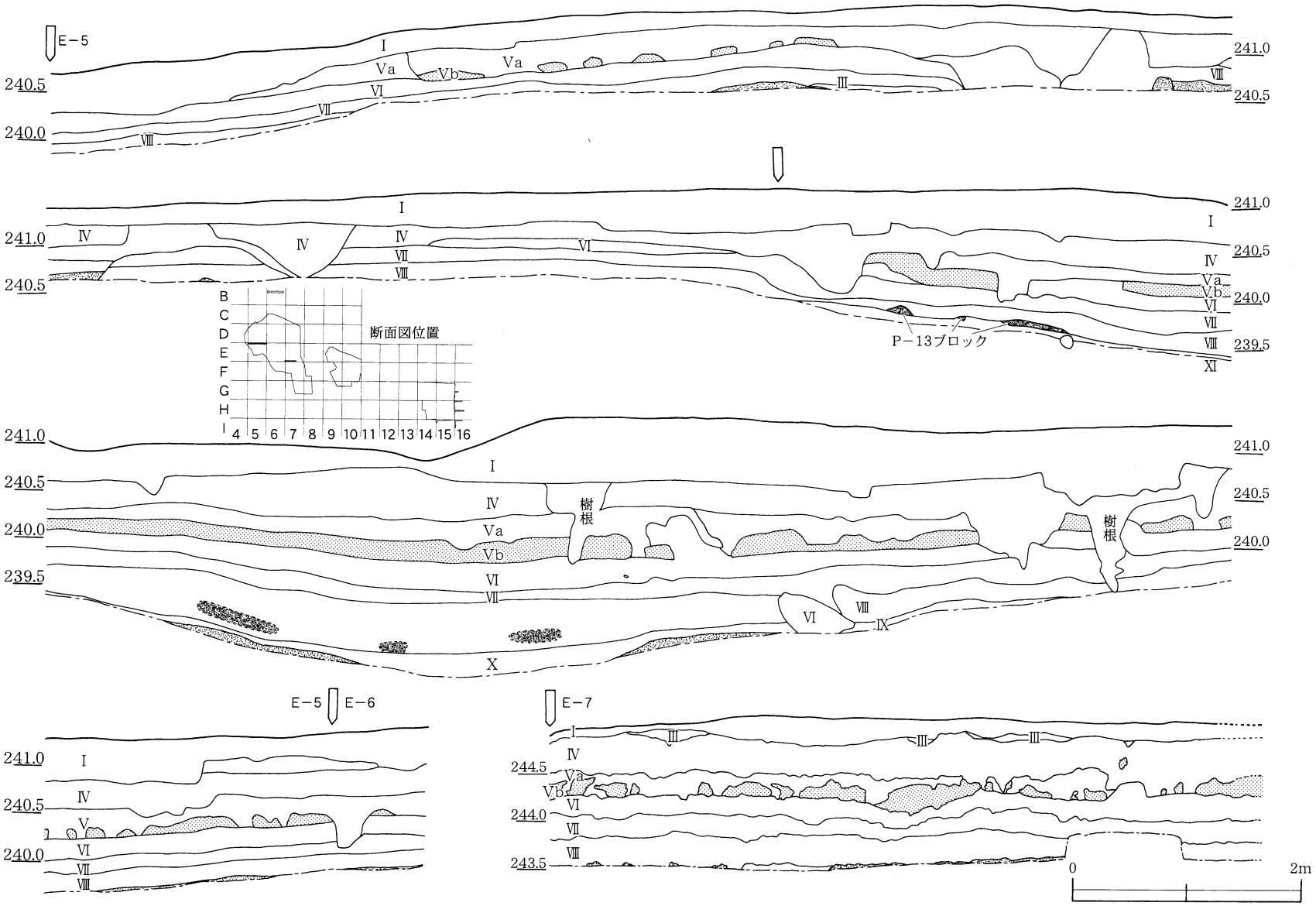
本遺跡は，敷根安山岩を基盤とした台地上に，入戸火砕流堆積物やAT火山灰等の姶良カルデラ火山噴出物が堆積し，その上位に時代や噴出源の違う何枚かの火山噴出物が堆積している。

本遺跡は，広範囲の遺跡であるため場所により堆積状況に差違がみられる。P－14（薩摩）火山灰は遺跡全体を覆うように堆積し，縄文時代早期前葉の遺構検出面であるが，本遺跡が降灰の北西限であると考えられるP－13（Sz-Tk３）火山灰は，竪穴住居等の遺構内や堆積の厚い谷部にのみ観察できるものである。また遺構内に検出されるP－13火山灰は，黄色パミスの密集したタイプと白色パミスの密集したタイプ，白色パミスの散在したタイプが確認されている。これらの火山灰は本遺跡の性格を明らかにする貴重な資料となっている。

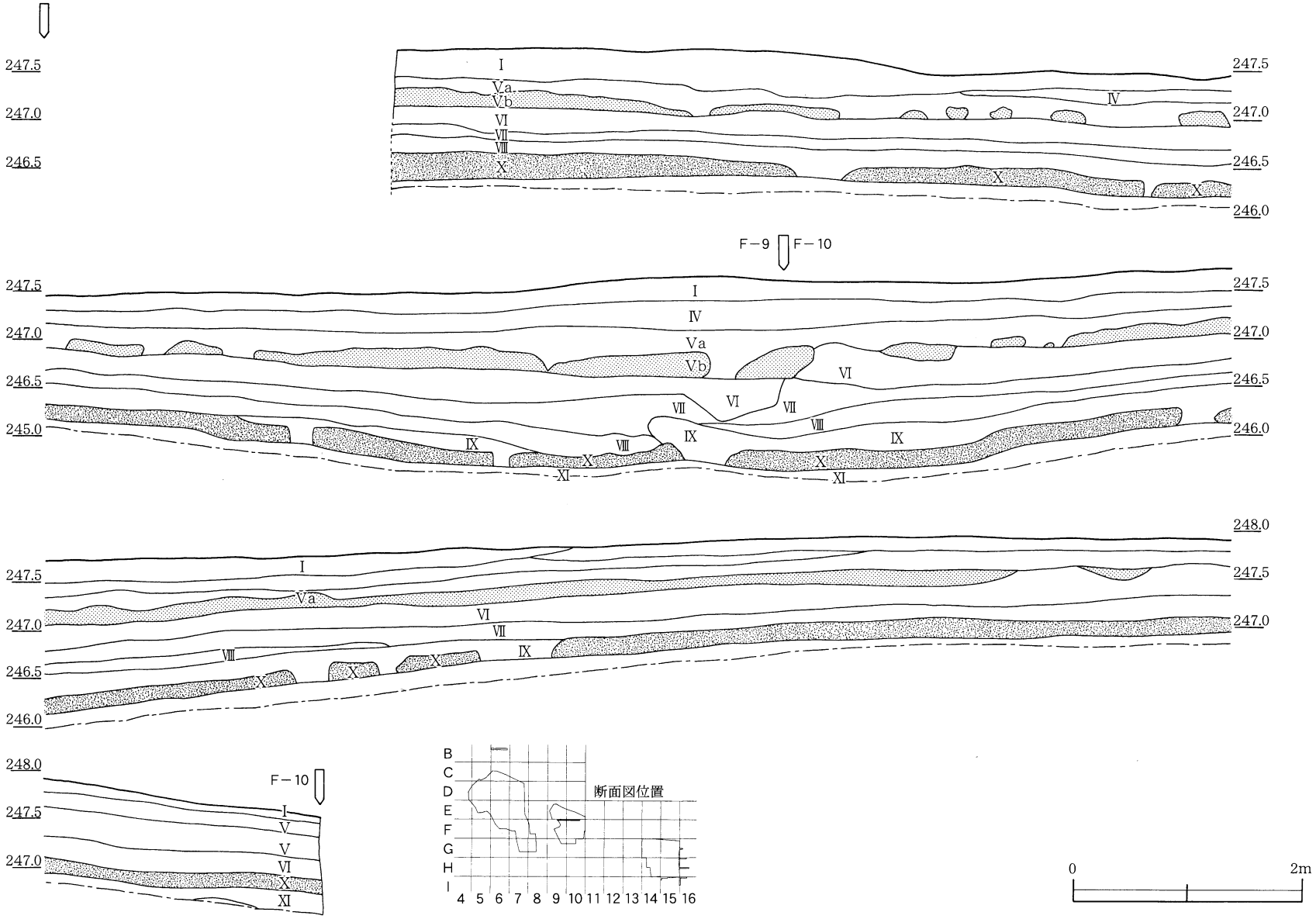
以下は本遺跡の基本的な層位である。

Ⅰ層	Ⅰ　層　灰褐色耕作土：大正(P-１)･安永(P-３)の火山灰を含む層。
Ⅱ層	Ⅱ　層　黒色土：古代･中世遺物包含層
Ⅲ層	Ⅲ　層　暗茶褐色土：弥生･古墳時代遺物包含層。
Ⅳ層	Ⅳ　層　明黄褐色土：(P-５)火山灰を基盤にした層で，縄文時代後期･晩期遺物包含層。
Ⅴa層	Ⅴa層　黄橙色火山灰土：(P-７)とアカホヤ火山灰が混入。
Ⅴb層	Ⅴb層　黄橙色軽石：アカホヤ火山灰。鬼界カルデラ起源約6300年前。
Ⅵ層	Ⅵ　層　灰茶褐色土：縄文時代早期中～後葉遺物包含層。
Ⅶ層	Ⅶ　層　黒褐色土：(P-11)を含み，縄文時代早期前葉から後葉遺物包含層。
Ⅷ層	Ⅷ　層　黒褐色火山灰土：約9500年前の(P-13)を含む。
Ⅸ層	Ⅸ　層　暗茶褐色粘質土：縄文時代早期前葉遺物包含層で，谷部にのみ明瞭な堆積。
Ⅹ層	Ⅹ　層　明黄色軽石：薩摩火山灰(P-14)。桜島起源で約11500年前。
Ⅺa層	Ⅺa層　暗茶褐色粘質土：腐植土層で，いわゆるチョコ層。
Ⅺb層	Ⅺb層　茶褐色粘質土：粘質を帯びた層。
Ⅺc層	Ⅺc層　暗黒茶褐色粘質土：粘質を帯びた層。
Ⅻ層	Ⅻ　層　黄褐色土：赤い粒子の混ざった火山灰土(P-15)を含む。

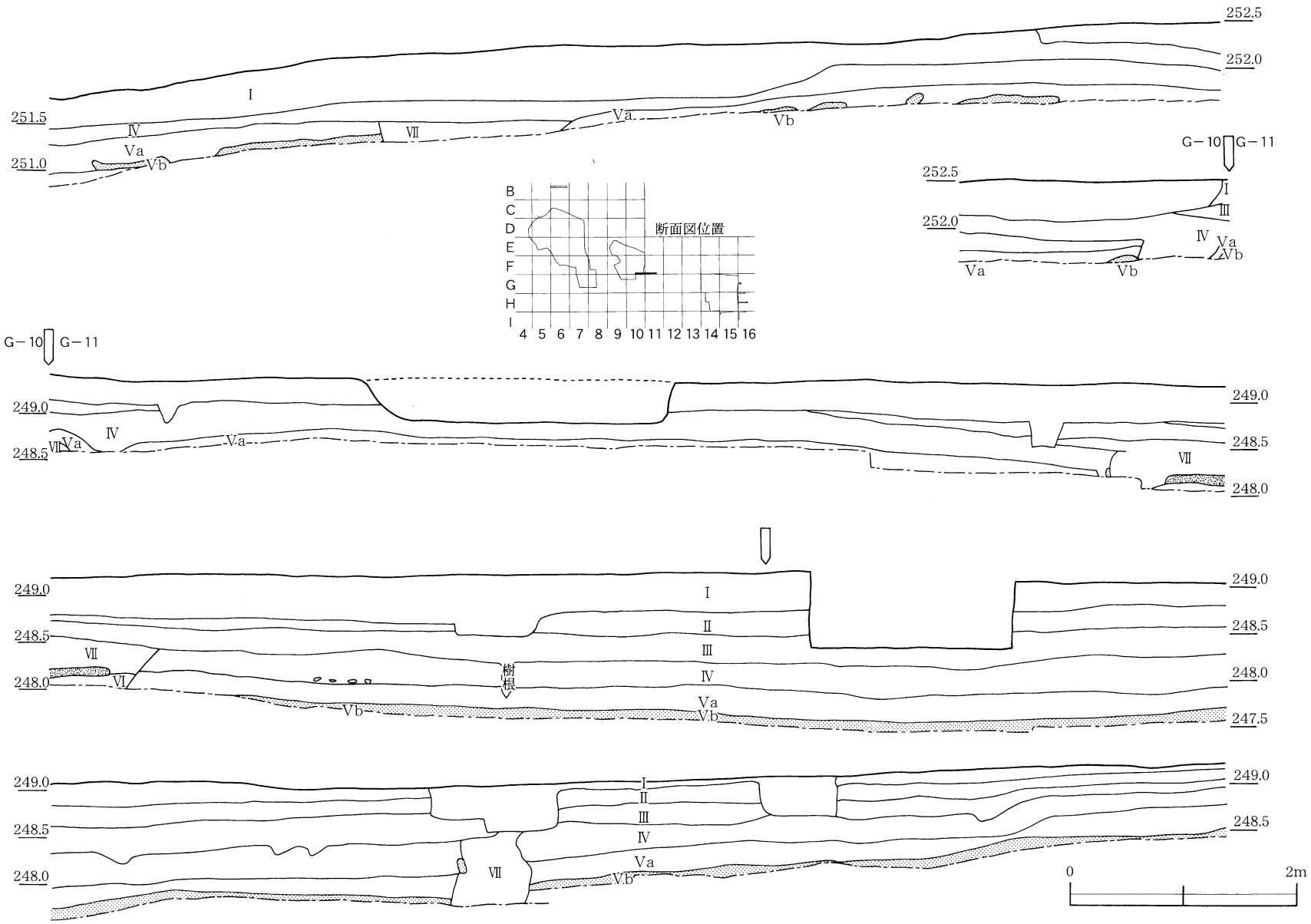
第５図　土層柱状図



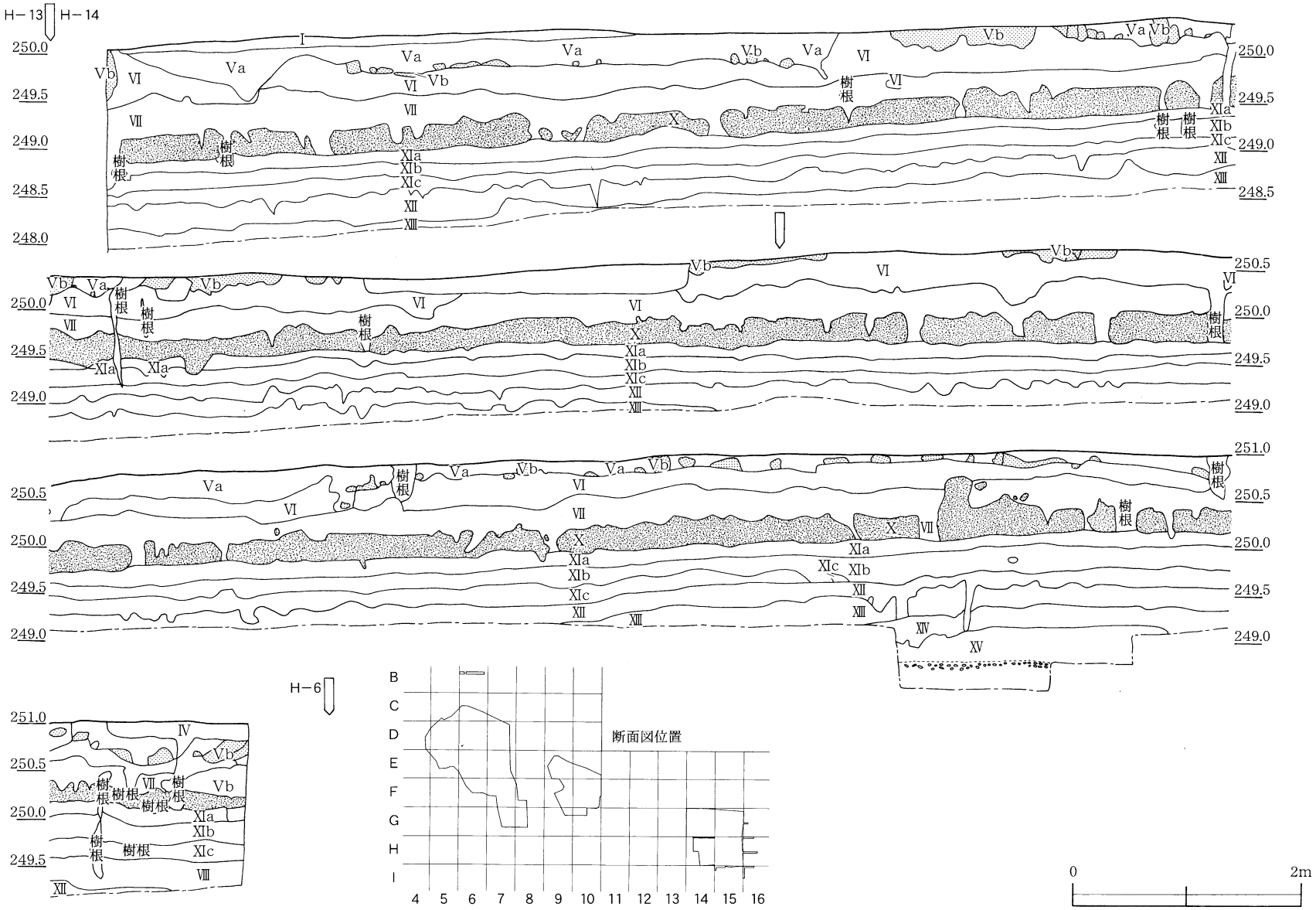
第6図　E−5・7区土層断面図



第７図　Ｆ－９・10区土層断面図



第８図　G－10・11区土層断面図



第９図　Ｈ−14区土層断面図

第４章　縄文時代早期の調査概要

第１節　調査の概要

縄文時代早期の発掘調査は，平成７年度に７地点及び４地点の一部について全面調査を実施し，平成８年度に４地点の残り部分を終了させ，２・３地点の調査へと移行していった。５・６地点に関しては，先行トレンチから遺物等の出土が見られなかったために全面調査はおこなっていない。

全面調査の方法は，Ⅴ層を重機で除去した後に人力でⅩ層上面まで掘り下げをおこなった。遺物の取り上げは，担当職員が中心となり適宜行い，遺構の検出は集石のみ遺物包含層中での確認が可能であった。しかし，竪穴住居跡や土坑，連穴土坑といった掘り込みを有する遺構については遺物包含層中での検出は出来ず，Ⅹ層上面まで掘り下げたのちにおこなった。また，地形図もⅩ層上面で作成している。

各遺構の実測図は，２・３地点に関して保存のため掘り下げを実施していないものもあり，状況に応じて図化あるいは写真撮影を実施している。竪穴住居跡に関しては，大半がベルトを残したままで調査を終了し，検出のみに留めたものもある。連穴土坑については，検出のみか半裁の状態で調査を終了している。土坑に関しては，半裁して土坑であることを確認するに留め，図化作業を実施していないものもある。集石については，礫を動かさない範囲で検出状況の平面図化をおこなった。このように調査の全行程を終了した調査区や遺構は無く，将来の発掘調査によっては基数やプラン等の修正もあり得る。

第２節　整理作業の方針

縄文時代早期の整理作業は，一部平成９年度の概報作成時に実施している。平成11年度は，縄文時代早期に限らず全時代のものを対象に遺物水洗・注記・接合・図面整理などの基本的な作業を実施した。縄文時代早期の遺構・遺物の実測・浄書等は，平成12年度から13年度にかけて整理作業員の協力の下各担当職員で実施した。執筆等の分担については，例言で示している。

遺構に関しては，大半が完掘していない状況であり概報段階ではスクリーントーンで表現していた。本報告では，その部分について波線で表現している。

遺物に関しては，地点ごとの分類は避け４工区全体で分類をおこなった。

土器は，Ⅵ層からⅩ層上面にかけて出土している。各土器型式の出土状況はその類の概要部分で報告していきたいが，これらは混在し，地点によっても一様でない。つまり，層位ごとに土器型式が出土する状況ではないということである。例えば，発掘調査の段階でⅨ層として取り上げをおこなった遺物には，４類や９類土器も混在していた。このことは，Ⅸ層として認識していた層は，主に谷状地形に見られプライマリーな状態ではないことを示唆している。よって，土器は型式変化の方向性を基に古いと思われる順に報告していく。石器に関しては，どの土器型式に属する石器であるかの認定はおこなえなかった。よって，石器は器種分類をおこない，取り上げた層位を基準にⅦ～Ⅹ層上面にかけて出土したもの，Ⅵ層から出土したもの別に報告していくこととした。

第３節　遺構の概要

（1）竪穴住居跡

竪穴住居跡は２・３地点のF－７区以北にのみ検出された。総数は52基である。これらの一部には，P－13（Sz-Tk３）火山灰の一次パミスと思われる黄色パミス層がレンズ状に堆積している状況が見られた。このことから，集落はP－13（Sz-Tk３）火山灰の降灰よりも以前に形成されていたことが判明しており，これまでの分析データなどをもとに，約9,500年前のものとして位置付けた。また，竪穴住居跡の埋土状況は４パターンに分類でき，これらの状況のいくつかは竪穴住居跡の時期差を示すものとしてとらえた。

竪穴住居跡の形態は，ほとんどが隅丸方形ないし隅丸長方形で竪穴内部にピットを伴うもの・竪穴外部にピットが伴うもの・竪穴の内外部にピットが伴うもの・ピットが見られないものに分類できる。また，床面積も小型のものや大型のものもある。

なお，竪穴住居跡内からの出土遺物は全体的に非常に少なく，床着の状態のものは極めて少ない状況であった。また，土器は風化・磨滅しているものが多く文様構成等はっきり見られないものも多い。このような制約が見られるが，出土土器は包含層分類に当てはめると３類土器の段階に収まるものである。

（2）連穴土坑

連穴土坑も２・３地点の北側にのみ検出された。総数は16基であるが，検出のみに留めた土坑の中には連穴土坑の可能性があるものもある。これらの連穴土坑は，竪穴住居跡を切るようにして検出されるものが多い。その中の３基に関しては，竪穴住居跡同様にP－13（Sz-Tk３）火山灰が堆積している状況が見られた。P－13（Sz-Tk３）火山灰と竪穴住居跡・連穴土坑の３者の関係は非常に注目に値する。１例を挙げると，P－13（Sz-Tk３）火山灰が明瞭に堆積している２号連穴土坑は７号竪穴住居跡の西壁を切って掘り込まれている。このことから遺構の年代は古いほうから，７号竪穴住居跡→２号連穴土坑→P－13（Sz-Tk３）火山灰の降灰となる。さらに，P－13（Sz-Tk３）火山灰が堆積している11号連穴土坑の床面部分に堆積していた炭化物から年代測定を実施したところ，先に竪穴住居跡で示した約9,500年前という年代観に概ね合致する結果が得られた。

遺構内出土の遺物も，竪穴住居跡と同様で非常に少ない。ただ，ブリッジ部分の床面に大型の礫が出土しており（２号連穴土坑），連穴土坑の機能に関して重要な鍵を握っている可能性もある。なお，床面まで掘り下げたものの全てに焼土もしくは火の痕跡が見られ，その中での11号連穴土坑はその堆積が非常に厚い。

（3）集石

縄文時代早期の集石は２・３地点で100基，４地点で32基，７地点で８基の合計140基が確認された。このうち，２・３地点の集石は現地保存のために平面プランと一部の断面図作成のみに止めており，最終的な形態分類はおこなっていない。

各集石の検出は，掘り込みのないものは遺物包含層中において確認できたが，掘り込みのある集石についてはX層上面で確認された。このため，包含層中において検出された集石が土俵上になって保存される結果となってしまっている。この両者は，全てが時間的な差を示すものではなく，検出レベルの差を示すものである。

概報作成時には，39基が縄文時代早期前葉段階であるとしたが，本報告では３類土器をはじめとする早期前葉段階の土器の出土ピークがⅦ層にある点を考慮し，Ⅶ層中に検出されたもので，３類土器などの分布と重なり，かつそれ以外の土器型式が集石内から出土していないものを早期前葉段階に近いものとして位置づけをおこなった。

（4）土坑

土坑は，２・３地点で約270基確認できた。単独もしくは竪穴住居跡等と切り合って検出されたものが175基，東西２つの土坑群が未調査のため約100基程度が切り合っているものとして考えた。形状は，円形・楕円形・方形と大きく３つに分類ができ，床面にピットを伴うものや２段掘りのものも見られた。時期的には，Ⅶ層を埋土に持つものとⅥ層を埋土に持つものとがあるが，前者が圧倒的に多い。竪穴住居跡や連穴土坑との相違点は，埋土にP－13（Sz-Tk３）火山灰の黄色パミスを含むものが全く見られないというところにある。これは，竪穴住居跡などと比較すると堆積容量が小さいという点もあり，比較的短時間で埋没する事が考えられる一方，人為的な埋め戻し作業も想定できよう。

土坑群内の１基を残留脂肪酸分析法で検証した結果，「強いて考えればヒト」が埋葬されていた可能性が指摘されている。土坑群に関しては，未調査のものが大半であり，将来的には土坑及び土坑群の位置づけを発掘調査や科学分析等によって解明していく必要性がある。

（5）道跡

２・３地点において確認された浅い谷状地形のことである。他の遺構が重ならない点や，分岐している箇所が見られる点などから道として機能していたものと判断した。東側を道跡１，西側を道跡２とした。その範囲は，概ねX層が流失している部分である。幅は変則的であり，狭い部分や広い部分を有しながらほぼ南北方向に確認できた。西側のものは東側と比較して深く，東側のものは特に顕著な分岐が確認された。特筆すべき状況としては，道跡１内には遺物が比較的多量に含まれているのに対し，道跡２にはほとんど遺物を含まない。この道跡２の延長上に確認トレンチを設定したが，ここでは多量の遺物が出土している。このことから，道跡２に堆積した遺物の多くは，水性作用などによって低い部分に移動して堆積しているものと思われる。

第４節　遺物の出土状況とその概要

（1）土器

1　分類基準

上野原遺跡における縄文時代早期の土器は，Ⅵ層からⅩ層上面にかけて出土した。出土状況は層ごとに単独で土器型式が出土することはなく，例えばⅦ層中が最も多くⅥ層からⅩ層上面にかけて出土するといった状況であった。よって土器は器形や文様などの属性分析を主に分類をおこなった。なお，４工区からは各時代の土器が出土しており，便宜上縄文時代早期の土器を第１群とし，縄文時代前期以降の土器を第２群・第３群として区分しておきたい。第２群以降の分類基準等は第５分冊以降で述べるものとする。以下，第１群の土器を１類から特徴を述べていきたい。

２　類別の概要

１類

既存の土器型式では，前平式土器に該当する。

器形は，口縁部から底部にかけて直行するものと思われる。口唇部は平坦で，全体像ははっきりとしないが円筒形の器形を呈する土器である。文様は，胴部に単純な貝殻条痕文を施すものである。貝殻条痕文は横位ないし斜位に施される。貝殻条痕文は，比較的大きめの貝殻で施文されたものが多い。内面調整は，ナデもしくは工具ナデが主であるが，希に貝殻条痕文を施すものも見られる。胎土は，石英・長石を含み角閃石や雲母を含む資料は極めて少ない。特筆すべき事項としては，小軽石を含むものも見られることである。色調は，赤茶褐色ないし黄茶褐色を呈する資料が多い。分布は，２・３地点の北側部分に出土する。

２類

既存の土器型式では，前平式土器及びそれに類するものに該当する。

器形は，口縁部から底部にかけて直行するものと思われる。口唇部は平坦である。器形には，円筒形と角筒形の２種類が見られるが，全体像がはっきりする資料の出土は少ない。

文様は，胴部に貝殻条痕文を地文とし貝殻条痕文を主に重ねる二重施文の手法をとる。二重施文は貝殻刺突文以外で構成されている。内面調整は，ナデもしくは工具ナデが主であるが，希に貝殻条痕を施すものも見られる。胎土は，石英・長石を含み角閃石や雲母を含むものは少ない。色調は，赤茶褐色ないし黄茶褐色を呈するものが多い。分布は，２・３地点にのみ出土しており，さらにC・D－６区を中心とした狭い範囲での出土状況である。ただし，角筒形の出土地点は円筒形と異なっており，ここに分類した両者はセット関係にない可能性が高い。なお，追加トレンチではわずかに２類の角筒形が出土しており，分布域は北部へ拡大しているものと思われる。

３類

既存の土器型式では，河口氏の前平式土器，新東晃一氏の知覧式土器，長野眞一氏・前迫亮一氏の加栗山式土器に該当する。

器形は，口縁部が直行するものとわずかに外反するものがあり，口唇部は平坦である。円筒形と角筒形及び口縁部の上面観がレモン形を呈するものの３種類のものがある。

文様は，胴部に貝殻条痕文を地文とし貝殻刺突文のみを重ねる。貝殻刺突文は，間隔が広いも

の，狭いもの，密接なものとに分けられ，また，貝殻刺突文が１本を１つの単位とするもの，２本のもの，３本以上のものなどバリエーションも多い。三器形ともに貼付文の有無でさらに分けられるが，角筒形の場合４面中２面にのみ貼付されるものもある。貼付文の形状は，粘土紐状とクサビ状とがあり粘土紐状のものは，細めのものと太めのものとがある。

内面調整は，基本的に工具ケズリを用いて器壁を薄く仕上げている。口縁部内面にミガキを施すものも見られる。この内面調整は，外面施文ともある程度関連性があり，二重施文の間隔が広いものにはミガキは見られない。代わりに二重施文の間隔がやや狭く，貼付文が施されるものにはミガキが明瞭に見られるのである。胎土は，石英・長石を含み角閃石を含む資料は極めて少ない。だが，雲母を含む資料は１・２類と比べて若干多い。色調は，赤茶褐色や黄茶褐色のものが多い。なお，この類は２・３地点の縄文時代早期遺物の中で最も量的に多く，竪穴住居跡の多くはこの段階の土器が混入している。分布は２・３地点に出土するが，F－７区以南の高所からはほとんど出土が見られない。なお，北側に設定したトレンチでも多く出土している。

４類

既存の土器型式では，吉田式土器に該当する。

器形は，口縁部が外反し口唇部は平坦である。円筒形のみが出土している。文様は，口唇部に刻目を施し，口縁部には横位の貝殻刺突文がめぐる。その下位には，縦位の貝殻刺突文や「C」字状の刺突文を施すなどしてクサビ形貼付文を意識したものが見られる。胴部は貝殻押引文が施こされている。胎土に雲母を含む資料が多い。色調は，赤茶褐色のものが多く，雲母を含んでいるためか全体的に脆い資料が多い。分布は，２・３地点の北側に多く出土し，追加トレンチの調査ではややまとまりが見られた。このことから，分布域は北側へ拡大しているものと思われる。

５類

既存の土器型式では，倉園B式土器に該当する。

器形は，口縁部が外反し直線的な胴部を呈する円筒形のみである。文様は，胴部に横位の貝殻条痕文を施すもので，１類に類似するが貝殻条痕は横位でシャープなものが多い。４地点にのみ１個体程度の出土しか見られない。

６類

既存の土器型式では，石坂式土器に該当する。

器形は，口縁部が外反するものと直行するものとがある。文様は，胴部に貝殻条痕文を綾杉状に施すものである。口縁部は斜位の貝殻刺突文が施され，その下に横位の貝殻刺突文がめぐるものもある。内面調整は，口縁部から胴部にかけて比較的丁寧なナデが施され，部分的にミガキに近い光沢を発するものも見られる。これは，器面の乾燥がある程度進行した段階でのナデによって生じたものとして理解できよう。色調は，赤茶褐色や黄茶褐色を呈する。分布は，２・３地点ではD－６区を中心に分布し，４地点でもわずかに出土している。このように，隣接する地点同士に同じ類が出土するようになるのはこの６類土器からである。

７類

既存の土器型式では，下剥峯式土器に該当する。

器形は，口縁部が直行ないし内湾し，資料によっては内側に肥厚する。瘤状もしくは楕円形状の瘤状突起を有するものもある。文様は，胴部に貝殻刺突文を施す。羽状文のみのものと間に横位の貝殻刺突文が入るものとがある。色調は暗褐色や黄茶褐色のものが多い。分布は，２・３地点の北東部及び４地点に出土する。

８類

既存の土器型式では，辻タイプと称されるものに該当する。７類の下剥峯式土器と９類の桑ノ丸式土器との関連性が高く，かつ分類はいずれに属するのかはっきりとしていない。ここでは，短い沈線文を施すものについて分類をおこなった。器形は，口縁部が直行ないしわずかに内湾し口唇部は平坦面を有する。胴部から底部にかけては外開きに直線的である。文様は，短い羽状沈線文を基本とし貝殻刺突文を同一器面上に交互に施文するものもある。内面調整は，丁寧なミガキによって調整されている。また，内面に限らず外面も施文前に入念なミガキが施されている。色調は暗赤茶褐色などが見られる。分布は，２・３地点及び４地点に出土する。

９類

既存の土器型式では，桑ノ丸式土器に該当する。

器形は，口縁部から底部までほぼ直線的なバケツ状の器形で，口唇部は平坦面を有し内側へ肥厚させるものも多い。文様は，胴部に短い沈線・条痕で羽状文を施すものが主体をなし，これには横位のものと縦位のものとがある。施文具も貝殻・櫛歯状工具・棒状工具など様々である。内面調整は，どの文様パターンに関しても丁寧であり，いずれも入念なミガキが施されている。胎土は，粒子が粗いものが多く小礫を多量に含むものも珍しくない。分布は，２・３地点及び４地点に出土する。３類土器に次いで出土量の多い土器である。

10類

押型文土器を一括している。文様や器形などから６つに細分した。a類としたものは，楕円押型文を施すものである。口縁部は外反し，胴部でやや膨らむ器形を呈する。押型文の粒は，小粒のものや粗大なものなどがあり，施文方向も縦位のものと横位のものとがある。楕円文の出土量は，山形文と比べて少ない。b類としたものは，連珠状の押型文を施すものである。口縁部は外反するものが多く，内面には段を有するものが見られる。施文方向は，縦位のものと横位のものとがある。c類としたものは，山形押型文を横位ないし斜位に施すもので，器形は口縁部が外反する。胴部で膨らみ平底の底部へ至る。底部径は口縁部径に比べて小さく，圧痕が観察できる資料も見られる。d類としたものは，山形押型文を縦位に施すもので，口縁部は外反する。e類としたものは，山形押型文を施し，口縁部が直行ないし内湾する器形を呈し，口唇部が内側に肥厚するものも見られる。これは，９類の器形の特徴に極めて類似しており，両者が時間的にも極めて近い関係にあることが推察できる。f類としたものは，楕円文と山形文とを併用しているものである。

内面調整は，ナデ調整しているものが多い。胎土は，角閃石を含む資料が他の類と比べて多い傾向が窺える。分布は，２・３地点及び４地点であるが，f類の楕円文と山形文とを併用している資料は２・３地点のみに出土する。９類土器と類似した遺物の広がりを持っている。

11類

刺突文に類似した文様のものである。全体の器形を知りうる資料は出土していない。口唇部は平坦面を有して内側へ肥厚するものもある。口縁部は直線的であるが，わずかに内湾するものもある。全体の器形を知りうる資料は出土していないが，これらの形態などから９類に近い器形を呈するものと思われる。なお，10b類土器の文様と併用している資料があることから，10類土器とも近い関係にあるものと思われる。施文方法に関しては，松の枝などを回転させたものと極めて類似する。

12類

既存の土器型式では，一野式土器や中原式土器もしくは櫛島タイプと称されているものに該当する。

器形は，口縁部が直行ないしわずかに外反する。口唇部は丸味を呈するものが多く，胴部はわずかに膨らみ平底の底部へ至る。

文様は，口縁部に横位の貝殻条痕文を施す。この貝殻条痕文は，個体によっては押引状を呈するものもある。胴部は多くの場合無文であり，ケズリ痕を顕著に残すものも見られる。また，口縁部の貝殻条痕文の下に縦位の貝殻条痕文が観察できるものも見られる。角閃石を含む資料が多い。

分布は，２・３地点に見られ４地点には出土していない。

13類

撚糸文・縄文を施すものを一括した。

器形は，口縁部が直行するものや外反するものなどがある。文様は，縄文・撚糸を施文するものをa類・変形撚糸を施文するものをb類と細分した。分布は，a類がD～G区にかけて出土しているのに対し，b類はF～G－７・８区に集中している。なお，b類は器形において14類に類似しており，14類として同一型式の範疇で理解できる可能性もある。

14類

既存の土器型式では，手向山式土器に該当する。

器形は，口縁部が外反し胴部で屈曲する。底部は若干上げ底状を呈する。文様は，間延びした縦位の山形押型文を施すものなどがある。口唇部にはやや凹点に近いキザミが施されている。２・３地点ではF・G－７・８区を中心に出土し，４地点でもわずかに出土している。出土量的には少ない。

15類

既存の土器型式では，妙見・天道ケ尾式土器に該当する。

器形は，口縁部が外反する。口縁部や胴部に突帯をめぐらせ，部分的にフジツボ状の瘤状突起が付着する。文様は，沈線文・刺突文を組合せで多様な文様パターンを作出している。２・３地点の南側及び７地点に出土している。

16類

既存の土器型式では，平栫式土器に該当する。

器形は，口縁部が外反する。口縁部外面に粘土帯を貼付するなどして肥厚した文様帯を作出している。文様は，口縁部に沈線文を羽状に施し，胴部には結節縄文が施文されている。

17類

既存の土器型式では，塞ノ神式土器に該当する。撚糸文系と，貝殻文系とがある。

撚糸文系の器形は，口縁部がラッパ状に外反し，短筒状の胴部を呈する。底部は比較的薄手で若干上げ底状を呈している。文様は，網目撚糸文を間隔を持って縦位に施すものと，幾何学的に撚糸文を施しその上下を沈線で区画する２つのタイプが見られる。

貝殻文系の器形は，口縁部が直行し胴部がわずかに膨らむものが多い。

分布は，２・３地点の北側及び４地点，７地点に出土する。

18類

１類から17類までに入らないものを一括した。１個体程度の出土であり，詳細は各地点ごとの報告中で述べたい。

（２）土器加工品

土器片を素材とした加工品は，底部片を利用したものと胴部片を利用したものの２種類が出土している。両者共に２・３地点から出土している。底部片を利用するものは，３類土器を再加工している。ほぼ中央部に回転によって未貫通の孔が見られ，土器の表面もこの孔を中心に同心円状に摩耗しているものもある。胴部片を利用するものは，９類土器の胴部片を円形に再加工を施している。

（３）石器

１　分類基準

上野原遺跡における縄文時代早期の石器は，Ⅵ層からⅩ層上面にかけて出土した。土器の出土状況がⅩ層からⅥ層までに混在していることから，石器に関してはその帰属の判別は極めて困難であった。よって，各器種ごとにⅩ層上面からⅦ層にかけて出土したものと，Ⅵ層から出土したものとに分けて掲載することとした。なお，土器の出土分布域などから時期設定がある程度可能なものも見られ，この点に関しては個別にまとめている。

2　類別の概要

石鏃

石鏃は，２・３，４，７地点の全ての地点において出土した。形状は，正三角形・二等辺三角形に大別でき，抉りの状態と大きさによって細分が可能であった。石材は，黒曜石やチャートなどを用いているものが多く，中には頁岩製のものも見られた。傾向としては，小型のものは２・３地点に多く，４地点においては見られないことから早期前葉段階の特徴と思われる。

尖頭状石器

形状は，石鏃に類似するが厚みがあり，縁辺の加工も比較的粗いものが多い。２・３地点及び４地点において出土している。従来，押型文土器に伴うとされているものである。

石匙

石匙は，２・３地点に１点のみ出土した。ハリ質の安山岩製のものである。土器の分布状況から，これは中～後葉段階の資料である。

楔形石器

楔形石器として認識できたものは１点に留まった。黒曜石を素材として，対向する剥離を有して剥離面はつぶれたような状況が見られた。

異形石器

２・３地点及び４地点で出土している。いわゆるトロトロ石器とも称されるものも含まれる。

石核

調査区内からは，小型のものも含め黒曜石やチャートの石核が出土している。自然面を残すものに関しては，こぶし大程度の円礫を用いているものと思われる。また，1098は風化面を有する角礫を素材としている。このような角礫状の素材は転石では考えにくく，原産地に近い露頭などで採取した可能性が考えられる。

剥片類

剥片類はわずかにしか出土していない。しかし，石核等の出土から遺跡内で石器を製作していた可能性は高い。

石斧類

５cm程度の小型石斧や６～10cm程度のもの，10cm以上のものと大きく３種類が見られる。小型のものは，２・３地点のⅦ層以下に多く出土している。なお，形状では，ノミ状のものや丸ノミ状の刃部を有するものなども見られた。この類は２・３地点にのみ出土していることから，

早期前葉段階のものである可能性が高い。また，小型のものも同様のことが言える。なお，素材の形状を残したままの1110のような石斧も見られる。２・３地点ではこれらの他に未製品と思われるものや再加工を施したものなども見られた。

環状石斧も２・３地点で１点出土している。これは，Ⅶ層出土品であるが土器の出土分布から中～後葉段階のものであると思われる。

礫器

礫器は，２・３地点及び４，７地点でも出土している。１辺にのみ加工痕が見られるものをA類，２辺以上に加工痕が見られるものをB類とした。素材は板状に剥離する安山岩を多用している。形状が三角形を呈するものや，断面が逆三角形を呈するもの，縄文時代晩期などでよく見られる扁平打製石斧状のものなどが出土している。このように資料のその幅は広く，用途に関しても特定することは難しい。なお，刃部の摩耗が著しいものも多い。

磨石

磨石は，２・３地点及び４，７地点で出土している。２・３地点では方形のものが出土しており，中・後葉の４地点からは出土していないことから，この形状のものは前葉段階の特徴であると思われる。このほかに，小型の磨石や円形・楕円形あるいは不定形の円礫を用いたものなどが出土している。出土量は多い。

砥石

著しい磨り面が認められるものをここに分類した。大人の手のひらサイズのものがほとんどである。磨りの他に，あばた状の敲打に類似した痕跡も見られる。

石皿

２・３地点及び４地点や７地点において出土している。２・３地点では，Ⅶ層以下より面取りを施したものが出土しており，他の地点ではこのような形状の石皿が見られないことから早期前葉段階のものであると思われる。なお，台地周辺部では扁平に剥離する安山岩が産出され，これを使った石皿も比較的多い。面取りを施すものをA類，扁平な素材を用いるものをB類，厚みのあるものをC類とした。B・C類に関して言えることであるが，その多くが破片の状態であった。

（4）軽石

軽石は，加工・未加工品共に包含層中や遺構内から出土している。２・３地点及び４地点で出土している。本来は，遺跡の土壌中には生成されないため，人為的な持ち込みの可能性が極めて高い。この中には，中央に孔を穿つものなどが見られる。用途などに関しては不明である。なお，図化してはいないが包含層中より出土した軽石の中には，楕円形状のものが複数見受けられ，加工の結果であるのかもしれない。

第５章　縄文時代早期（２・３地点）の調査

第１節　２・３地点縄文時代早期の概要

２・３地点は，C～G－５～８区に位置する。地形は南側から北側にかけて緩やかに傾斜し，東側に４地点との境でもある谷状地形がある。西側には，C～G－４区周辺から傾斜する谷状地形があり，この２つの谷状地形に挟まれた調査区である。B区とC区との間には現道があり，現道より北側部分は残地林としてⅤ層以下の遺物包含層が保存されるため早期の包含層まで発掘調査を実施してはいない。しかし，平成９年度の追加調査で数本のトレンチを設定した結果，縄文時代早期の遺跡範囲は北側斜面にまで及んでいることが確認されている。

発掘調査時においては，F区より北側を２地点，G区より南側を３地点と呼んでいたが，縄文時代早期に関しては特に後葉段階において遺跡の連続性が窺われたため，報告書では２・３地点として一連の地点として記述した。

遺構は，竪穴住居跡52基・連穴土坑16基・集石100基・土坑175基・土坑群２ヶ所・道跡２本が検出された。これらの遺構の多くは，ベルトを残したままないし半裁の状態で埋め戻し保存してある。検出された遺構のレベルは，掘り込みを有するものがⅩ層上面，集石などはⅦ層上面・Ⅶ層中・Ⅹ層上面と様々である。

遺構の報告は，グリッドごとに遺構配置図を示したうえで各遺構ごとに報告していきたい。

土器は，５類以外の土器が出土している。出土量はⅦ層→Ⅵ層の順に多く，Ⅹ層上面まで出土している。

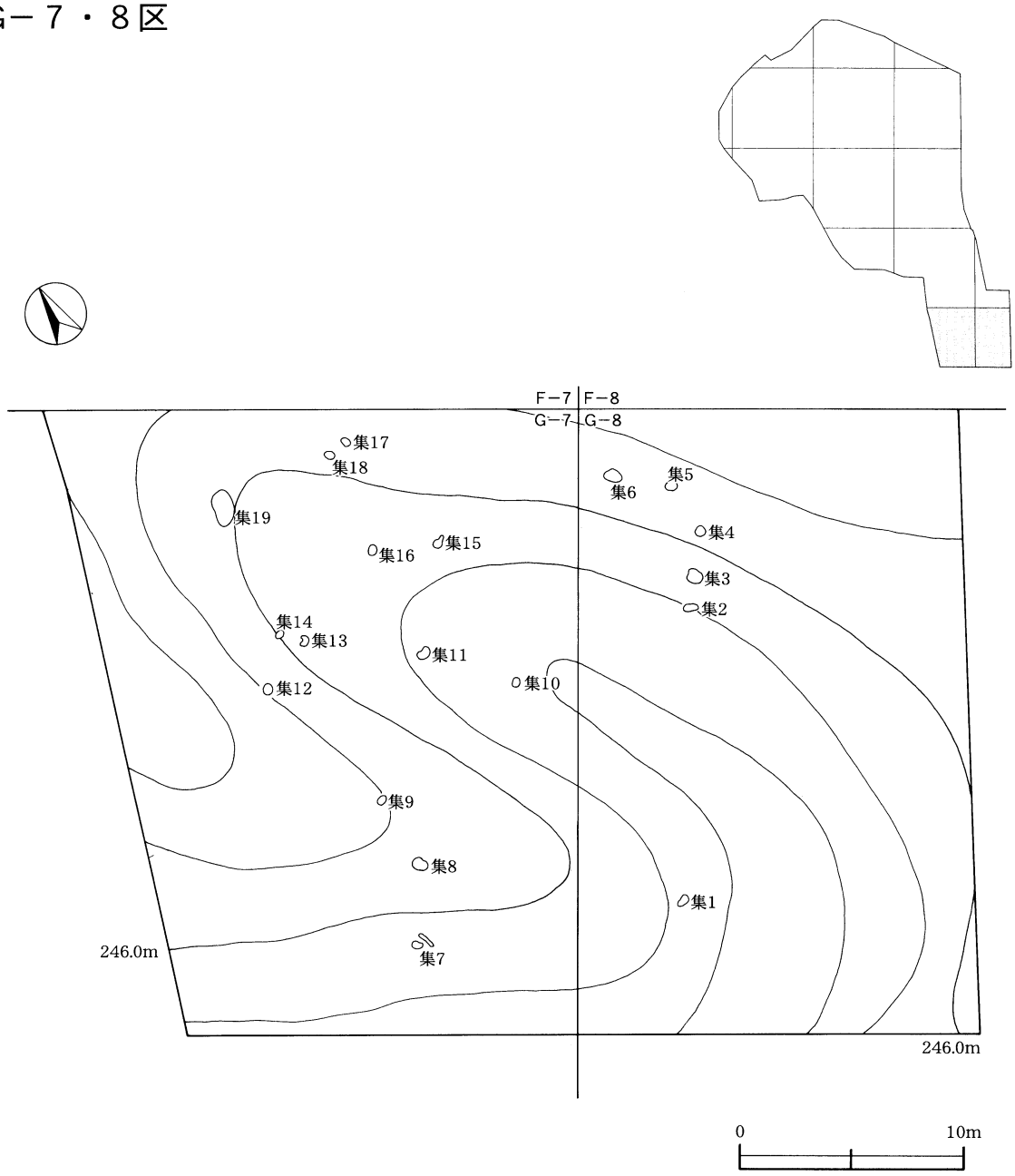
石器は，石鏃などが出土している。しかしながら複数の土器型式と共に出土していることから，これらの石器がどの段階に共伴するかははっきりとしなかった。だが，前葉の土器のピークがⅦ層以下であること，中・後葉の土器がⅥ層中に求められることから，石器に関しても，早期前葉，中・後葉という枠内での位置づけは可能である。なお，遺物の出土傾向としては２地点では早期前葉段階から中葉段階にかけて，３地点では，早期中葉から後葉にかけての遺物が主に出土している。

第２節　グリッドごとの遺構配置図

第10図を１グリッドないし隣接するグリッド同士で提示した。グリッドごとの遺構データは第３表にまとめてある。これで見ると，竪穴住居跡や集石などの遺構はC・D－６区が最も多い傾向にある。

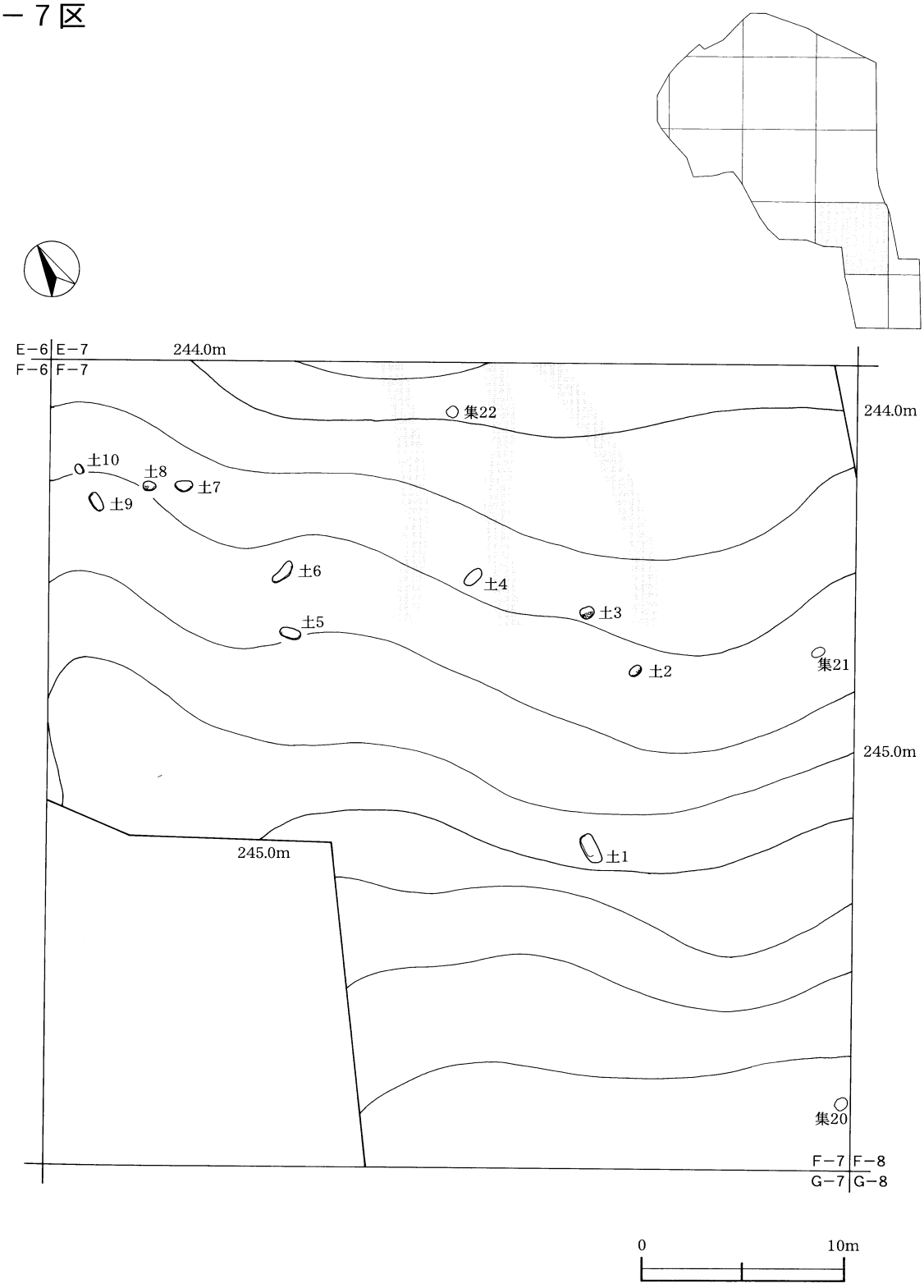
第10図　2・3地点縄文時代早期遺構配置図

G－７・８区



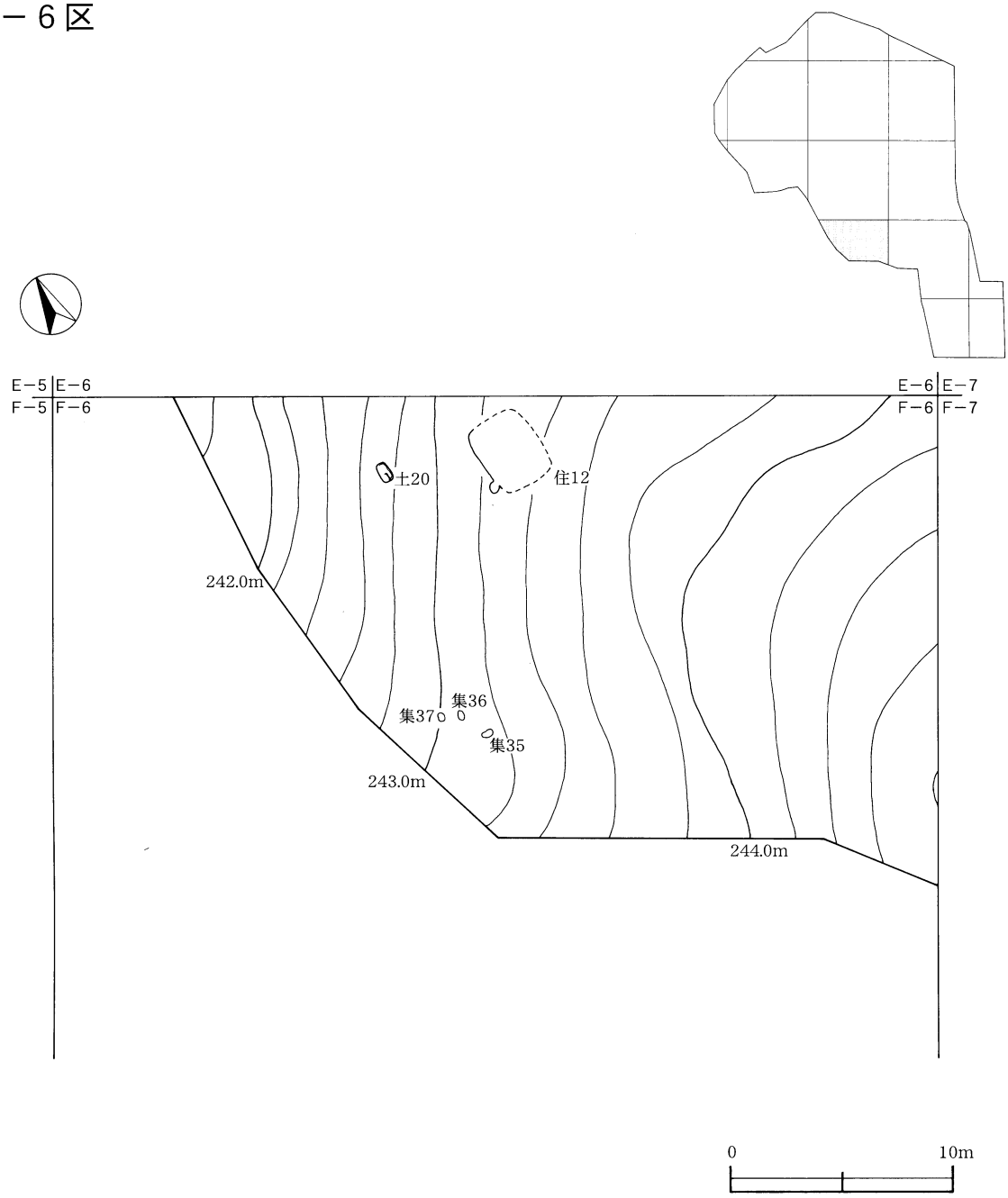
第11図　G－７・８区遺構配置図

F－7区



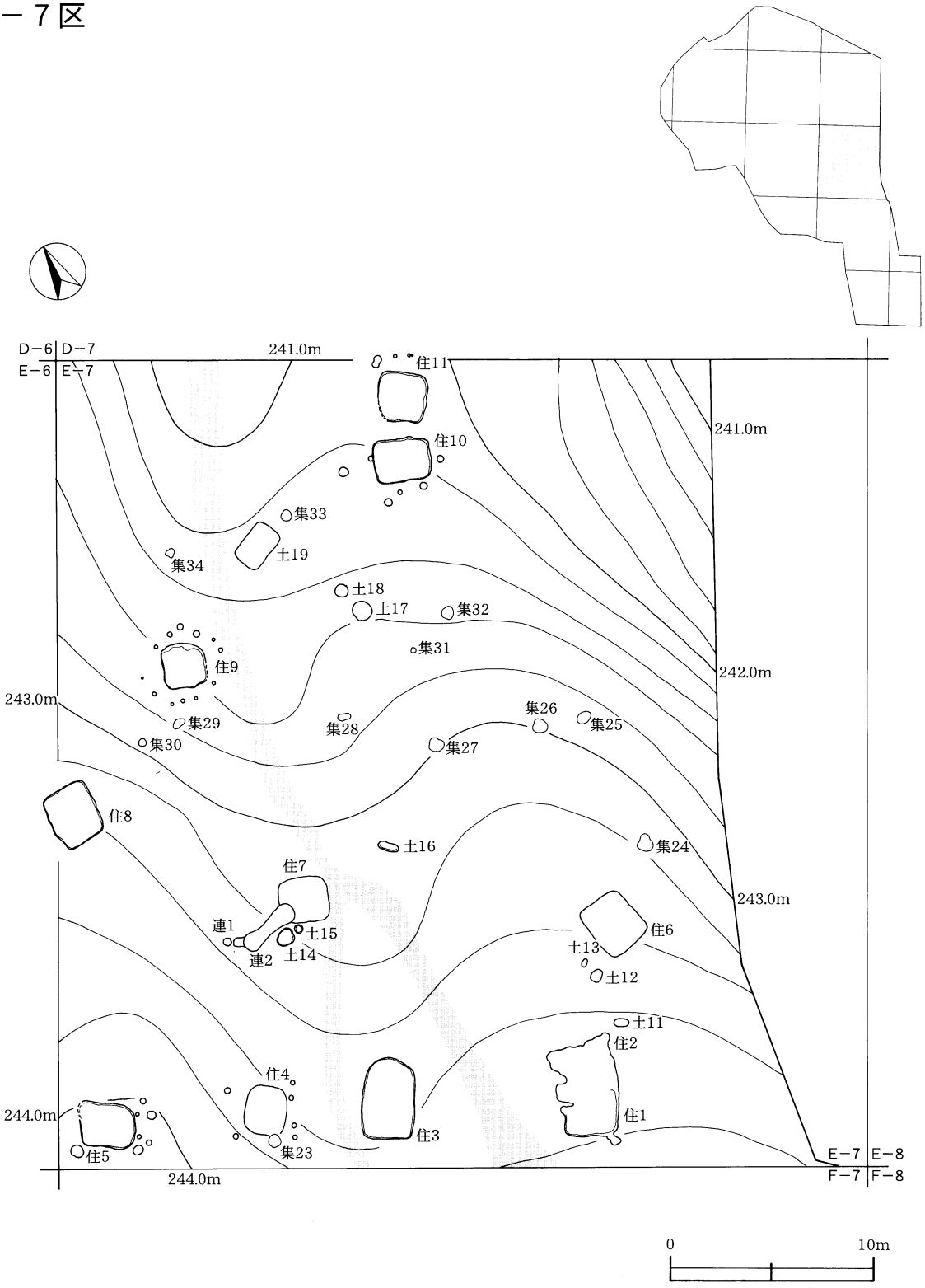
第12図　F－7区遺構配置図

F－6区



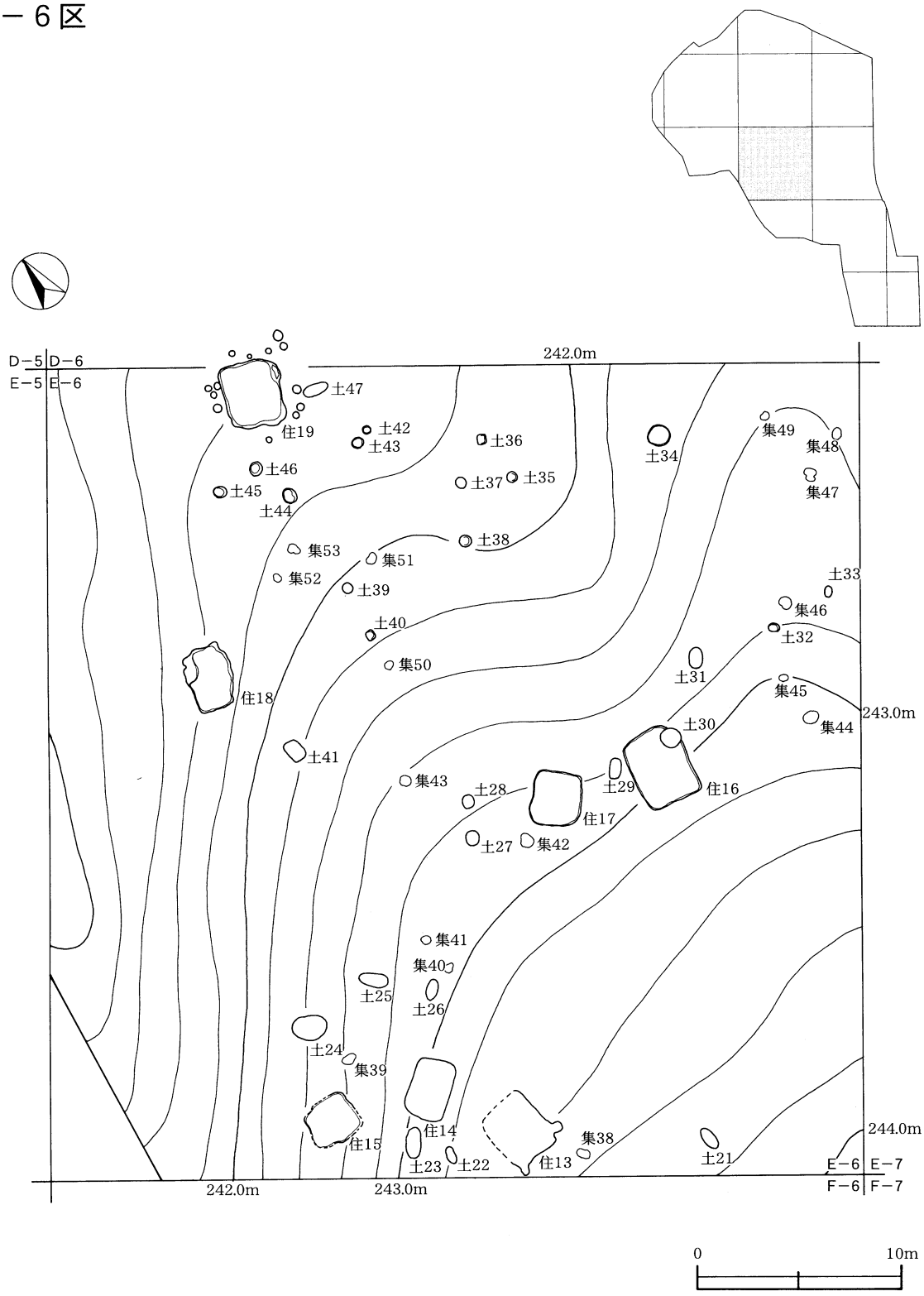
第13図　F－6区遺構配置図

E－７区



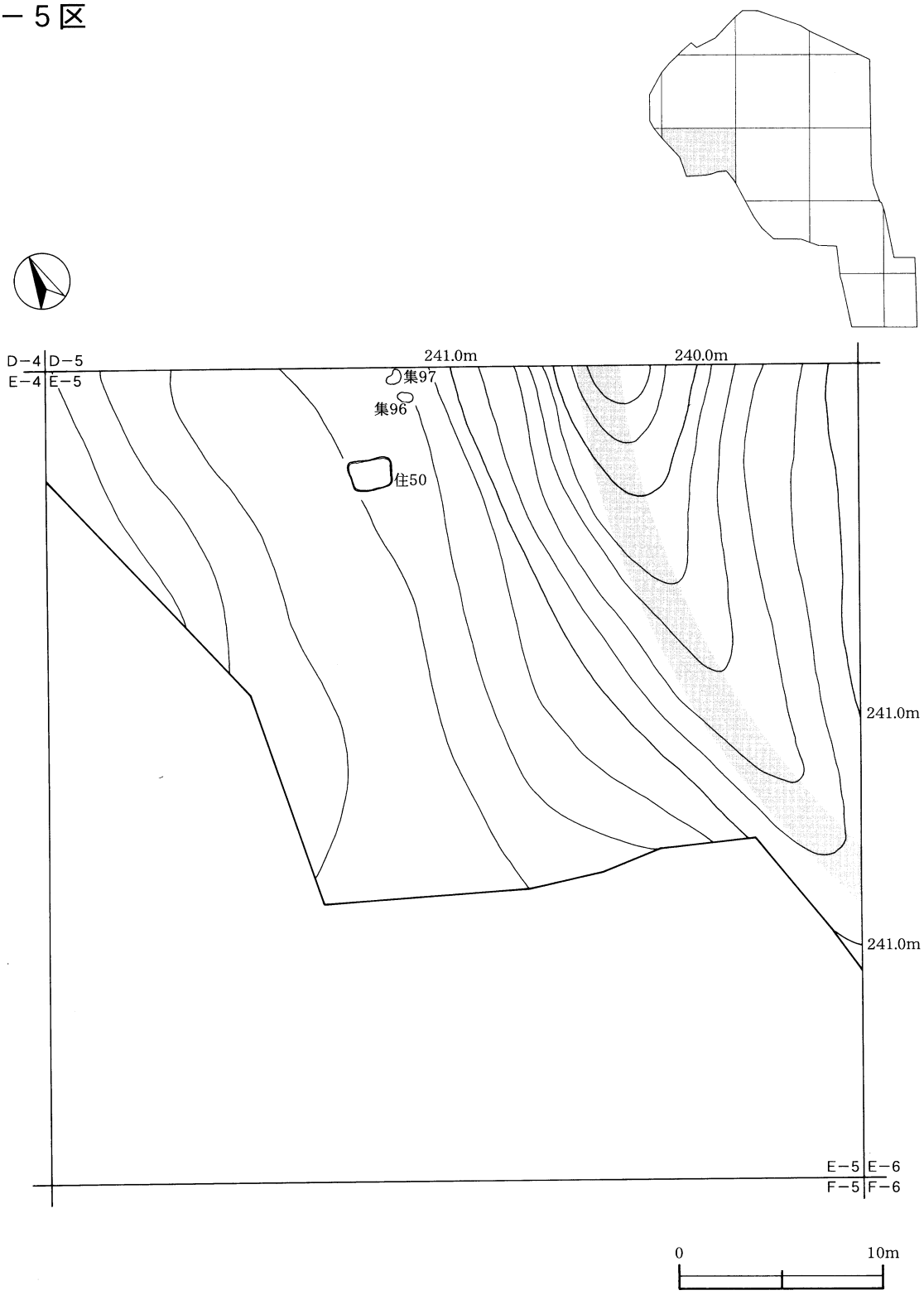
第14図　E－７区遺構配置図

E－6区



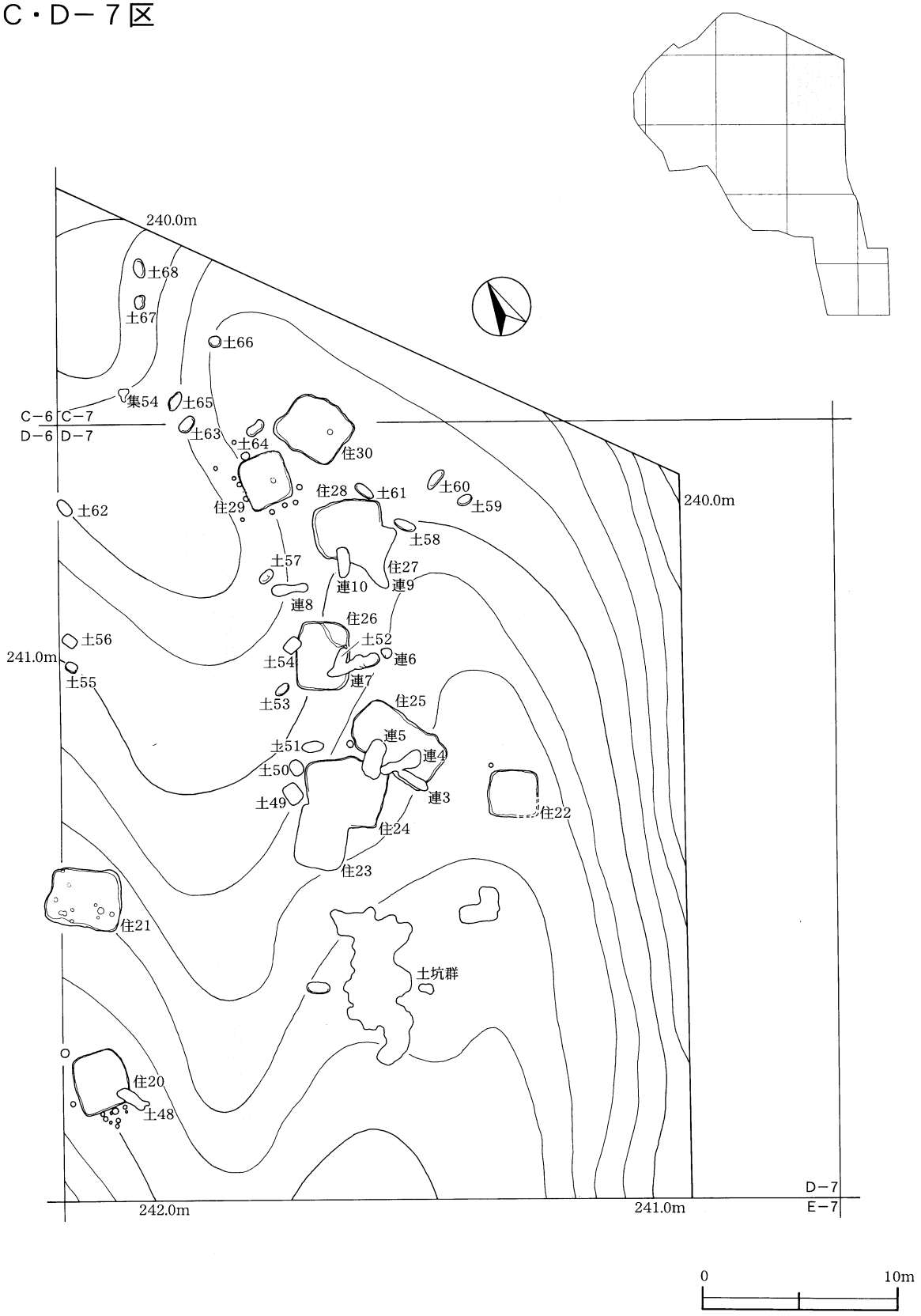
第15図　E－6区遺構配置図

E－5区

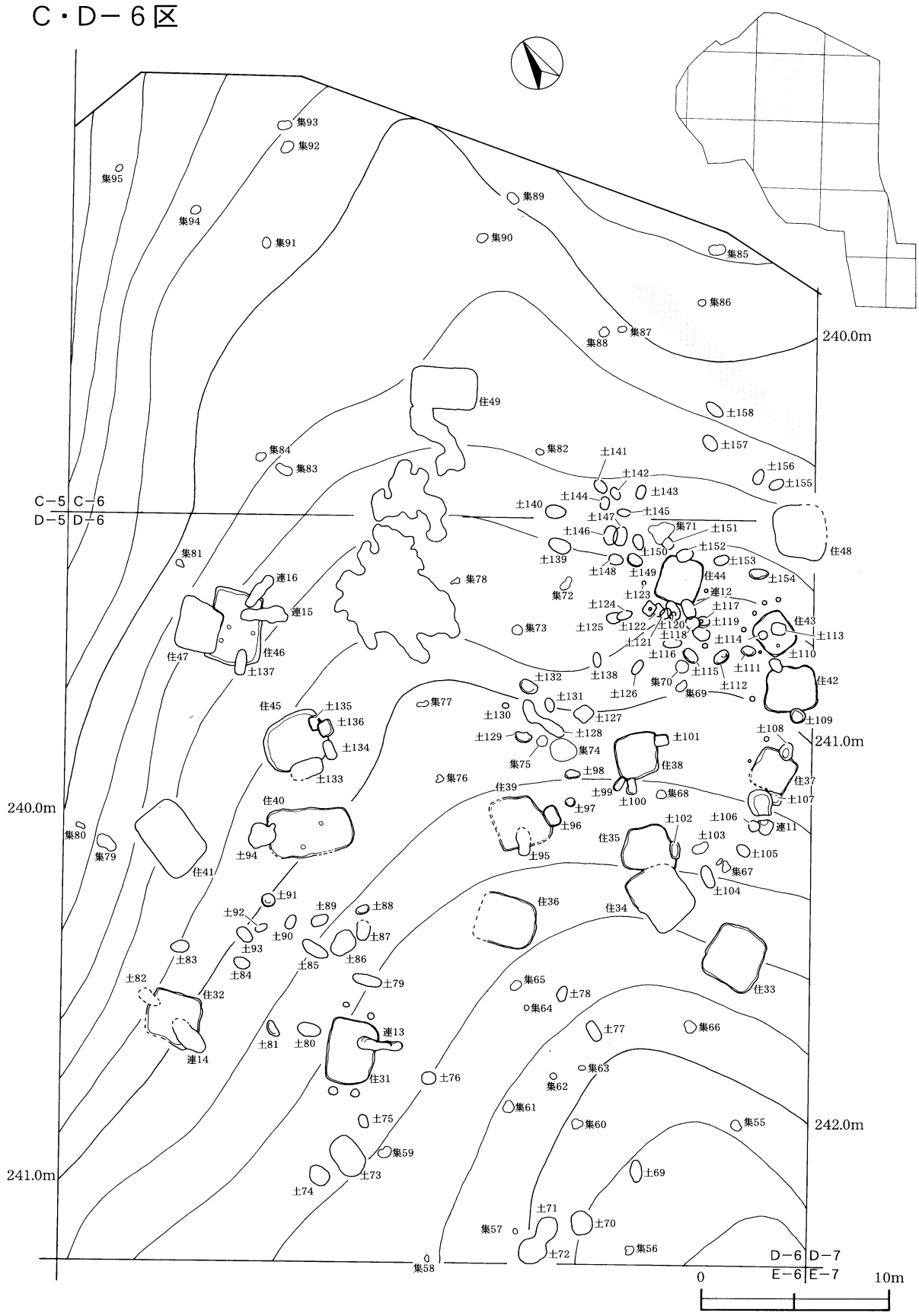


第16図　E－5区遺構配置図

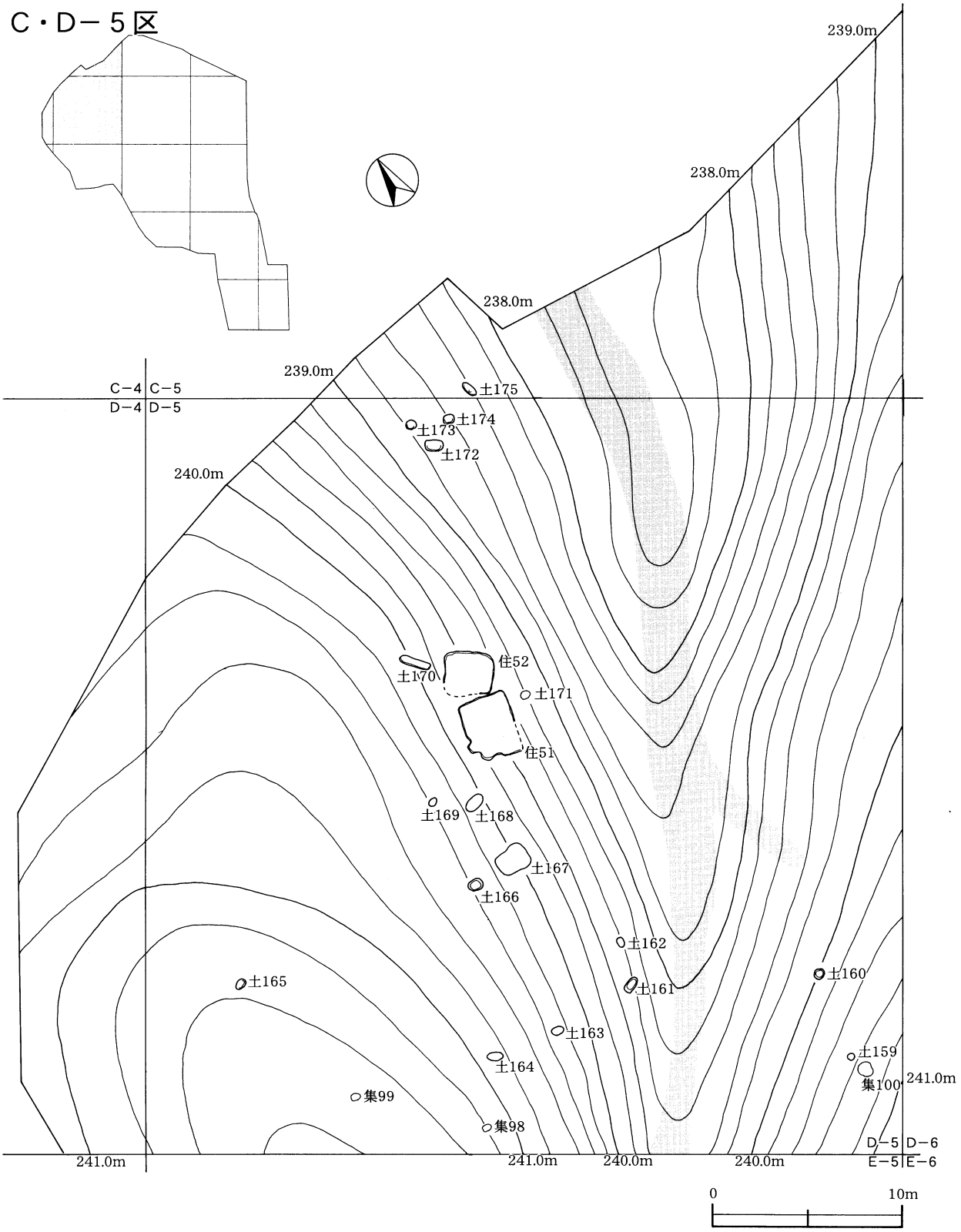
C・D－７区



第17図　C・D－７区遺構配置図



第18図　C・D－6区遺構配置図



第19図　C・D－5区遺構配置図

第３表　各グリッドの遺構概要表

区	遺構名	基　数	遺構番号
G−7・8	竪穴住居跡	0	
	連穴土坑	0	
	集石	19	1号～19号
	土坑	0	
	土坑群	0	
F−7	竪穴住居跡	0	
	連穴土坑	0	
	集石	3	20号～22号
	土坑	10	1号～10号
	土坑群	0	
F−6	竪穴住居跡	1	12号
	連穴土坑	0	
	集石	3	35～37号
	土坑	1	20号
	土坑群	0	
E−7	竪穴住居跡	11	1号～11号
	連穴土坑	2	1号・2号
	集石	12	23号～34号
	土坑	9	11号～19号
	土坑群	0	
E−6	竪穴住居跡	7	13号～19号
	連穴土坑	0	
	集石	16	38号～53号
	土坑	27	21号～47号
	土坑群	0	

区	遺構名	基　数	遺構番号
E−5	竪穴住居跡	1	50号
	連穴土坑	0	
	集石	2	96号・97号
	土坑	0	
	土坑群	0	
C・D−7	竪穴住居跡	11	20号～30号
	連穴土坑	8	3号～10号
	集石	1	54号
	土坑	21	48号～68号
	土坑群	1	
C・D−6	竪穴住居跡	19	31号～49号
	連穴土坑	6	11号～16号
	集石	41	55号～95号
	土坑	80	69号～158号
	土坑群	1	
C・D−5	竪穴住居跡	2	50号・51号
	連穴土坑	0	
	集石	3	98号～100号
	土坑	17	159号～175号
	土坑群	0	
総計	竪穴住居跡	52	
	連穴土坑	16	
	集石	100	
	土坑	175	
	土坑群	2	

第４表　竪穴住居跡一覧表
▒▒は，予想されるプラン・面積を示す。

				検出面			床面			遺構内遺物					
号数	区	埋土	土器	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	土器	石器	礫	軽石	剥片	備考
1	E−7	C	3e	2.45	2.4	5.88	2.4	2.3	5.52	22		2		3	2号と切り合い
2	E−7	C		3.15	2.8	8.82									1号と切り合い
3	E−7	C	3e	3.94	2.58	10.17	3.86	2.48	9.57	14	2	6			
4	E−7	B		2.48	2.08	5.16									
5	E−7	D	3	2.72	2.16	5.88	2.62	2.08	5.45	8	1	3			
6	E−7	D		2.6	2.56	6.66									
7	E−7	A		2.4	2.3	5.52									
8	E−7	D	3	2.82	2.37	6.68	2.76	2.27	6.27	3	1				
9	E−7	C	3	2.22	2.1	4.66	2.02	2.02	4.08	6	1	5			
10	E−7	D	3d	2.8	2.12	5.94	2.74	2.08	5.70	9	1	5			
11	E−7	D	3	2.42	2.3	5.57	2.36	2.2	5.19	50		9			
12	F−6	D		2.8											
13	E−6	B		2.7											
14	E−6	D		3	2.1	6.30									
15	E−6	C	3	2.38	2.22	5.28	2.32	2.17	5.03	6		15			
16	E−6	B	3b	3.55	2.88	10.22	3.44	2.77	9.53	16	1	8			
17	E−6	B	3	2.62	2.44	6.39	2.53	2.35	5.95	8		6			
18	E−6	C	3e	2.98	2.1	6.26	2.94	2.02	5.94	5					
19	E−6	D	3c	3.2	2.77	8.86	2.85	2.6	7.41	5	1	1	1		
20	D−7	D		2.97	2.79	8.29	2.86	2.68	7.66	1		1	1		
21	D−7	A	3	3.8	2.92	11.10	3.65	2.84	10.37	6	1	3			
22	D−7	D		3	2.4	7.20	2.96	2.26	6.69			1			
23	D−7	D													24号と切り合い
24	D−7	D	3	4.4	3.54	15.58	4.12	3.5	14.42	23		7	1		23号と切り合い
25	D−7	D	3	4.9	2.72	13.33	4.8	2.55	12.24	4	2	3			
26	D−7	D		3.47	3.26	11.31	3.32	2.61	8.67		1	2			
27	D−7	D		2.78	2.23	6.20									28号と切り合い
28	D−7	D	3c	3.53	2.93	10.34	3.3	2.73	9.01	16	1	3			27号と切り合い
29	D−7	B	3	2.4	2.28	5.47	2.75	2.42	6.66	4		2			
30	C・D−7	D	3	3.3	3	9.90	3.16	2.92	9.23	1		4			
31	D−6	A	3	3.49	2.55	8.90	3.37	2.42	8.16	13	1				
32	D−6	A	3d	2.94	2.79	8.20	2.6	2.5	6.50	7		2			
33	D−6	D	3e	3.4	3.08	10.47	2.92	2.88	8.41	44	2	10			
34	D−6	A	3	3.5	2.85	9.98	3.2	2.75	8.80	6	1				35号と切り合い
35	D−6	A	3b	2.9	2.4	6.96	2.85	2.25	6.41	10	1	15			34号と切り合い
36	D−6	D	3	2.7	2.57	6.94	2.57	2.55	6.55	3		3	2		
37	D−6	A	3	2.15	2	4.30	2	1.95	3.90	11		2	1		
38	D−6	A	3	2.38	2.16	5.14	2.26	2.06	4.66	17	1	7			
39	D−6	D	3	2.7	2.65	7.16	2.53	2.5	6.33	18		11			
40	D−6	D	3	4.47	2.45	10.95	4.44	2.33	10.35	9	1	1			
41	D−6	A	3	3.7	2.5	9.25									
42	D−6	D	3	2.7	2.3	6.21	2.52	2.24	5.64	1		8			
43	D−6	B	3	2.2	2.05	4.51	2.08	1.94	4.04	9	2	2			
44	D−6	A		2.51	2.23	5.60	2.4	2.14	5.14	2		6			
45	D−6	A	3	3.2	2.98	9.54	2.9	2.57	7.45	6		1			
46	D−6	A	3d	3.84	2.82	10.83	3.53	2.51	8.86	9		3			47号と切り合い
47	D−6	A		2.5											46号と切り合い
48	C・D−6	D		2.8	2.5	7.00									
49	C−6	D	3?	3.2	2.2	7.04				2	1				
50	E−5	D	3c	1.98	1.54	3.05	1.92	1.47	2.82	17		2			
51	D−5	C	3e	3.1	2.7	8.37	3.04	2.62	7.96	17		9			
52	D−5	C	3	2.5	2.31	5.78	2.47	2.28	5.63	21	2	2			

第３節　各遺構の調査

（1）竪穴住居跡

１・２号竪穴住居跡

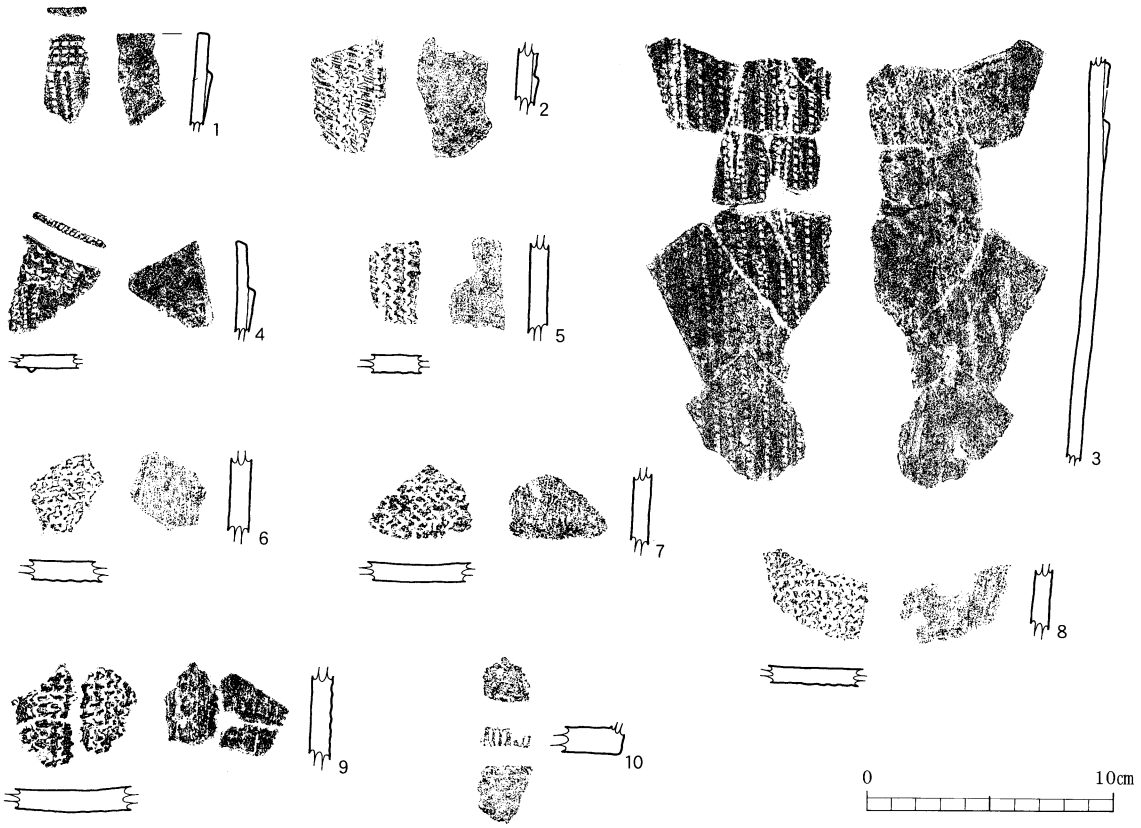
Ｅ－７区で検出された。２つの竪穴が重複する状態で検出されたが，１号竪穴住居跡のみ掘り下げをおこない，２号竪穴住居跡については検出のみに留めた。１号竪穴住居跡は，ベルト部分

第20図　１・２号竪穴住居跡

を残して掘り下げをおこなっている。北側部分が２号竪穴住居跡と重複しているが，約2.4mの隅丸方形のプランを呈するものと思われる。検出面から床面までの深さは，約25cmである。埋土の状況は，a層の黒褐色土に黄褐色と白色のパミスが密集し，これが埋土上部の約20cmを占めている。a層の下部は不安定で，b層との境が波を打つような状況を呈している。b層は暗茶褐色で粘質が無く，ややザラザラとした感じの土である。

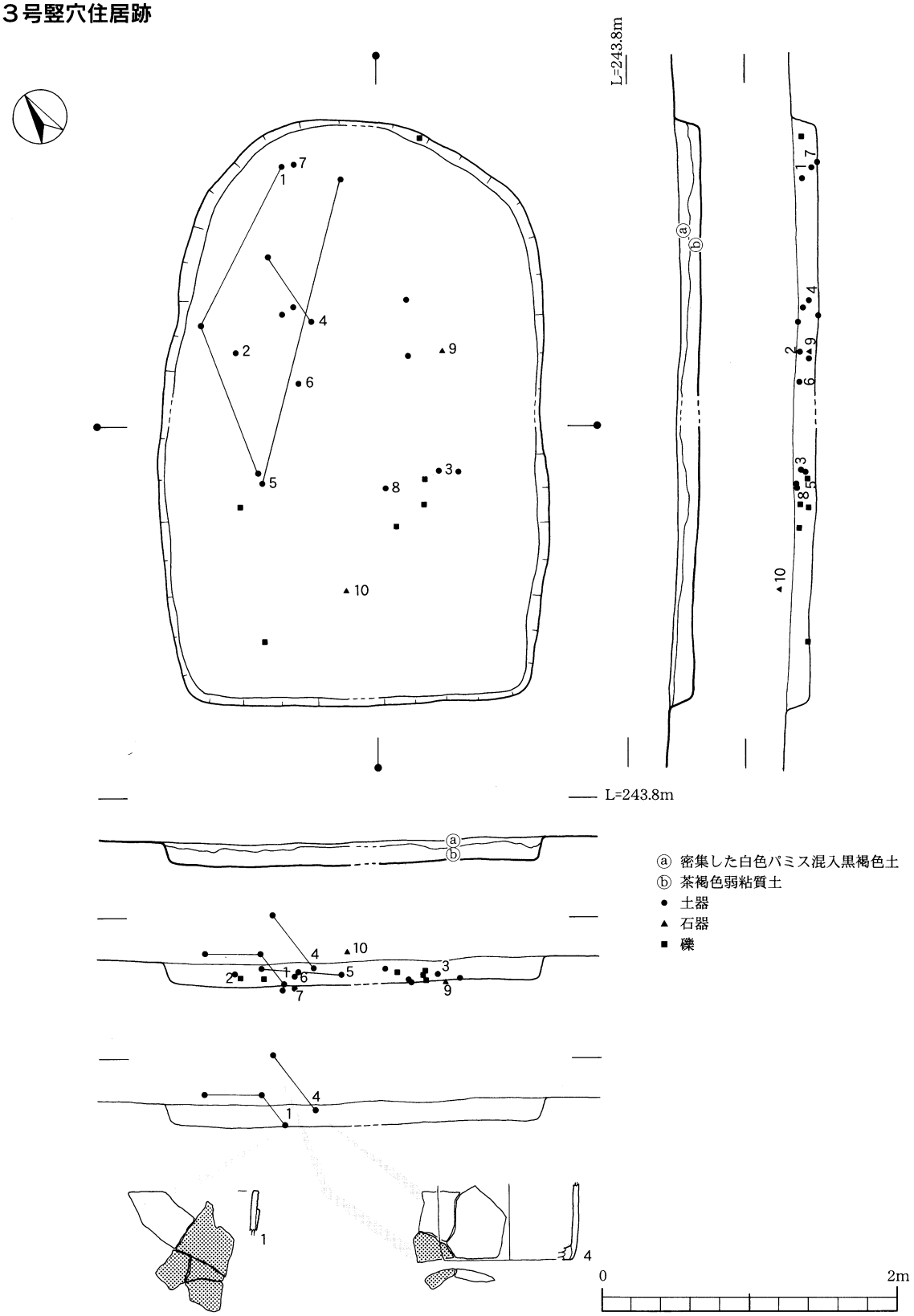
遺構内遺物は，土器片22点・黒曜石チップ３点・礫２点が出土している。この内，土器片10点を図化し掲載した。１～３は，円筒形の器形を呈する。１は口縁部片である。口唇部にキザミ目を有し，口縁部は方形に近い刺突文が横位に４条施されている。貼付文はクサビ状を呈し，口縁部施文後に貼付され，両側をクシ状工具により刺突されている。２は胴部片でクサビ形貼付文は上面もクシ状工具で刺突している。３は縦位の方形刺突文のみ施文されており，貝殻条痕文は観察されない。胴部下半には炭化物が付着している。４～10は角筒形である。４は口縁部片で口唇部にキザミ目を施し口縁部には貝殻刺突文を横位に４条施す。貼付文は，クサビ形を呈し上面をヘラで側面をクシ状工具で刺突している。６～９は同一個体と思われる。胴部片で，内面には工具による下から上へのケズリ痕が観察される。貝殻刺突文の間隔は，胴部片のためはっきりとはしないが，やや密接している。10は角筒形の底部片である。

２号竪穴住居跡は，上面プランの検出のみであるが，約３mの隅丸方形を呈している。埋土はa層の黒色土に黄褐色と白色のパミスが密集しているもので，１号竪穴住居跡とほぼ同じ状況である。



第21図　１・２号竪穴住居跡内遺物

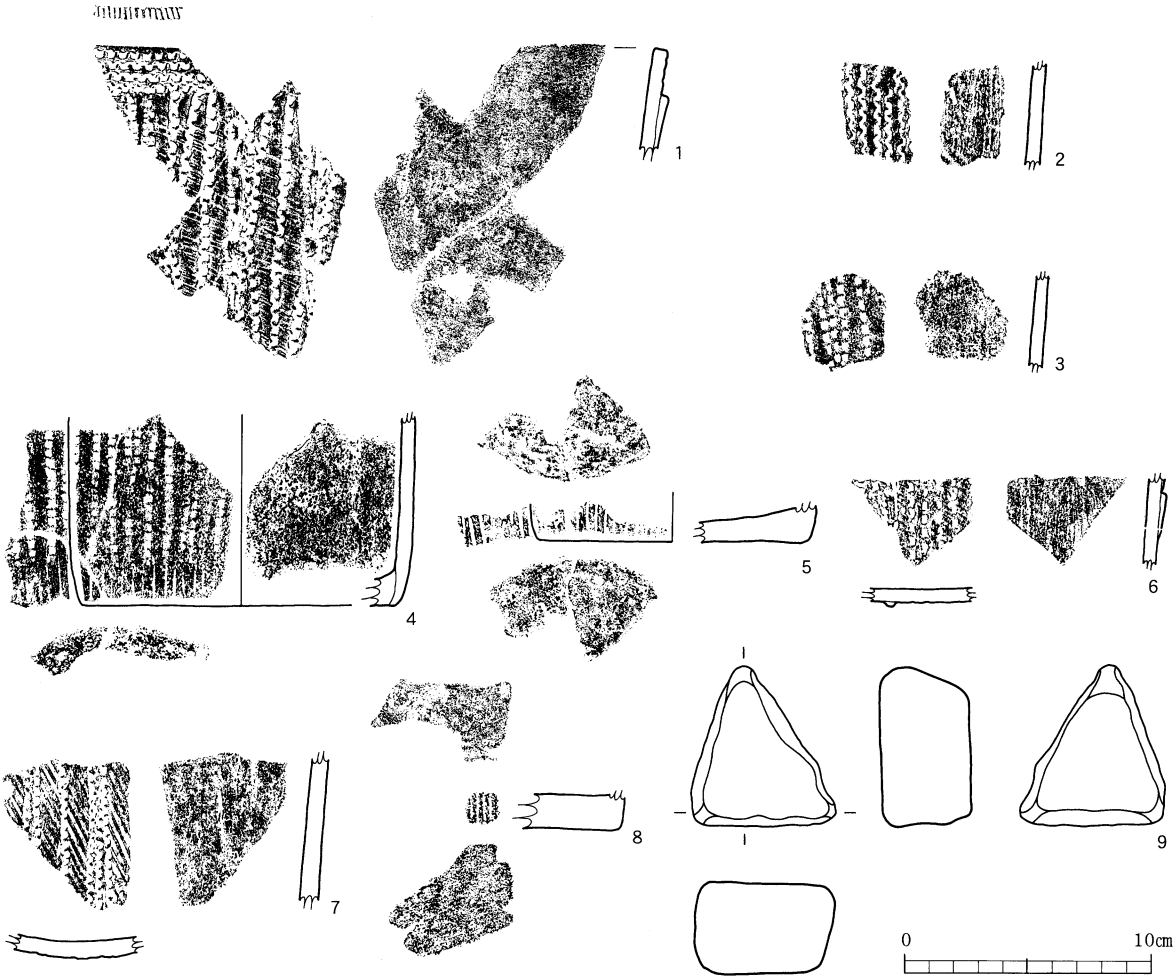
３号竪穴住居跡



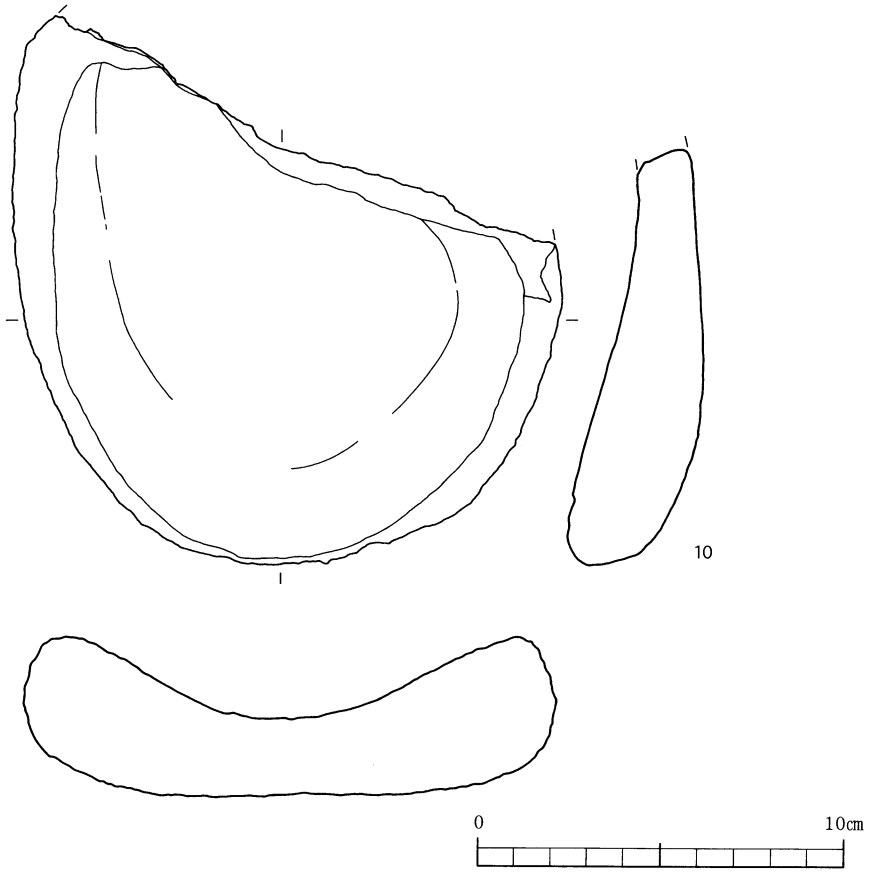
第22図　３号竪穴住居跡

E－７区で検出された。プランは隅丸長方形を呈しているが，北部の短軸が直線的であることに対し，南部の短軸は曲線的で釣り鐘状とも言える。検出面から床面までの深さは，およそ20㎝である。埋土の状況は，a層の黒褐色土中に含まれる白色パミスが密集している。当初，包含層掘り下げ中にこの密集した白色パミスに気づいたが，包含層段階では遺構のプランが掴めずX層上面まで掘り下げて遺構検出をおこなった。

遺構内遺物は，土器片14点・石器２点・礫６点が出土している。この内，土器８点・石器２点を図化し掲載した。１～５は円筒形の器形である。１は口唇部にキザミ目を有し口縁部には貝殻刺突文が横位に４条めぐる。貼付文は，上面をヘラで側面をクシ状工具により刺突されクサビ形を呈している。口縁部付近では横位のハケメ状の調整が観察できる。なお補修孔が見られ，擦り切りによる縦長の穿孔である。２・３は胴部片である。２は丁寧なナデの後貝殻刺突文が施されている。３は方形刺突に近い貝殻刺突文である。４・５は底部片である。４は方形刺突文で貝殻条痕等は観察できない。内面にはススが付着している。６～８は角筒形である。７は胴部片で貝殻刺突文は６～７の肋により上から下へと施文されている。８は底部片である。９・10は石皿片である。９は小型で厚みがあり，10は中央が明瞭に窪んでいる。10は埋土a層の白色粒パミスを含む黒褐色土中から出土し，住居跡床面から高い位置での出土である。



第23図　３号竪穴住居跡内遺物（１）



第24図　３号竪穴住居跡内遺物（２）

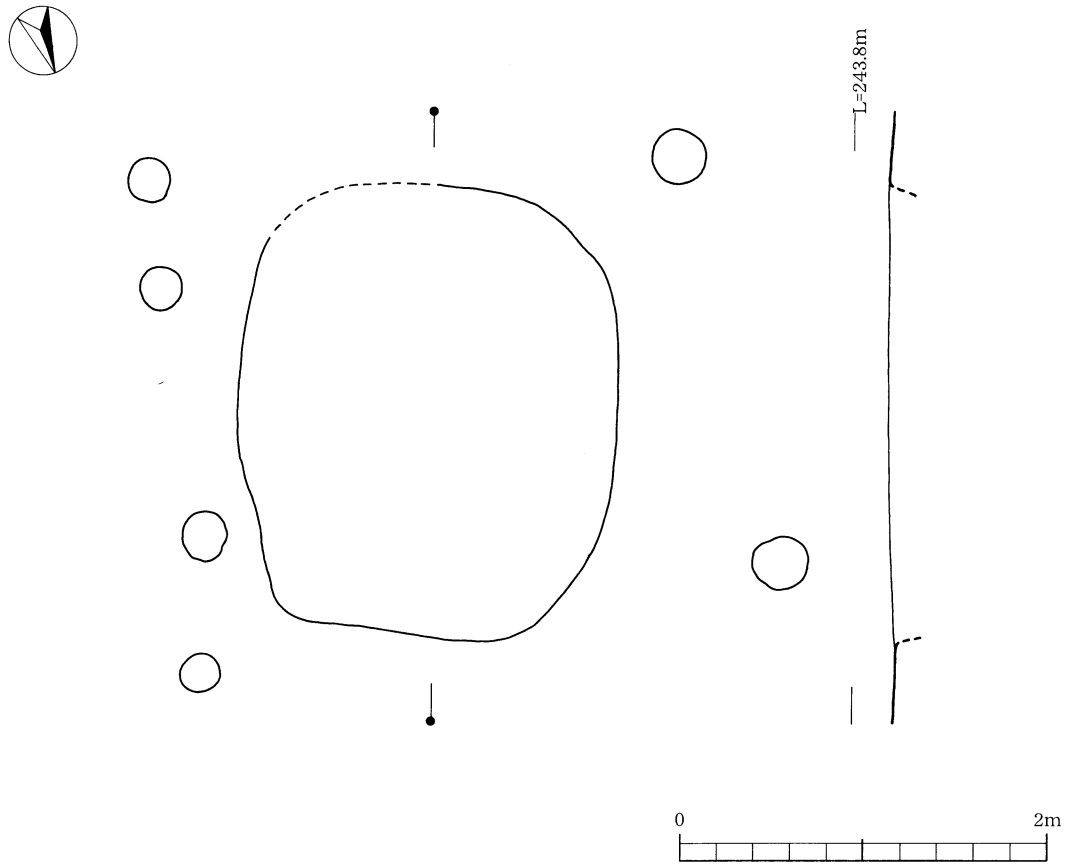
なお，１と４に関しては包含層中取り上げの遺物と接合している。１は比較的床面に近い状態で出土した口縁部片が，遺構プラン内約２mの距離で接合した。４は30cm上層で出土した資料と接合している。しかし，遺物は長い年月の間に上下左右へ様々な現象で移動するため，この結果が竪穴住居跡の深さを直ちに示しているとは断定出来ない。

４号竪穴住居跡

Ｅ－７区で検出された。この竪穴住居跡は検出のみで掘り下げをおこなっていない。検出面でのプランは，隅丸方形を呈している。竪穴の外には東側に４基，西側に２基のピットと思われるプランが検出されている。これらが竪穴に伴うかは，ピットであるかという検証も含めて断定できない。

埋土は，中央にＰ－13（Sz-Tk３）火山灰と思われる黄色パミスが明瞭に堆積しており，その周囲はザラザラとした黄褐色と白色パミスの混入する黒褐色土がめぐる。他の竪穴住居跡の状況からＰ－13（Sz-Tk３）火山灰降灰前の竪穴住居であると判断した。

なお，竪穴住居跡の東南の角にはⅥ層検出の23号集石が位置している。この断面で，竪穴住居跡の掘り込み面の検出に努めたが，明瞭な立ち上がりは確認されなかった。

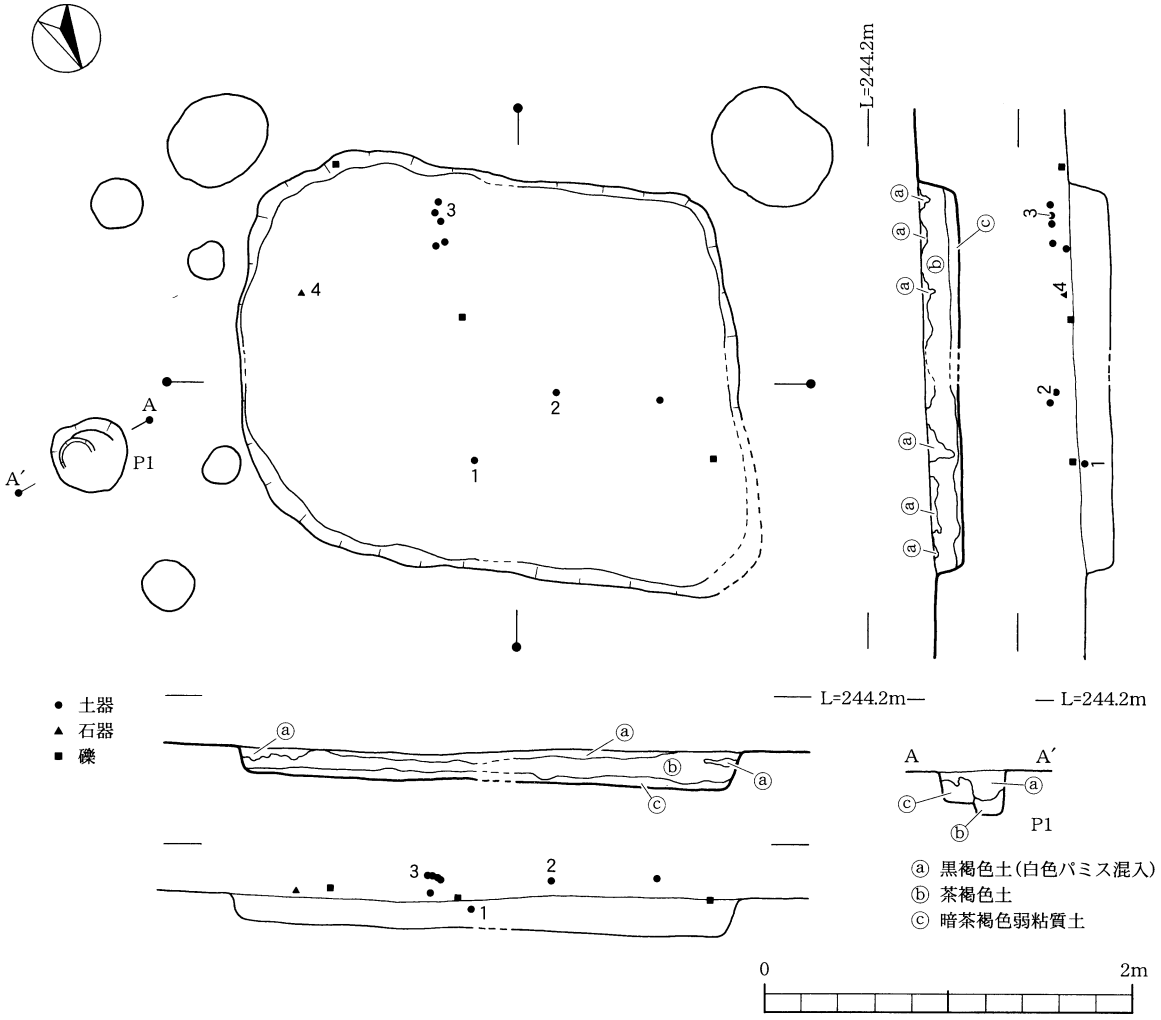


第25図　４号竪穴住居跡

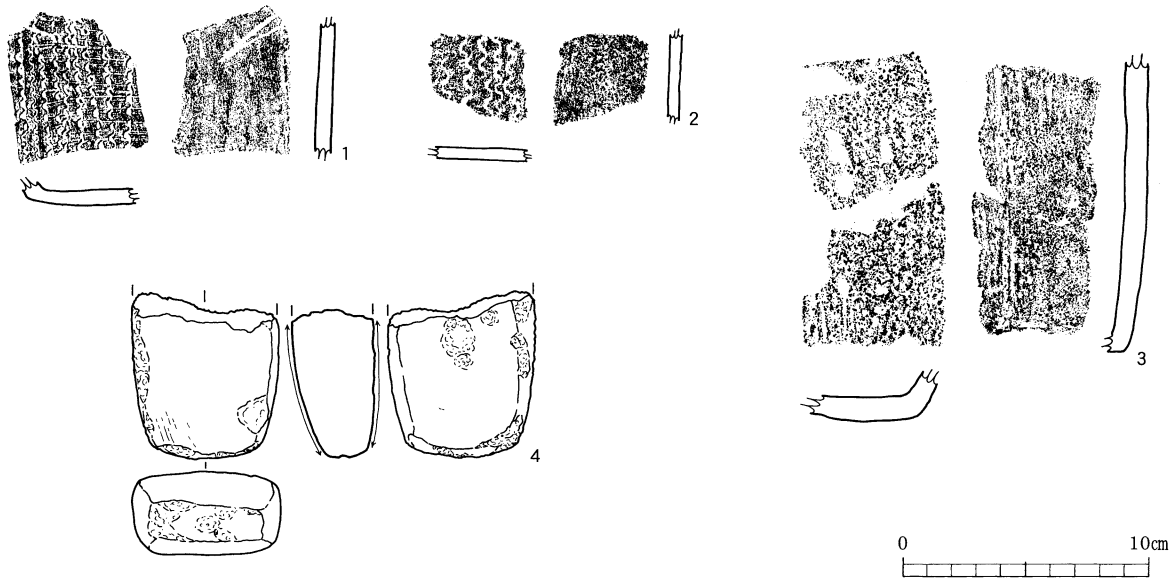
５号竪穴住居跡

Ｅ－７区に検出された。土層観察ベルトを残して掘り下げをおこなっている。竪穴の外周には，大小７つのピット状の遺構を確認している。南東・南西側にあるピット状遺構は，検出段階で直径50から60㎝程度の大きさを有し，土坑の可能性もある。なお，掘り下げをおこなったものは，ピット１のみである。ピット１の深さは，検出面から28㎝を測る。

遺構内遺物は，土器８点・石器１点・礫３点が出土している。このうち，土器３点・石器１点を図化した。これらの遺物は，いずれも検出面に近いレベルで取り上げており，床着の状態の遺物は見られない。１～３は角筒形の器形である。１は縦位の細かい調整後横位の線状痕が見られ，その上から貝殻刺突文が施文されている。２は風化が激しく詳細は不明である。３は胴部下半から底部にかけての破片である。縦位のやや密な貝殻刺突文が施され，角部には横位の貝殻刺突文が施される。底部にはキザミ目が見られ，キザミは1.8㎝とやや長い。４は方形の磨石である。



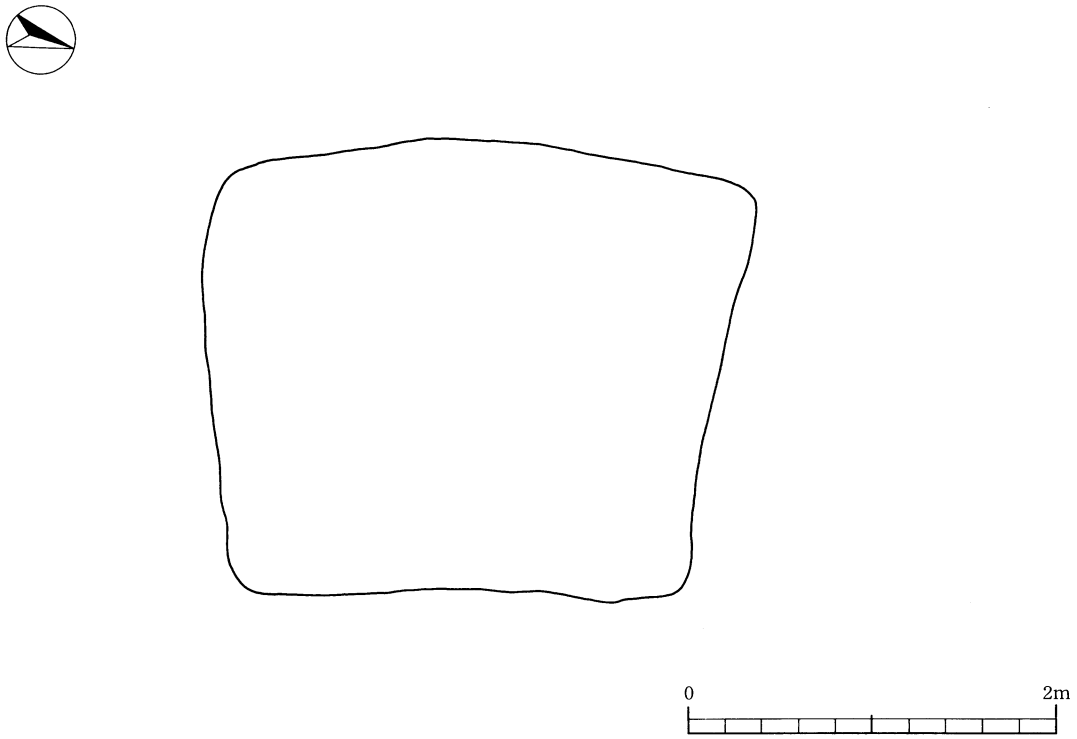
第26図　５号竪穴住居跡



第27図　５号竪穴住居跡内遺物

６号竪穴住居跡

Ｅ－７区に検出された。当住居跡は，Ｘ層上面でプランを検出するに止め，掘り下げをおこなっていない。検出の状況から竪穴住居跡の可能性が高いと判断したが，竪穴住居跡であるかの最終的な判断は将来に委ねたい。検出プランの状態は，隅丸方形状で北西の一角がわずかに突出している感じがある。場合によっては，他の遺構との切り合いも考えられる。なお，検出面での面積は6.6㎡で周辺からピット状の遺構は検出されていない。

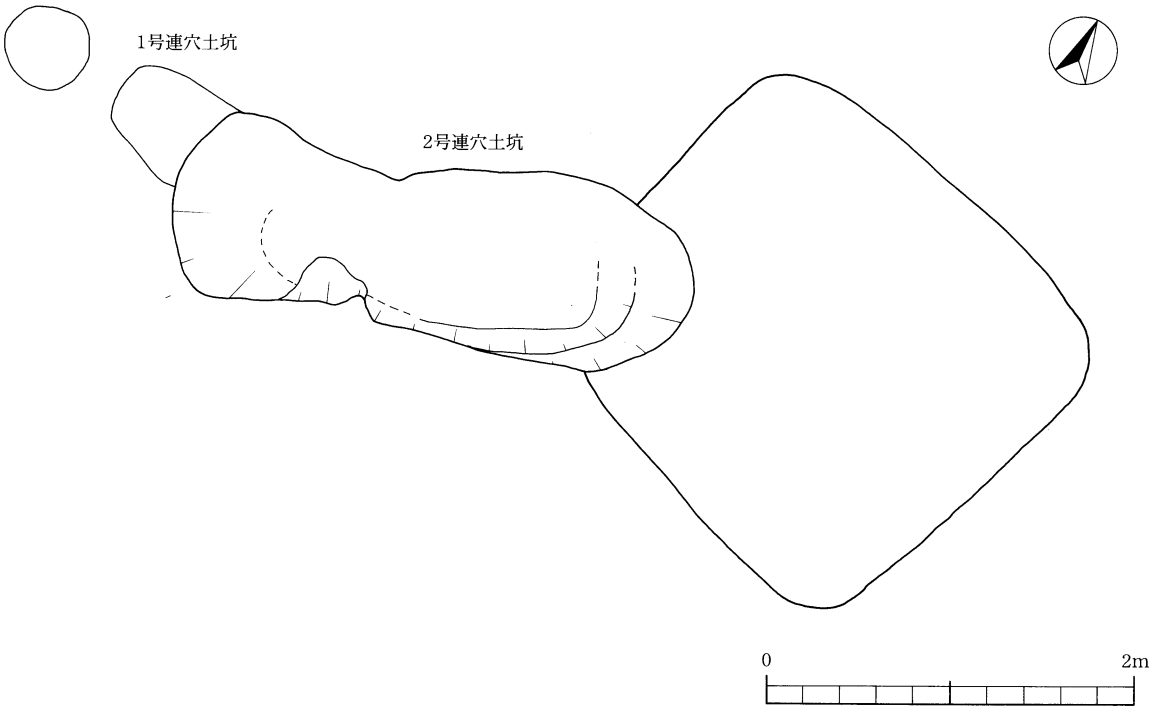


第28図　６号竪穴住居跡

７号竪穴住居跡

Ｅ－７区に検出された。当住居跡の東側には，浅い谷状の地形が南北に見られ，西側のコーナーは２号連穴土坑に切られている。当住居跡は，連穴土坑との切り合い関係を調べるためのミニトレンチのみ掘り下げをおこなっている。ミニトレンチの状況から，床面が安定していることがわかり，竪穴住居跡と判断した。埋土の状況は，茶褐色の弱粘質土であった。この中には，白色粒パミスは含まれていない。

なお，この２号連穴土坑の埋土には，Ｐ－13（Sz-Tk３）火山灰の黄色パミスが約70㎝の厚さで堆積している。このことから，Ｐ－13（Sz-Tk３）火山灰と住居跡・連穴土坑との関係は，７号竪穴住居跡→２号連穴土坑→Ｐ－13（Sz-Tk３）火山灰の降灰という関係が考えられる。このような関係は他にも例があり，詳細は第９章で述べたいが，少なくともＰ－13火山灰の降灰以前に２時期の竪穴住居を伴った生活が営まれたことを示唆する状況であると思われる。

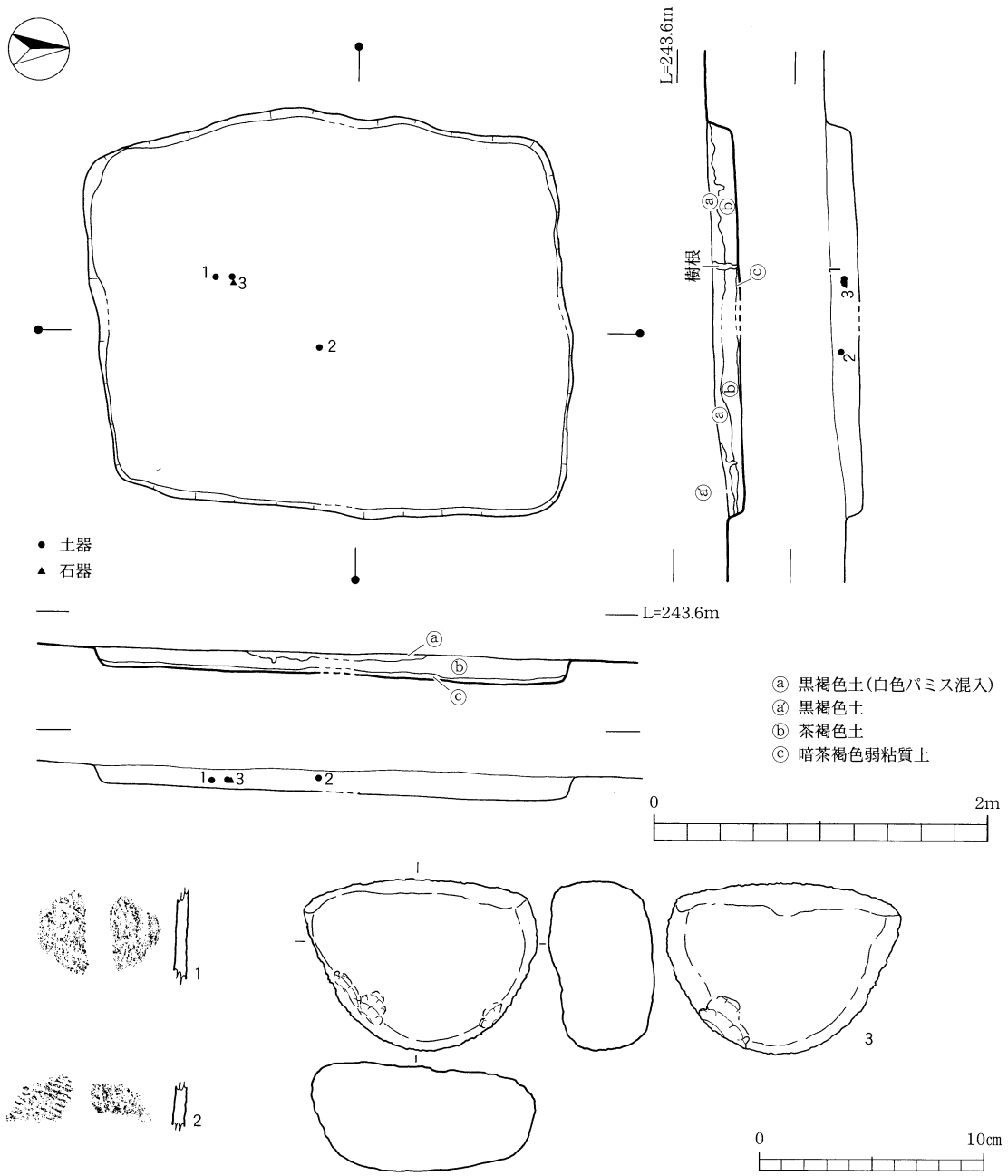


第29図　７号竪穴住居跡

８号竪穴住居跡

Ｅ－６・７区にまたがって検出された。プランは隅丸長方形を呈し，南北の軸と約2.8mの長軸がほぼ沿うような形で検出されている。ベルト部分を残して掘り下げをおこなったが，検出面から床面までの深さは約15cmである。埋土状況としては，中央部を東西に白色パミスを含んだa層の黒褐色が入り込み，埋土の大部分をb層の茶褐色土が占めている。

遺構内遺物は非常に少なく，土器３点・石器１点が出土している。このうち土器２点・石器１点を図化し掲載した。１・２共に，円筒形と思われるが小片であることの他に風化が激しく詳細は不明であった。３はわずかに磨りが確認された。



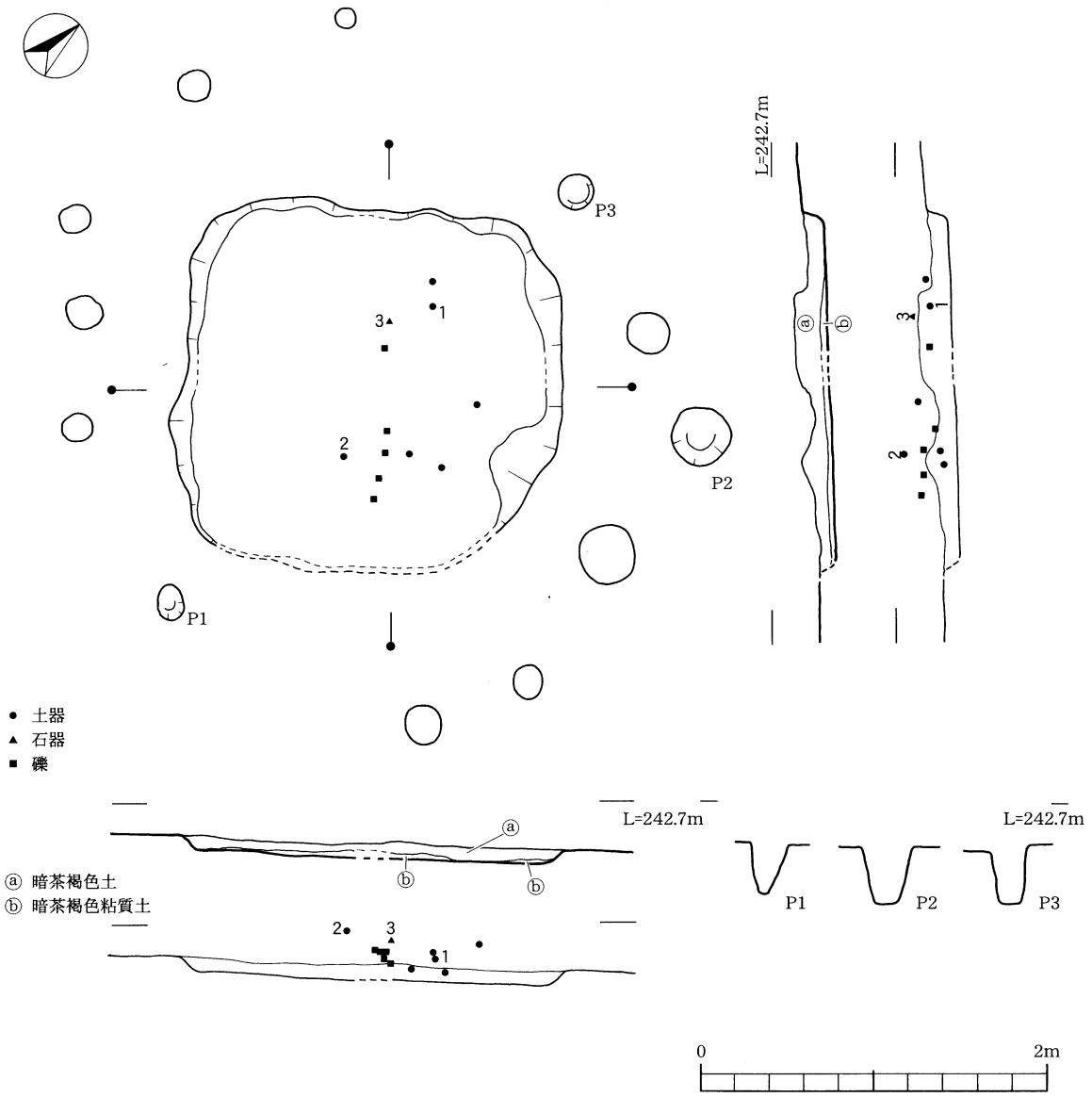
第30図　８号竪穴住居跡・住居跡内遺物

９号竪穴住居跡

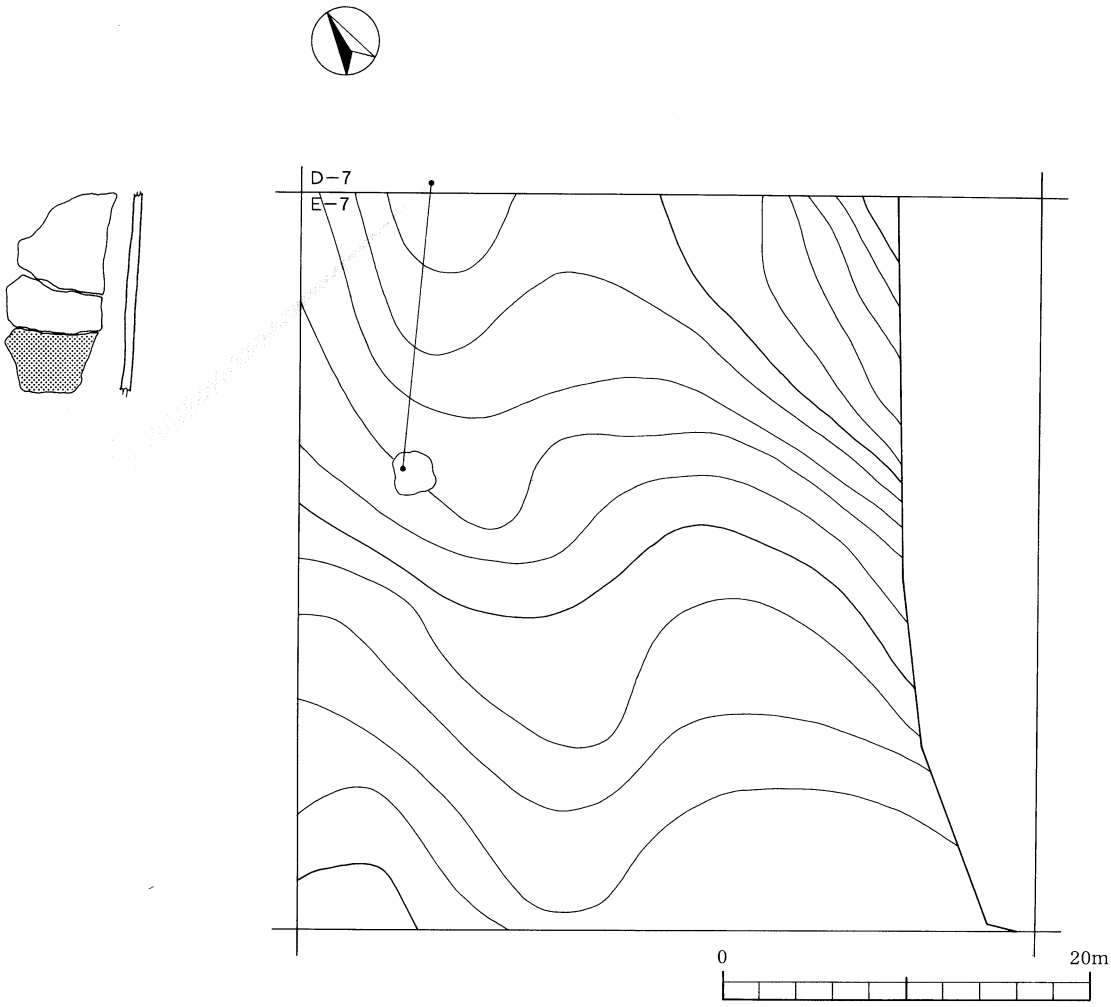
Ｅ－７区で検出された。約２ｍの隅丸方形プランを呈し，竪穴の外周にはピットが11基めぐる。このピットのうち３基を掘り下げ，深さ30cmの柱穴であることを確認している。

埋土の状況は，検出の際一部上面を削平してしまい図面には残らなかったが，Ｐ－13（Sz-Tk３）火山灰の密集した白色パミスが明瞭に堆積していたことがわかっている。東側部分については，道跡に近い部分であり，道跡の埋土との判別が困難であったため，壁の明瞭な確認は出来ていない。

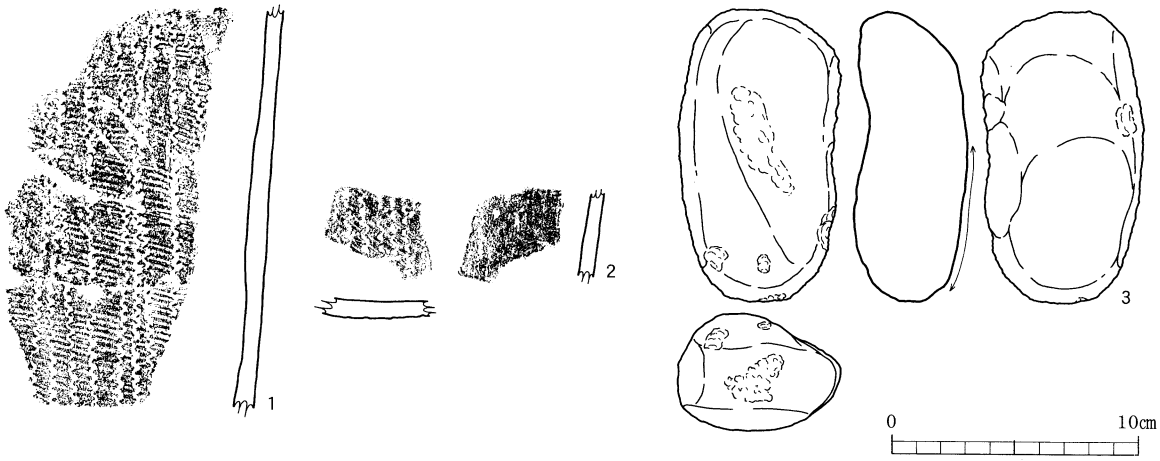
遺構内遺物は，土器６点・石器１点・礫５点が出土している。この内，土器２点・石器１点を図化し掲載した。１は包含層中の遺物と接合している。接合距離は約15mであった。円筒形の器形で，間隔の広い貝殻刺突文が施されている。内面は剥離が激しく，拓本は掲載できなかった。雲母を多量に含んでいる。２は角筒形で貝殻条痕文は浅くナデ消しが観察できる。



第31図　９号竪穴住居跡

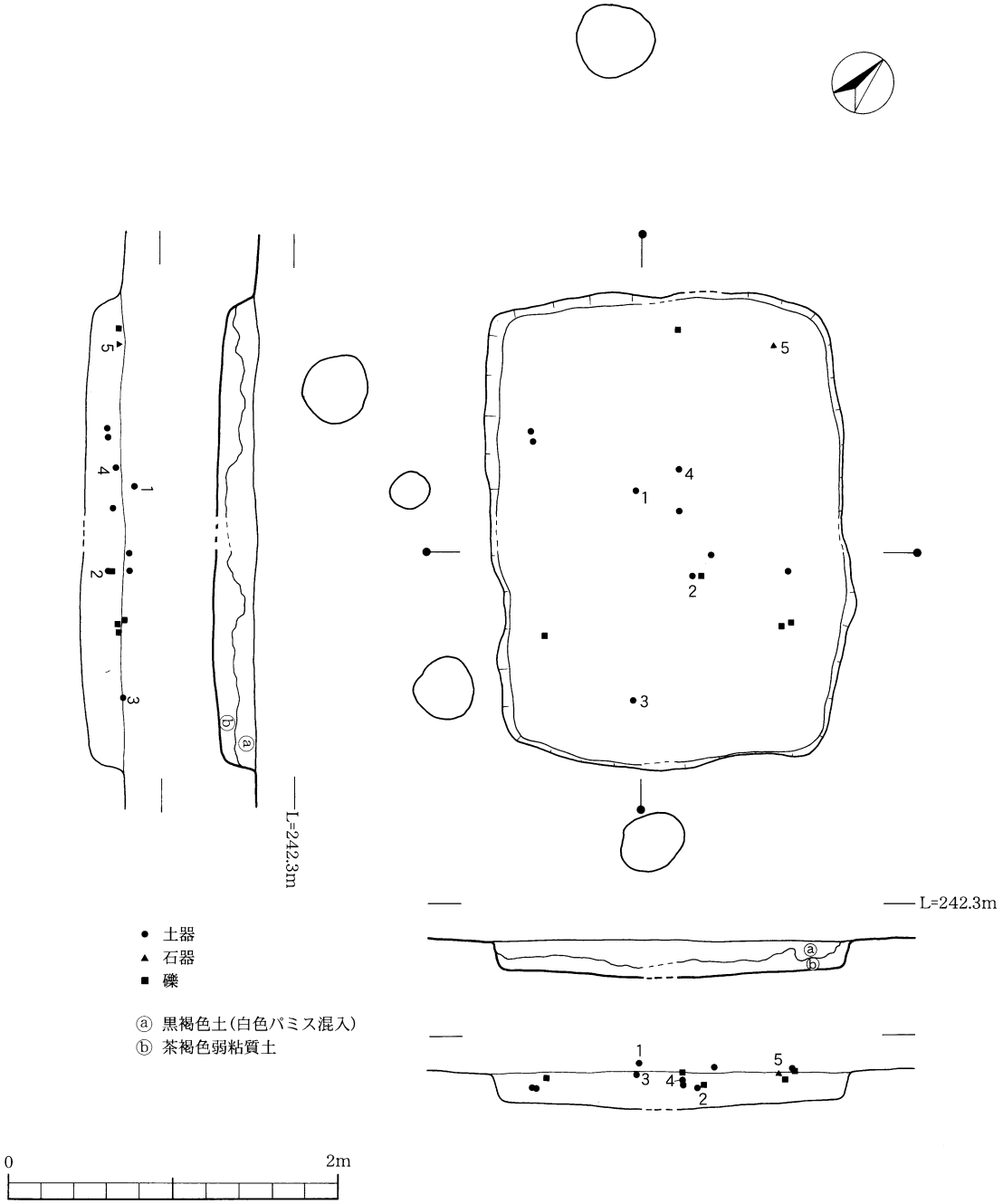


第32図　包含層資料との接合関係



第33図　９号竪穴住居跡内遺物

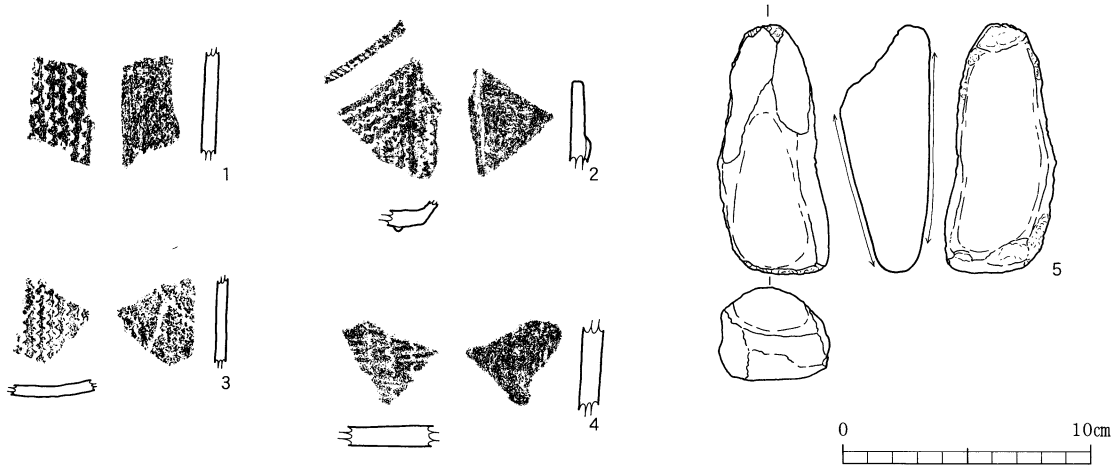
10号竪穴住居跡



第34図　10号竪穴住居跡

E－７区で検出された。11号竪穴住居跡と並行している。隅丸長方形のプランで，竪穴の外周には５基のピット状の遺構が検出された。ただし東側からは確認されず，ピットの掘り下げもおこなっていないため，確実にこの竪穴住居跡に伴うものであるかは不明である。ベルト部分を残して掘り下げをおこなったが，検出面から床面までの深さは約20cmである。埋土の状況としては，上部がa層の白色のパミスが混入する黒褐色土で，下部がb層の茶褐色弱粘質土である。

遺構内遺物は，土器９点・石器１点・礫５点が出土している。このうち土器４点・石器１点を図化した。１は円筒形の器形である。縦位のナデ調整後に貝殻刺突文を施している。２～４は，角筒形である。２は口縁部片で縦位のナデ調整後施文が施されている。口唇部にはキザミ目が施され，口縁部は貝殻刺突文が４条めぐる。貼付文が見られ，形状は粘土紐状を呈し，側面はクシ状工具により刺突されている。３・４は胴部片であるが小片であり風化が激しいために詳細は不明である。５は，やや不定形の礫の両端部に敲き痕が見られ，平坦面には一部磨りが観察された。

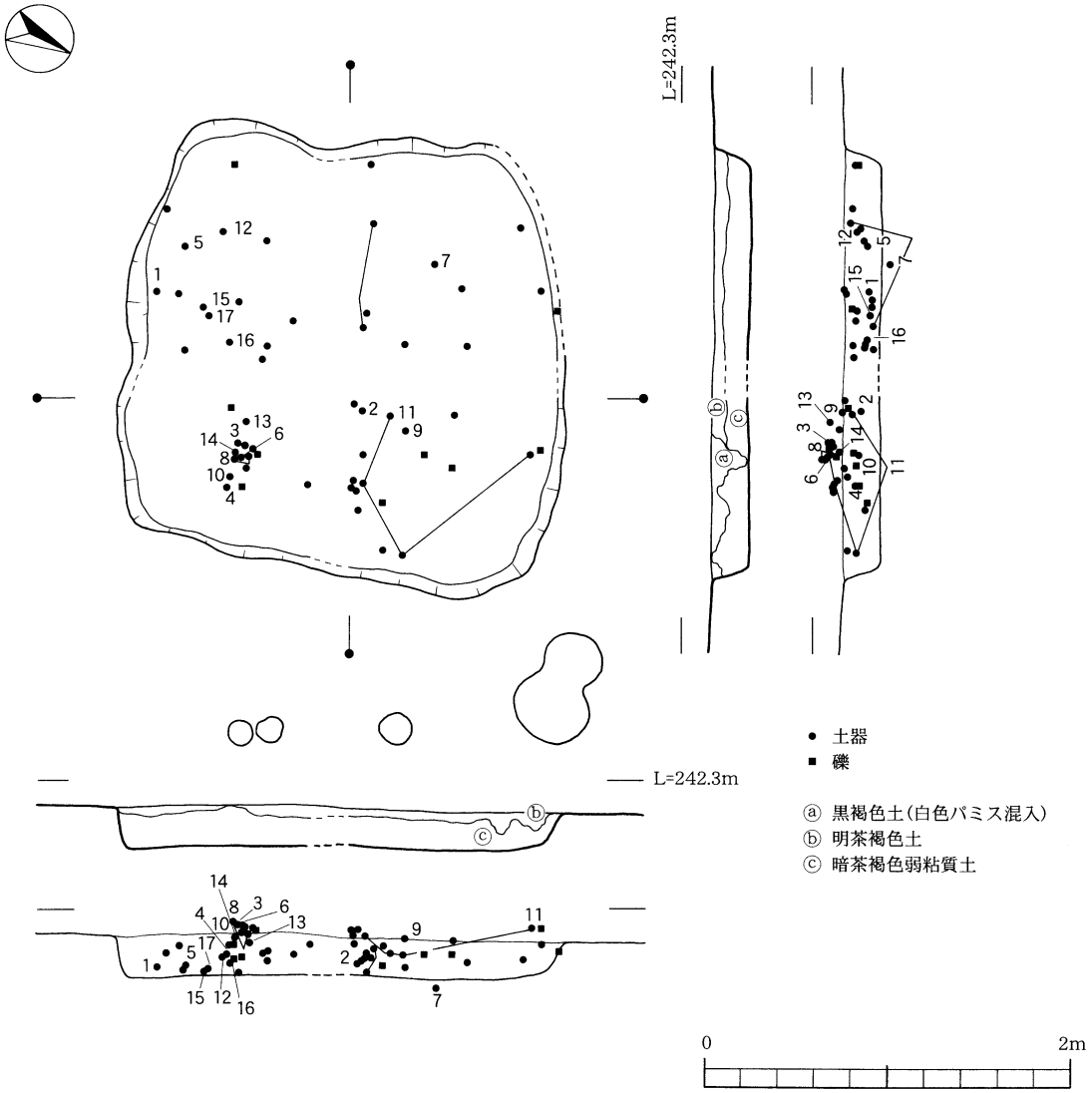


第35図　10号竪穴住居跡内遺物

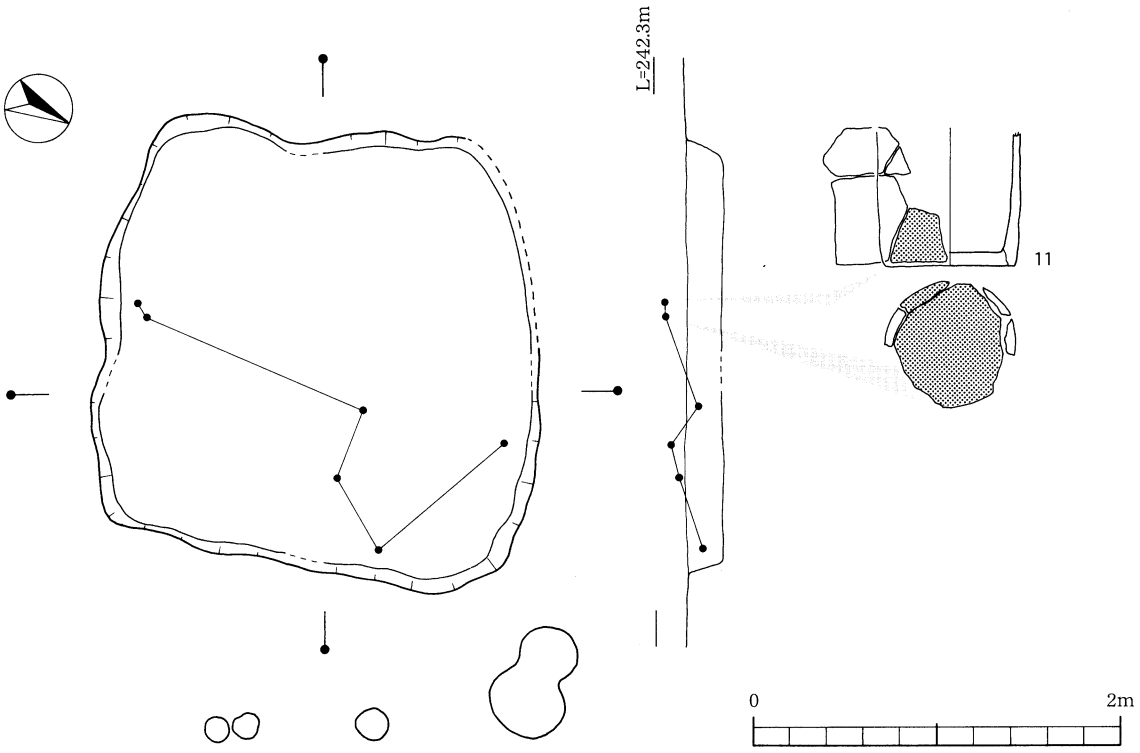
11号竪穴住居跡

E－７区で検出された。10号竪穴住居跡と並行している。隅丸方形のプランで，竪穴の外周には４基のピットが検出された。ただし東側のみの確認であり，ピットの掘り下げもおこなっていないため，確実にこの竪穴住居跡に伴うものであるかは不明である。ベルト部分を残して掘り下げを行い，検出面から床面までの深さは約20cmである。埋土の状況としては，上部がb層の明茶褐色土で，下部がc層の暗茶褐色弱粘質土である。c層には黄橙色パミスが含まれ，薩摩火山灰であると考えられる。また，東側の一部のみにa層の白色パミスを含む黒褐色土が確認できる。

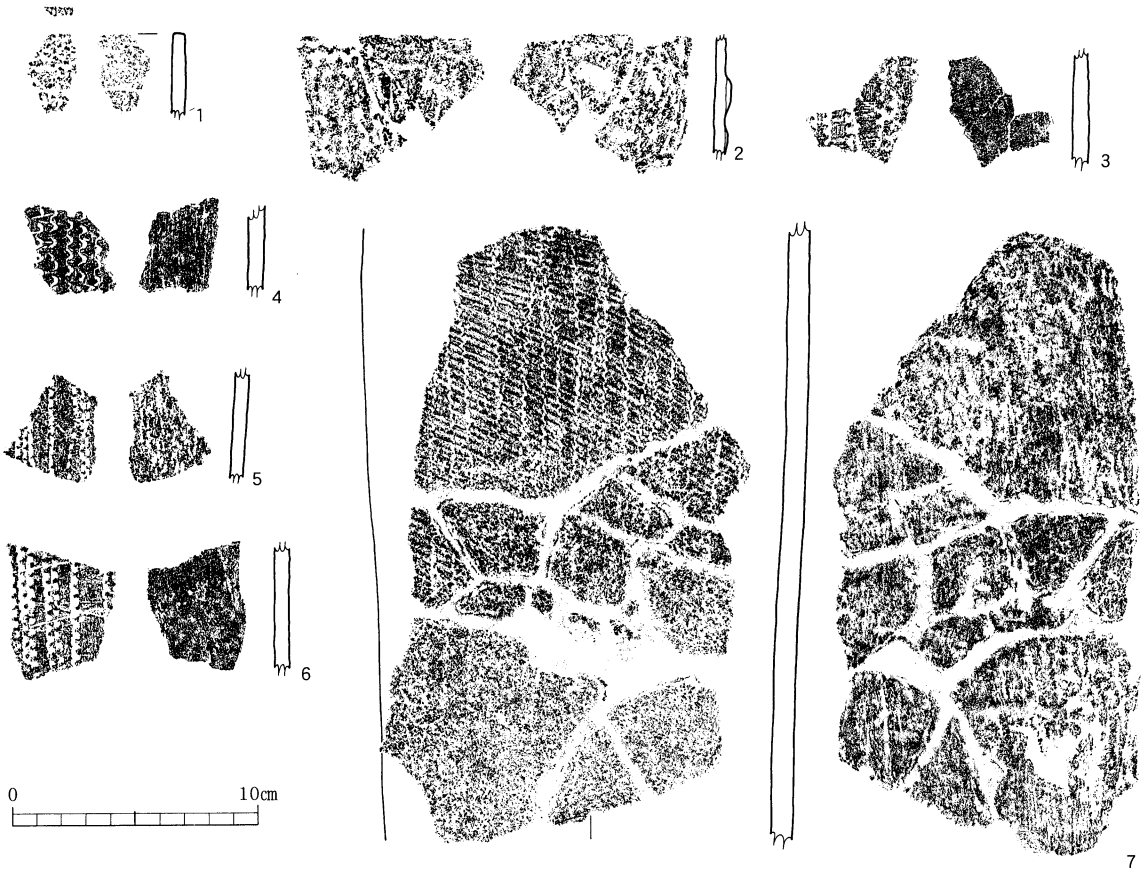
遺構内遺物は，他の竪穴住居跡と比べて多く，土器50点・礫９点が出土している。このうち土器17点を図化した。１～12は円筒形の器形を呈する。１・２は口縁部片であるが，風化が激しい。３～10は胴部片である。３・４は縦位の調整をおこなった後に貝殻刺突文を施している。５の貝殻刺突文はやや間隔が広い。６は部分的に横位の線状痕が観察できる。７は比較的大きめの破片であるが，胴部下半で風化が激しい。11・12は底部片である。11は包含層中で取り上げたものと接合したものである。図上復元をおこなったところ，竪穴住居跡のプラン内に全ての遺物が収まることが判った。上下間での接合距離は約20㎝であった。13～17は角筒形である。13は口縁部片で口縁部に貝殻刺突文を横位に３条施し，角部に粘土紐貼付文を施す。14は口縁部付近の破片でナデの後に方形刺突文を施している。



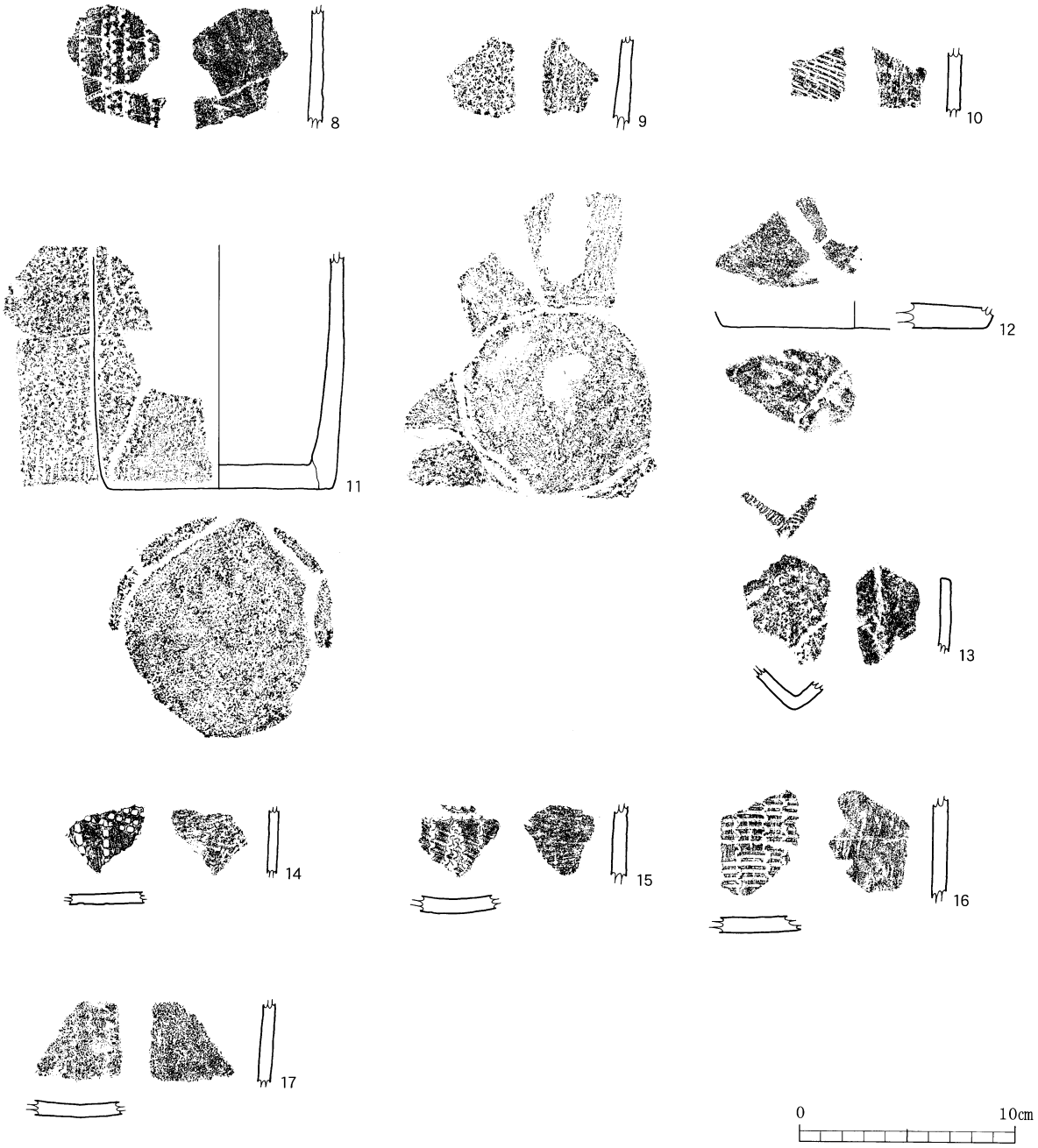
第36図　11号竪穴住居跡



第37図　包含層資料との接合関係



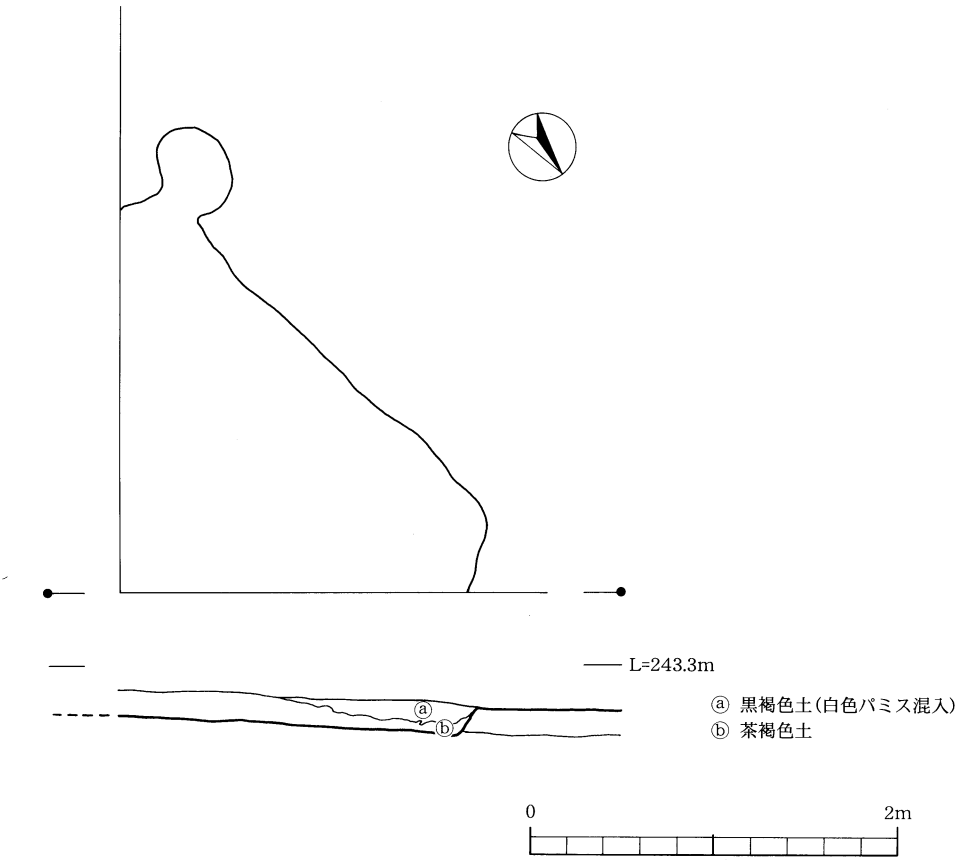
第38図　11号竪穴住居跡内遺物（1）



第39図　11号竪穴住居跡内遺物（2）

12号竪穴住居跡

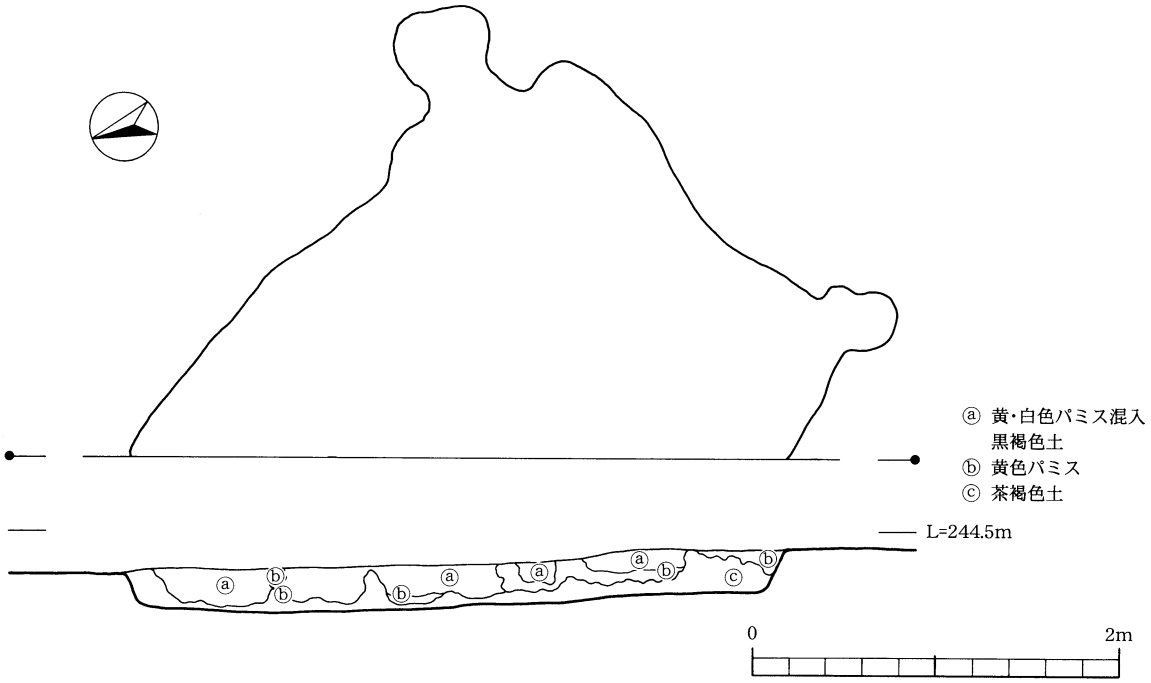
F－６区で検出された。確認調査時の下層確認トレンチにより大部分が削平されているが，平面プランは約３mの隅丸方形を呈するものと思われる。今回の調査では検出のみで掘り下げはおこなわなかったが，トレンチ断面の観察により検出面からの深さは約15cmであることが確認された。検出面のX層上面レベルにおいては，埋土中に黄色のパミスはみられなかった。



第40図　12号竪穴住居跡

13号竪穴住居跡

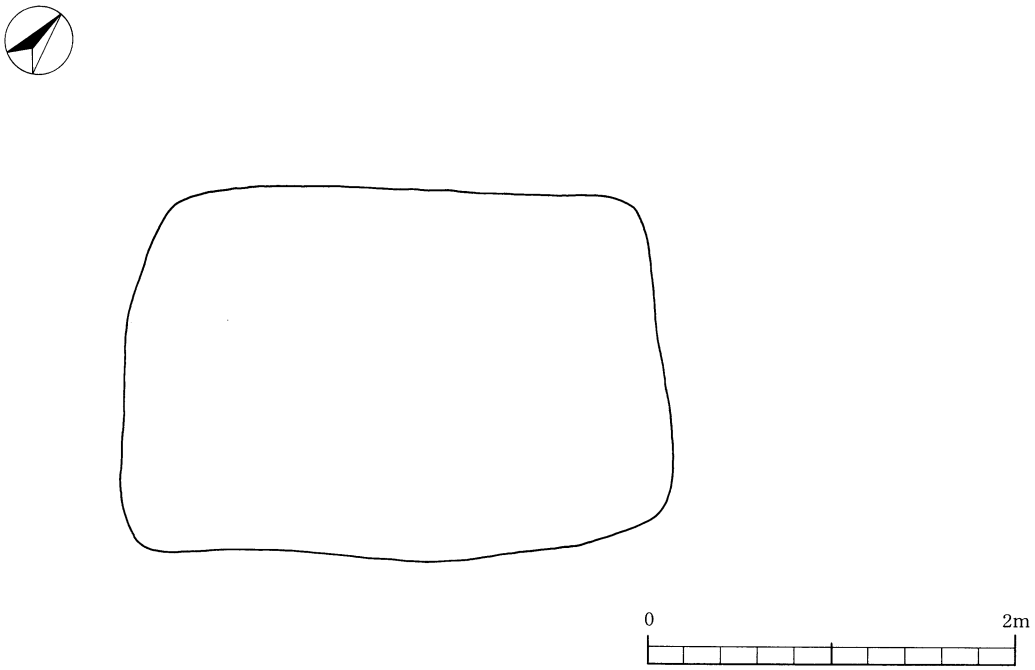
E－６区で検出された。12号と同じく下層確認トレンチにより約半分が削平されているが，概略南北方向に長軸をもつ隅丸長方形プランであることがわかる。今回は掘り下げはおこなっていない。遺構内には，一次埋土である茶褐色土上に，P－13（Sz-Tk３）と思われる黄色パミスが床面上５～10cmまで深く堆積している。これは，後述する他のP－13（Sz-Tk３）火山灰の黄色パミスを持つものと比べた場合，比較的水平に近い堆積状況である。



第41図　13号竪穴住居跡

14号竪穴住居跡

E－6区で検出された。平面プランは，約3m×6mの隅丸長方形を呈する。今回は遺構の掘り下げはおこなわなかった。検出面における遺構内埋土は暗茶褐色粘質土で，黄色パミス等は観察されなかった。

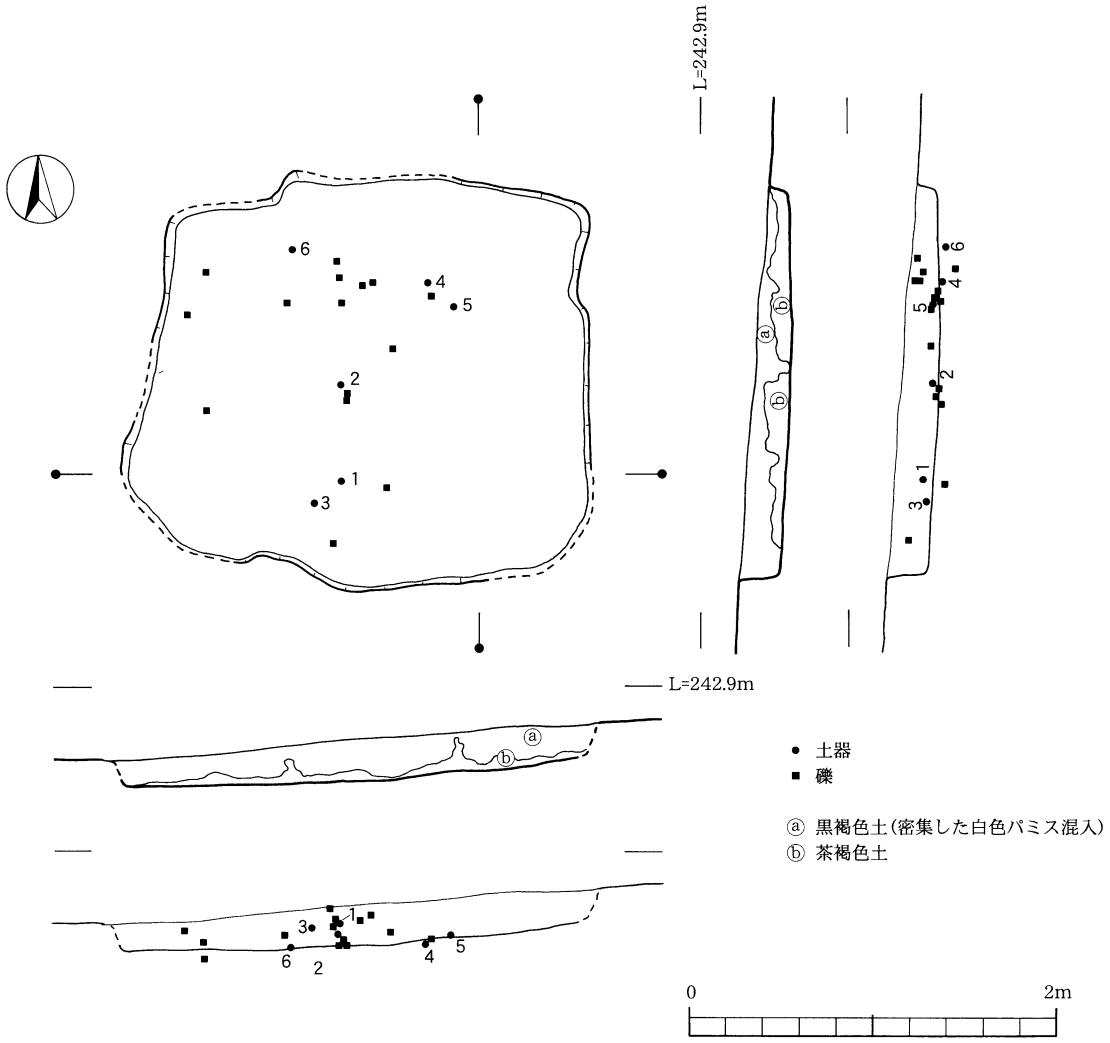


第42図　14号竪穴住居跡

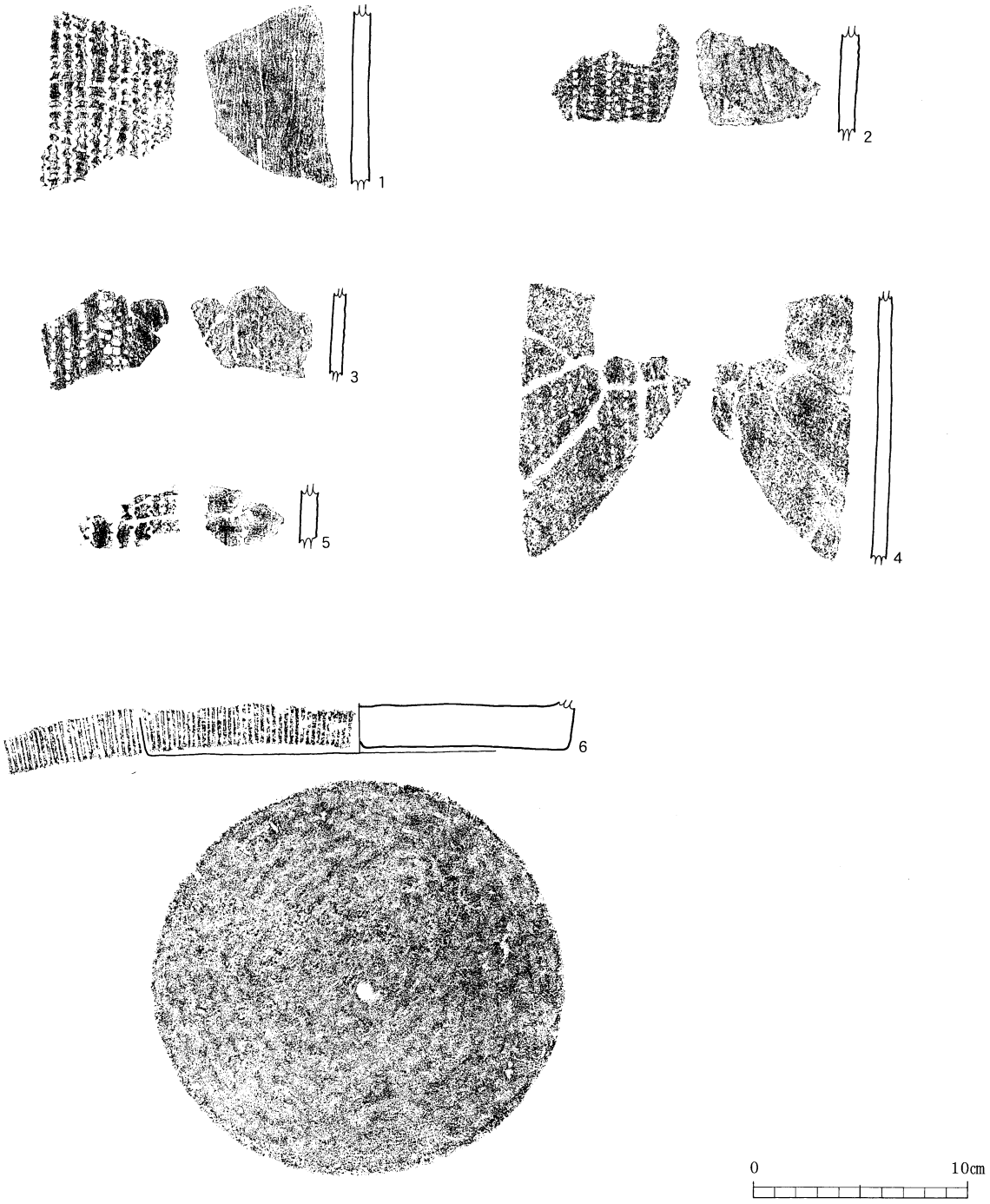
15号竪穴住居跡

E－６区で検出された。平面プランは概ね隅丸方形を呈する。検出面から床面までの深さは約20㎝で，遺構内一次埋土の茶褐色土上に，白色パミスを含む黒褐色土が厚く堆積する。

遺構内遺物としては土器６点・礫15点が出土し，このうち土器６点を図化した。１～６は全て円筒形である。１は粘土のきめが細かい。胴部の貝殻刺突文は比較的密である。２の刺突文は方形刺突に近い。３・５は貝殻条痕文が観察されない。６は底部片である。底部外面中央には擦孔と呼ばれる焼成後の未貫通の孔が観察される。わずかに上げ底状を呈し，胴部との接合は底部外周上にある。底部外面の調整は弧状に丁寧なナデ調整が観察される。



第43図　15号竪穴住居跡

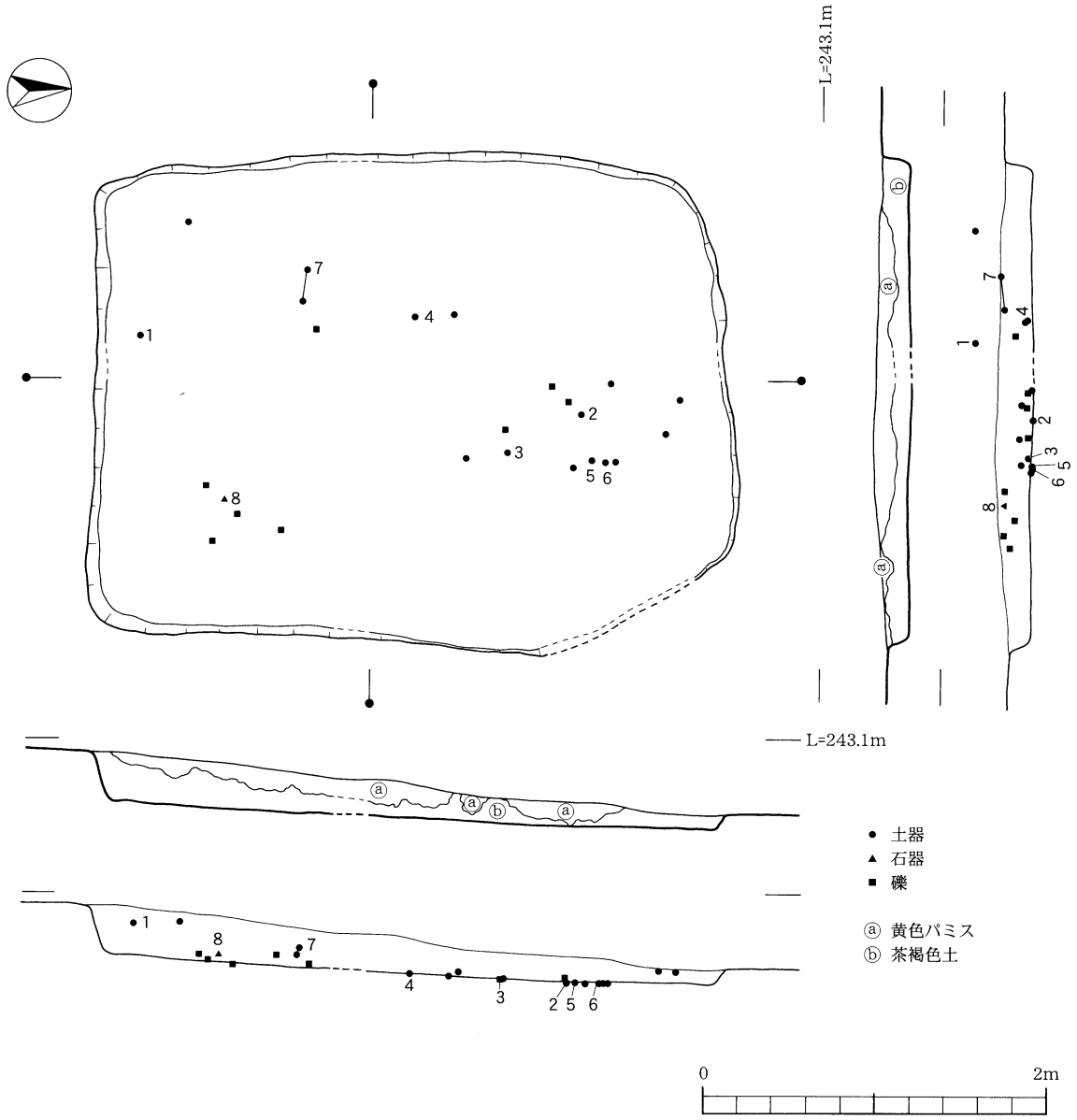


第44図　15号竪穴住居跡内遺物

16号竪穴住居跡

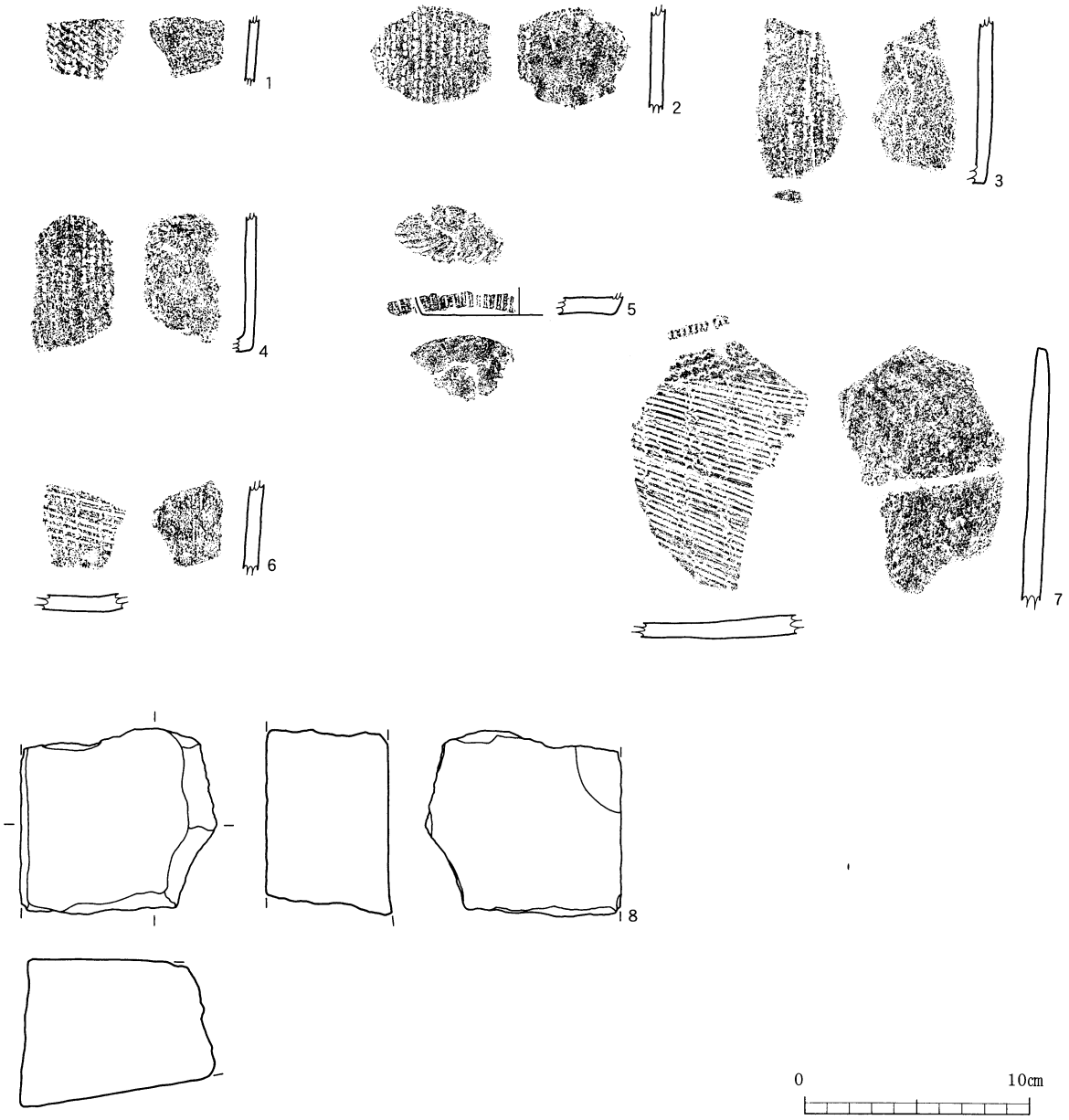
E－６区で検出された。土層観察ベルトを十字に残した状態で掘り下げを終了している。プランは，隅丸長方形で床面積は9.5㎡である。東側は30号土坑と切り合っている。

当住居跡の埋土は，大きく２枚に分かれる。上面に堆積しているものはP－13（Sz-Tk３）火山灰の黄色パミスである。なお，30号土坑はこの黄色パミスを切っており，これらの関係は16号竪穴住居跡→P－13（Sz-Tk３）火山灰の降灰→30号土坑という新旧の切り合い関係が窺われる。下面には，茶褐色土が堆積しており感触としてザラついている。このような茶褐色土は，P－13（Sz-Tk３）火山灰の黄色パミスもしくは濃密な白色パミスを含む黒褐色土層の下に多く見られる傾向がある。



第45図　16号竪穴住居跡

遺構内遺物は，土器16点・石器１点・礫８点が出土し，このうち土器７点・石器１点を図化した。１～５は円筒形である。２～４は同一個体と思われ，胴部には方形に近い刺突文が施されている。５は，底部片である。横ナデを施した後にキザミを施文している。６・７は角筒形である。７は口縁部片である。口唇部にキザミ目を有し，口縁部には横位に貝殻刺突文が４条めぐる。胴部は，斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を菱形状に施文しその間隔は広い。８は厚みのある石皿片と思われる。

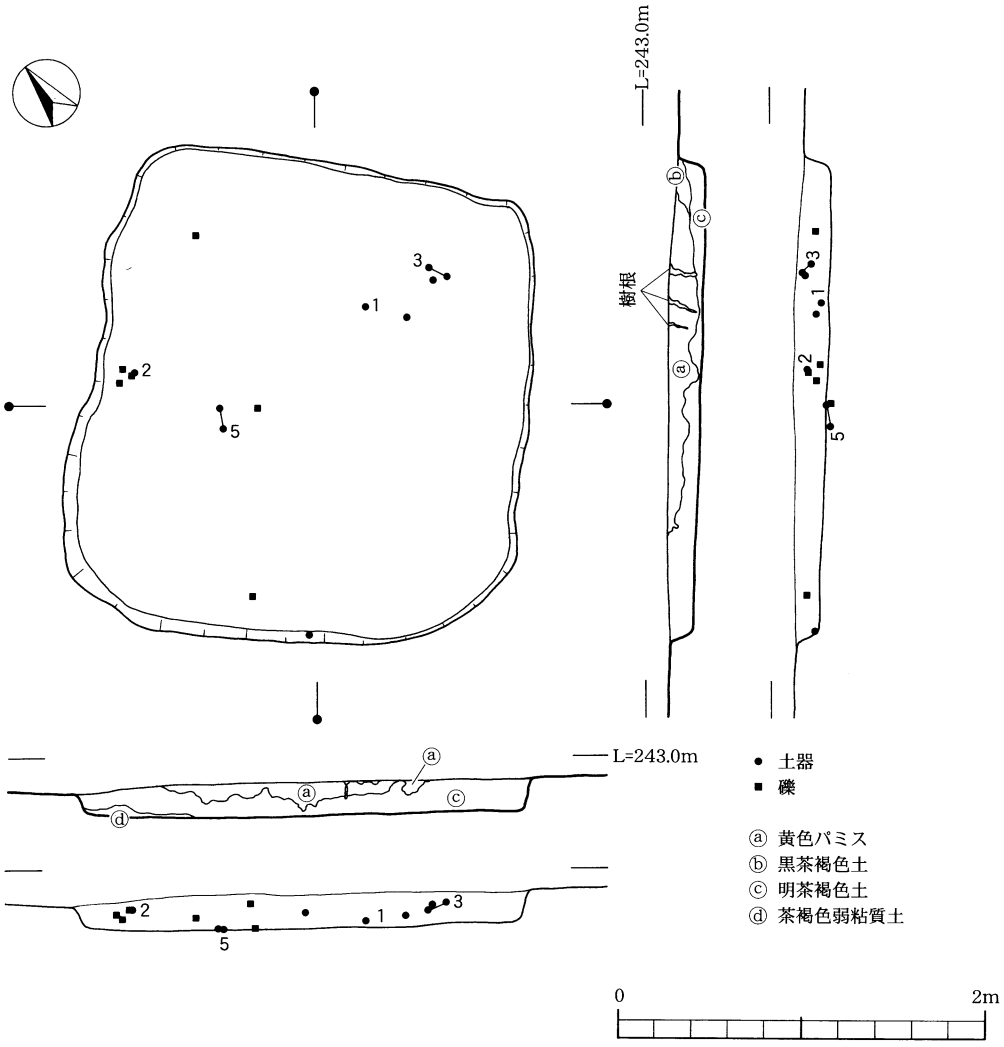


第46図　16号竪穴住居跡内遺物

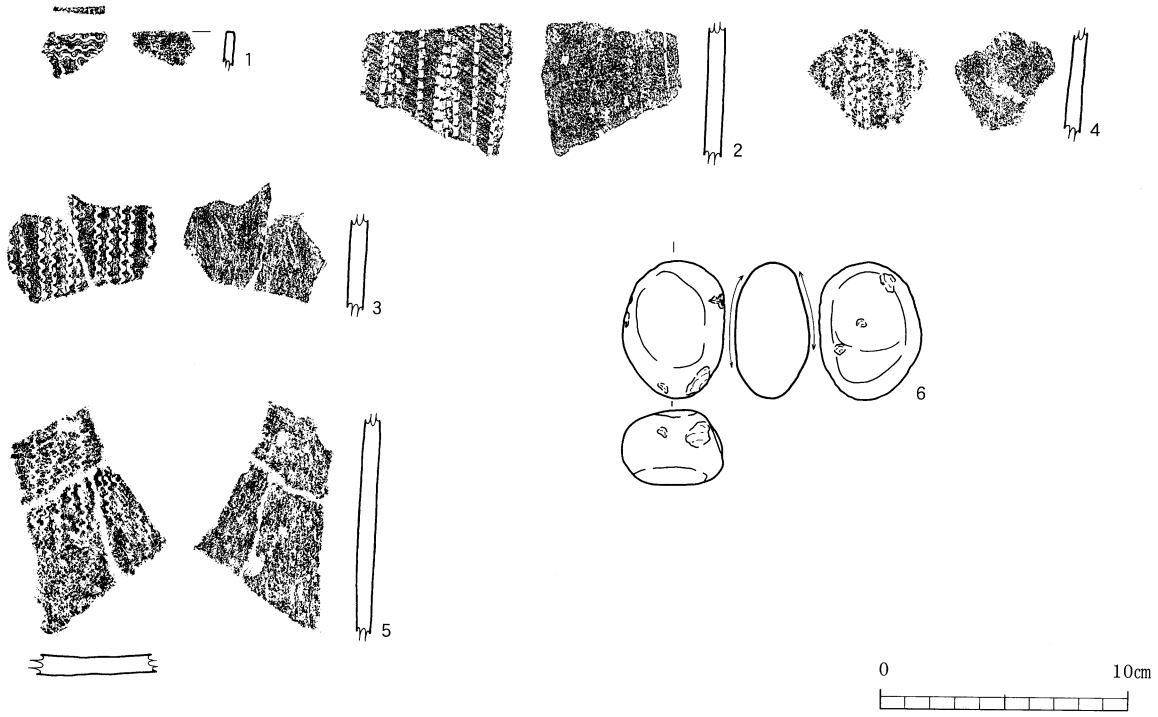
17号竪穴住居跡

E－６区で検出された。プランは隅丸方形を呈し，床面積は5.9㎡である。東側に隣接する16号住居跡と同様，埋土にP－13（Sz-Tk３）火山灰の黄色パミスが堆積している。竪穴内部及び周辺からはピット状の遺構は検出されなかった。

遺構内遺物は，土器８点・礫６点の合計14点が出土し，このうち土器５点・石器１点を図化した。１～４は円筒形である。１は口縁部片であるが小片のため詳細は不明である。２は浅い貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を施している。３は貝殻条痕文は観察されず縦位のナデの後貝殻刺突文を施している。５は角筒形であるが風化が激しく詳細は不明である。６は小型の磨石である。



第47図　17号竪穴住居跡

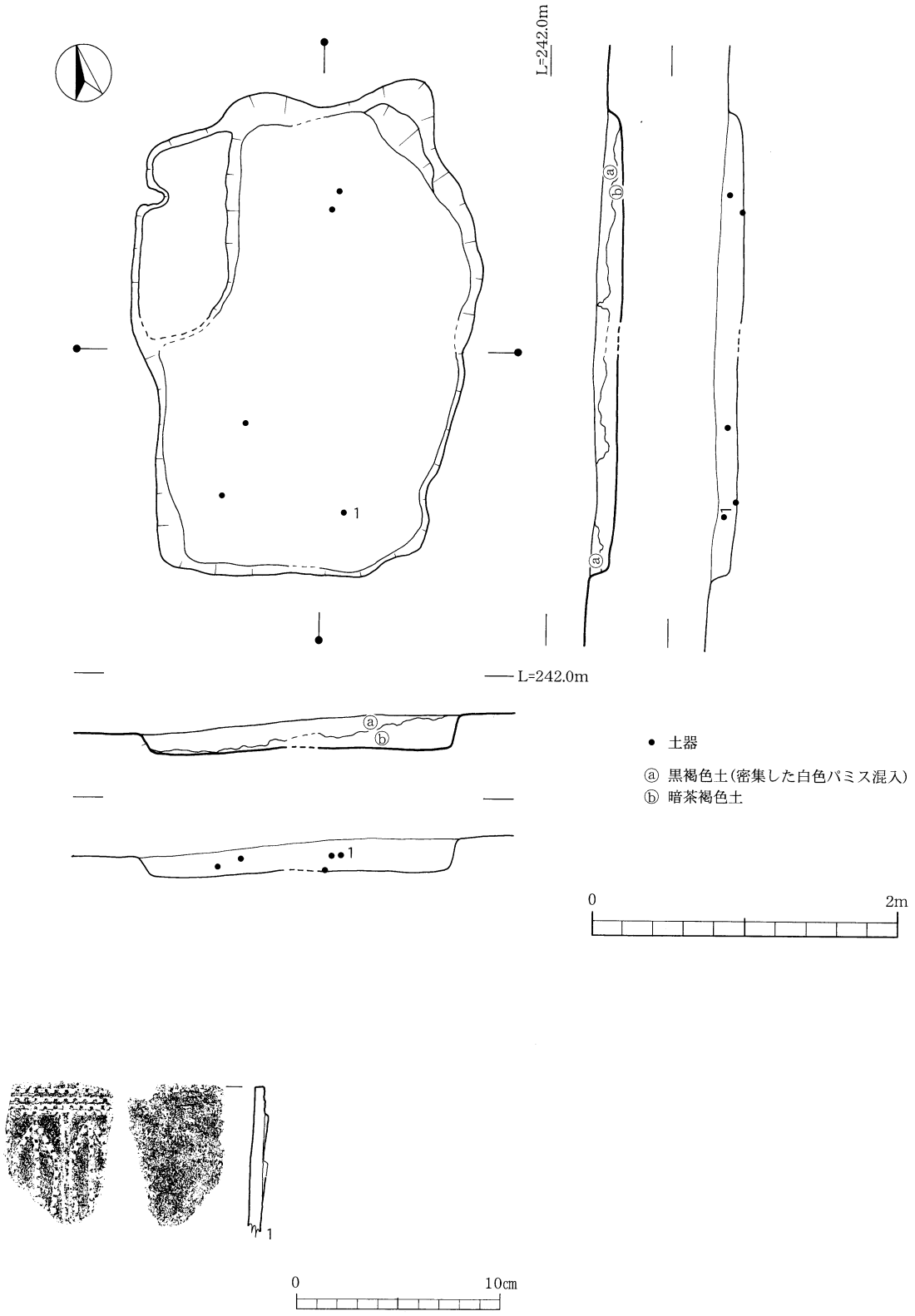


第48図　17号竪穴住居跡内遺物

18号竪穴住居跡

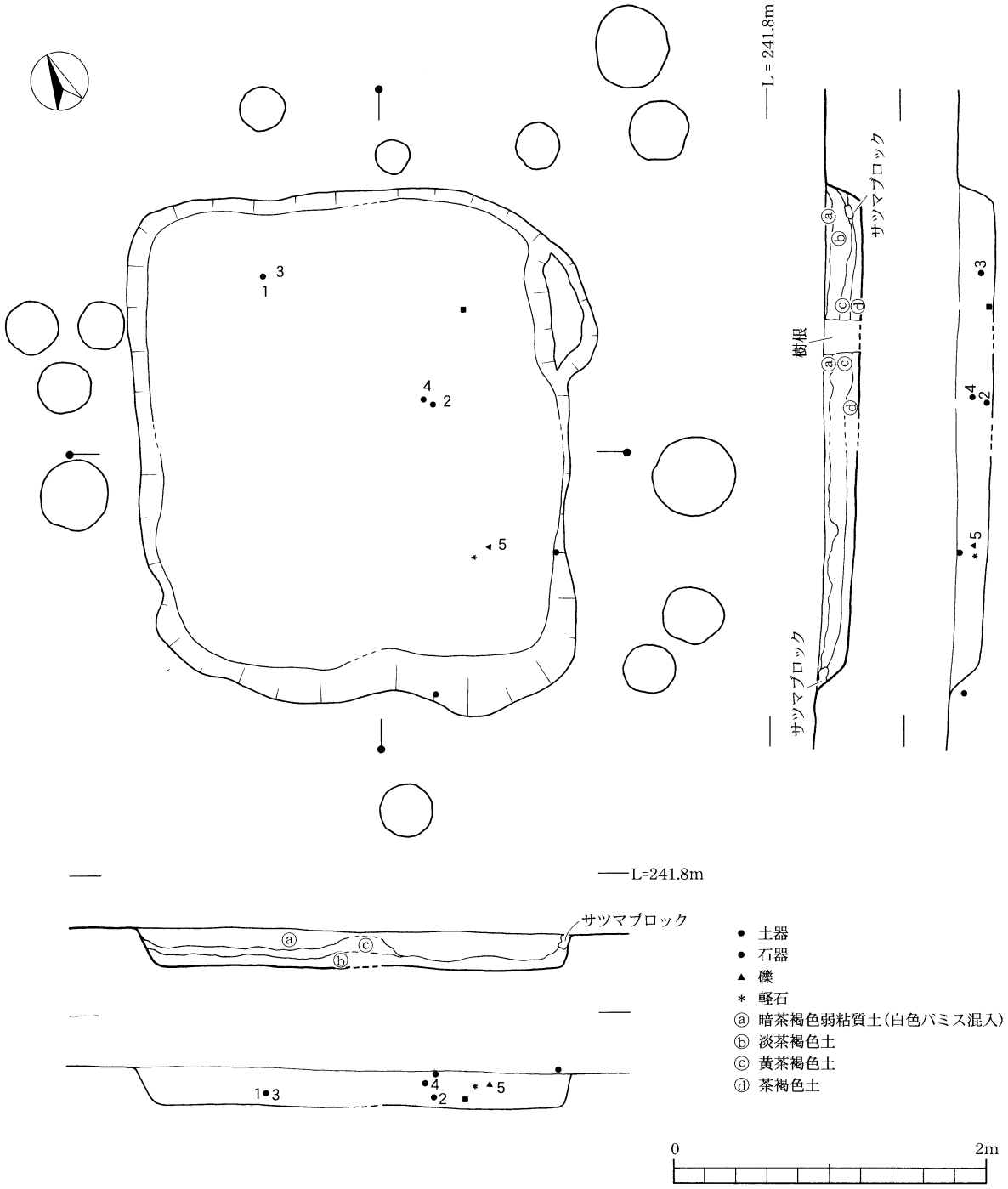
E－６区で検出された。土層観察ベルトを残して調査を終了している。プランは隅丸長方形を呈し，床面積は7.4㎡である。住居跡内北東部には，ベット状のものが確認された。床面にはX層と思われる層が部分的に見られた。だが，その上部に堆積している埋土はザラザラした茶褐色土であり床面と判断した層はP－13（Sz-Tk３）火山灰の一次堆積物である可能性も考えられる。

遺構内遺物は少なく，土器が５点出土し１点を図化した。１は円筒形の器形で口縁部片である。口唇部にキザミ目を有し，口縁部には横位に貝殻刺突文が３条めぐる。貼付文が見られ，上面をヘラで側面をクシ状工具により刺突しクサビ状を呈する。



第49図　18号竪穴住居跡・住居跡内遺物

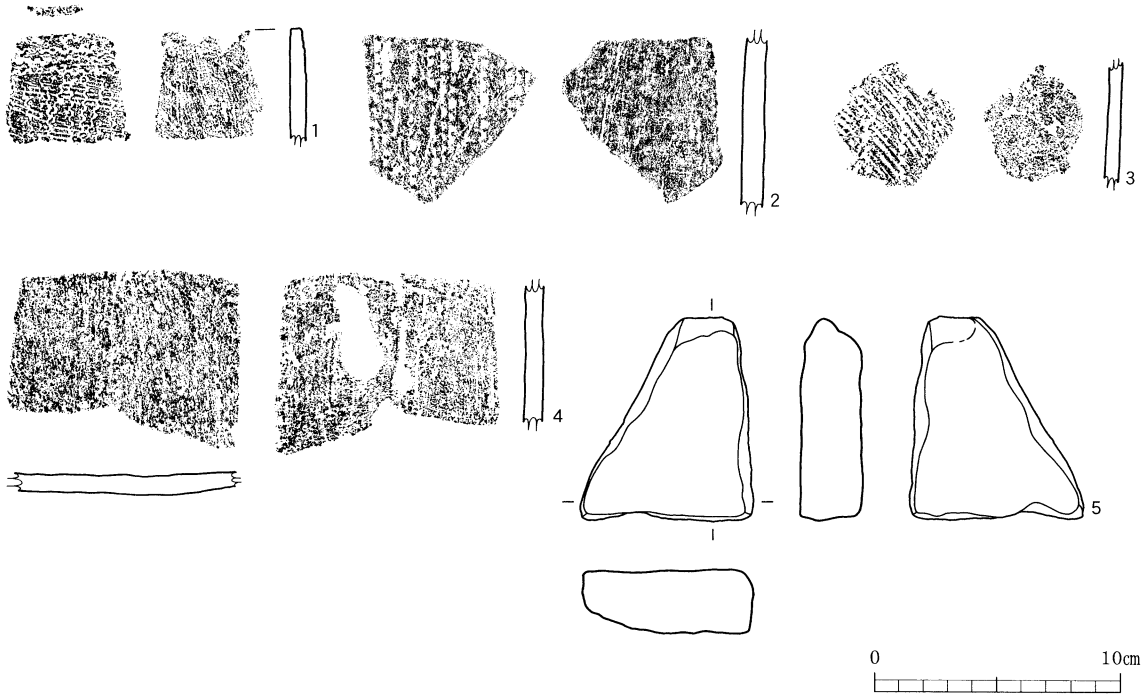
19号竪穴住居跡



第50図　19号竪穴住居跡

E－６区とD－６区にまたがって検出された。約３mの隅丸方形プランを呈する。遺構内埋土観測用のベルトを残し，掘り下げをおこなった。竪穴外周には大小13のピット状の痕跡が確認されたが，配列に明確な規則性はみられない。また，今回はピットの掘り下げはおこなっていないため，竪穴住居に伴う柱穴の状況等は不明である。検出面から床面までの深さは約20cmで，遺構内埋土はその色調から４層に分けられる。

遺構内遺物としては土器５点・石器１点・礫１点・軽石１点が出土し，このうち土器４点・石器１点を図化した。１～３は円筒形である。１は口縁部片である。口唇部にキザミ目を有し，口縁部には横位に貝殻刺突文が４条めぐる。２は貝殻条痕文が観察されない。４は角筒形であるが風化のため詳細は不明である。５はやや扁平の石皿片と思われる。

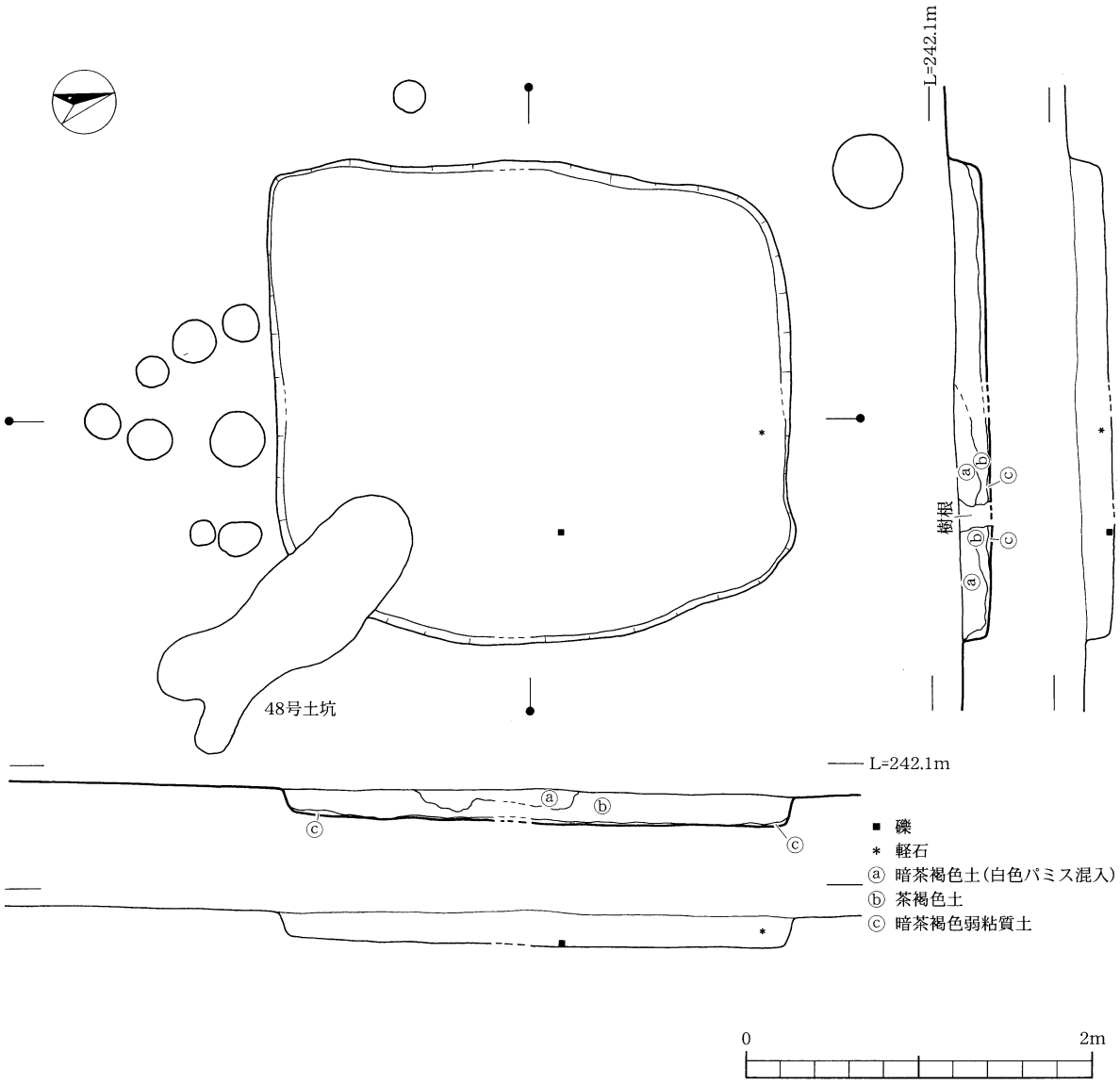


第51図　19号竪穴住居跡内遺物

20号竪穴住居跡

D－７区で検出された。約３mの隅丸方形プランを呈する。遺構内埋土観測用のベルトを残し掘り下げをおこなった。南隅で48号土坑との切り合いが確認されたが，埋土状況から判断して竪穴住居跡埋没後に土坑が構築されたものと思われる。竪穴周辺には10基のピット状の痕跡がみられるが，今回は掘り下げをおこなっていないため住居との細かな関連は不明である。遺構検出面から床面までの深さは約18cmで，遺構中央付近には白色パミスを含む暗茶褐色土の堆積がみられる。

遺構内遺物として，土器１点・礫１点・軽石１点が出土しているがいずれも小破片のため図化出来なかった。

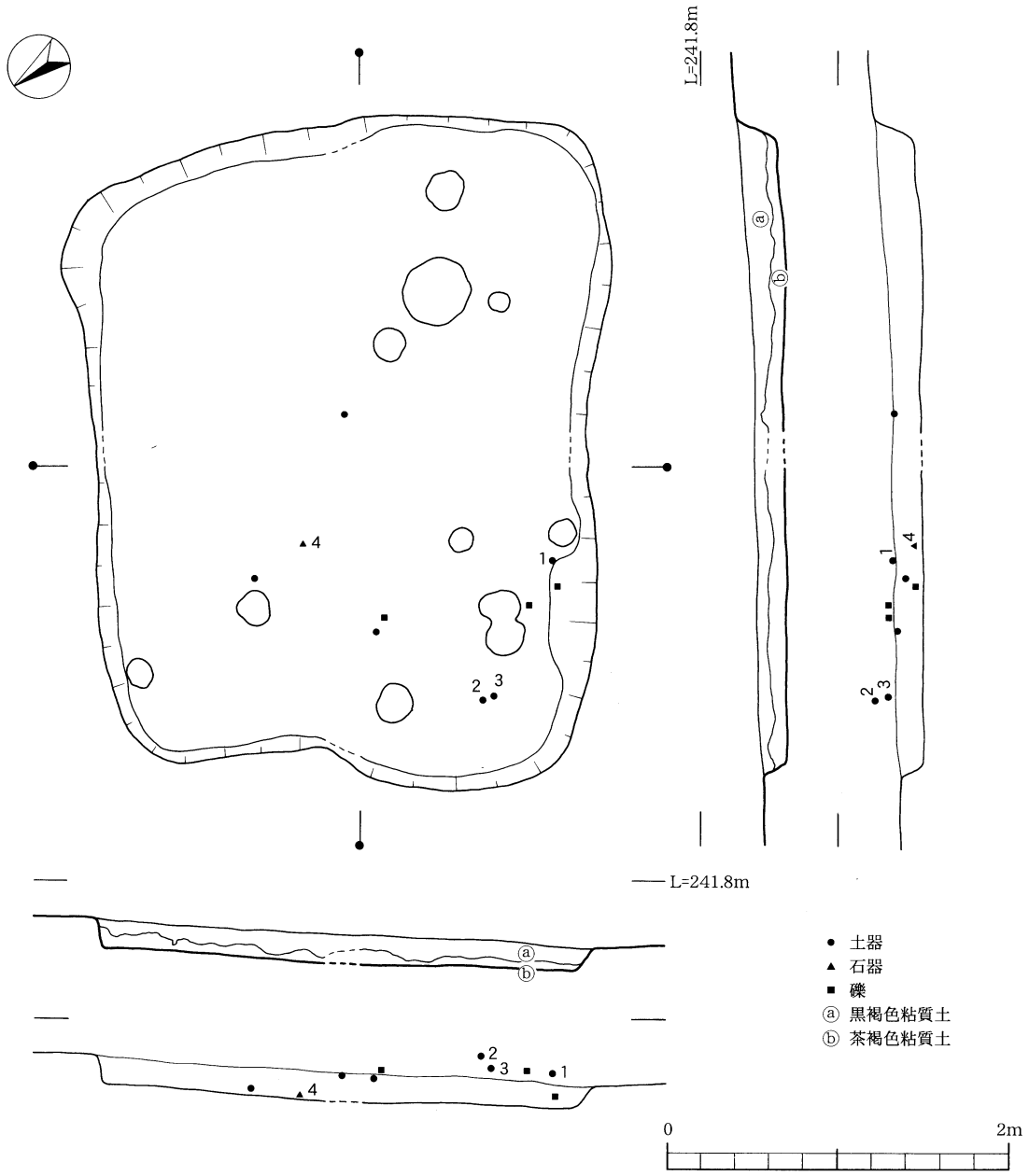


第52図　20号竪穴住居跡

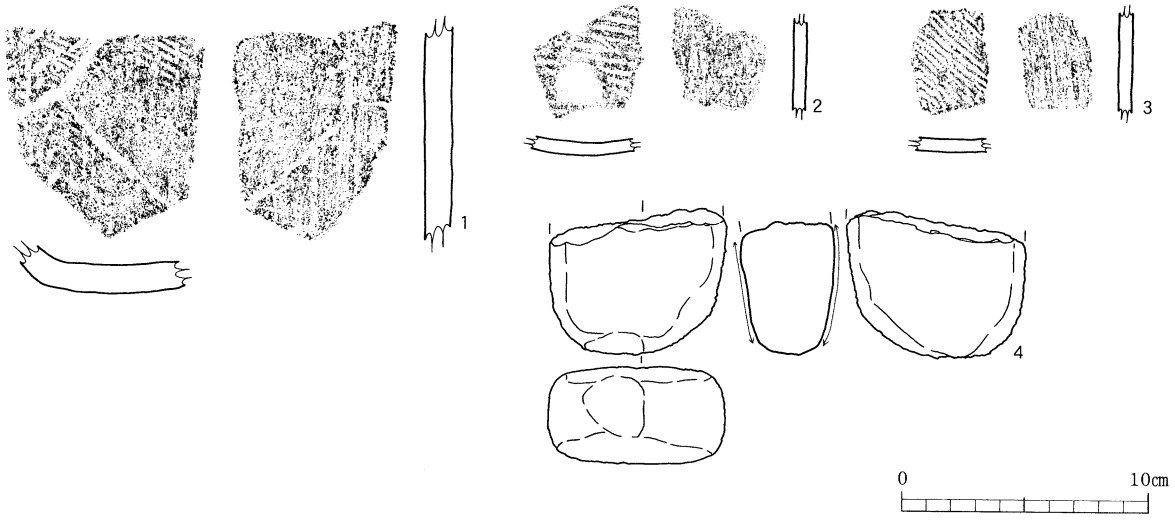
21号竪穴住居跡

D－７区で検出された。やや不定形な隅丸方形プランを呈する。遺構内埋土観測用のベルトを残し，掘り下げをおこなった。床面に大小11基のピット状の痕跡が確認されたが，配列に規則性はみられず，掘り下げもおこなっていないため，現時点では柱穴との判断はできない。検出面から床面までの深さは約25cmで，一次埋土として茶褐色粘質土（b層）が堆積し，その上に黒褐色粘質土（a層）が覆っている。パミス等の混入はみられない。

遺構内遺物は土器６点・石器１点・礫３点で，このうち土器３点・石器１点を図化した。



第53図　21号竪穴住居跡

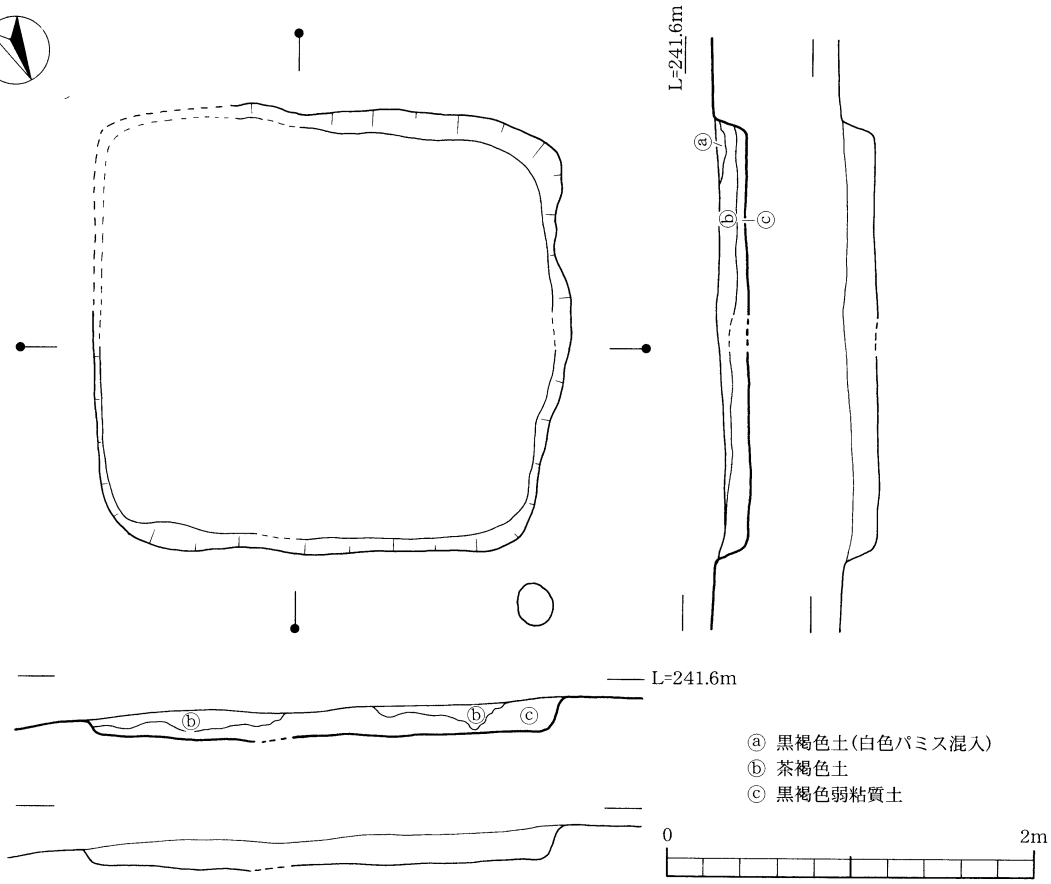


第54図　21号竪穴住居跡内遺物

22号竪穴住居跡

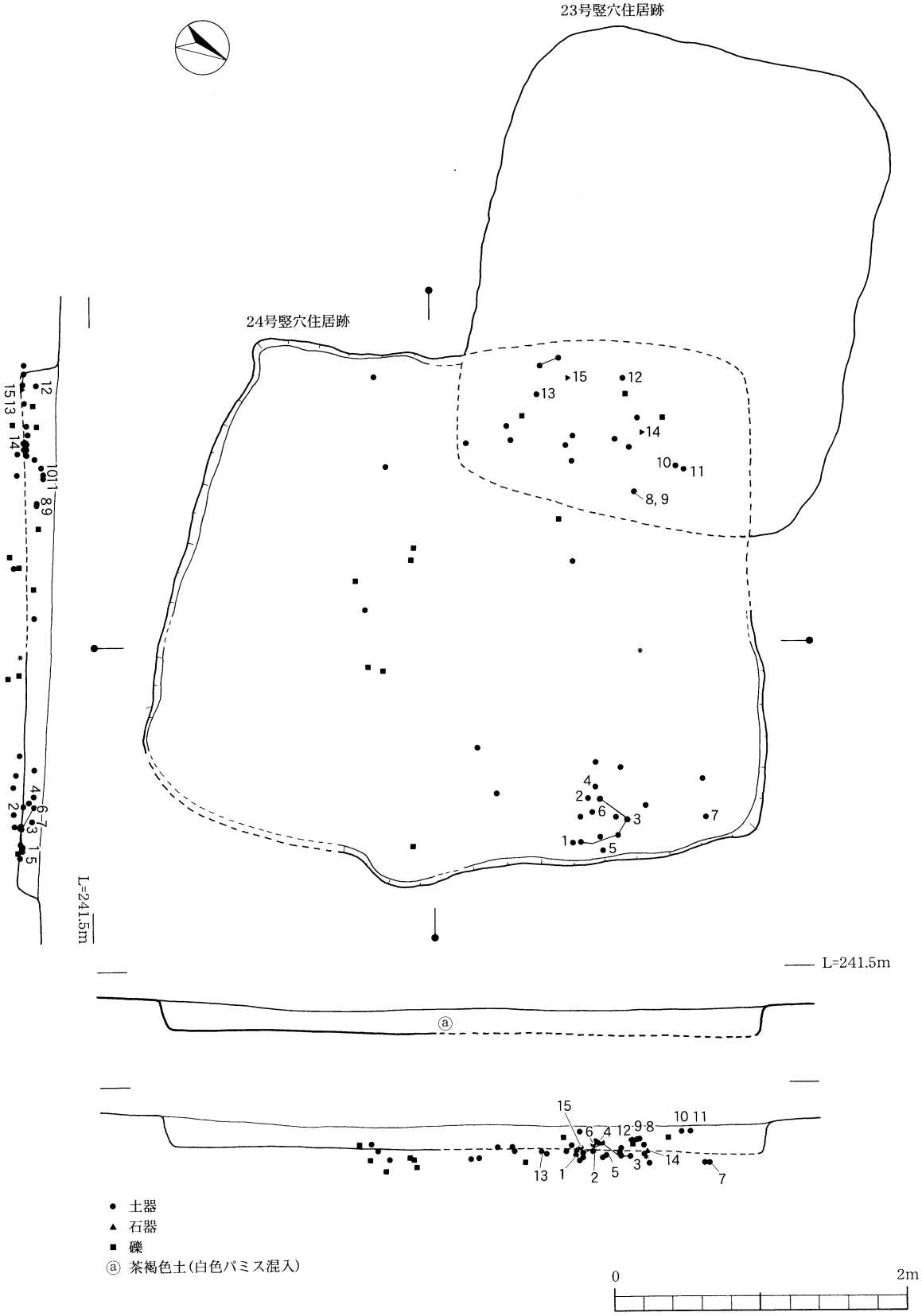
D－７区で検出された。土層観察ベルトを残して調査を終了している。プランは隅丸長方形を呈すると思われるが，南側のプランが一部不明瞭であった。なお，床面積は6.6㎡である。住居跡外部に直径約20㎝のピット状の遺構が検出されている。

遺物は，礫が１点出土したのみであった。時期の特定は，埋土中にⅦ層該当と思われる黒褐色土が流入していることから推察し，他の竪穴住居跡と同時期であろうと判断した。



第55図　22号竪穴住居跡

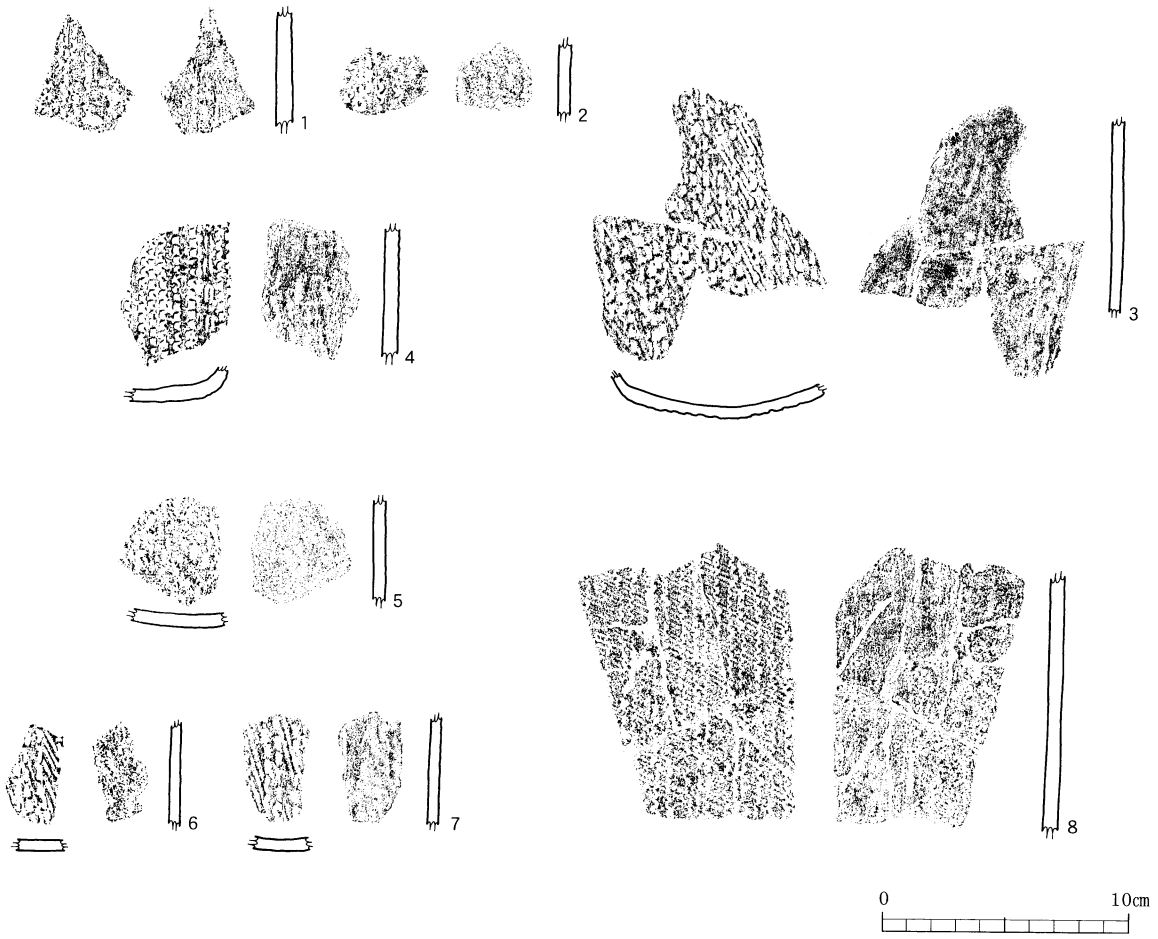
23・24号竪穴住居跡



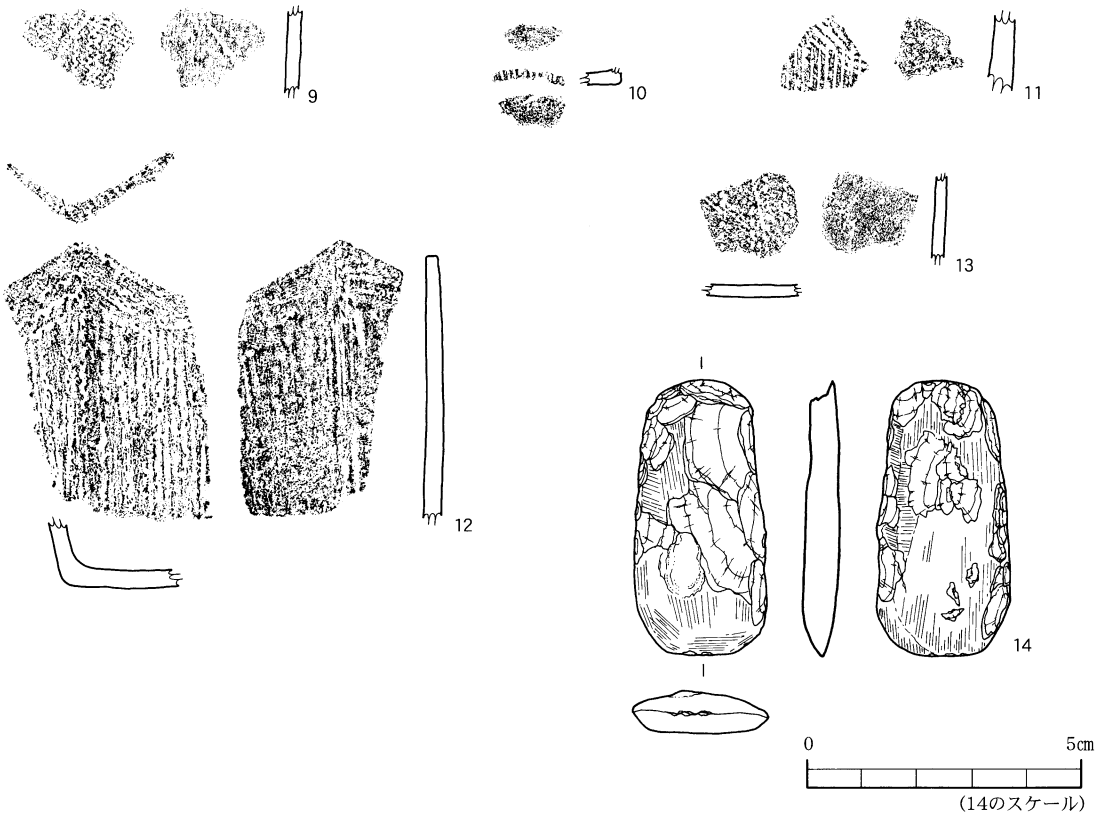
第56図　23・24号竪穴住居跡

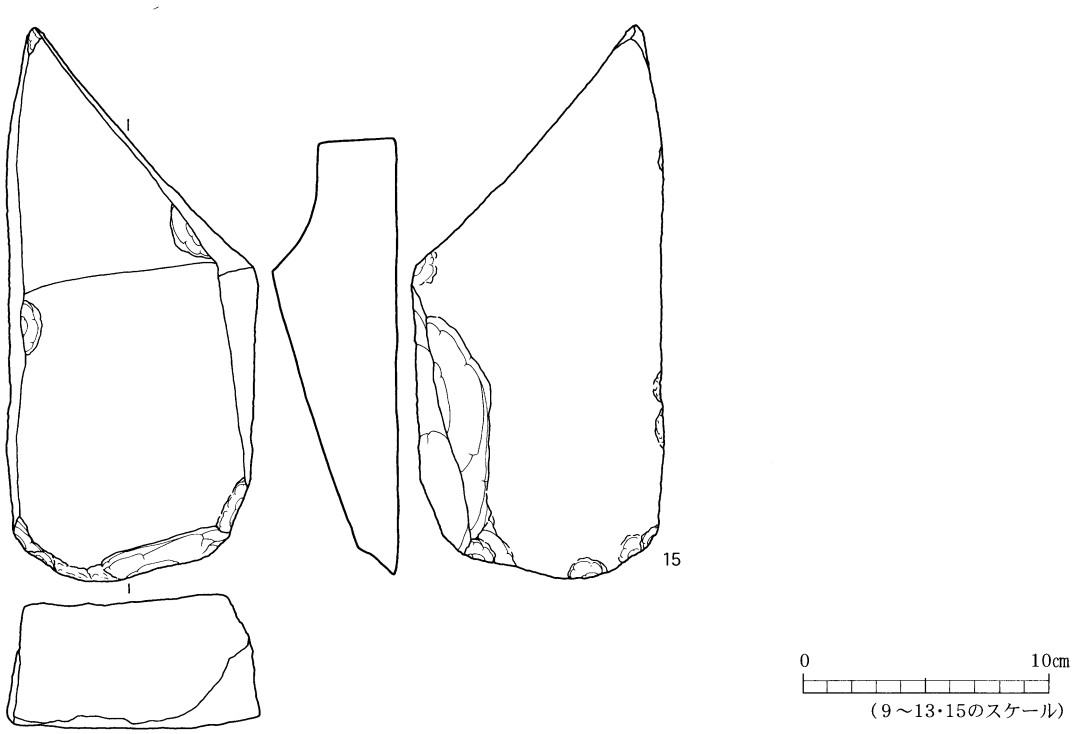
D－７区に検出された。23号は，24号と切り合っている部分の掘り下げと土層観察ベルトを残して掘り下げを終了している。このため，両者の前後関係は不明である。23号・24号は，隅丸長方形のプランを呈し24号の床面積は8.1㎡である。

遺構内遺物は，24号のものと思われるものが土器23点・礫７点・軽石１点が出土し，このうち土器６点を図化した。また，どちらに伴うかはっきりしないが土器16点・石器２点・礫３点が出土し，このうち土器６点・石器２点を図化した。１～７は24号に伴うと思われ，８～13は23号24号のいずれに伴うかはっきりとしないものである。１・２は円筒形の器形である。１は貝殻条痕文が見られない。３～７は角筒形である。３は貝殻刺突文の刺突部分がやや縦長である。４は角部に２本１組でクシ状工具による刺突文を施している。８～11は円筒形である。８・９はやや密な貝殻刺突文が施されている。10・11は底部片である。10は器壁が薄い。12・13は角筒形である。12は口縁部片で口唇部にキザミ目を有し口縁部には貝殻刺突文が横位に４条めぐる。胴部は，縦位の貝殻条痕文の後縦位の貝殻刺突文が施されている。



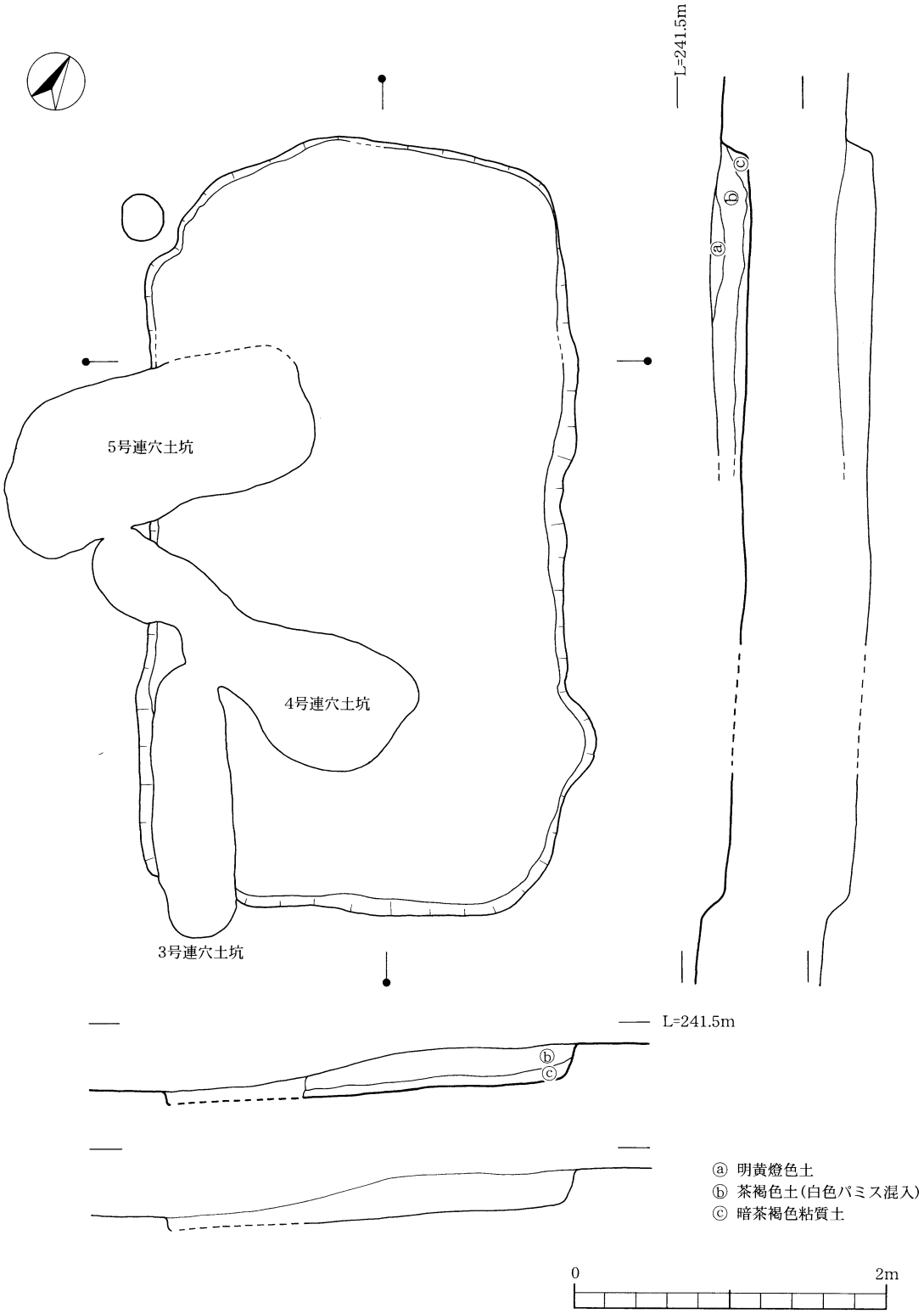
第57図　23・24号竪穴住居跡内遺物（１）





第58図　23・24号竪穴住居跡内遺物（2）

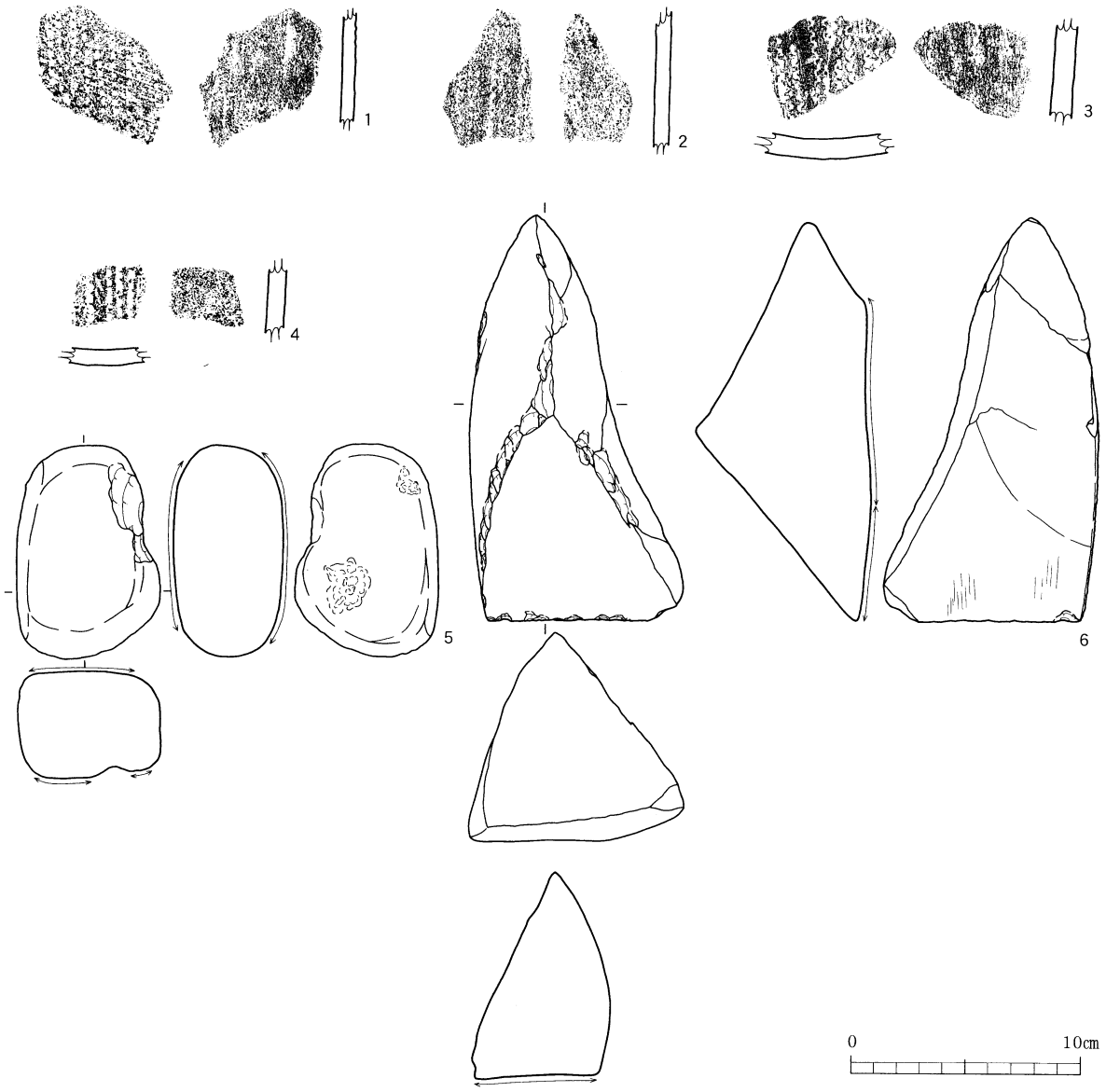
25号竪穴住居跡



第59図　25号竪穴住居跡

D－７区で検出された。遺構内埋土観測用のベルトを残し，掘り下げをおこなった。約５m×４mの概略隅丸長方形プランを呈する。検出面から床面までの深さは約25cmである。北側中央の埋土上層部に黄燈色土が堆積しているが，これが攪乱なのかははっきりしない。西側長辺部分で連穴土坑３基と切り合っている。連穴土坑相互の新旧関係ははっきりしないが，いずれも竪穴住居が埋没後に構築されたものと思われる。

遺構内遺物として土器４点・石器２点・礫３点が出土しており，このうち土器４点・石器２点を図化した。１・２は円筒形であるが文様は風化のためにはっきりとしない。３・４は角筒形である。３は，縦のナデ調整後貝殻刺突文が施されている。５は磨石と思われる。６は断面三角形の礫で平坦面に磨りの痕跡が見られ，また角部にはやや規則的な剥離が見られる。

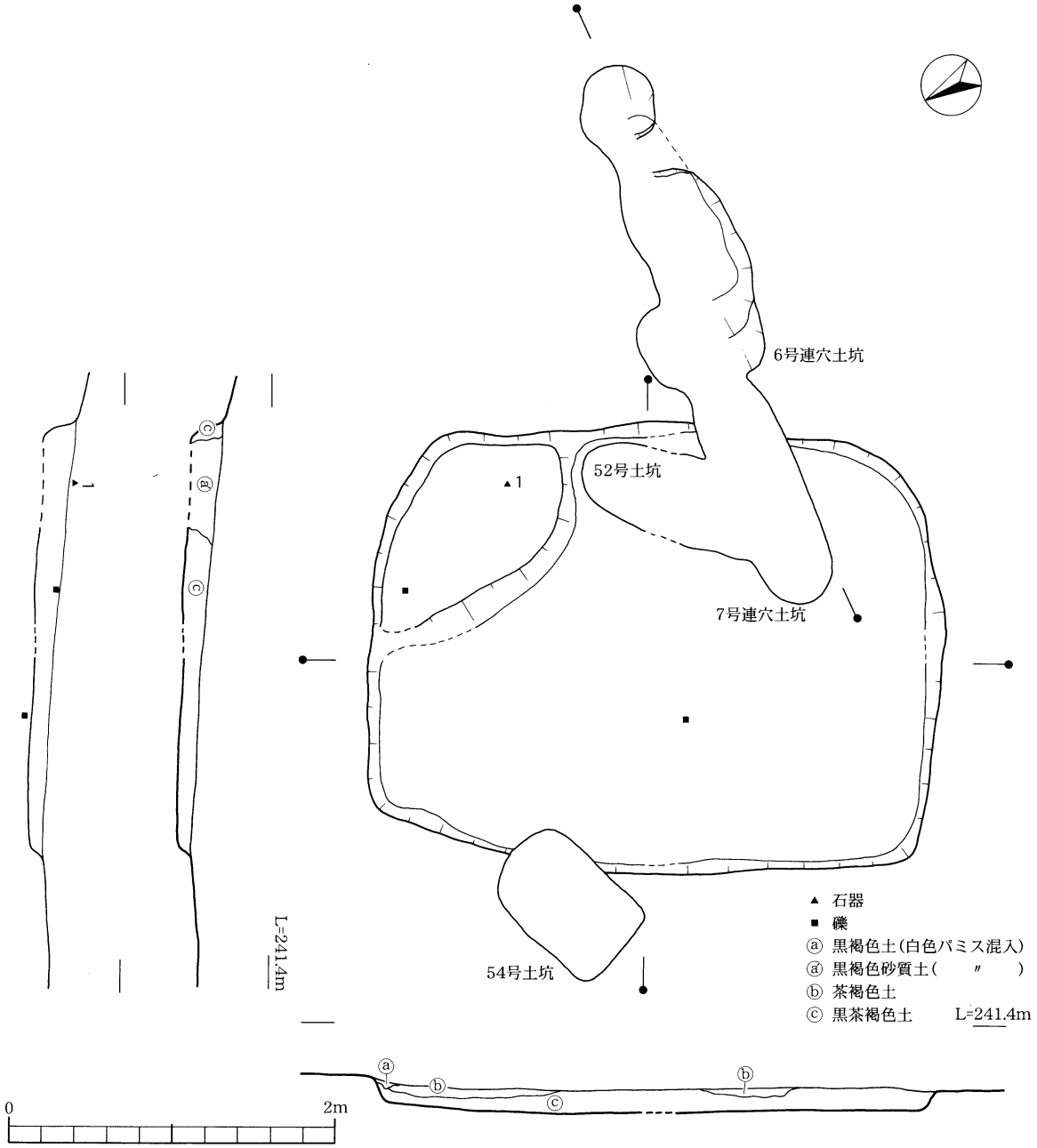


第60図　25号竪穴住居跡内遺物

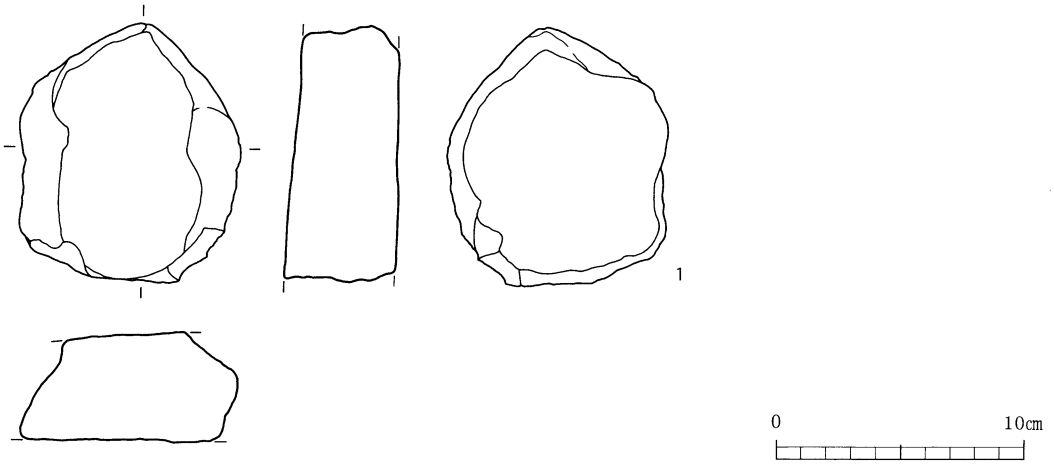
26号竪穴住居跡

D－７区で検出された。土層観察ベルトを残して調査を終了している。プランは隅丸長方形で，北東部に床面より一段高い部分がある。床面積は，8.6㎡である。26号住居跡は，52号・54号土坑，６号・７号連穴土坑と切り合い関係にある。これらの遺構は，26号住居跡の一部を切って検出されていることから，当住居跡より新しいものと思われる。

遺物は少なく，石器１点・礫２点が出土し石器１点を図化した。

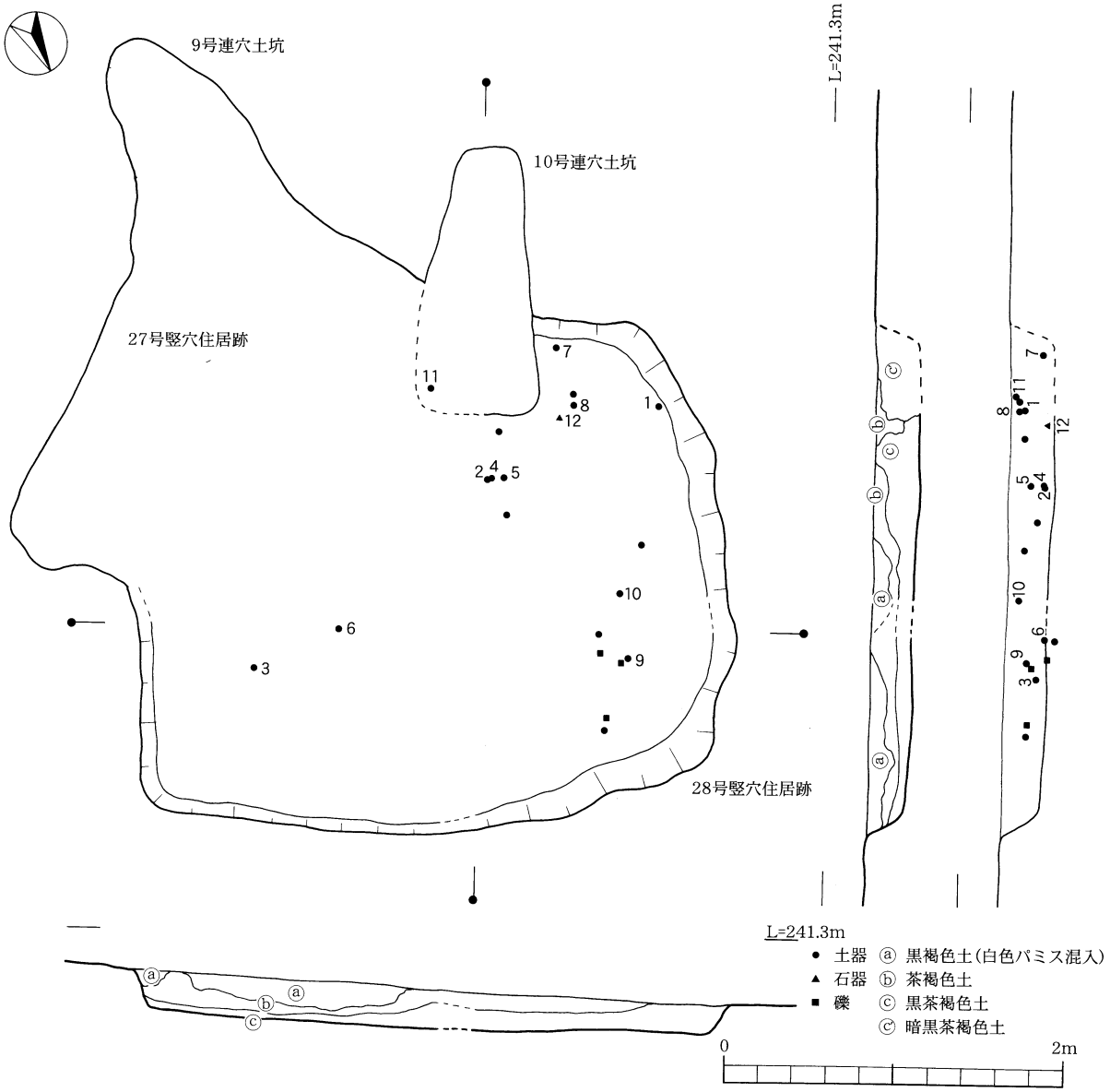


第61図　26号竪穴住居跡



第62図　26号竪穴住居跡内遺物

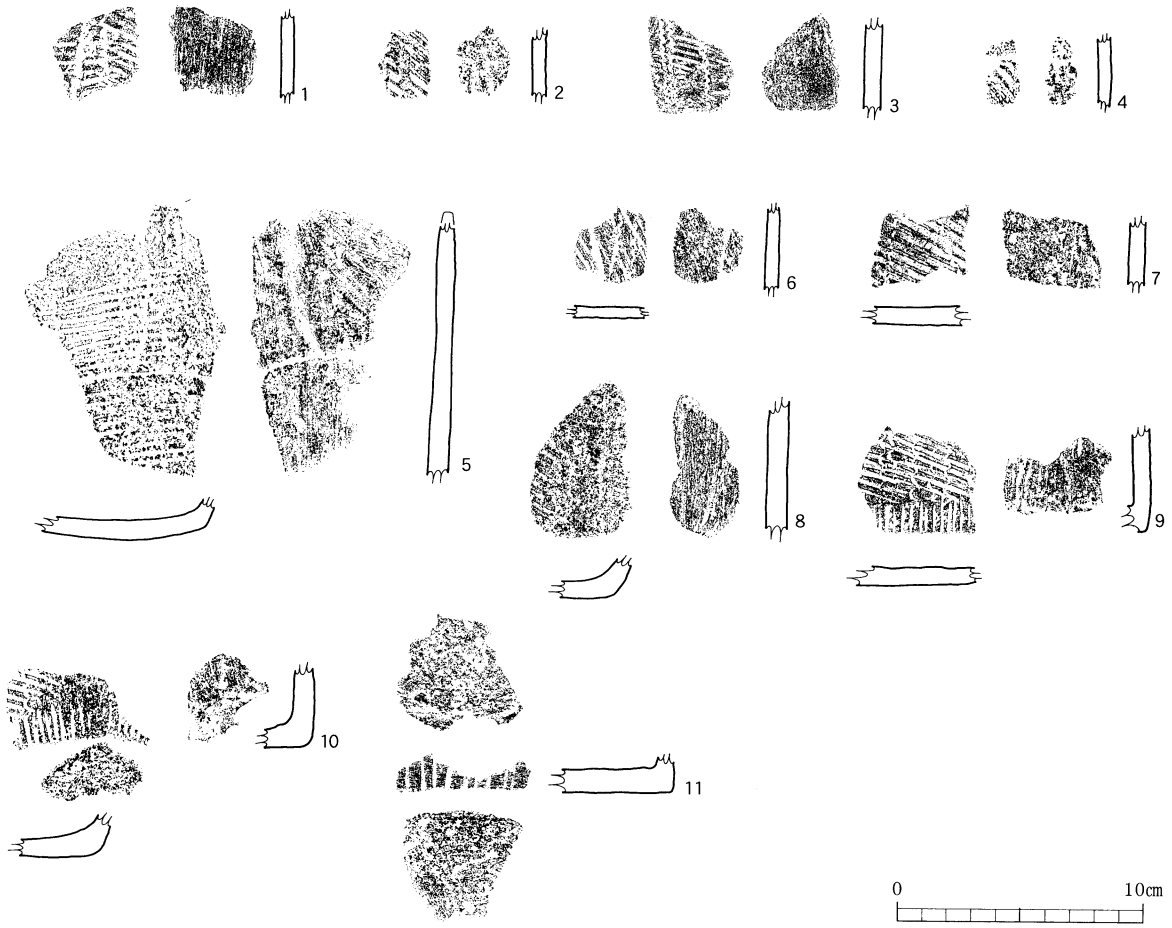
27・28号竪穴住居跡



第63図　27・28号竪穴住居跡

D－７区で検出された。27号はプランを確認した段階で調査を終了し，28号は土層観察ベルトを残して調査を終了している。両住居跡は10号連穴土坑と，27号住居跡は９号連穴土坑と切り合い関係にある。これらの遺構は，掘り下げをおこなっておらず前後関係については断定できていない。また，竪穴住居跡のコーナーを掘り込んでいることから連穴土坑と判断したが，この点についても断定はできていない。現段階で判明していることは，28号住居跡→10号連穴土坑という関係のみである。

遺構内遺物は，土器16点・石器１点・礫３点の合計20点が出土し，このうち土器11点を図化した。１～10までは，28号住居跡に伴うと思われ，11ははっきりとしないが27号住居跡に伴う可能性が高いものと思われる。１～４は円筒形である。１の貝殻条痕文はやや太めである。３は貝殻刺突文の間隔が広い。５～10は角筒形である。５は口縁部片である。風化しているが，間隔の広い貝殻刺突文が施されている。７は間隔の広い貝殻刺突文が施されている。９・10は底部片で同一個体と思われる。キザミ目が施されている部分は，施文の前にケズリ込みをおこなっている。11は底部片である。27号住居跡か10号連穴土坑内遺物の可能性もある。

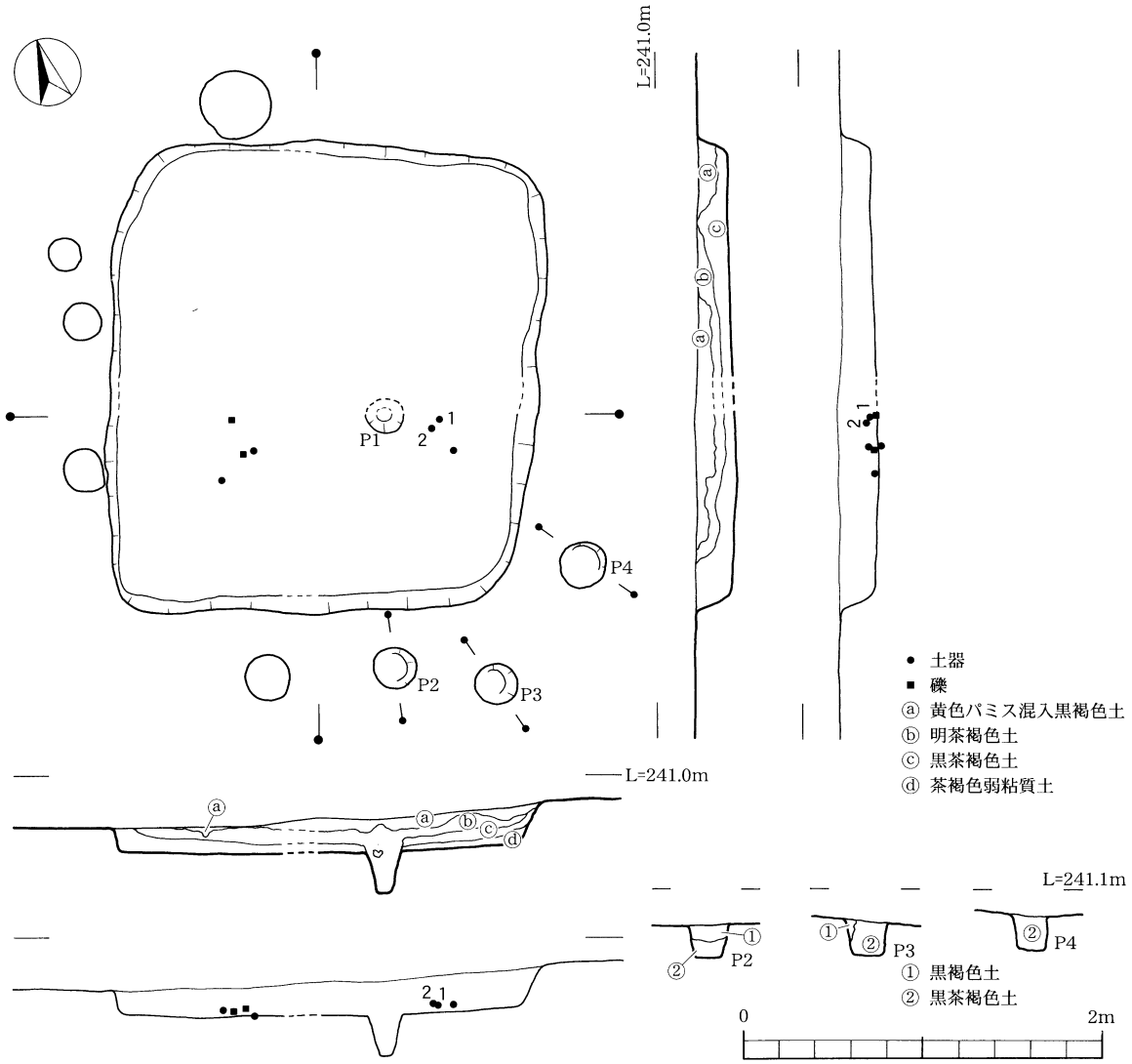


第64図　27・28号竪穴住居跡内遺物

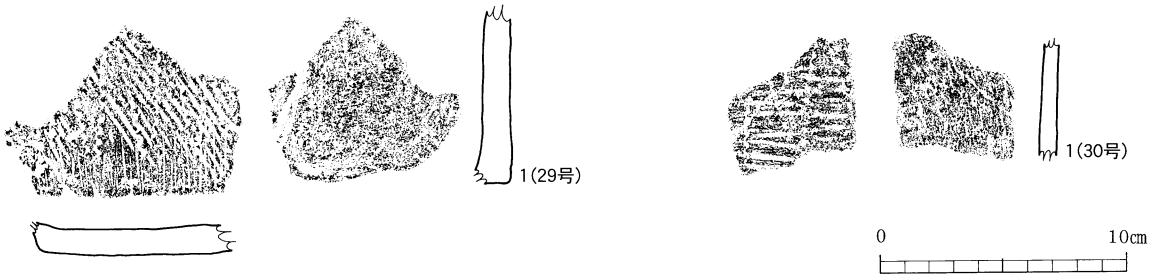
29号竪穴住居跡

D－７区で検出された。土層観察ベルトを残して掘り下げを終了している。プランは隅丸方形を呈し，床面積は6.6㎡である。住居跡周辺からは，ピット状の遺構が検出され，この内の３基について半裁した。その結果，いずれもピットである可能性が高いことが判明した。ピットはいずれも検出面より30㎝程度の深さがあり，また，竪穴内部にもピットが１基検出されている。このピットは，竪穴の埋土c・dを切っている。これは，竪穴住居が埋まる過程においてピットが掘られた場合と，竪穴住居が埋まる初期の段階まで柱が立っており，その後埋土a・bが堆積したという２つの場合が想定される。なお，埋土aはP－13（Sz-Tk３）火山灰の黄色パミスであり，29号竪穴住居跡はP－13（Sz-Tk３）火山灰の降下前の遺構ということになる。

遺構内遺物は，土器４点・礫２点の合計６点が出土し，このうち土器１点を図化した。１は角筒形で胴部から底部にかけての破片である。貝殻条痕文の上に間隔の広い貝殻刺突文が菱形状に施文されている。また，図化できなかったが剥落の激しい円筒形土器の比較的大きめの破片も出土している。



第65図　29号竪穴住居跡

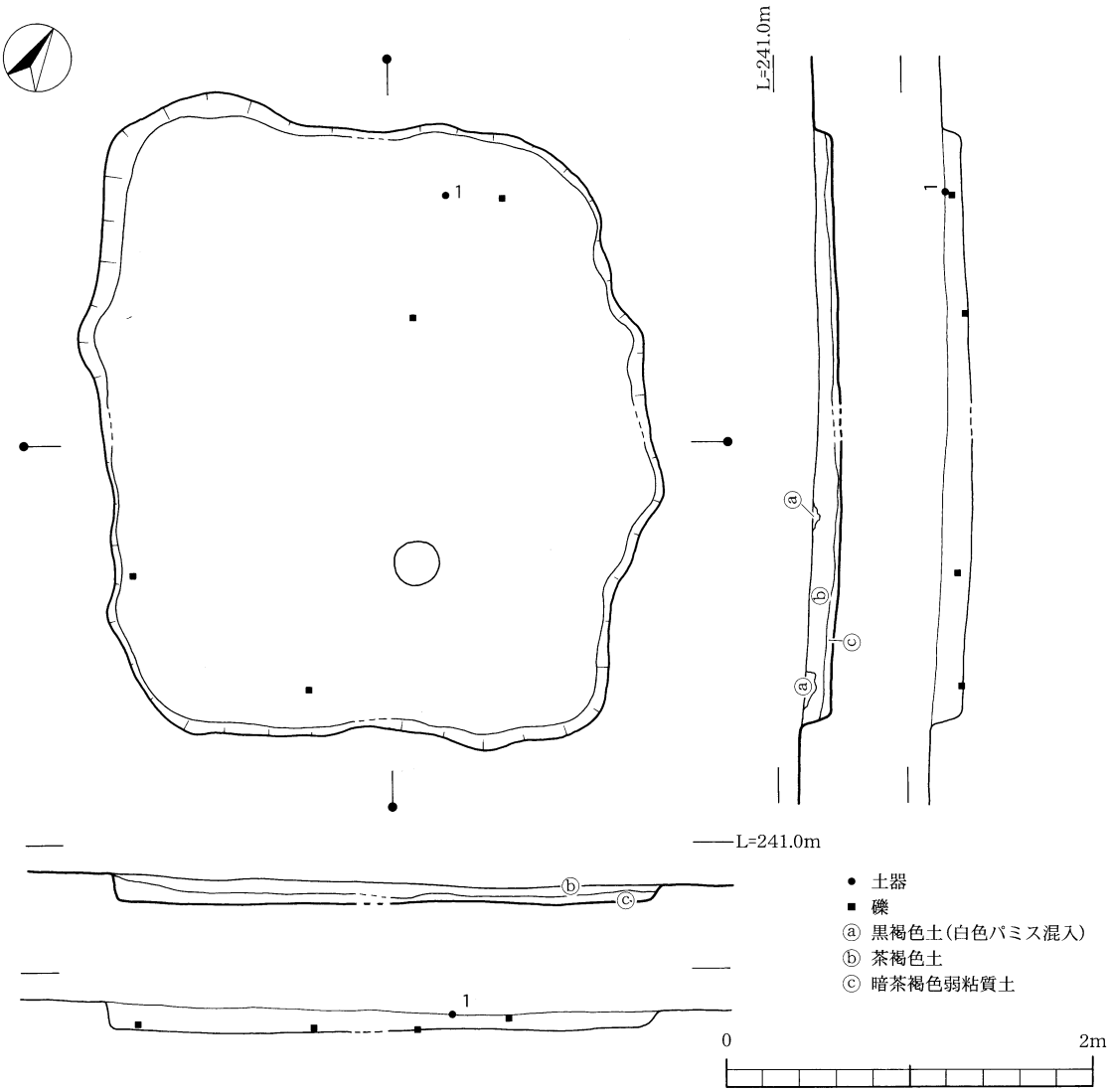


第66図　29・30号竪穴住居跡内遺物

30号竪穴住居跡

C・D－７区にまたがって検出された。土層観察ベルトを残して掘り下げを終了している。プランは隅丸方形状を呈し，床面積は9.2㎡である。竪穴内部には，ピット状のものが１基中央よりも東南壁に近い位置に検出された。

遺構内出土遺物は少なく，土器１点・礫４点の合計５点出土し，このうち土器１点を図化した。１は円筒形の胴部片である。横位に近い貝殻条痕文の上に間隔の広い貝殻刺突文が施されている。

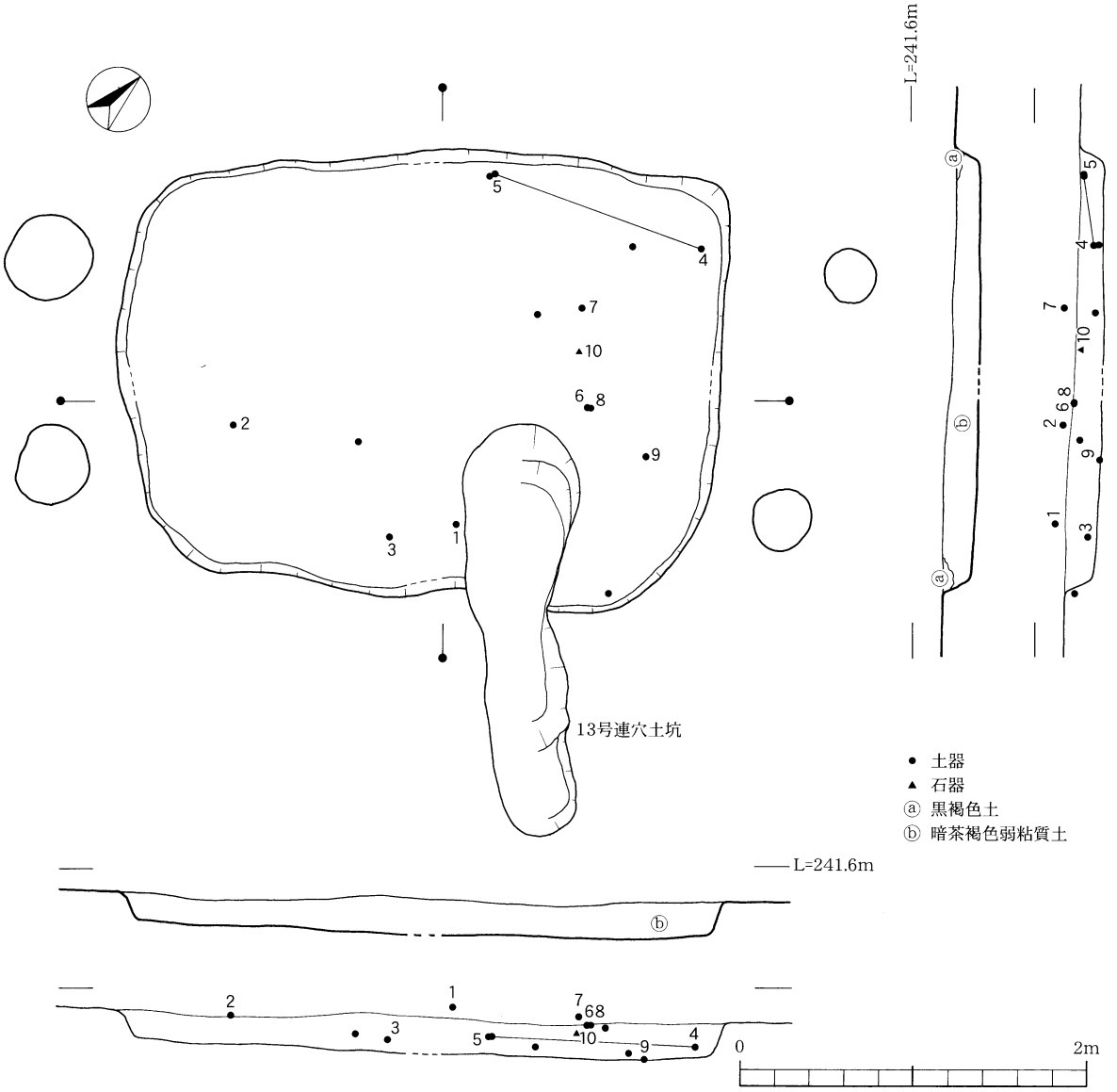


第67図　30号竪穴住居跡

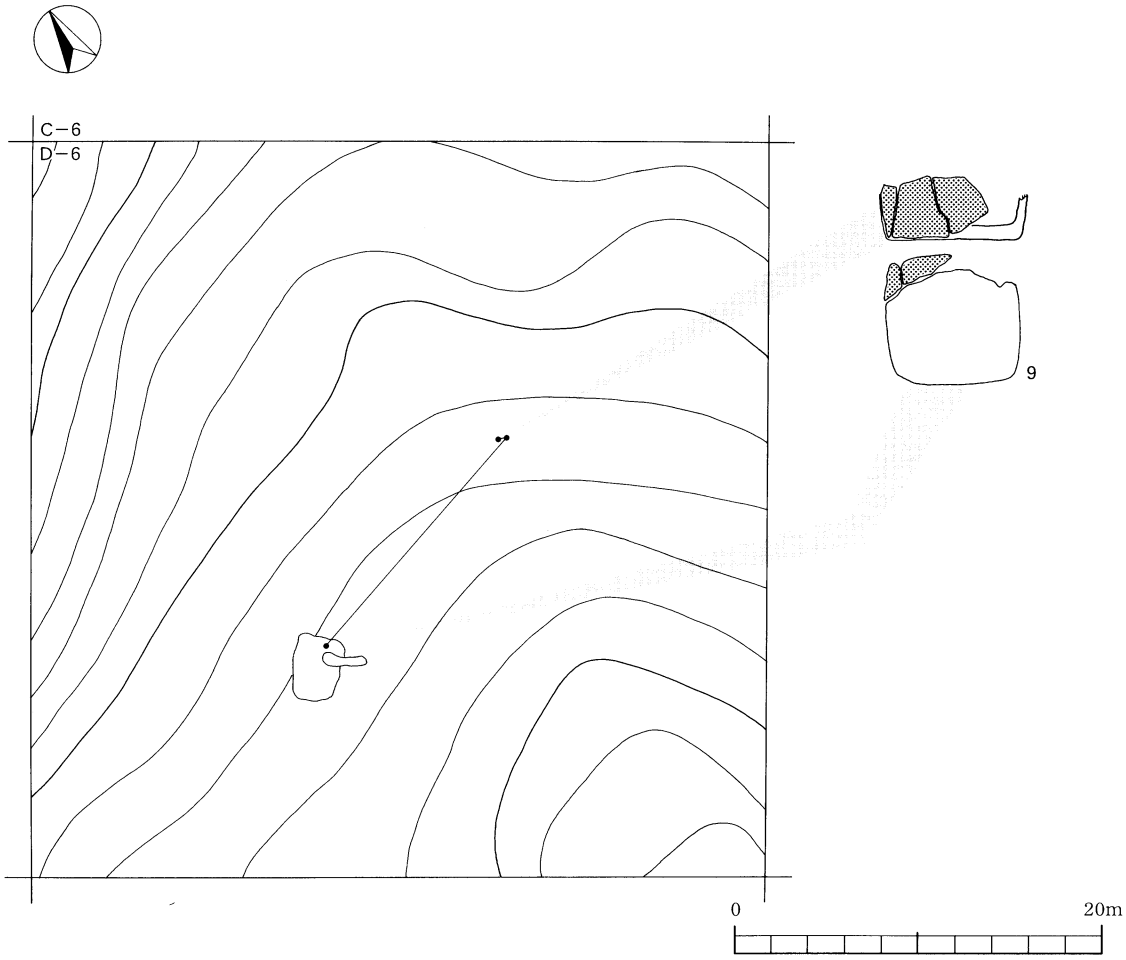
31号竪穴住居跡

D－６区で検出された。遺構内埋土観測用のベルトを残し，掘り下げをおこなった。隅丸長方形プランを呈し，検出面から床面までの深さは約20㎝である。南北短辺の外側に２基ずつピット状の痕跡がみられるが，その配置や大きさから柱穴である可能性がある。東側長辺部分で13号連穴土坑とほぼ垂直に切り合っているが，埋土の状態から竪穴掘削後に連穴土坑を構築したものと思われる。

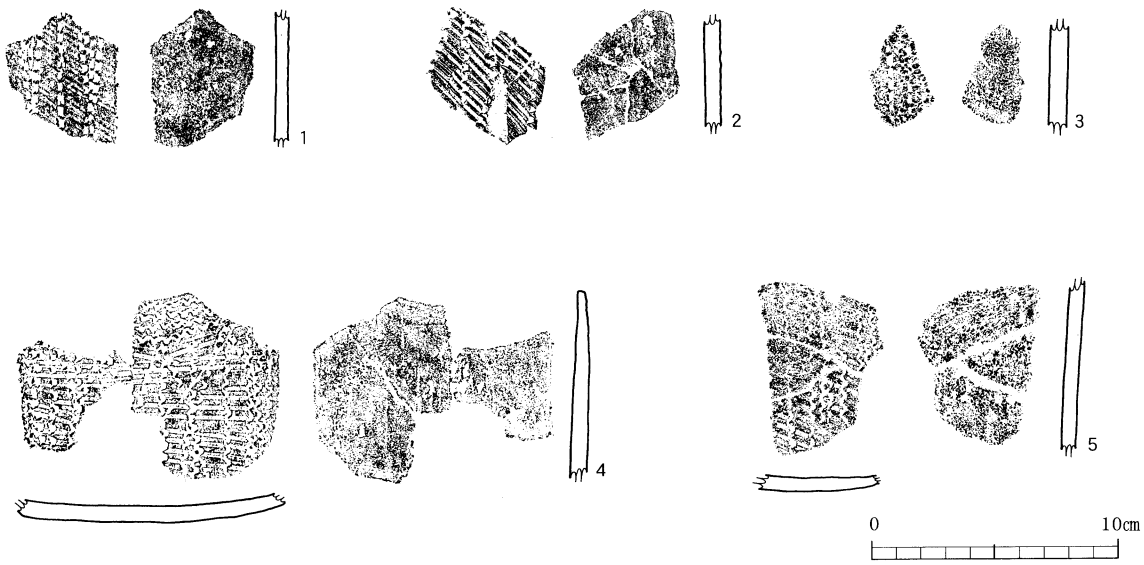
遺構内遺物は，土器13点・石器１点が出土しており，このうち土器９点・石器１点を図化した。１～３は円筒形の器形を有する。１は雲母を多量に含んでいる。２は斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が施されている。４～９は角筒形である。４は口縁部片である。口縁部に貝殻刺突文が横位に４条めぐる。横位に貝殻条痕文が施され，その上に縦位の貝殻刺突文が施されその間を埋めるように貝殻刺突文が菱形状に施されている。施文の前に縦位の調整が施されている。また，内面は特に口縁部において入念な調整が施されている。８は口縁部から胴部下半にかけての資料



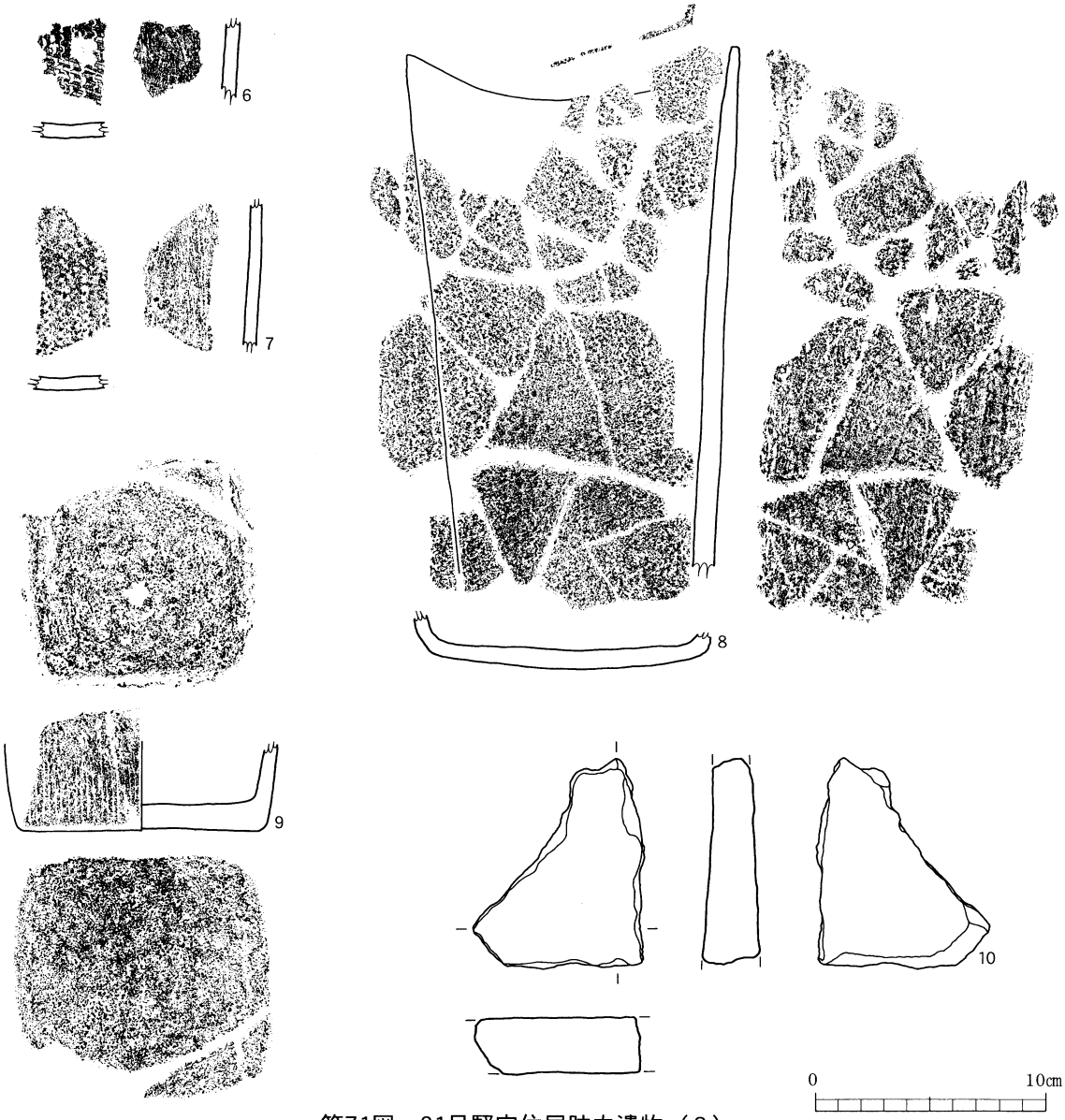
第68図　31号竪穴住居跡



第69図　包含層資料との接合関係



第70図　31号竪穴住居跡内遺物（1）



第71図　31号竪穴住居跡内遺物（2）

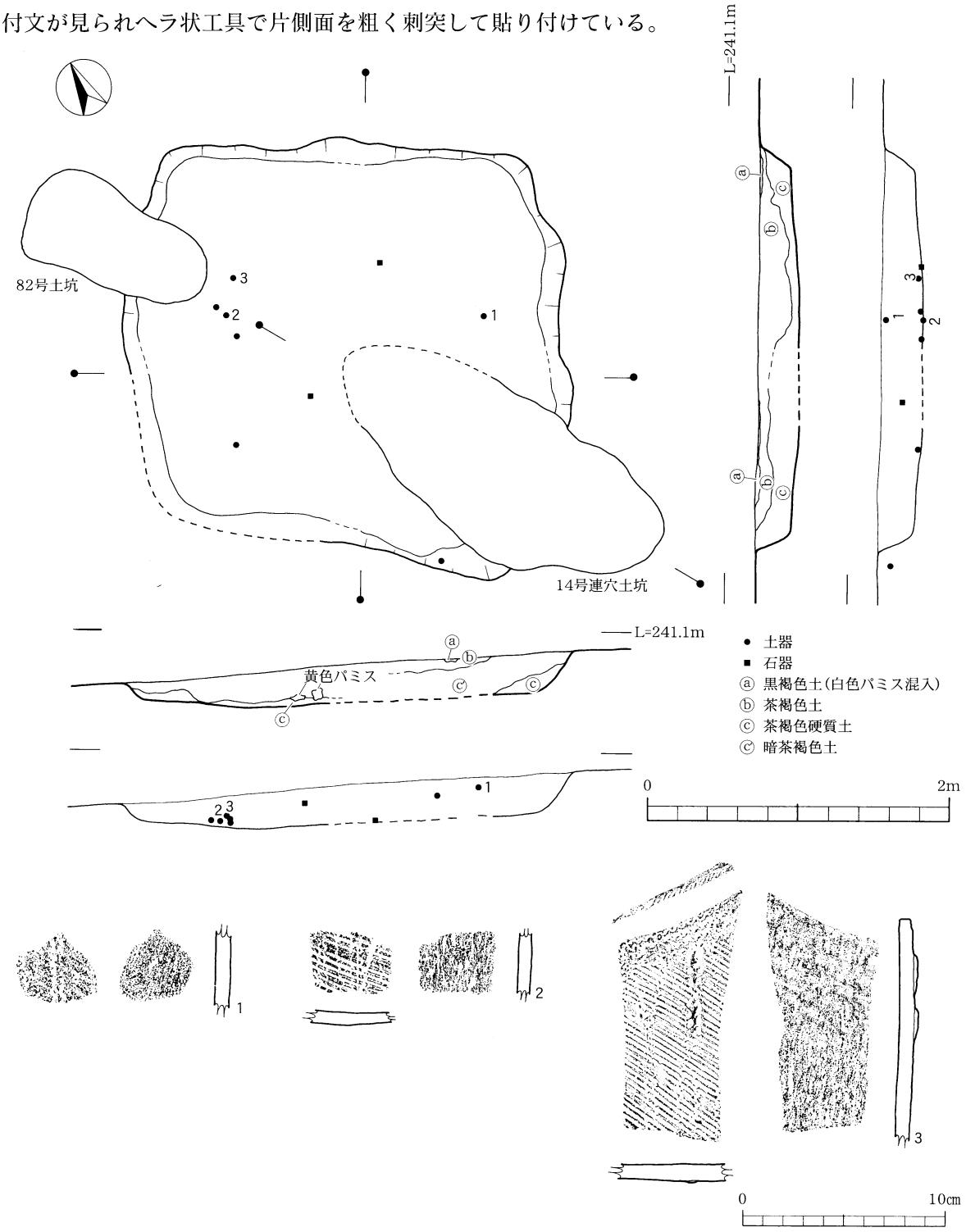
である。風化が激しいが，口縁部は貝殻刺突文が横位に４条めぐり，胴部はやや間隔の狭い貝殻刺突文が施されている。９は底部片である。包含層取り上げのものと接合した。接合距離は約15mである。

32号竪穴住居跡

D－６区で検出された。遺構内埋土観測用のベルトを残し，掘り下げをおこなった。約３m×３mの隅丸方形プランを呈する。検出面から床面までの深さは約25cmである。14号連穴土坑１基と82号土坑と切り合っているが，埋土の状態から竪穴掘削後に連穴土坑や土坑が構築されたものと思われる。連穴土坑内の埋土上部にP－13（Sz-Tk３）火山灰起源と思われる黄色パミスの混入がみられるため，14号連穴土坑はP－13降下以前に廃棄されたと考えられる。従って32号住居についても，P－13（Sz-Tk３）降下以前の遺構であることが想定できる。また，西側の

82号土坑に関しても，検出の状況が14号連穴土坑に類似しており，掘り下げてはいないが連穴土坑になる可能性もある。

遺構内遺物として土器７点・礫２点が出土している。このうち土器３点を図化した。１は円筒形で２・３は角筒形である。３は口唇部端部に斜位のキザミ目を有し口縁部には貝殻刺突文を横位に４条めぐらす。胴部は，斜位の貝殻条痕文の上に菱形状の貝殻刺突文が施される。また，貼付文が見られヘラ状工具で片側面を粗く刺突して貼り付けている。



第72図　32竪穴住居跡・住居跡内遺物

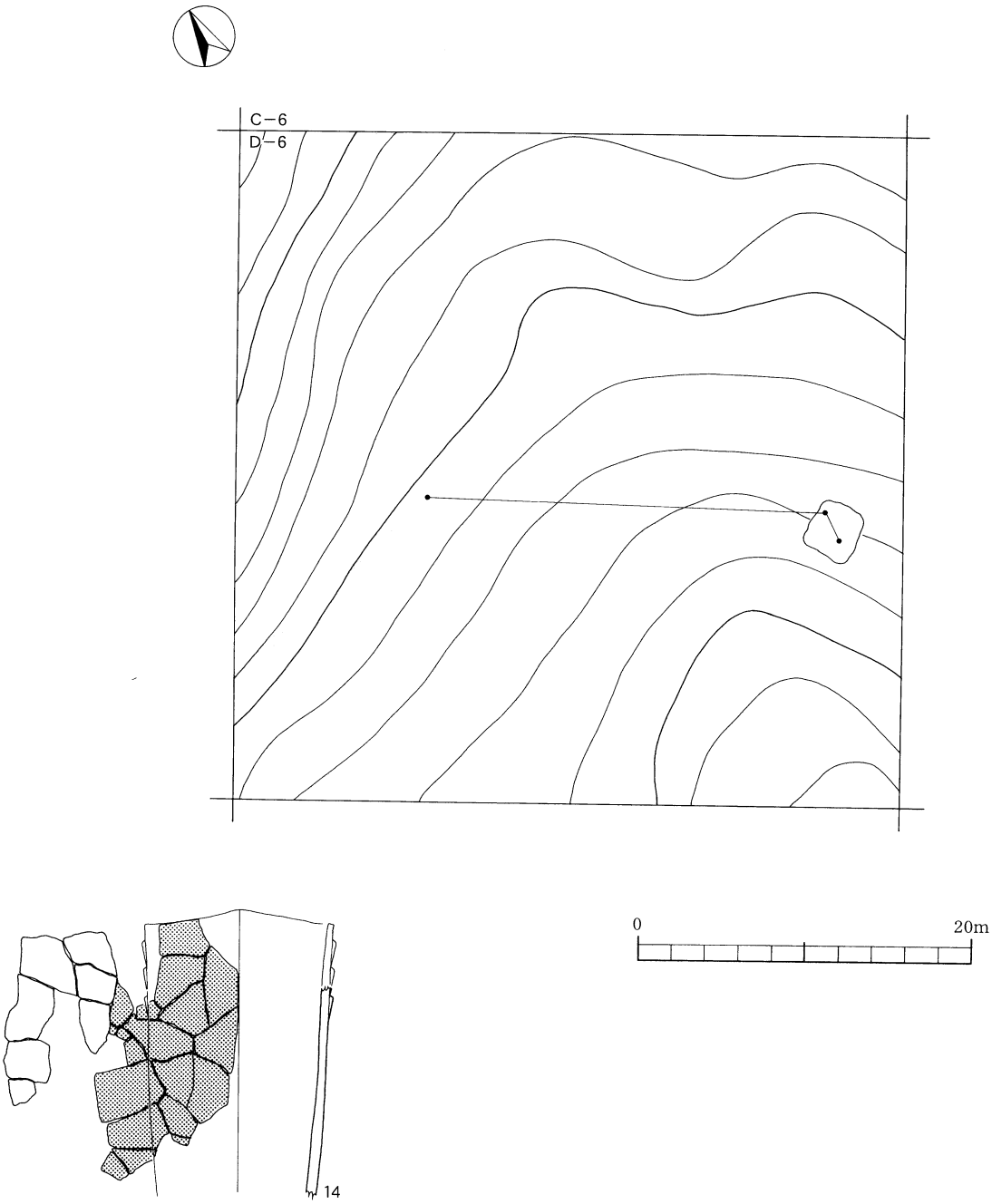
33号竪穴住居跡

D－６区で検出された。隅丸方形のプランで，ベルト部分を残して掘り下げをおこなった。検出面から床面までの深さは約30㎝である。埋土の状況としては，a層の黒色土がc層の明茶褐色土に部分的に入り込んでおり，b層の暗茶褐色土も部分的にしか観察できない。

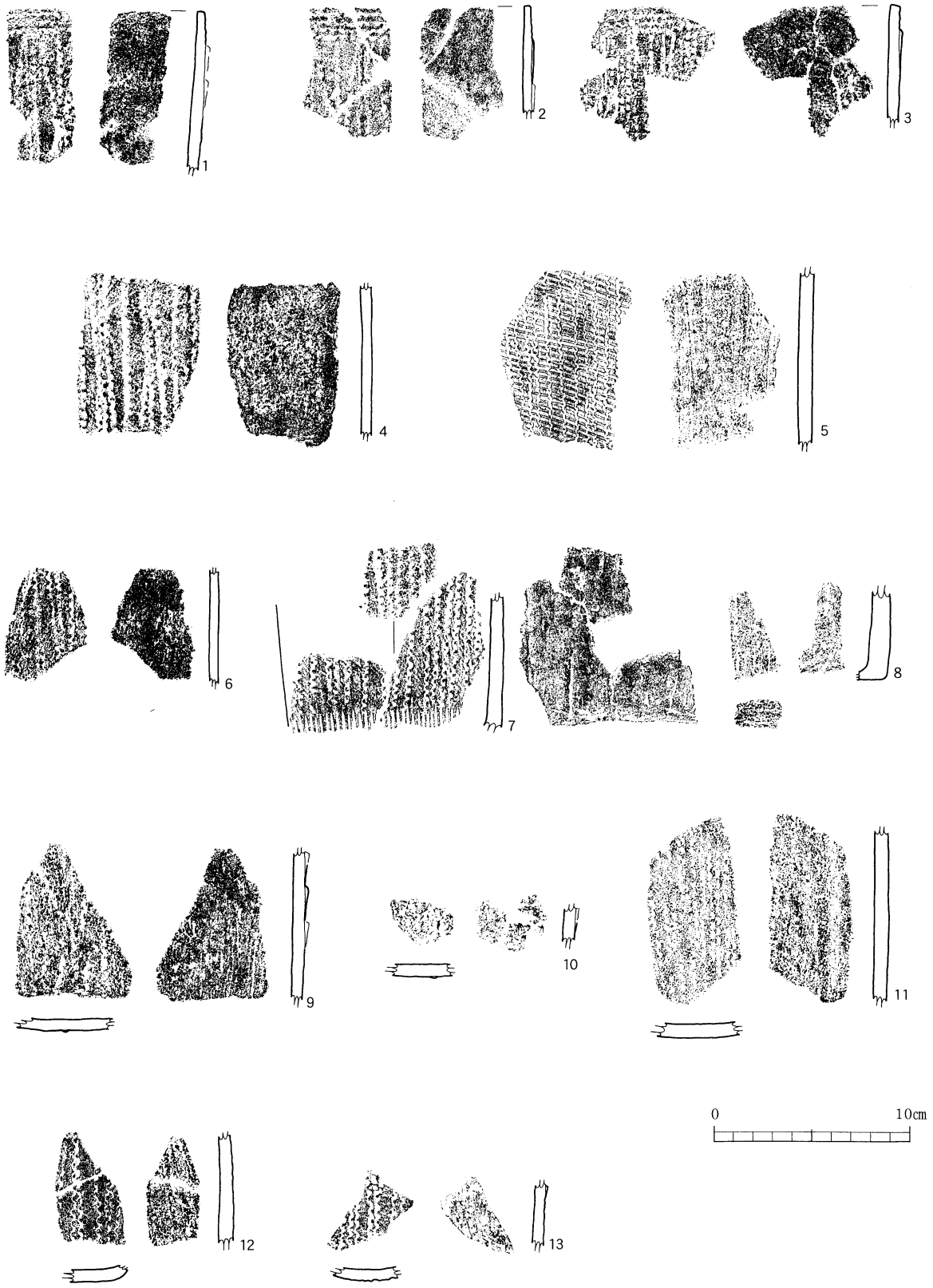
遺構内遺物は，土器44点・石器２点・礫10点が出土している。このうち土器15点・石器２点を図化した。１～８は円筒形である。１～３は口縁部片で貼付文が見られるが，風化のため形状ははっきりとしない。３はクサビ状を呈するかと思われる。７・８は底部片である。７は丁寧なナデ後密接な貝殻刺突文が施される。９～13は，角筒形である。11は密接な貝殻刺突文が施されている。13は貝殻条痕文がナデ消され，その上に貝殻刺突文が施されている。14・15はいわゆるレモン形の口縁部を有するものである。14は口唇部にキザミ目を有し，口縁部には貝殻刺突文が横位に３条めぐる。胴部は，貝殻条痕文の上に縦位の貝殻刺突文が施され，縦位の貝殻刺突文間には菱形状の貝殻刺突文が施される。胴部施文後に貼付文が施され，上面をヘラで側面をクシ状工具で刺突されている。内面は，特に口縁部内面において入念なミガキが施されいる。な

第73図　33号竪穴住居跡

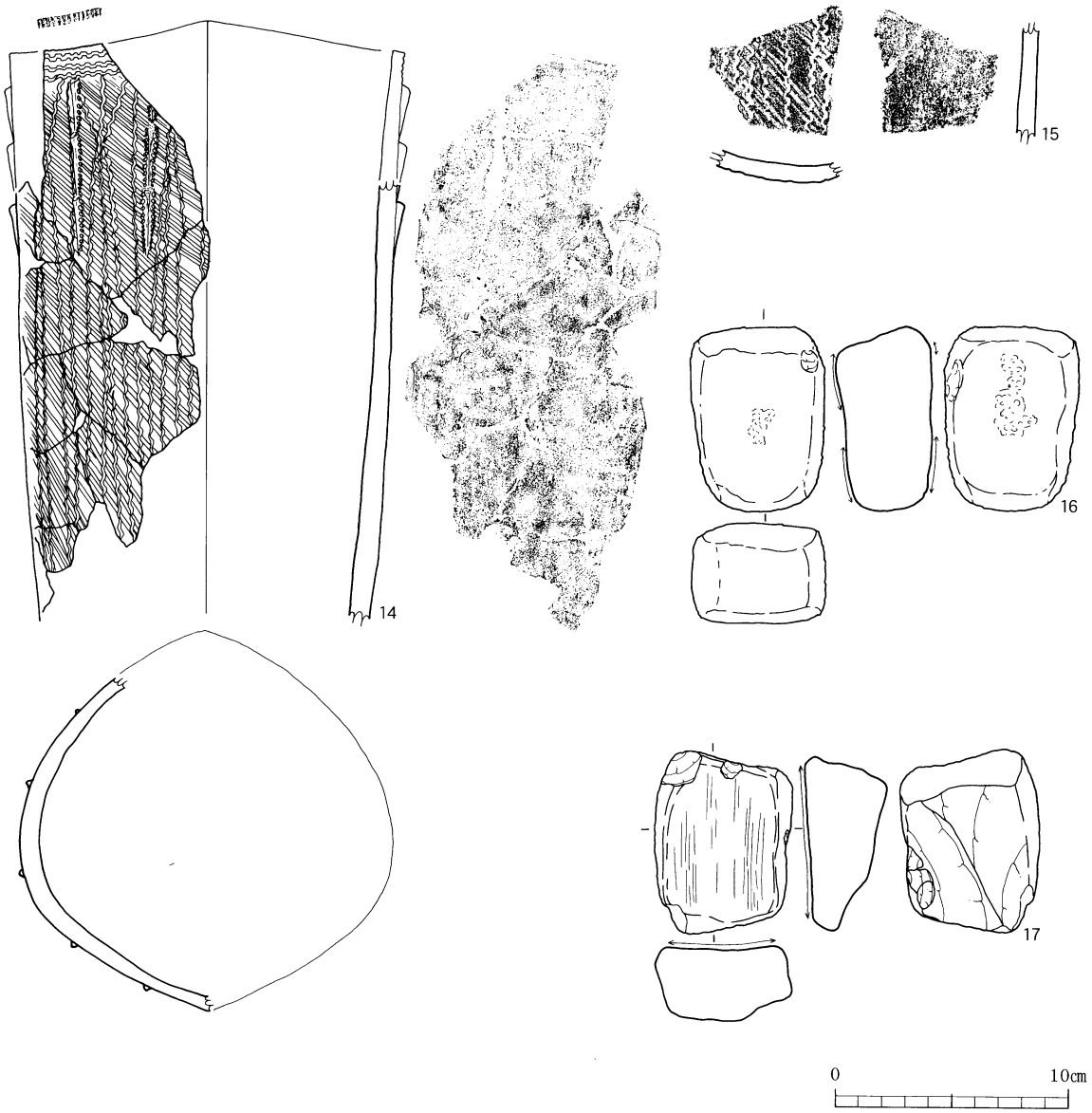
お，約24m離れて出土した包含層資料と接合している。16は磨石である。17は平坦面に磨りが見られるが断面がわずかにU字状を呈しており，他の磨石とは区別する必要も考えられる。



第74図　包含層資料との接合関係



第75図　33号竪穴住居跡内遺物（1）



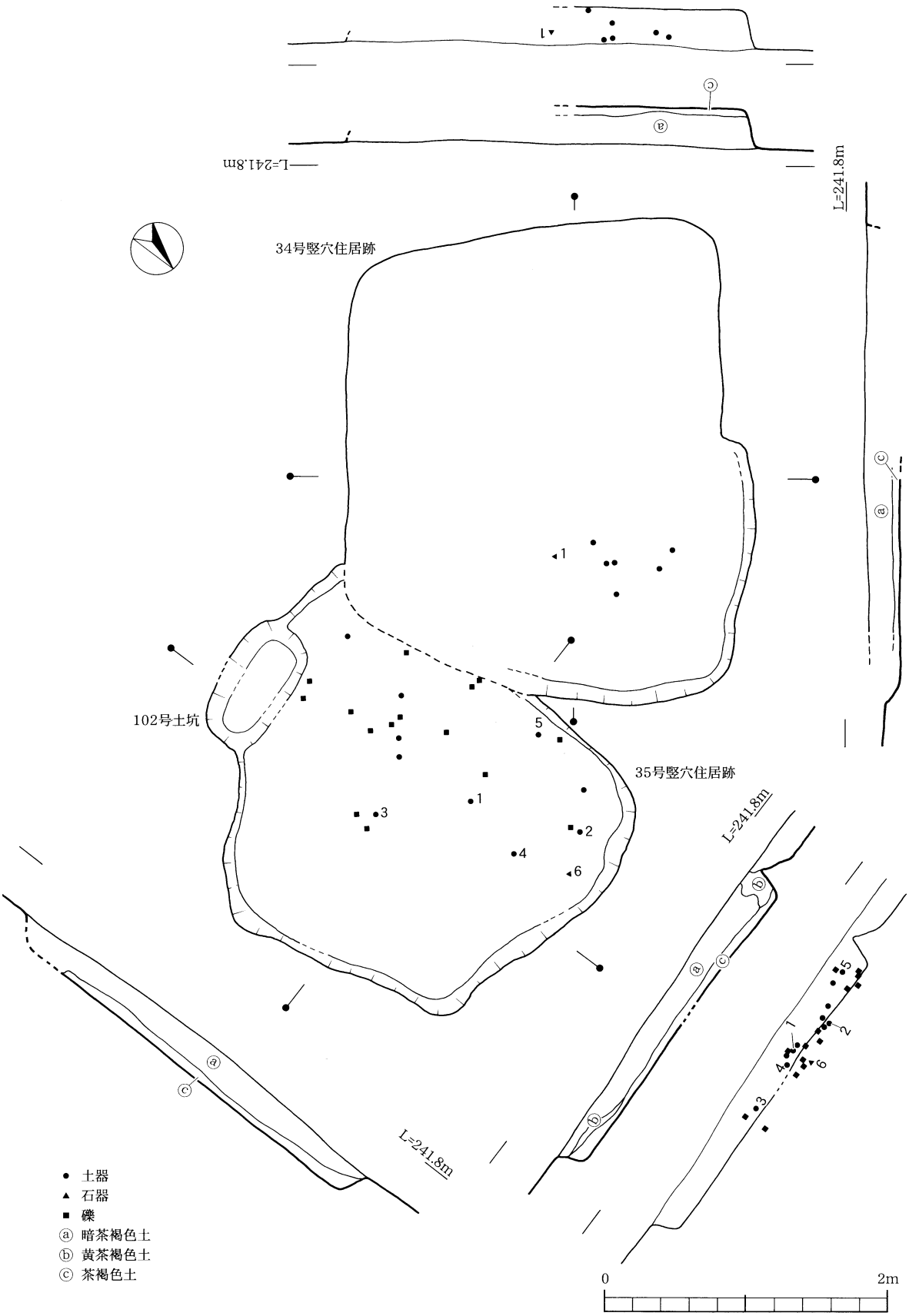
第76図　33号竪穴住居跡内遺物（２）

34・35号竪穴住居跡

D－６区で検出された。２つの竪穴が重複する状態で検出された。断面観察から35号→34号という切り合い関係にあると思われる。34号竪穴住居跡は北側の４分の１だけを掘り下げたため，明確なプランは不明であるが，ほぼ隅丸長方形を呈している。検出面から床面までの深さは，約30㎝である。埋土状況は，a層の暗茶褐色土が20㎝程度堆積しており，b層が無く，c層の茶褐色土が５㎝程度床面直上に堆積している。

遺構内遺物としては，土器６点・石器１点が出土している。土器は，いずれも小破片であり図化するには至らず，石器１点のみ図化した。

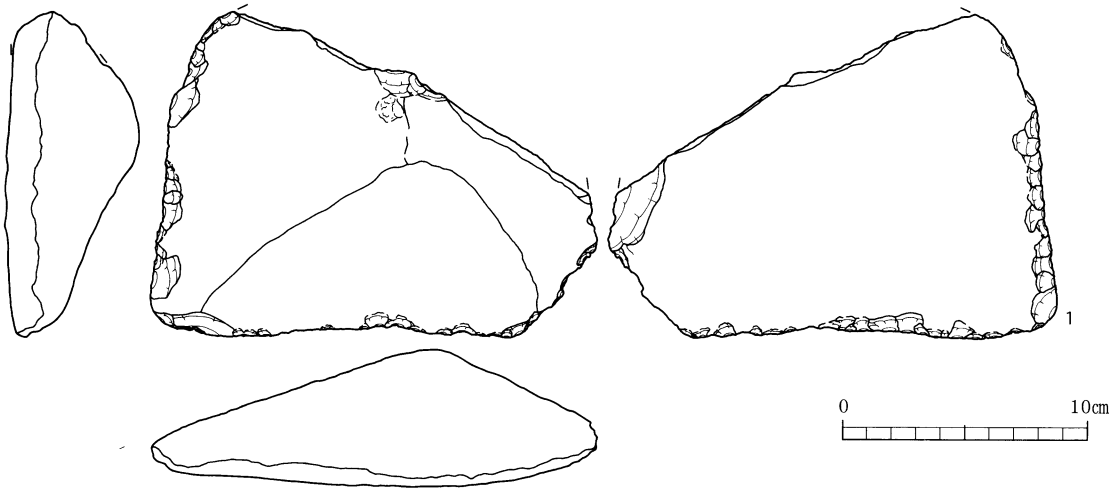
35号竪穴住居跡は隅丸長方形を呈しているが，北側部分がやや狭く台形状である。東側部分



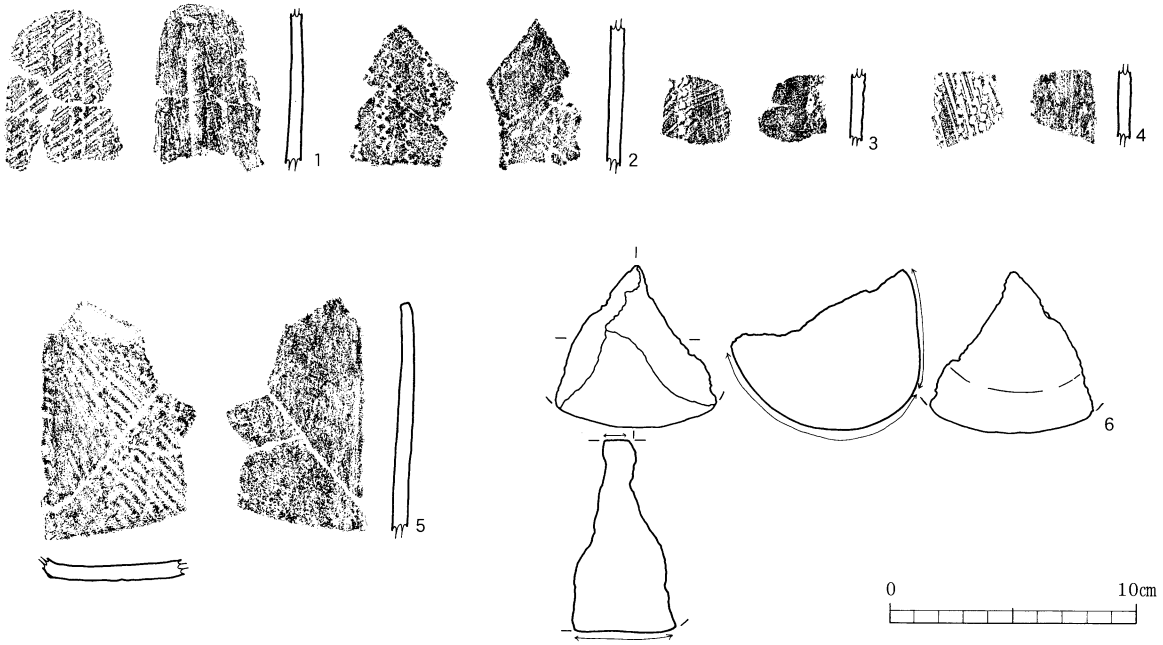
第77図　34・35号竪穴住居跡

には102号土坑があるが，竪穴より新しい時期のものである。検出面から床面までの深さは約20㎝である。埋土状況は，34号竪穴住居跡とほぼ同じであるが，北側部分にb層のパミスの混入した黄茶褐色土が入り込んでいる。

遺構内遺物としては，土器10点・石器１点・礫15点が出土している。このうち土器５点・石器１点を図化した。１～４は円筒形である。１は胴部片で内面には約７㎜の幅を持つ工具痕が観察できる。３は貝殻条痕文を施文後ナデ消し，その上から貝殻刺突文を施している。４は胴部片で貝殻条痕文の上から貝殻刺突文と方形刺突文とを施している。両刺突文が同一器面上に施されるのは珍しい。５は角筒形である。貝殻条痕文は太く，貝殻刺突文は２本を１組として間隔を持って施文されている。



第78図　34号竪穴住居跡内遺物

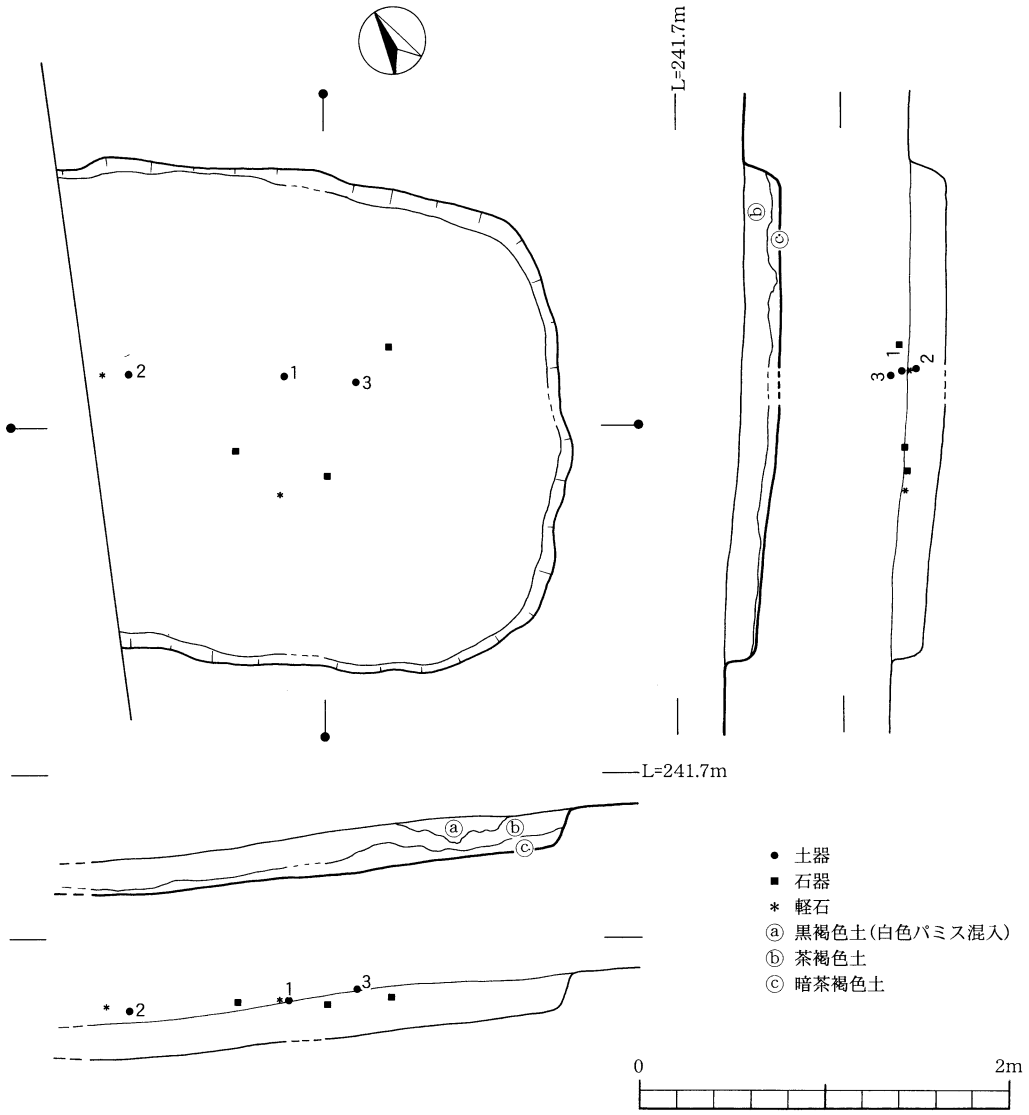


第79図　35号竪穴住居跡内遺物

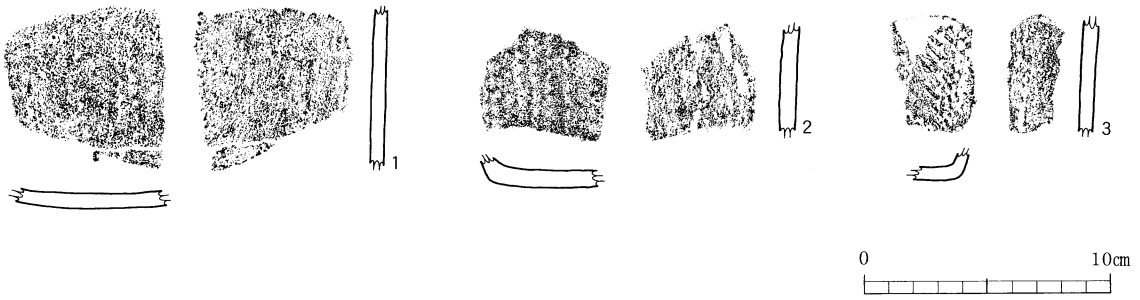
36号竪穴住居跡

D－６区で検出された。西側部分が削平を受けているため，正確なプランは確認できない。ベルト部分を残して掘り下げをおこなったが，検出面から床面までの深さは，約20cmである。床面は東から西，南から北へ傾斜している。埋土の状況としては，a層の白色パミスを含んだ黒色土が僅かに観察でき，b層の茶褐色土が15cm程度堆積している。

遺構内遺物は，土器３点・礫３点・軽石２点が出土している。全ての遺物が床面から15cm程度浮いた状態で出土している。このうち土器３点を図化した。１～３は角筒形である。１・２は風化が激しい。



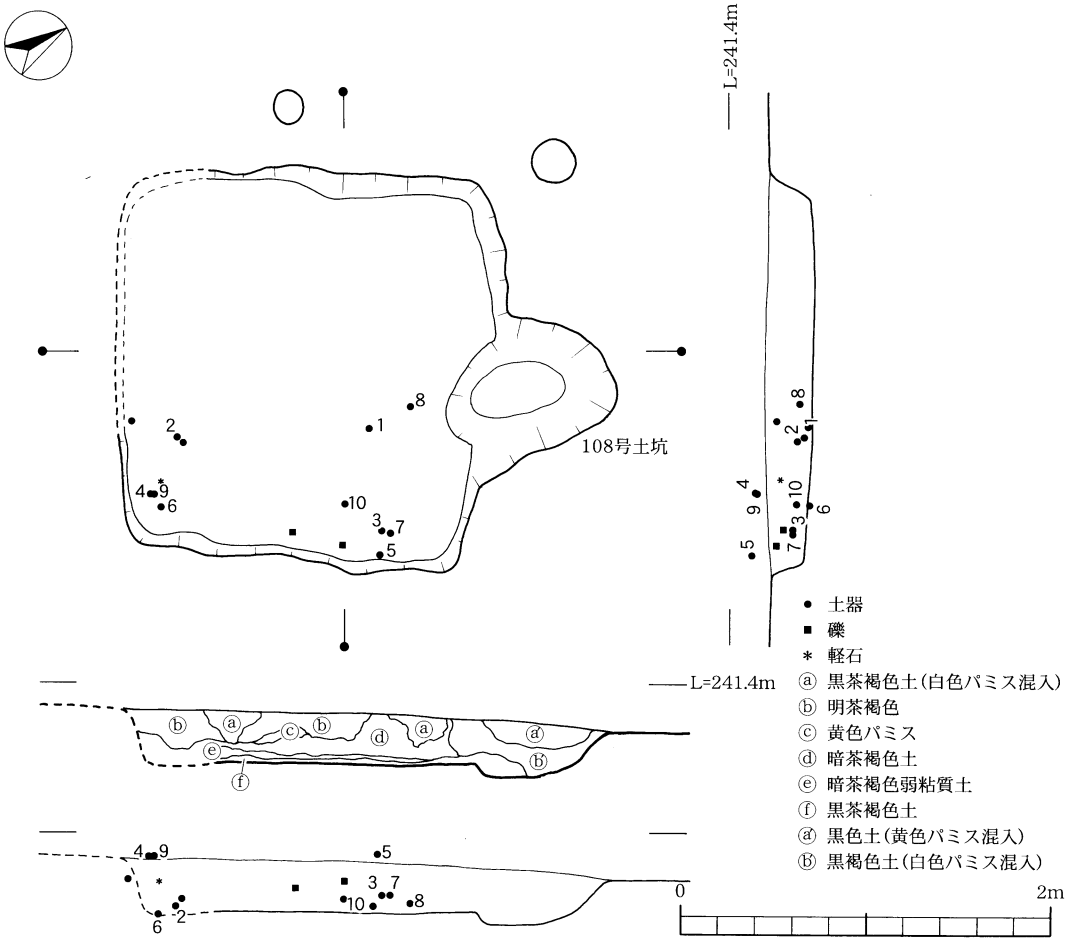
第80図　36号竪穴住居跡



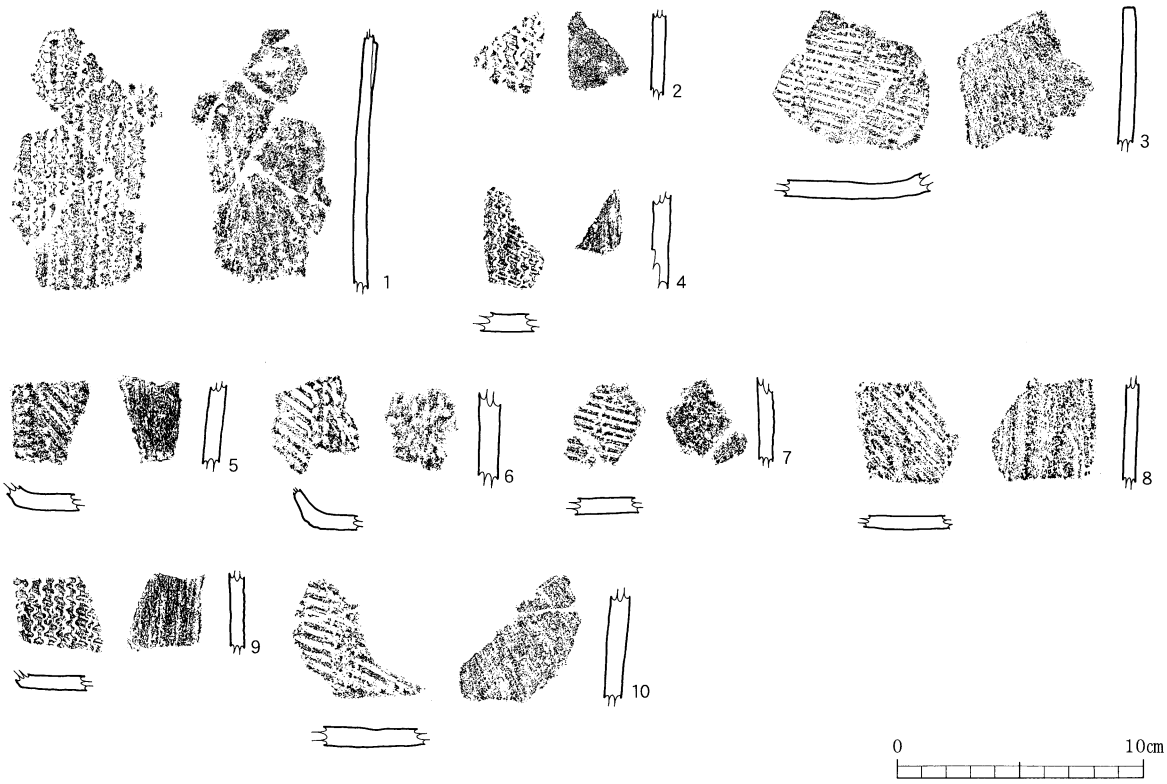
第81図　36号竪穴住居跡内遺物

37号竪穴住居跡

D－６区で検出された。隅丸方形のプランを呈しているが，南側部分が107号土坑を介して11号連穴土坑と隣接し，北側部分が108号土坑と重複している。11号連穴土坑は，P－13（Sz-Tk３）火山灰の堆積が厚く，107号土坑の上部に形成されている。このため，37号竪穴住居内に見られるa・b・cの３つの層は，11号連穴土坑の延長プラン内のものである可能性も高い。なお，108号土坑は，37号竪穴住居跡の上部に形成されている。検出面から床面までの深さは約30cmである。遺構内遺物は，土器11点・礫２点・軽石１点が出土している。



第82図　37号竪穴住居跡



第83図　37号竪穴住居跡内遺物

38号竪穴住居跡

D－６区で検出された。約2.2mの隅丸方形のプランである。ベルト部分を残して掘り下げをおこなったが，検出面から床面までの深さは約15cmである。東西のコーナー部分に土坑３基が見られるが，竪穴住居跡より新しい時期のものである。埋土の状況としては，a層の茶褐色土の単純層である。

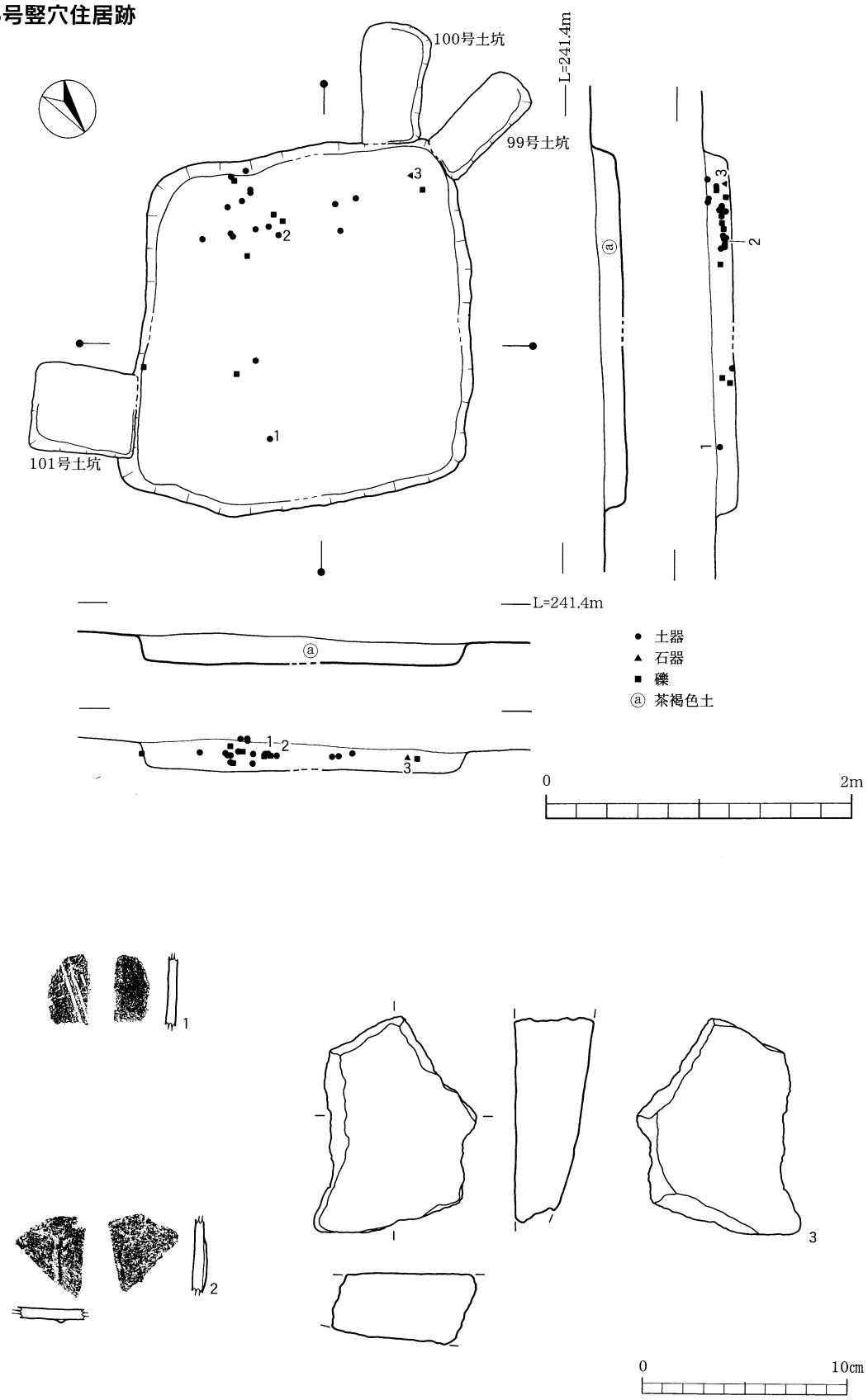
遺構内遺物は，土器17点・石器１点・礫７点が竪穴の南部分を中心に出土している。このうち土器２点・石器１点を図化した。１は円筒形，２は角筒形である。１は小破片のためにはっきりとしないが間隔の広い貝殻刺突文が施されているものと思われる。２は口縁部に近い部位の破片で，粘土紐貼付文が観察できる。

39号竪穴住居跡

D－６区で検出された。約2.5mの隅丸方形のプランと考えられるが，南北のコーナー部分はX層の堆積が薄く竪穴の壁を確認することが困難であった。ベルト部分を残して掘り下げをおこなったが，検出面から床面までの深さは，約20cmである。２基の土坑が見られる。埋土の状況としては，a層の明茶褐色土が南側部分だけに見られ，埋土の大部分をb層の黒茶褐色土が占めている。

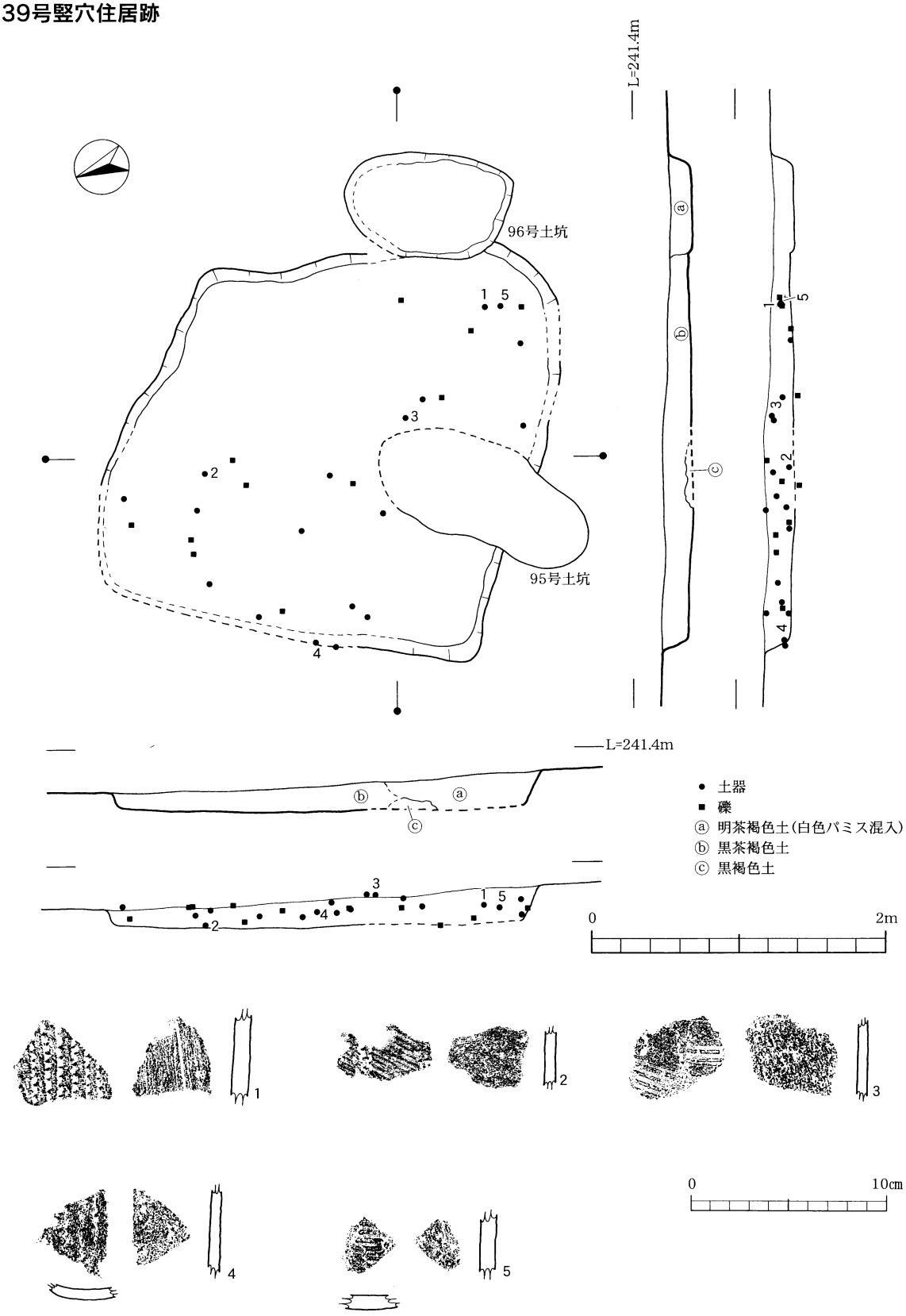
遺構内遺物は，土器18点・礫11点が出土している。このうち土器５点を図化した。１～３は円筒形である。１は貝殻刺突文のみ施文されている。２はやや間隔のある貝殻刺突文と思われる。４・５は角筒形であるが風化が激しい。３はやや扁平な石皿片の可能性がある。

38号竪穴住居跡



第84図　38号竪穴住居跡・住居跡内遺物

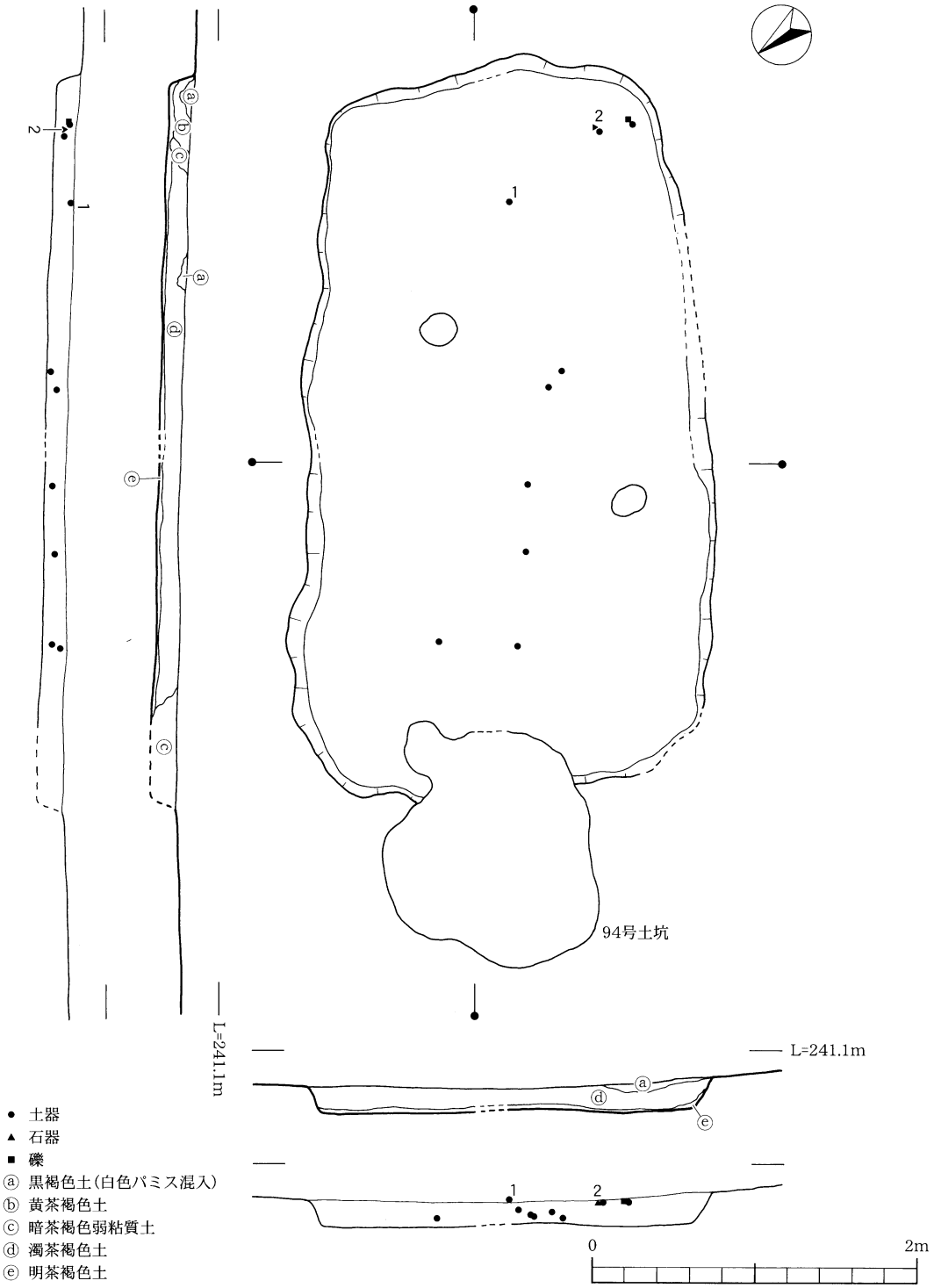
39号竪穴住居跡



第85図　39号竪穴住居跡・住居跡内遺物

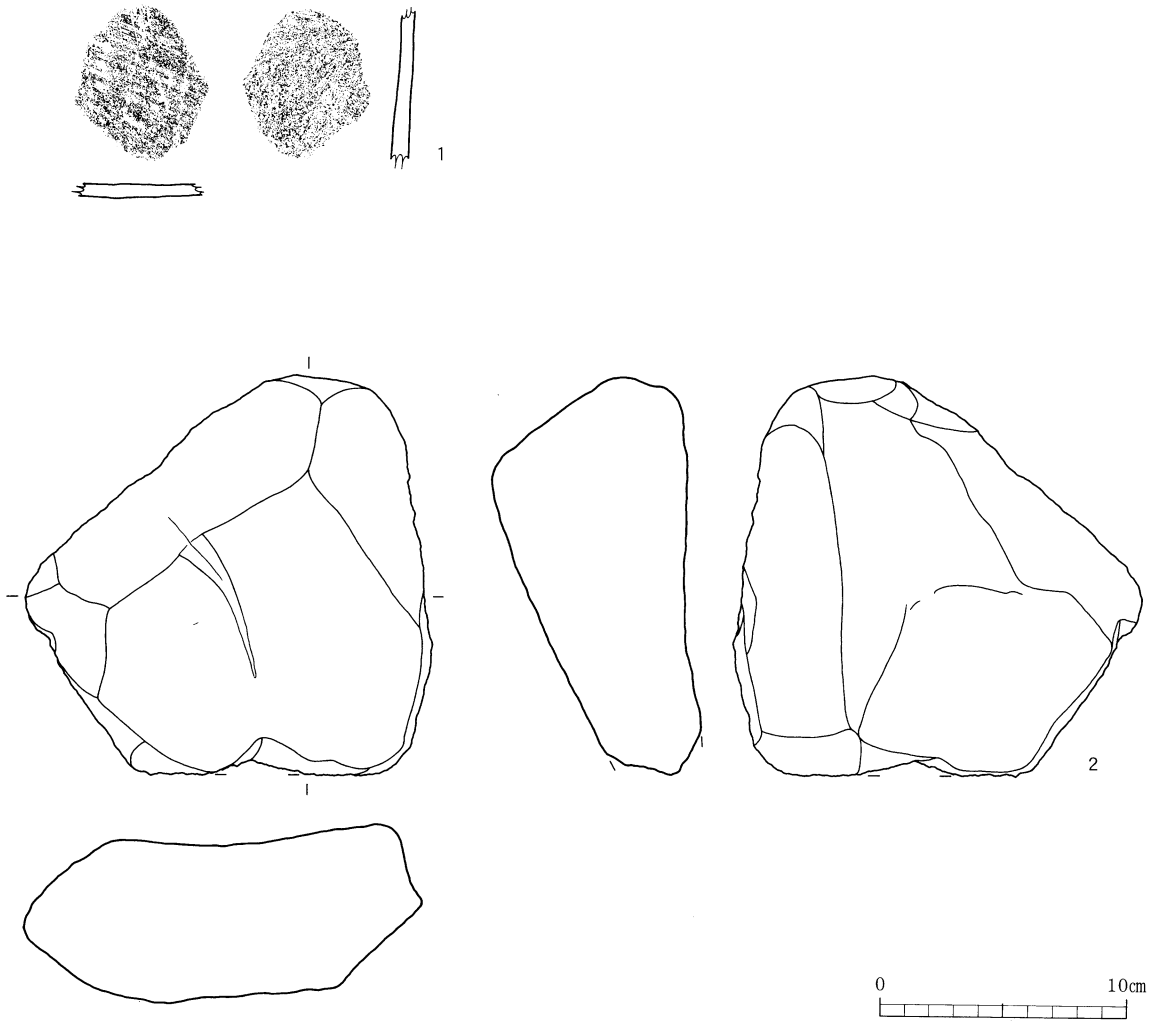
40号竪穴住居跡

D－６区で検出された。遺構内埋土観測用のベルトを残し，掘り下げをおこなった。約4.5m×2.5mの隅丸長方形プランを呈し，床面積は他の遺構と比較して大規模である。検出面から床面までの深さは約20㎝である。一次埋土として，床全体に明茶褐色土が薄く堆積する。



第86図　40号竪穴住居跡

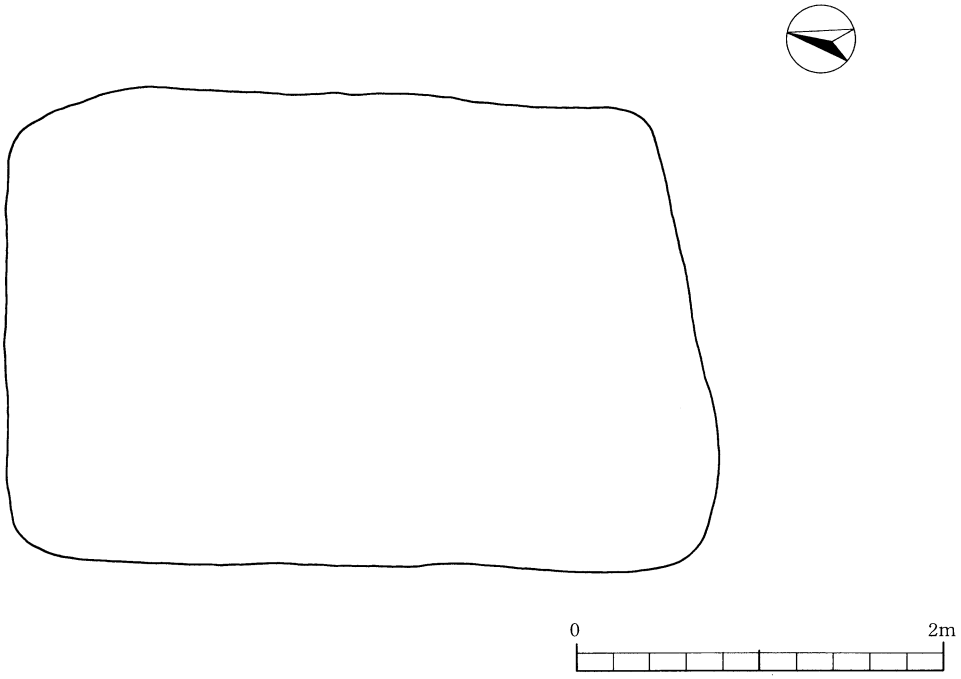
遺構内遺物は土器９点・石器１点・礫１点が出土しており，このうち土器１点・石器１点を図化した。１は角筒形で風化が激しいが貝殻条痕文は太く，間隔の広い貝殻刺突文が施されているものと思われる。２は大型の不定型な礫の平坦面を用いた石皿と思われる。



第87図　40号竪穴住居跡内遺物

41号竪穴住居跡

D－６区で検出された。平面プランは約3.7m×2.5mの隅丸長方形を呈し，長軸の方向はほぼ南北である。今回は遺構の掘り下げはおこなわなかった。検出面における遺構内埋土は明茶褐色粘質土である。

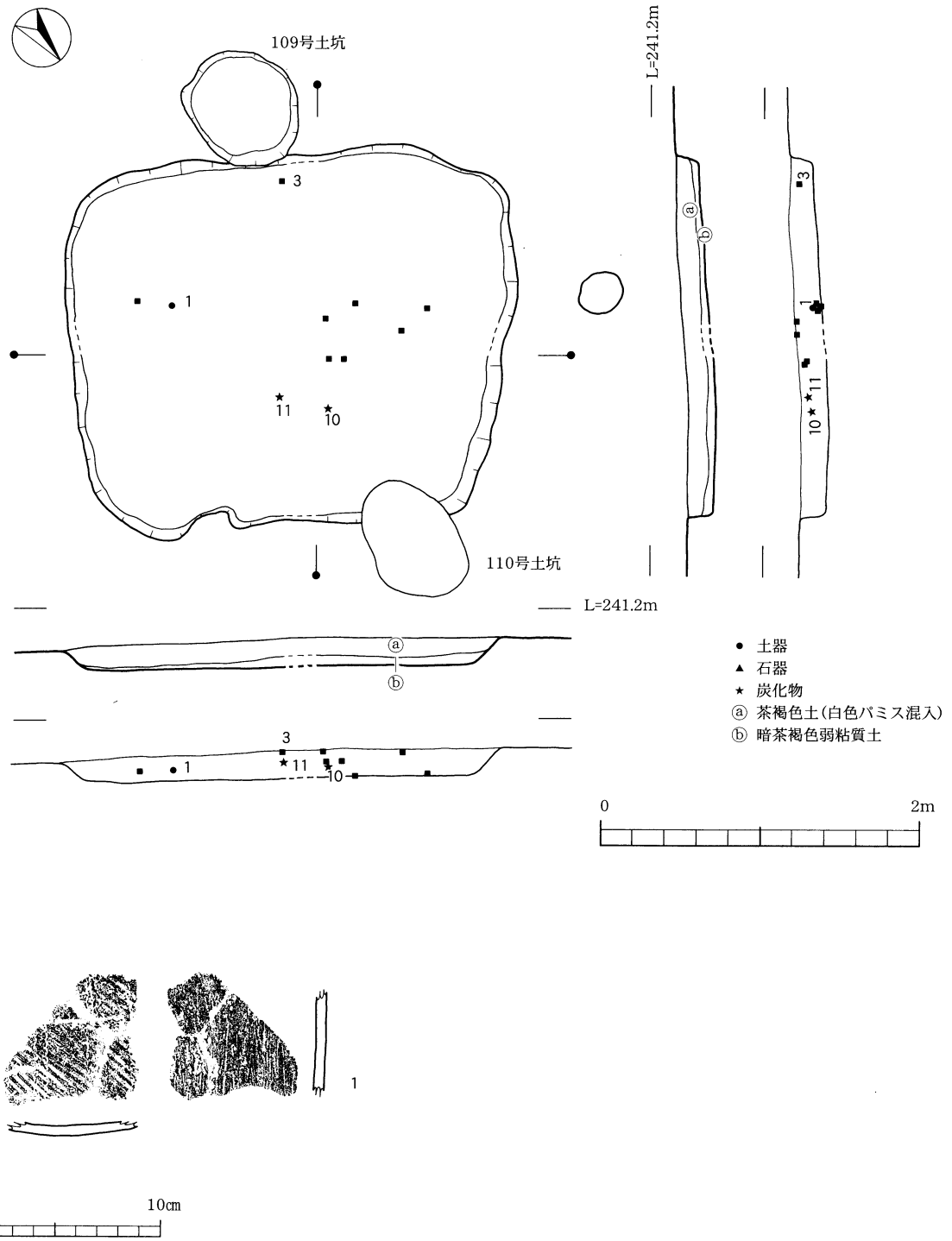


第88図　41号竪穴住居跡

42号竪穴住居跡

D－６区で検出された。隅丸長方形のプランである。周辺部にピット１基，土坑２基と切り合い関係にある。ピットが竪穴に伴うものかは不明である。ベルト部分を残して掘り下げをおこなったが，検出面から床面までの深さは，約15cmである。埋土の状況としては，a層の茶褐色土が10cm程度あり，b層の暗茶褐色土が５cm程度堆積している。だが，検出時には上部からの樹根状のシミや落ち込みが見られた。

遺構内遺物は，土器１点・礫８点が出土している。このうち土器１点を図化した。１は角筒形で風化が激しいが，間隔の広い貝殻刺突文が施されている。

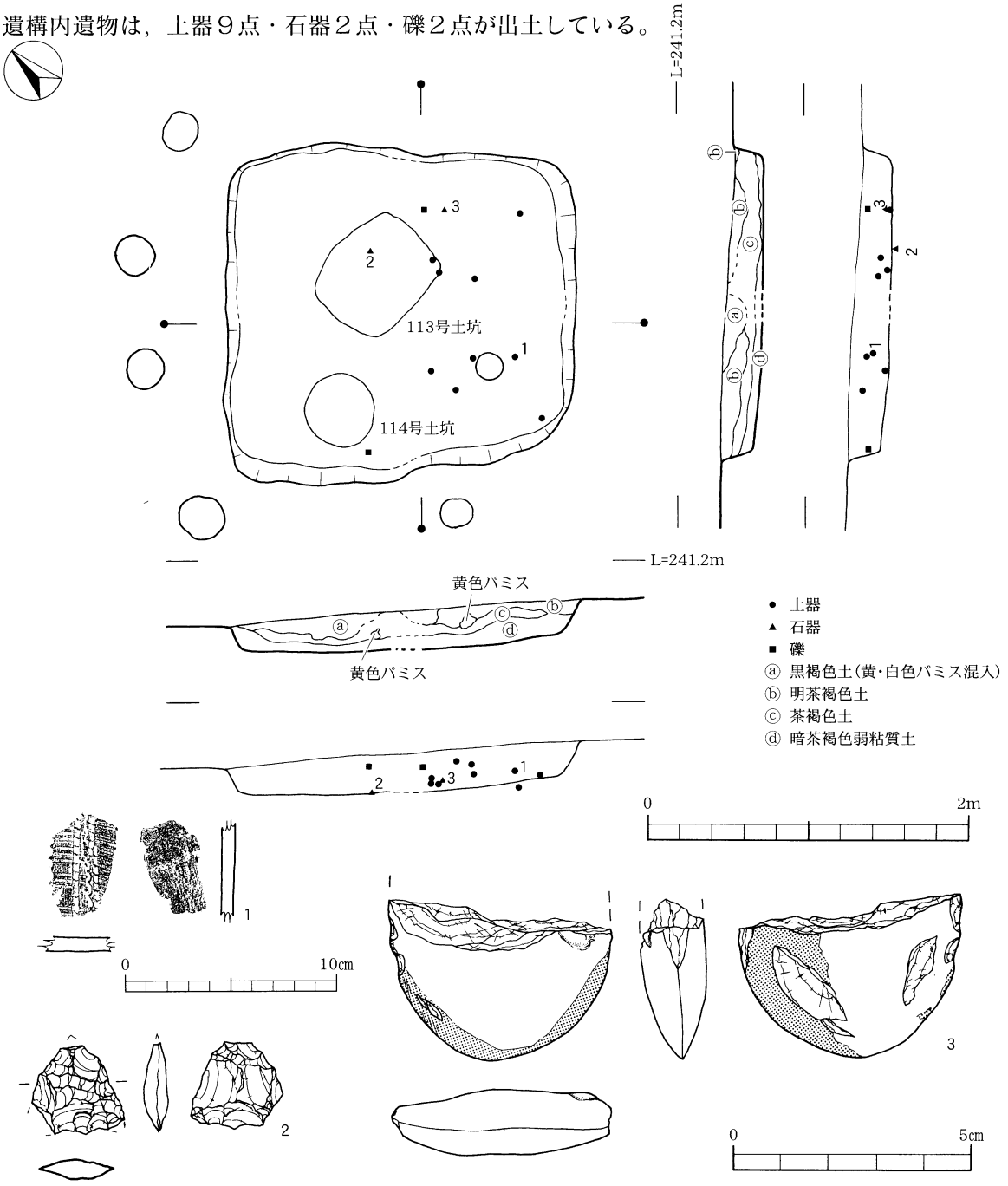


第89図　42号竪穴住居跡・住居跡内遺物

43号竪穴住居跡

D－６区で検出された。約2.1mの隅丸方形のプランである。周辺部に５基，竪穴内に１基のピットが見られる。周辺部のものが竪穴に伴うものかは不明である。さらに，竪穴内に２基の土坑が重なる。竪穴の深さは，検出面から床面まで約30cmである。埋土の状況としては，a層のP－13（Sz-Tk３）火山灰である黄色・白色パミスが混入した黒褐色土が中央部分に堆積している。部分的な入り込みに見えるが，これは土坑に切られている為である。b層の明茶褐色土は白色パミスが混入し，a層の周辺に堆積している。下部にc層の明茶褐色土とd層の暗茶褐色弱粘質土が５cm程度堆積している。

遺構内遺物は，土器９点・石器２点・礫２点が出土している。

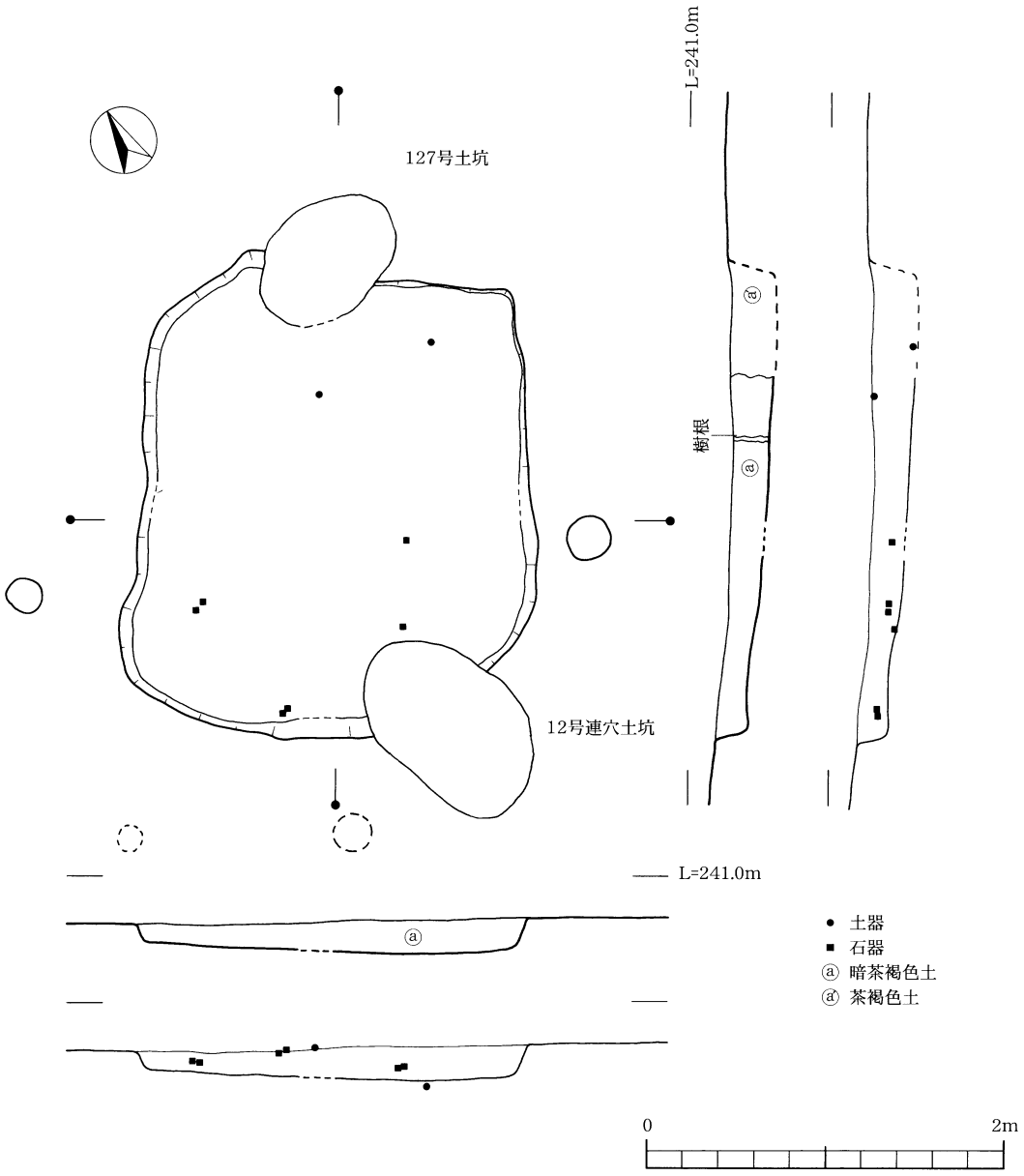


第90図　43号竪穴住居跡・住居跡内遺物

44号竪穴住居跡

D－６区で検出された。約2.3mの隅丸方形のプランである。竪穴周辺部東側にピット２基を確認し，南側の土坑内より２基のピットが確認されているが，これらが竪穴に伴うものかは不明である。南側に12号連穴土坑，北側に127号土坑が重複している。埋土の状況から12号連穴土坑，127号土坑は竪穴より新しい時期のものであることがわかっている。ベルト部分を残して掘り下げをおこなったが，検出面から床面までの深さは，約15cmである。埋土の状況としては，a層暗茶褐色土の単純な堆積状況である。

遺構内遺物は，土器２点・礫６点が出土している。ただし，小破片のために図化はできなかった。

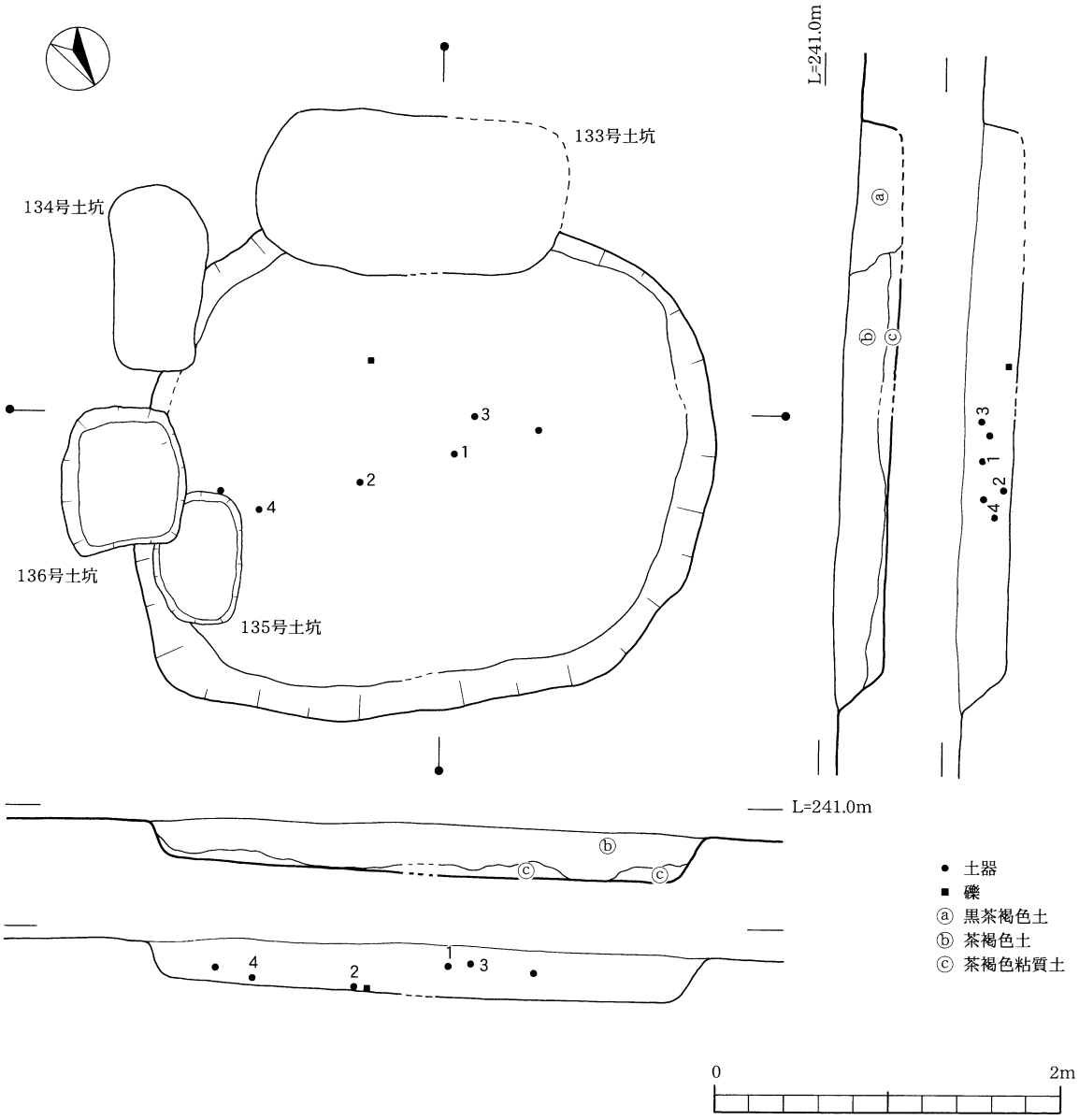


第91図　44号竪穴住居跡

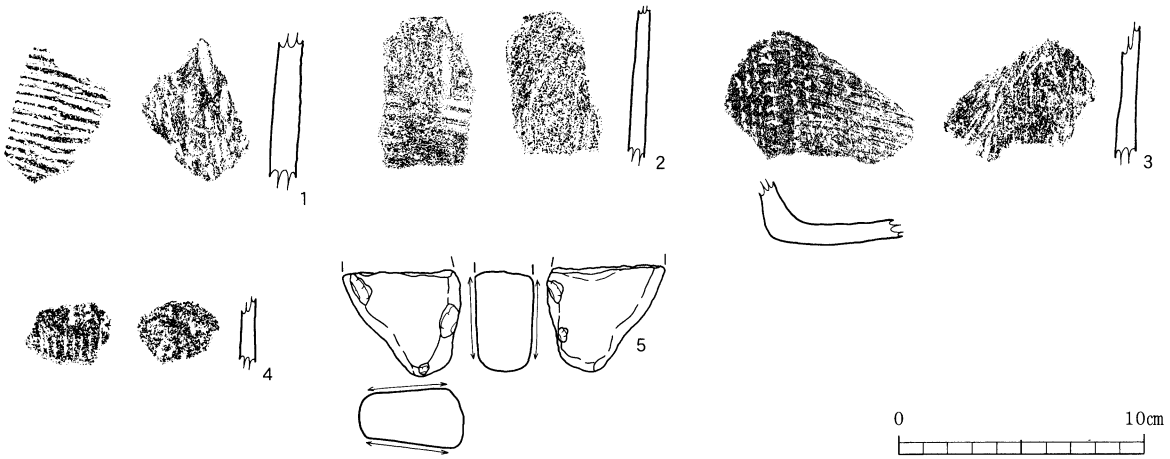
45号竪穴住居跡

D－６区に検出された。４基の土坑と切り合っているため詳細なプランは不明であるが，隅丸長方形を呈すると思われる。床面積は，7.4㎡である。検出面から床面までの深さは，約30㎝あり掘り下げをおこなった竪穴住居跡の中では比較的深い部類に属する。

遺物は土器６点・礫１点が出土し，このうち土器４点を図化した。１・２は円筒形である。やや太めの貝殻条痕文のみを施しており，包含層分類の１類に属する可能性が高い。３は角筒形である。貝殻条痕文はナデられその上から貝殻刺突文が施されている。４は底部片であるが，円筒形か角筒形かは不明である。５は磨石と思われる。



第92図　45号竪穴住居跡



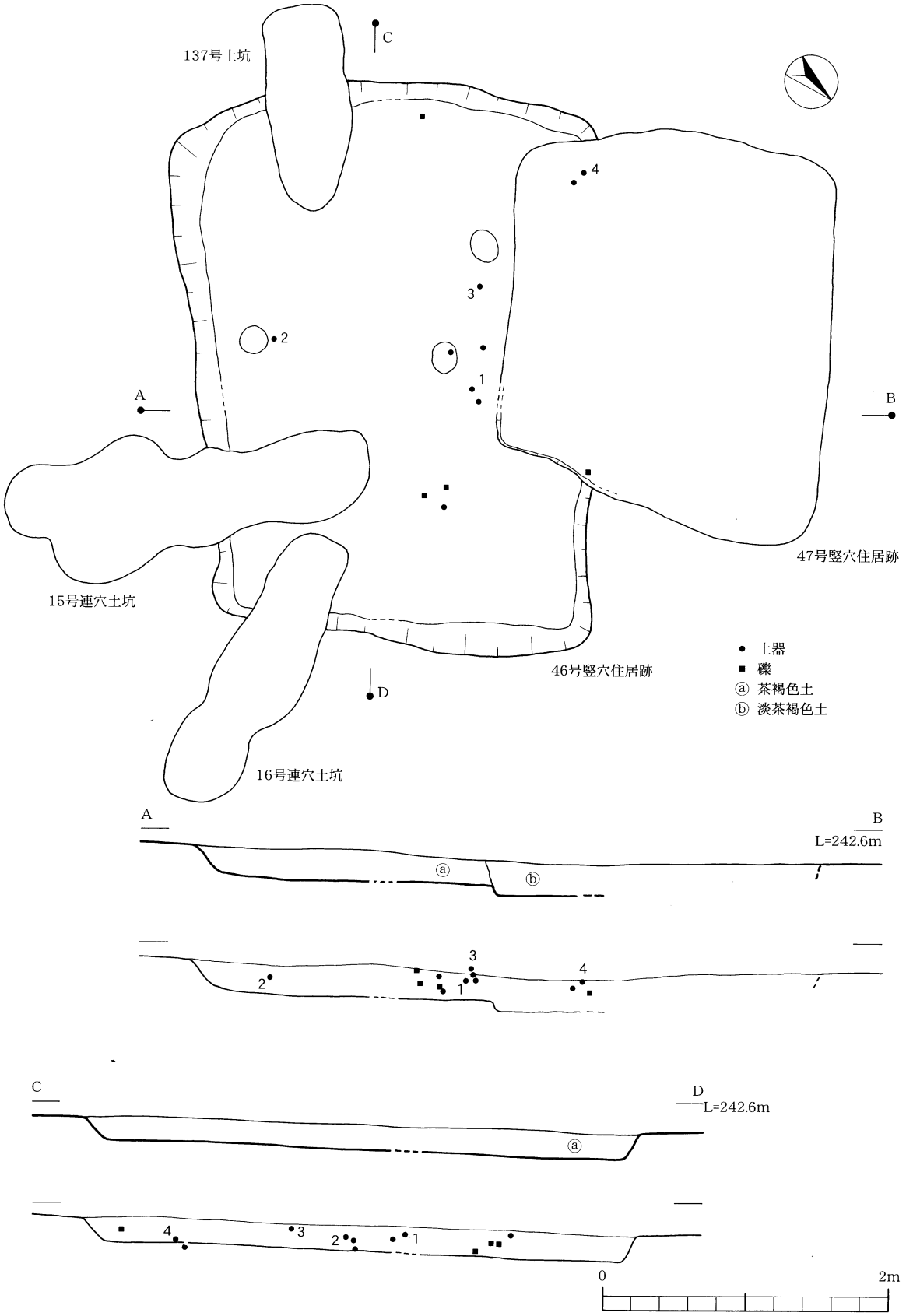
第93図　45号竪穴住居跡内遺物

46・47号竪穴住居跡

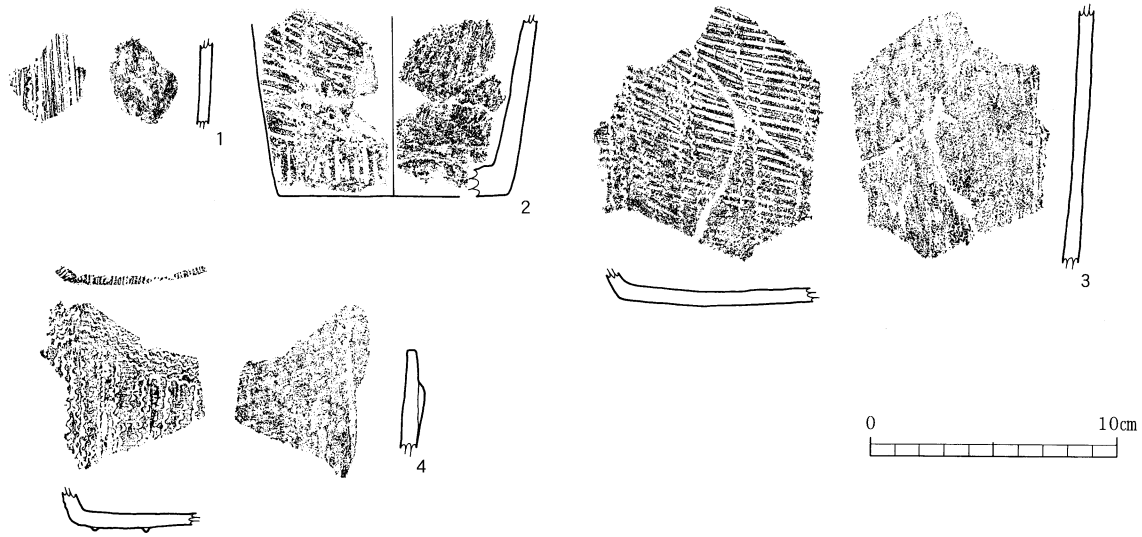
D－６区に検出された。46号竪穴住居跡は土層観察ベルトを残して掘り下げを終了し，47号竪穴住居跡は，46号と切り合う北側の一部分のみを掘り下げるに止めている。プランは，46号が隅丸長方形で床面積は8.8㎡で，47号は隅丸方形である。両者の関係は，46号→47号である。46号内からは，ピット状の遺構が３基検出されているが，これが46号の内部ピットであるのか，47号の外周ピットであるのかは不明であった。

46号には，３基の土坑が切り合っており，このうちの２基は，プランがコケシ状に検出されたことから連穴土坑であると判断した。

遺物は土器９点・礫３点が出土し，このうち土器４点を図化した。１・２は円筒形である。１は縦位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が施されている。２は底部片である。貝殻条痕文の上に間隔の広い貝殻刺突文が施されている。３・４は角筒形である。３は太めの貝殻条痕文の上に間隔の広い貝殻刺突文を菱形状に施文している。４は46号か47号かはっきりしない。口唇部にキザミ目を有し，口縁部に横位の貝殻刺突文を４条めぐらす。粘土紐貼付文が見られ，貼り付けに際しては貼り付け部分を窪ませ貼付している。



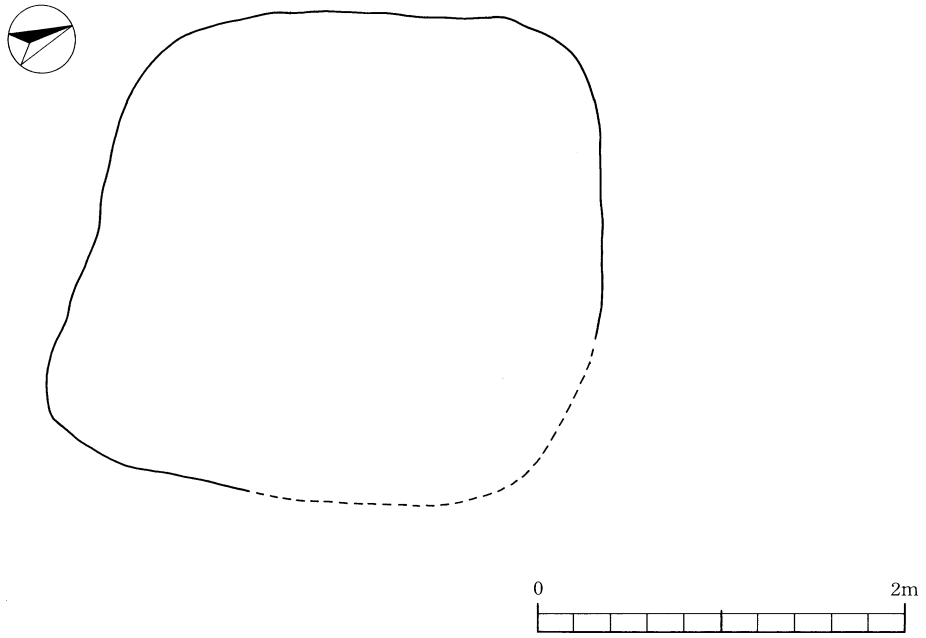
第94図　46・47号竪穴住居跡



第95図　46・47号竪穴住居跡内遺物

48号竪穴住居跡

C・D－6・7区境で検出された。ミニトレンチでの掘り下げであったため，明確なプランは確認できていないがほぼ隅丸方形を呈している。

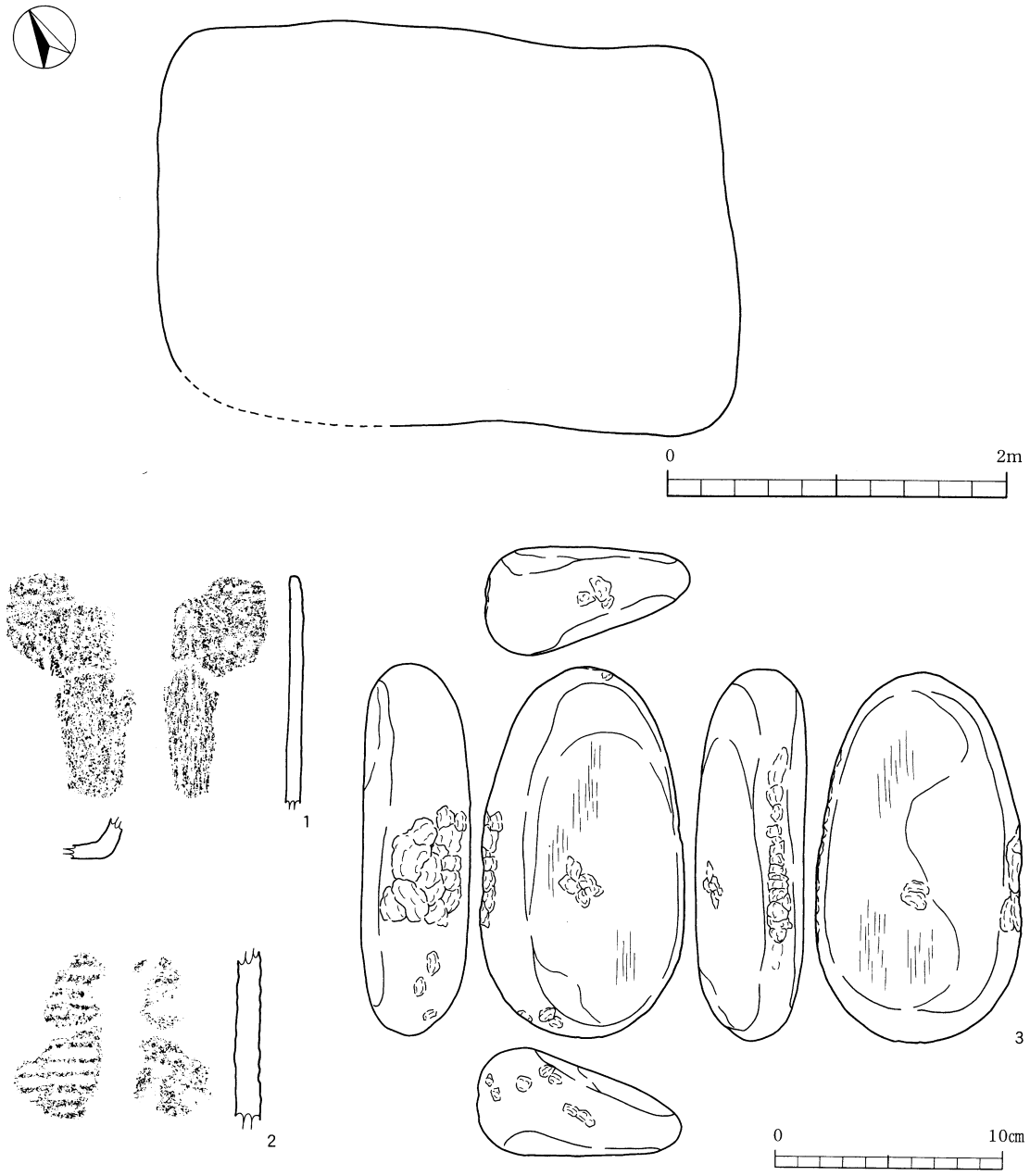


第96図　48号竪穴住居跡

49号竪穴住居跡

C－６区で検出された。平面プランは約３m×２mの隅丸長方形を呈する。今回はミニトレンチで壁面と床面を部分的に確認するに留め，遺構の掘り下げはおこなわなかった。

遺構内遺物は，ミニトレンチ内より土器２点・石器１点が出土し，全て図化した。１は角筒形である。口縁部片と思われるが風化のために詳細は不明である。２は円筒形で風化が激しい。雲母を多量に含み，胴部の貝殻条痕文が横位であることなどから４類に近い可能性がある。しかしながら，貝殻条痕文は押引状を呈していない。３は砂岩製の磨石である。表裏面に長軸方向への磨痕が見られ，両側面に敲打痕が見られる。

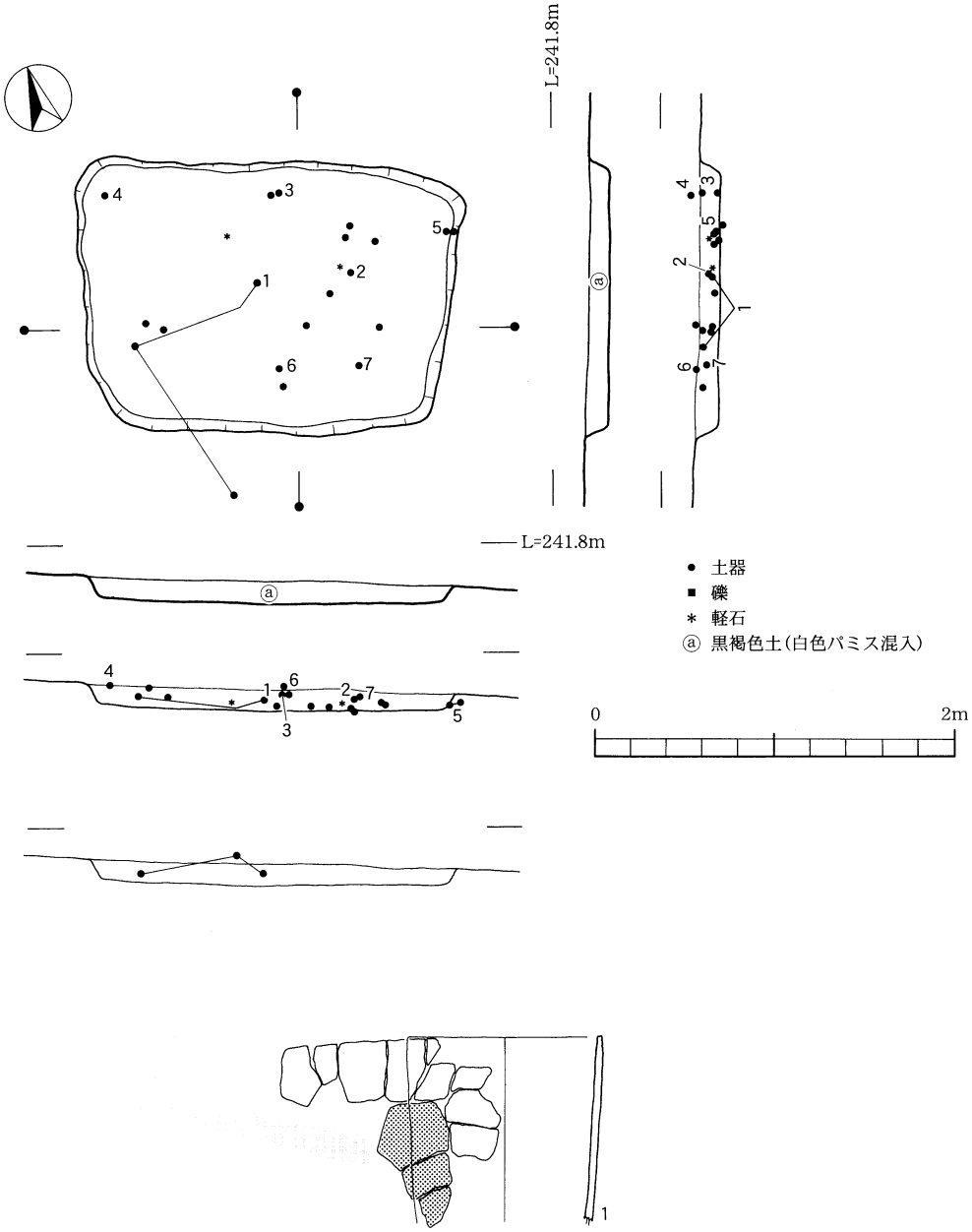


第97図　49号竪穴住居跡・住居跡内遺物

50号竪穴住居跡

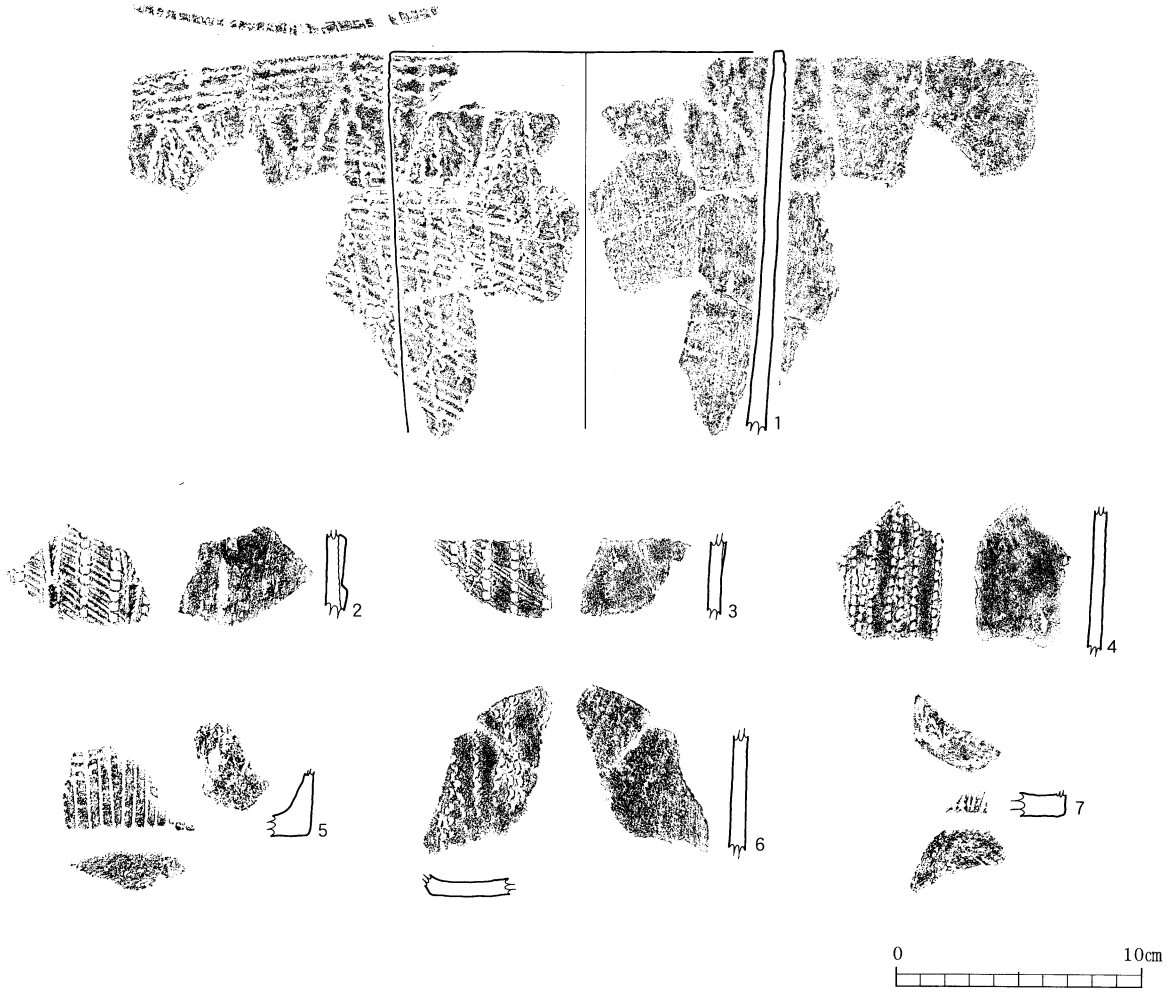
E－５区で検出された。約２m×1.5mの隅丸長方形を呈し，規模としては全竪穴住居跡中最小のものである。検出面から床面までの深さは約10cmであるが，実際の掘り込み面はさらに上部にあったものと考えられる。検出面における遺構内埋土は明茶褐色粘質土である。

遺構内遺物は，土器17点・軽石２点が出土し，このうち土器７点を図化した。１～５は円筒形である。１は住居内遺物として口径が復元できる数少ない資料である。口唇部にはキザミ目を



第98図　50号竪穴住居跡

有し，口縁部は貝殻刺突文を横位に４条めぐらす。胴部には貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が施される。だが口縁部付近では，貝殻条痕文ははっきりとしない部分も多い。２・３は同一個体と思われる。貝殻条痕文の上に方形刺突文が施され，貼付文はクサビ状を呈している。４は丁寧なナデの後に貝殻刺突文を施している。５は底部片でキザミ目は長く約３cmを測る。６・７は角筒形である。６は丁寧なナデの後に貝殻刺突文が施されている。７は底部片である。なお，１は住居周辺の包含層資料と接合している。



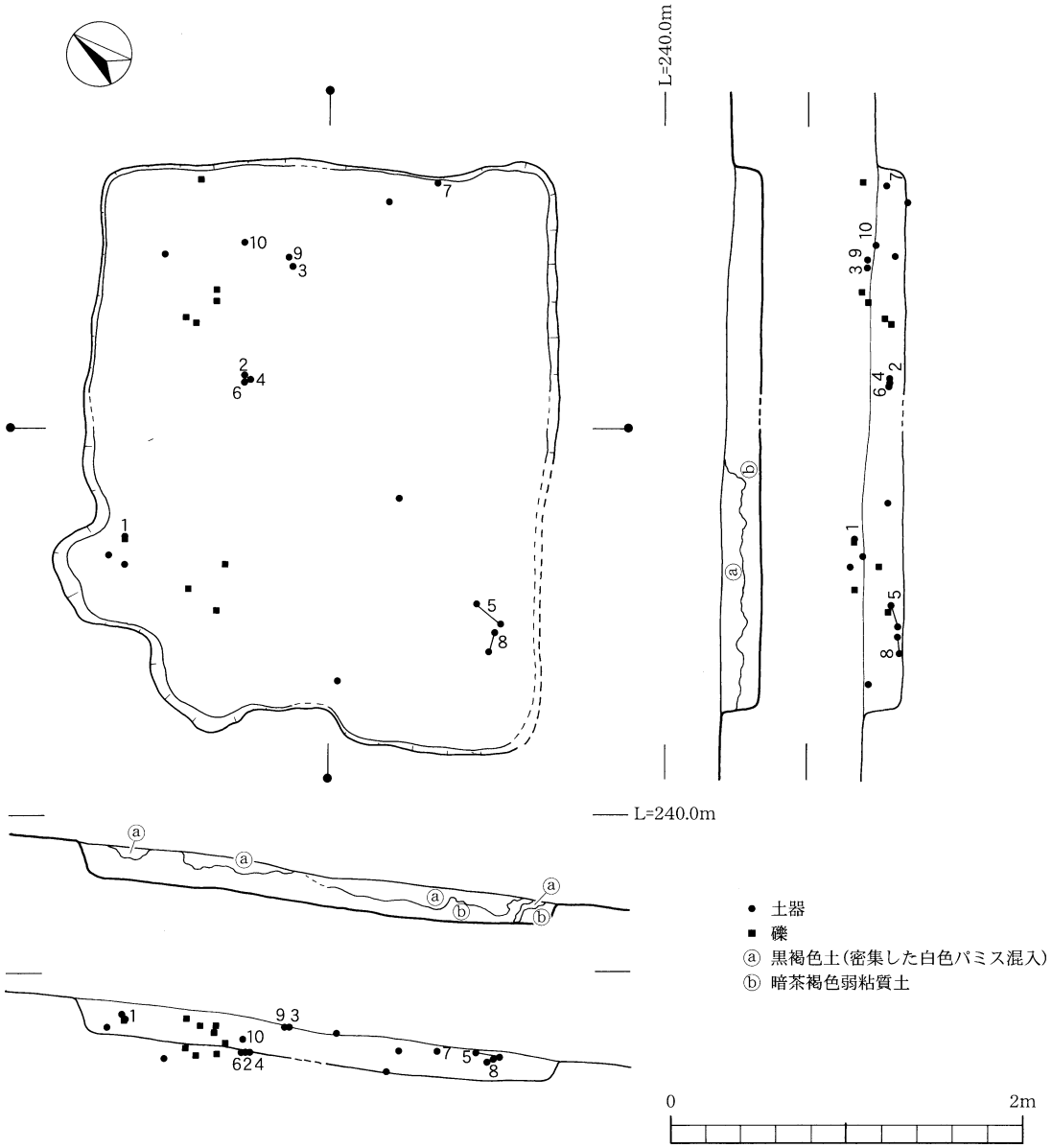
第99図　50号竪穴住居跡内遺物

51号竪穴住居跡

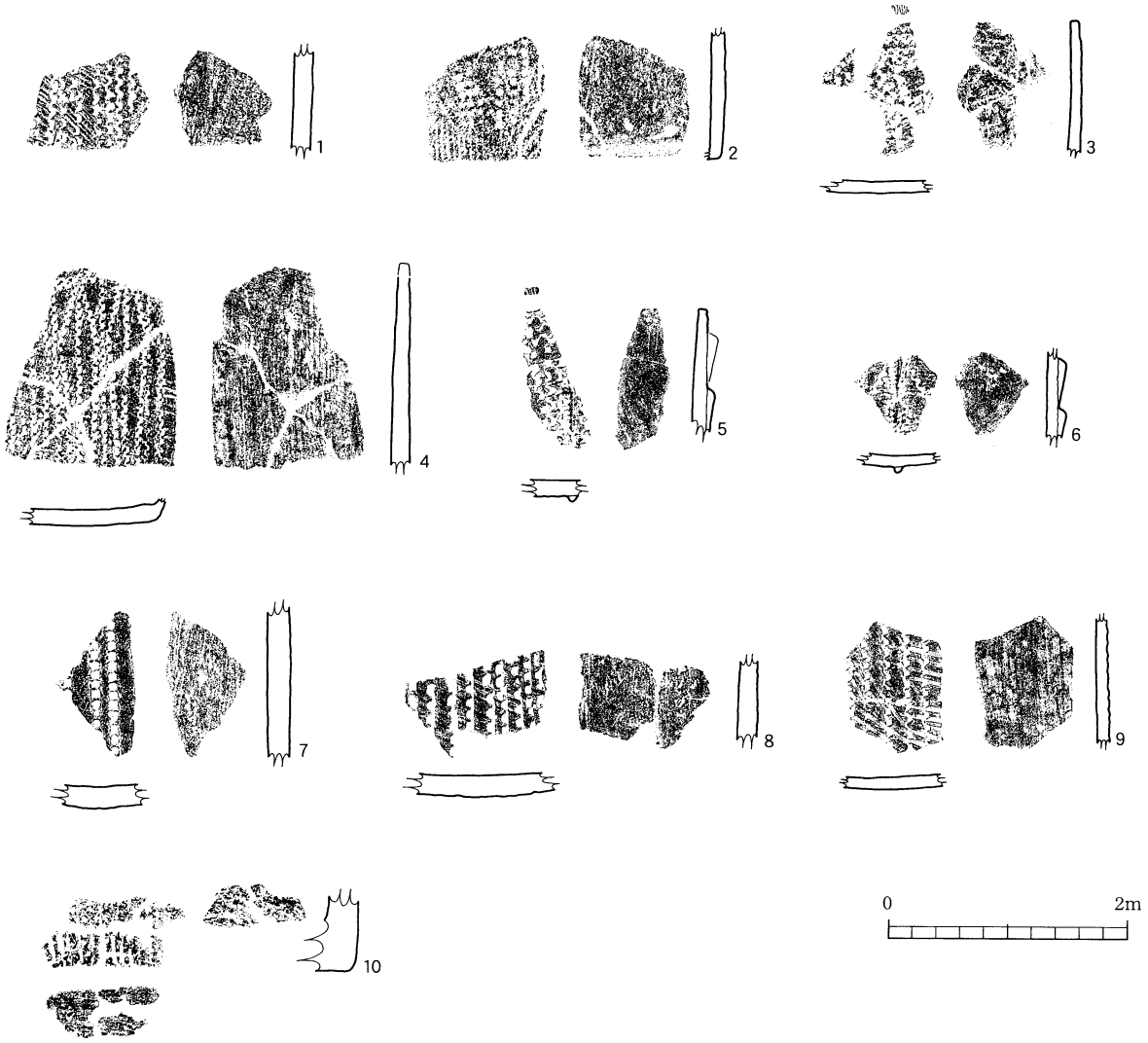
D－５区で検出された。約3.1m×2.7mの略隅丸長方形を呈するが，南西隅は不整形である。北西部から南東部にかけての約５度の傾斜面に構築されており，52号と近接する。

埋土は，明茶褐色粘質土が堆積し，中央から南部分にかけて上部に黄褐色土が見られるがアカホヤ層の落ち込みと考えられる。

遺構内遺物は，土器17点・礫９点が出土し，このうち土器10点を図化した。１・２は円筒形で３～10は角筒形である。３～５は口縁部片である。４は縦位の貝殻刺突文間を斜位の貝殻刺突文で埋めやや密な菱形状を呈している。５の胎土は非常に精錬されている。７はナデ調整の後方形刺突文を施している。８は施文終了後に軽いナデをおこなったのであろうか，全体としてトロッとした感じである。10は円筒形か角筒形かはっきりしない。



第100図　51号竪穴住居跡

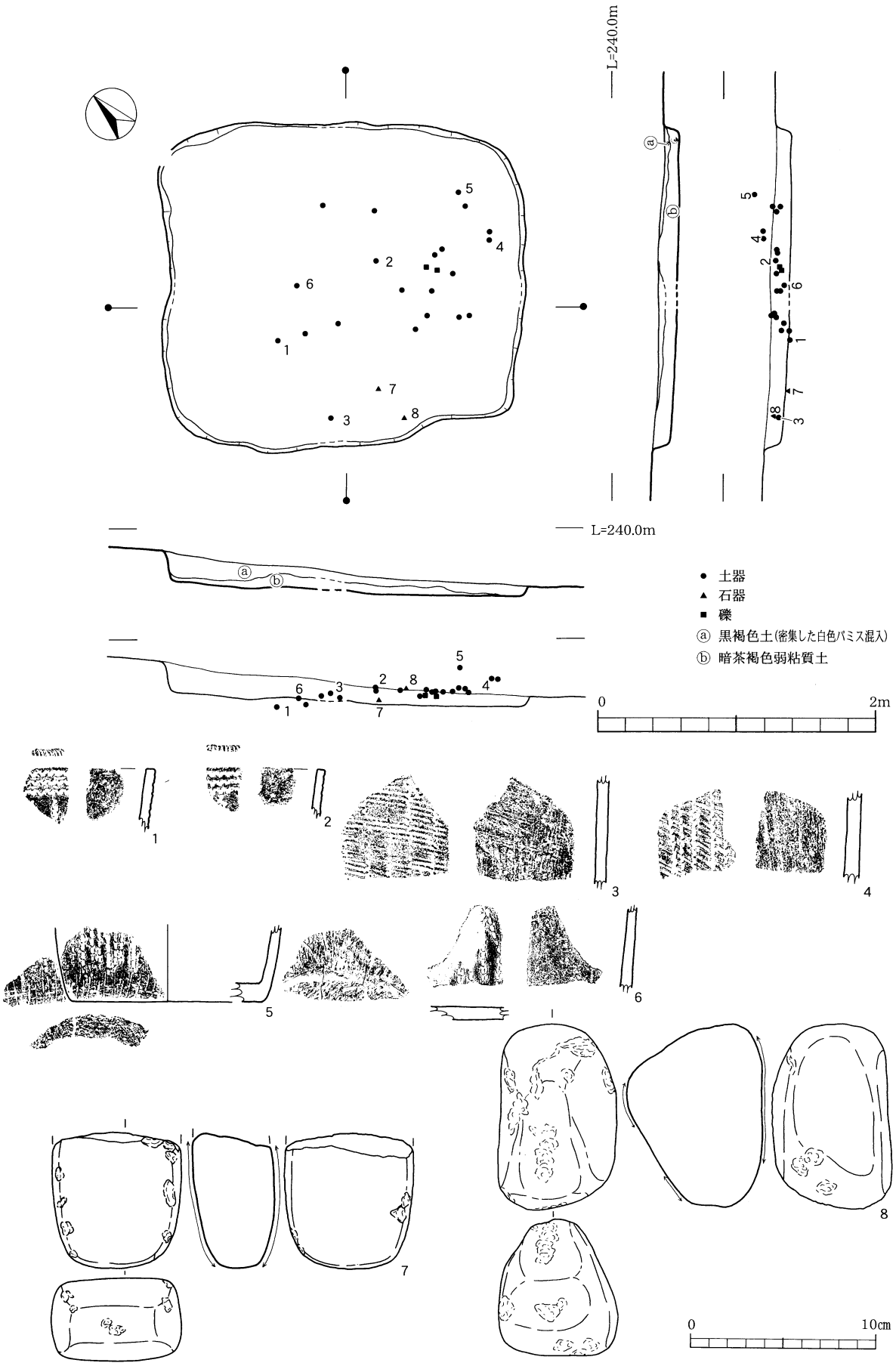


第101図　51号竪穴住居跡内遺物

52号竪穴住居跡

D－５区に検出された。土層観察ベルトを残して掘り下げを終了している。プランは隅丸方形を呈し，床面積は5.6㎡である。床面は，水平ではなく北西部から東南部へかけて約10㎝の勾配をもっている。

遺構内遺物は，土器21点・石器２点・礫２点の合計25点が出土し，このうち土器６点・石器２点を図化した。１～５は円筒形である。１・２は口縁部片である。口縁部に貝殻刺突文が横位に３条めぐる。２は文様の切り合いから左から右へと施文していることがわかる。５は底部片で方形刺突文が施されている。底部外周面はケズリにより調整された後にキザミが施されている。６は角筒形である。７は方形の磨石で約４分の１を欠損する。



第102図　52号竪穴住居跡・住居跡内遺物

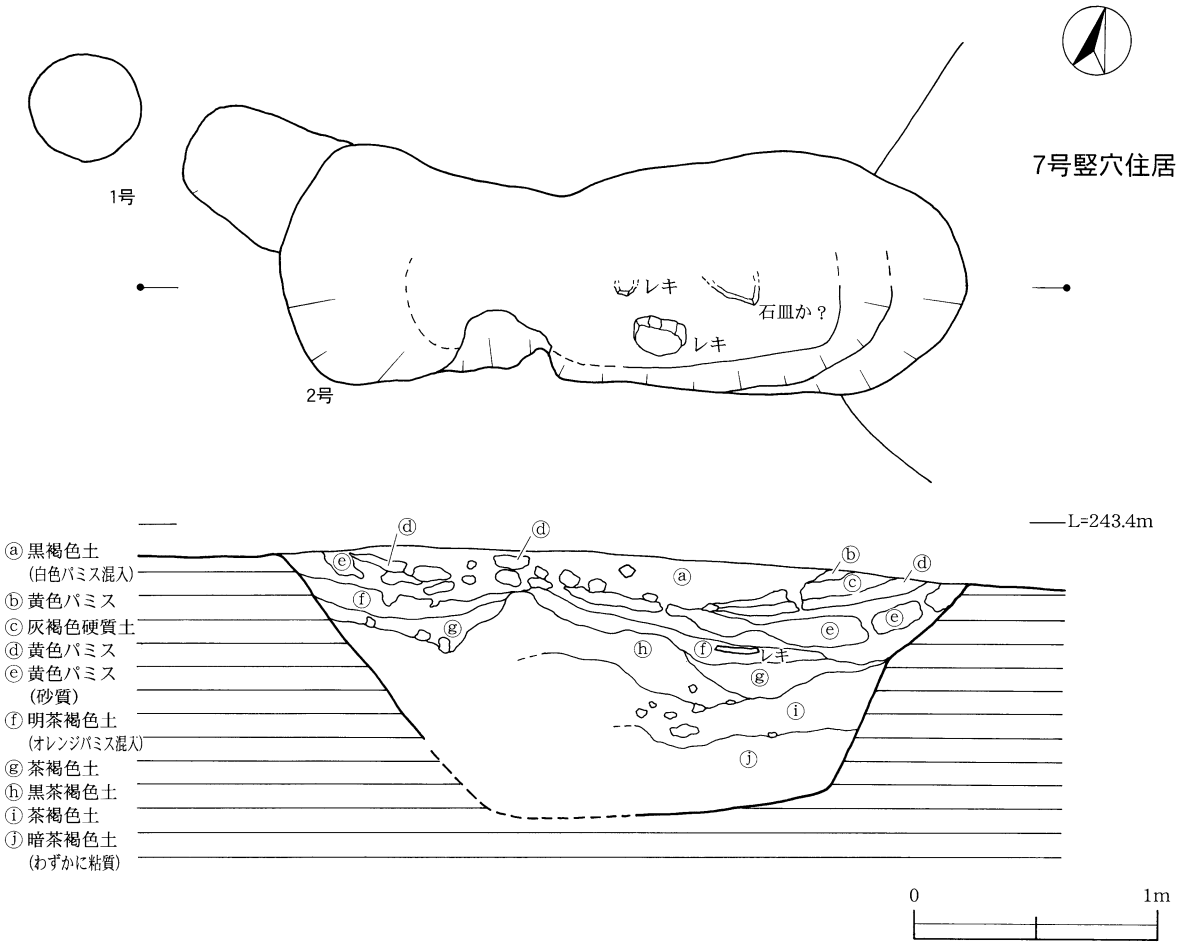
（2）連穴土坑

連穴土坑あるいは煙道付き炉穴と呼ばれているものである。16基が検出され，この内４基を半裁した。検出のみに留めた土坑の中には連穴土坑の可能性のあるものも存在するものと思われる。連穴土坑は，単独で検出されたものは８号のみで，残りの15基は全て竪穴住居跡と切り合うかたちで検出された。また，トンネルで連結するためか，６号のように崩壊したブリッジの穴を利用してその先に新たな連穴土坑を構築するものも見られる。

検出時の形状はコケシ状もしくは楕円形状を呈し，検出面から床面までは深いもので１mを越えるものもある。比較的大型なものとそうでないものとに分けられるが，この違いが何を示すかは不明である。連穴土坑内からは遺物の出土が竪穴住居跡以上に少ない。以上のような共通する特徴を有しており，以下各連穴土坑ごとに詳細を述べていきたい。

１・２号連穴土坑は，７号住居跡と切り合っており，埋土にはP－13（Sz-Tk３）火山灰を含む。１号連穴土坑は掘り下げていないために竪穴住居跡との関係ははっきりとしないが，７号住居跡→２号連穴土坑→P－13（Sz-Tk３）火山灰の降灰という関係になる。当初はこのP－13（Sz-Tk３）火山灰を薩摩火山灰と認識していたために，上面を幾分か掘り下げてしまっていた。現

1・2号連穴土坑



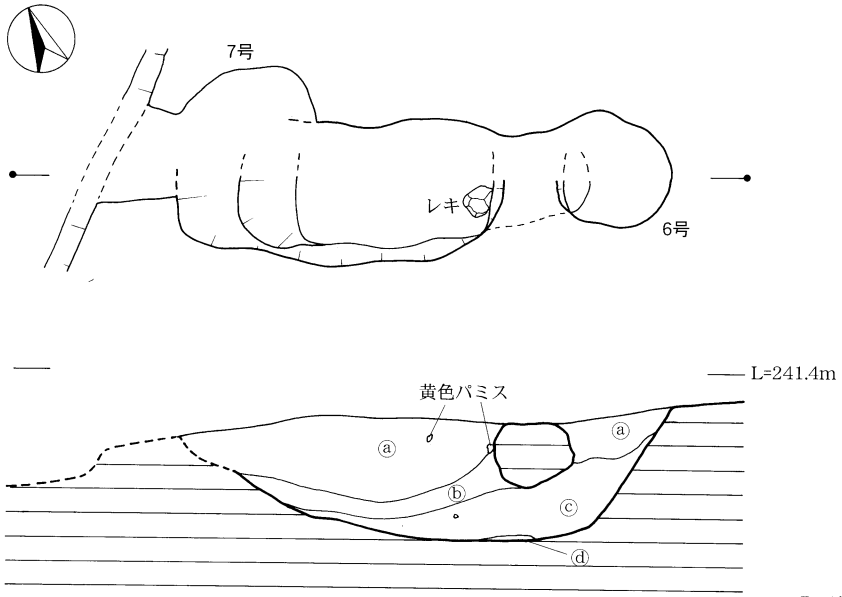
第103図　連穴土坑（１）

場写真を元に上面のプランを確認すると，７号住居跡にかなり食い込んでいることがわかった。つまり，断面に表れている段は，比較的長めのスロープ状を呈しておりそこから急激に落ち込むようにして竪坑的に楕円形土坑が掘り込まれていると考えられるのである。なお，Ｐ－13（Sz-Tk３）火山灰は埋土の約１/３を占め７層に分層が可能であった。床面近くからは，大型の角礫が出土しており，赤化が見られた。このほかに，断面に石皿片が確認されている。

６・７号連穴土坑は，26号住居跡の東壁と切り合って検出された。これらの関係は，26号竪穴住居跡→７号連穴土坑→６号連穴土坑となる。６号連穴土坑は，ブリッジが残存しておりその下の床面が熱により赤変硬化していた。遺物は，床面から小礫が１点出土しているのみである。埋土中には，Ｐ－13（Sz-Tk３）火山灰の白色粒パミスが確認されている。26号竪穴住居跡にも白色粒パミスが確認されていることから，これらの遺構は，Ｐ－13（Sz-Tk３）火山灰降灰以降のものであろう。

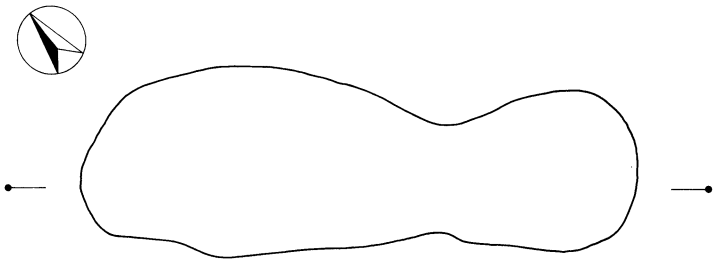
８号連穴土坑は検出のみに留めている。

6・7号連穴土坑



ⓐ 黒褐色土
（白色パミス混入）
ⓑ 黒茶褐色土
ⓒ 茶褐色土
ⓓ 明茶褐色土（硬化）

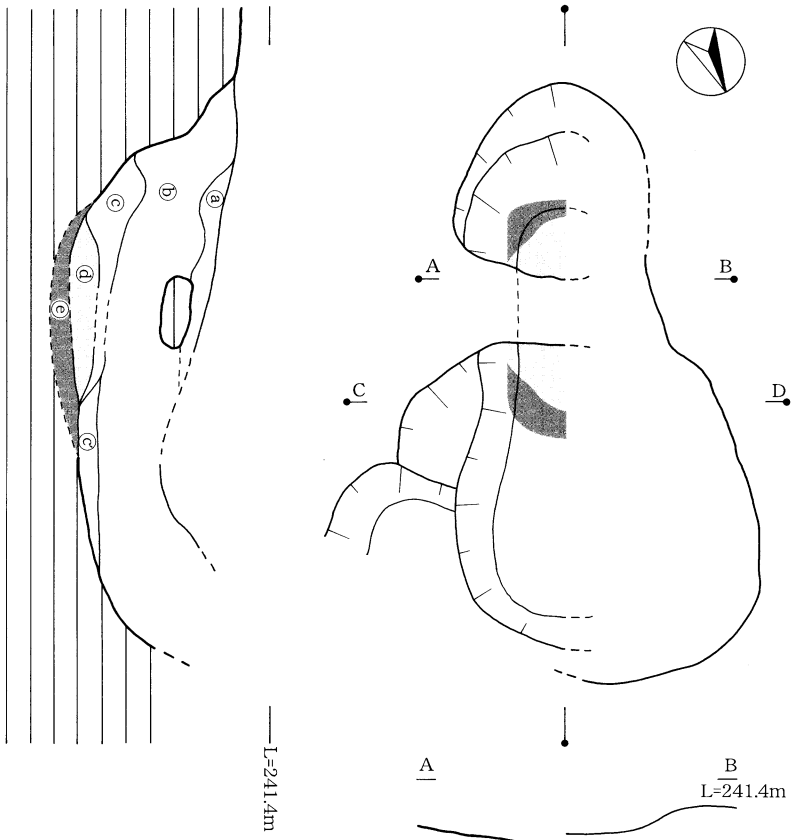
8号連穴土坑



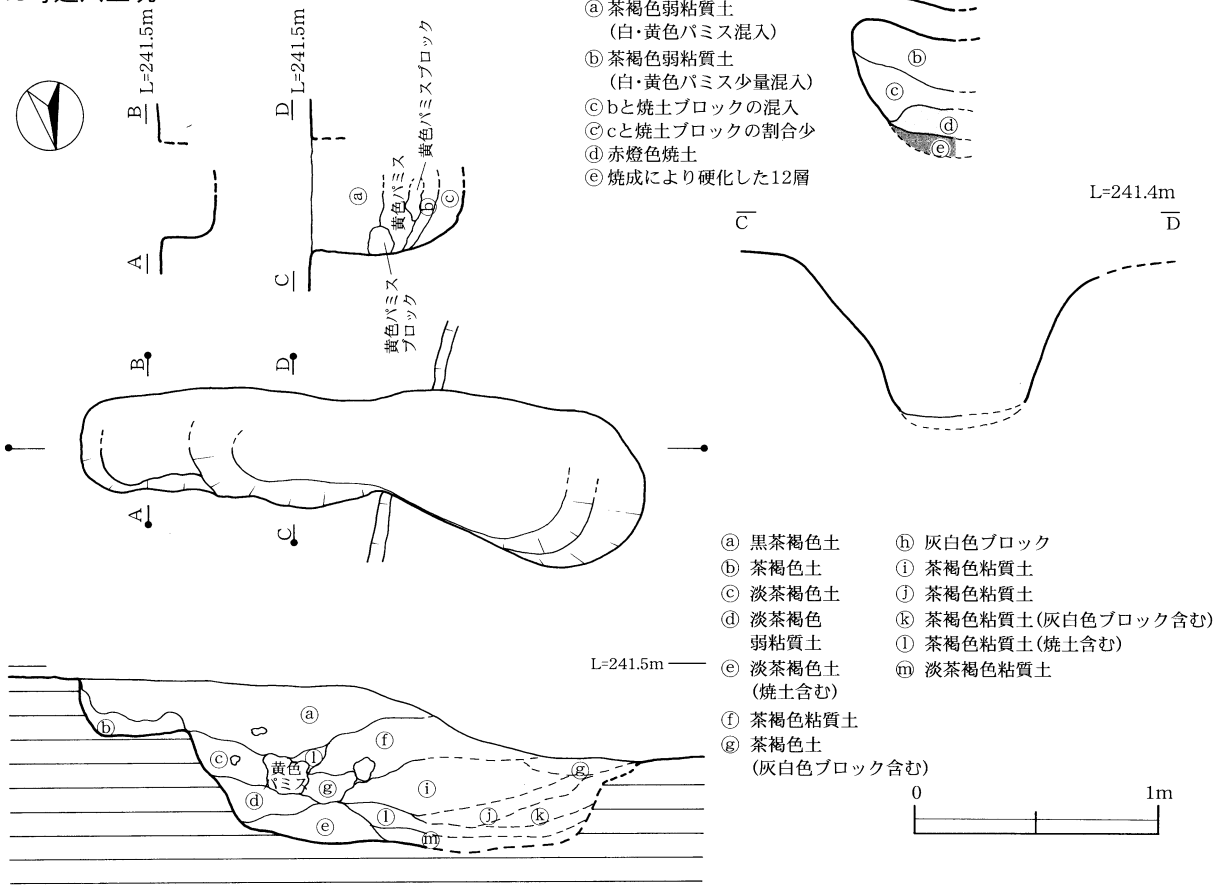
1m

第104図　連穴土坑（２）

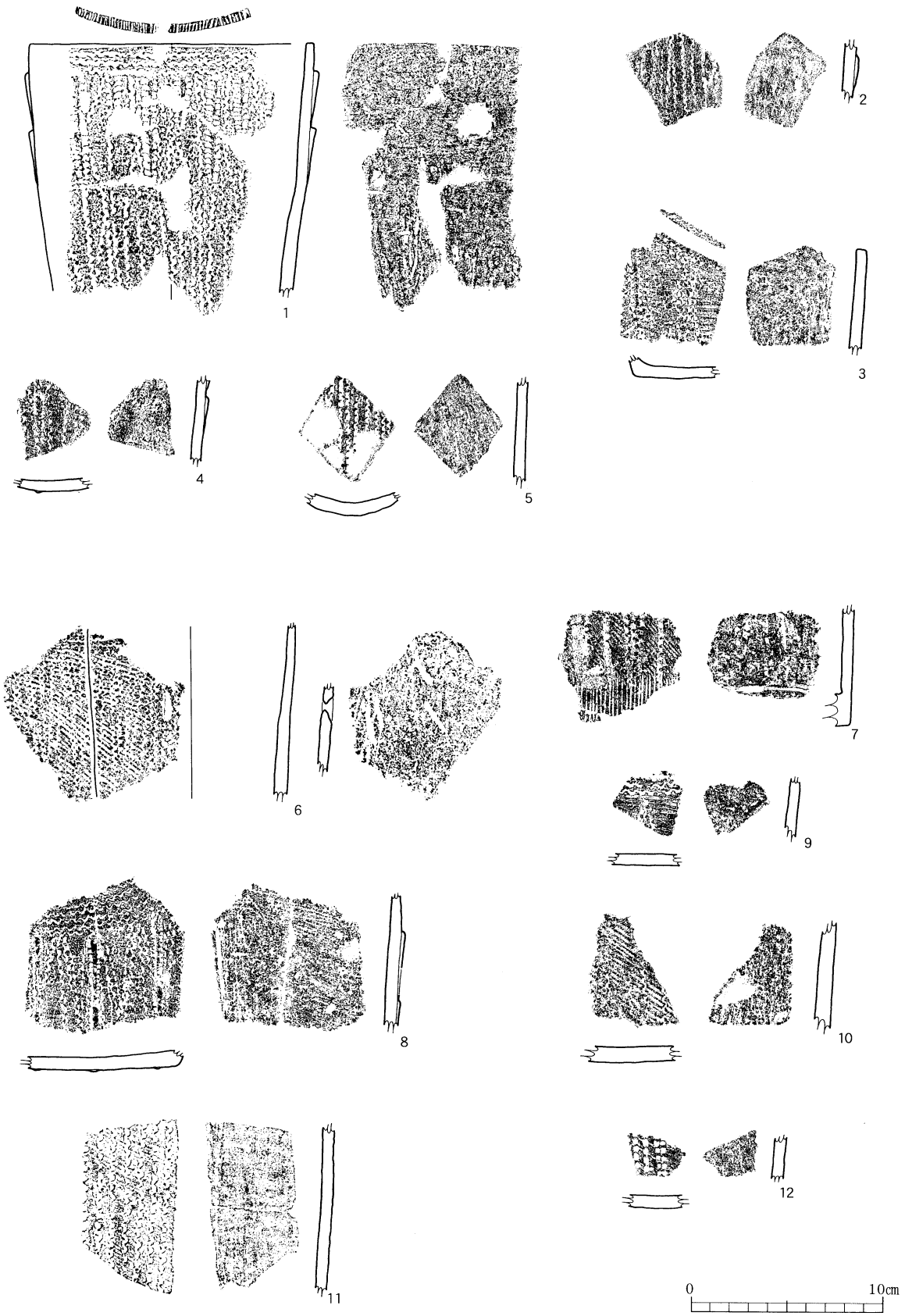
11号連穴土坑



13号連穴土坑



第105図　連穴土坑（3）



第106図　連穴土坑内遺物

11号連穴土坑は，当初竪穴住居跡を想定して掘り下げ，37号と２基の竪穴住居跡の切り合いを想定していたが，37号竪穴住居跡の南東壁とほぼ接して検出された。本遺跡では，全長の半分近くを竪穴住居と切り合って検出される連穴土坑が大半を占めるが，この遺構の状態は特徴的である。竪穴住居跡と接する部分の壁面が埋土とともに攪乱されているため，住居との新旧関係ははっきりしない。本遺構の埋土上面にはP－13（Sz-Tk３）火山灰のパミスが厚く堆積しているのに対し，37号竪穴住居跡内の埋土中ある黄色や白色パミスの層は，この遺構プランの延長であった可能性が考えられる。これで見ると，11号連穴土坑が37号竪穴住居跡より新しいものであることが考えられる。

それぞれの遺構内からは土器，小礫が出土している。他の遺構と比較して全長に対する最大幅の割合が大きく，平均的な幅（約60㎝）の２倍以上（約150㎝）である。また，薩摩火山灰によるブリッジが完全な状態で残存しており，そのほぼ直下の床上面には約10㎝の厚さで赤燈色焼土が堆積し，その床面は硬化していた。これは強い熱によるものと考えられ，ブリッジの真下が焚口として使用されたためと思われる。

出土遺物は１～５で，そのすべてが３類土器である。１は３e類に該当する。

13号連穴土坑は，31号竪穴住居跡の東壁にほぼ直交するように構築されている。これらの新旧関係は，31号竪穴住居跡→13号連穴土坑となる。なお，竪穴住居の壁付近で遺構の軸がやや北側にずれており，再構築をおこなった可能性が窺える。遺構東側の先端寄りには，薩摩火山灰のブリッジがブロック状に崩落した状態で検出された。これは，本遺構が薩摩火山灰の硬化面を利用して作られたことを示しており，その崩落によって最終的に破棄されたものであろう。ブリッジ部分の下面周辺からは，大粒の焼土ブロックを含む土が検出された。出土遺物は，６～10である。６は３c類に該当する。８は３d類である。

11は14号連穴土坑から，12は15号連穴土坑から出土した。

（3）集石

集石は100基検出された。現地保存のため平面図と礫上面のレベルのみで断面図を作成している。このため，下面の様相は不明なものが多い。検出面がⅥ層かⅦ層以下であるかによって早期前葉か中・後葉かの判断をおこない，G－７・８区に関しては周辺から出土している遺物が中・後葉に限られていたため概期のものと判断した。だが，たとえ集石内から土器が出土していたとしても，これが直ちに集石の時期を判断するとは限らない。このことを考慮しながら報告していきたい。また，集石の形態は現段階で確認できた掘り込みの有無で分類が可能であった。

第107図から第121図は検出時に掘り込みが確認されなかったものである。

１～20号集石は，周辺の遺物出土状況から早期後葉段階のものの可能性が高い。散在的なものも多いが，３号や20号のように礫が密集しているものもある。

21～100号集石は，周辺の遺物出土状況から，早期前葉もしくは中葉の可能性がはじめに考えられた。さらに，検出面がⅥ層のものとⅦ層以下とに分類されることから，前者は中葉段階，後者は前葉段階の可能性が指摘されよう。

22号集石は，比較的大型の礫で構成されている。29号集石は石皿片を含む。33号集石は，こぶし大程度の礫が密集している。このようなタイプは，他に42・43・85号などがこれに類似する。41号集石は，やや大型の礫が数個密集しているものである。63・82号などもこれに類似する。59号集石は，礫が縦長に集積しているものである。71号集石は，散在しておりまとまりに欠けている。いくつかの集石を構成する礫が分散したものであるのかもしれない。

第122図・第123図は，検出時に掘り込みが確認されたものである。中には，土坑状のプランのみが検出され，掘り下げていく段階で礫が出土したものも見られた。25・26号集石は，底面近くに大型の礫を配し，その上部にこぶし大程度の大きさの礫が見られるものである。なお，26号集石は脂肪酸分析法による科学分析をおこなった。詳細は第３分冊の付編１において報告をまとめている。27・74号集石は，土坑中に小型の礫が不規則に見られるものである。土坑中に流れ込んだ礫である可能性も考えられるがここに分類してある。100号集石は，道跡２の東側に位置し，土坑中の礫の量はこの類の中では最も多い。

１は28号集石より出土した３類土器である。２は29号集石内から出土した６類土器の胴部片である。風化が激しく脆い。３は，32号集石内から出土した10類土器である。山形押型文を横位に施していることから10c類の可能性が考えられる。５・６は46号集石から出土した。同一個体と思われるが，５は６と比べて施文に規則性があまり窺えない。また，６に関しては包含層資料と接合している。７・８は47号集石から出土した３類土器である。７は小破片であるが３c類の可能性が考えられる。８は３e類と思われる。９は54号集石から出土した３類土器の底部片である。10～12は61号集石から出土した。10は３類だが11・12は９類土器である。11・12は同一個体である可能性が高い。13は62号集石から出土した。器面に貝殻刺突文を不規則に施すものである。口唇部は丸みを呈して，その端部に浅いキザミ目が施される。14・15は68号集石から出土した。14は３類土器の底部片と思われる。15ははっきりとしないが，キザミ目が無い点などから９類あるいは10類の底部片である可能性が高い。16は70号集石より出土した。17は71号集石から出土した。斜位の貝殻条痕文に貝殻刺突文を重ねるもので，間隔が広いことから

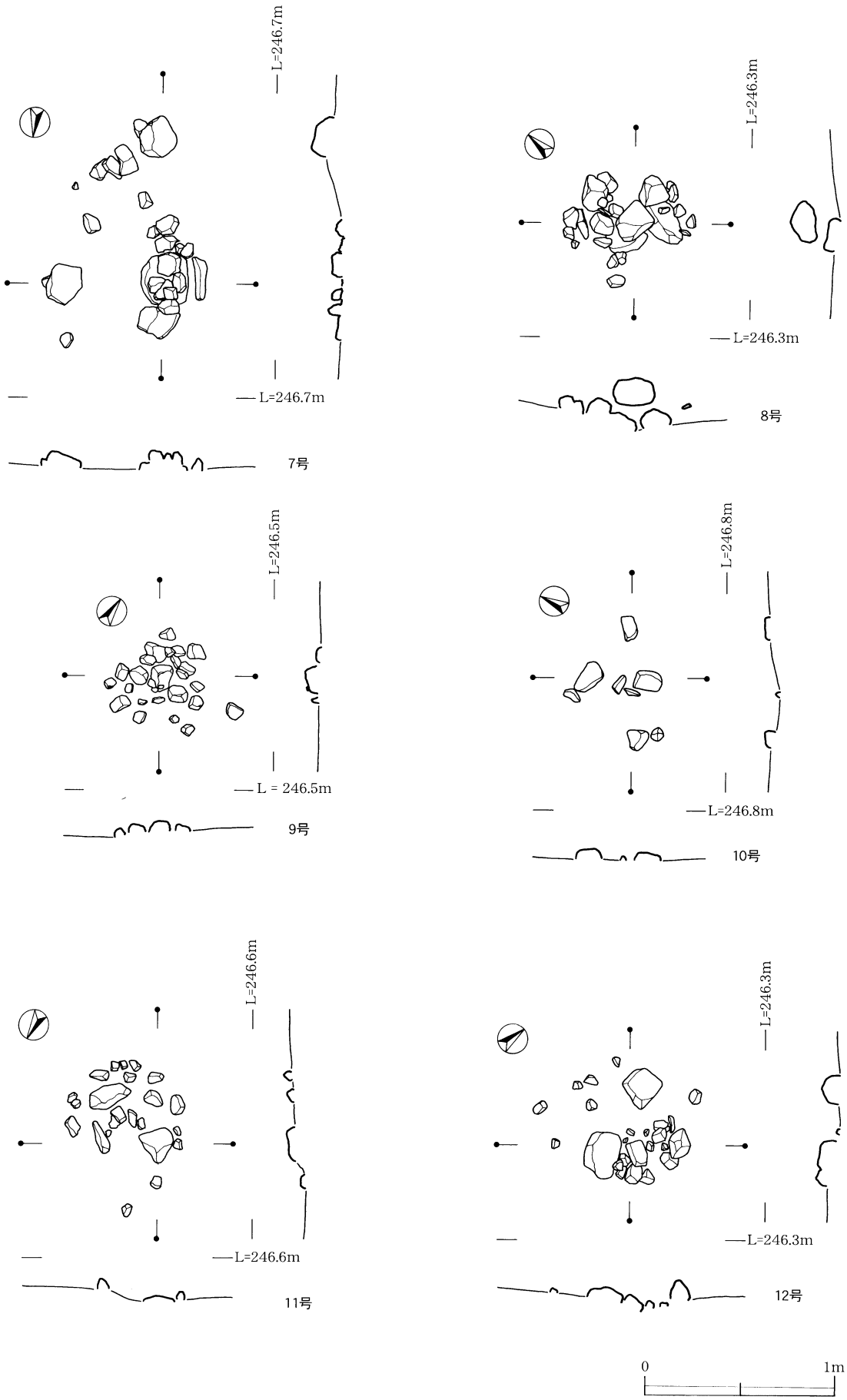
第６表　２・３地点集石一覧

番号	区	検出面	遺構内遺物	時期
1	G8	7		中～後葉
2	G8	7		中～後葉
3	G8	7		中～後葉
4	G8	7		中～後葉
5	G8	7		中～後葉
6	G8	7		中～後葉
7	G7	7		中～後葉
8	G7	7		中～後葉
9	G7	7		中～後葉
10	G7	7		中～後葉
11	G7	7		中～後葉
12	G7	7		中～後葉
13	G7	7		中～後葉
14	G7	7		中～後葉
15	G7	7		中～後葉
16	G7	7		中～後葉
17	G7	7		中～後葉
18	G7	7		中～後葉
19	G7	7		中～後葉
20	F7	7		中～後葉
21	F7	7		中～後葉
22	F7	7		中～後葉
23	E7	6		中～後葉
24	E7	7		前葉
25	E7	10上		前葉
26	E7	10上		前葉
27	E7	10上		前葉
28	E7	7	3類	前葉
29	E7	7	6類	前葉
30	E7	7		前葉
31	E7	7		前葉
32	E7	7	10類	中～後葉
33	E7	6	13類	中～後葉
34	E7	7		前葉
35	F6	7		前葉
36	F6	7		前葉
37	F6	7		前葉
38	E6	7		前葉
39	E6	7		前葉
40	E6	7		前葉
41	E6	7		前葉
42	E6	7		前葉
43	E6	7		前葉
44	E6	10上		前葉
45	E6	7		前葉
46	E6	7	9類	中～後葉
47	E6	7	3類	前葉
48	E6	7		前葉
49	E6	7		前葉
50	E6	7		前葉

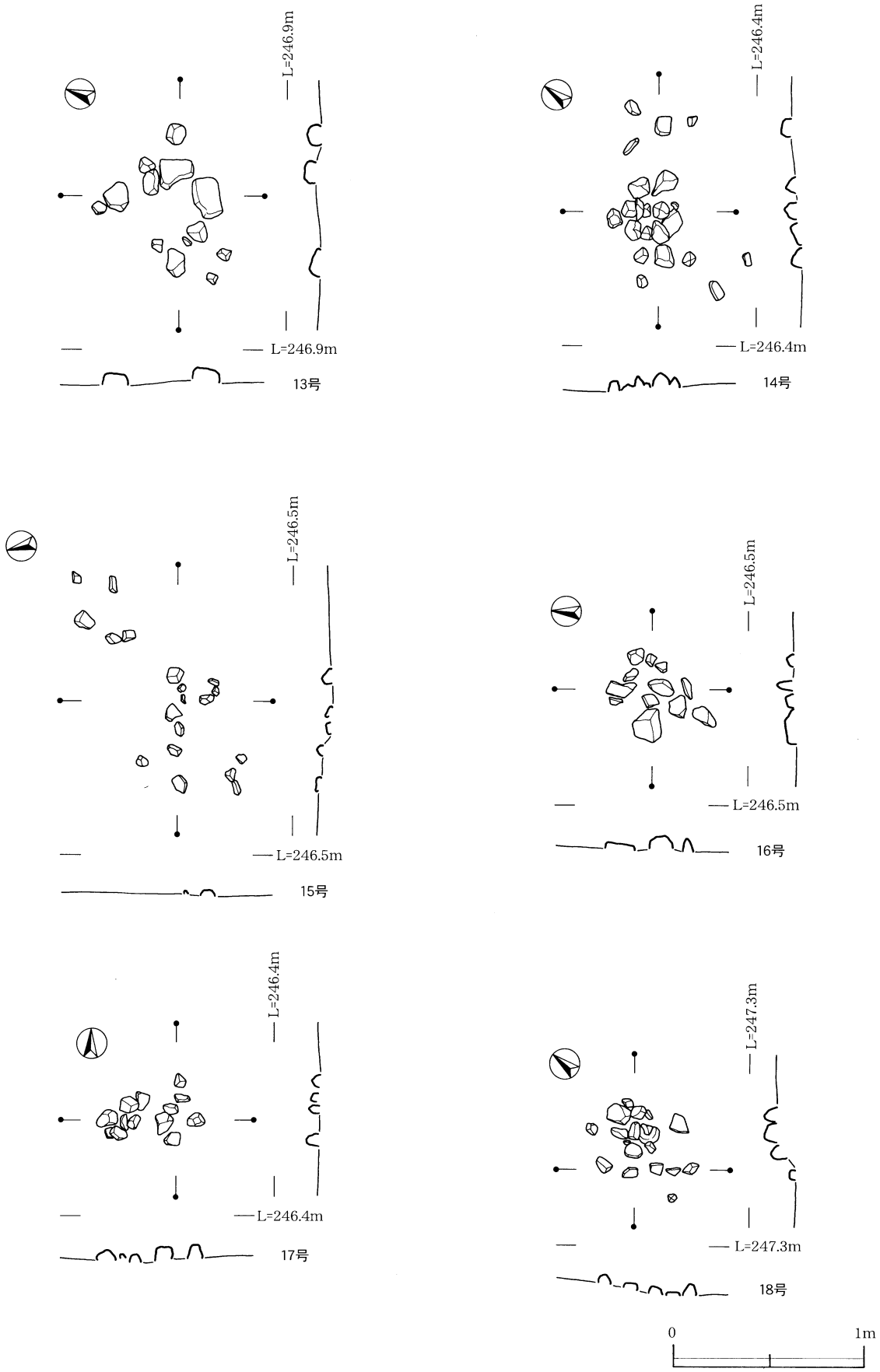
番号	区	検出面	遺構内遺物	時期
51	E6	7		前葉
52	E6	7		前葉
53	E6	7		前葉
54	C7	7	3類	前葉
55	D6	10上		前葉
56	D6	7		前葉
57	D6	7		前葉
58	D6	7		前葉
59	D6	7		前葉
60	D6	7		前葉
61	D6	6	3・9類	中～後葉
62	D6	6	3・9類	中～後葉
63	D6	7		前葉
64	D6	7		前葉
65	D6	7	9類	中～後葉
66	D6	7	3類	前葉
67	D6	7		前葉
68	D6	7	3・9類	中～後葉
69	D6	7		前葉
70	D6	10上	4類	前葉
71	D6	7	3類	前葉
72	D6	7	3類	前葉
73	D6	10上		前葉
74	D6	10上		前葉
75	D6	10上		前葉
76	D6	7		前葉
77	D6	7	3類	前葉
78	D6	7		前葉
79	D6	7	3類	前葉
80	D6	6		中～後葉
81	D6	7	3類	前葉
82	C6	7	3類	前葉
83	C6	7	10類	中～後葉
84	C6	7		前葉
85	C6	7	3類	前葉
86	C6	7		前葉
87	C6	7		前葉
88	C6	7	3類	前葉
89	C6	7		前葉
90	C6	7		前葉
91	C6	7	3類	前葉
92	C6	6		中～後葉
93	C6	6		中～後葉
94	C6	7	3類	前葉
95	C6	7		前葉
96	E6	7		前葉
97	E5	7		前葉
98	D5	7		前葉
99	D5	6		中～後葉
100	D5	10上		前葉

L=246.8m
L=246.8m
1号
L=246.6m
L=246.6m
2号
L=246.6m
L=246.6m
3号
L=246.5m
L=246.5m
4号
L=246.4m
L=246.4m
5号
L=246.4m
L=246.4m
6号
0
1m

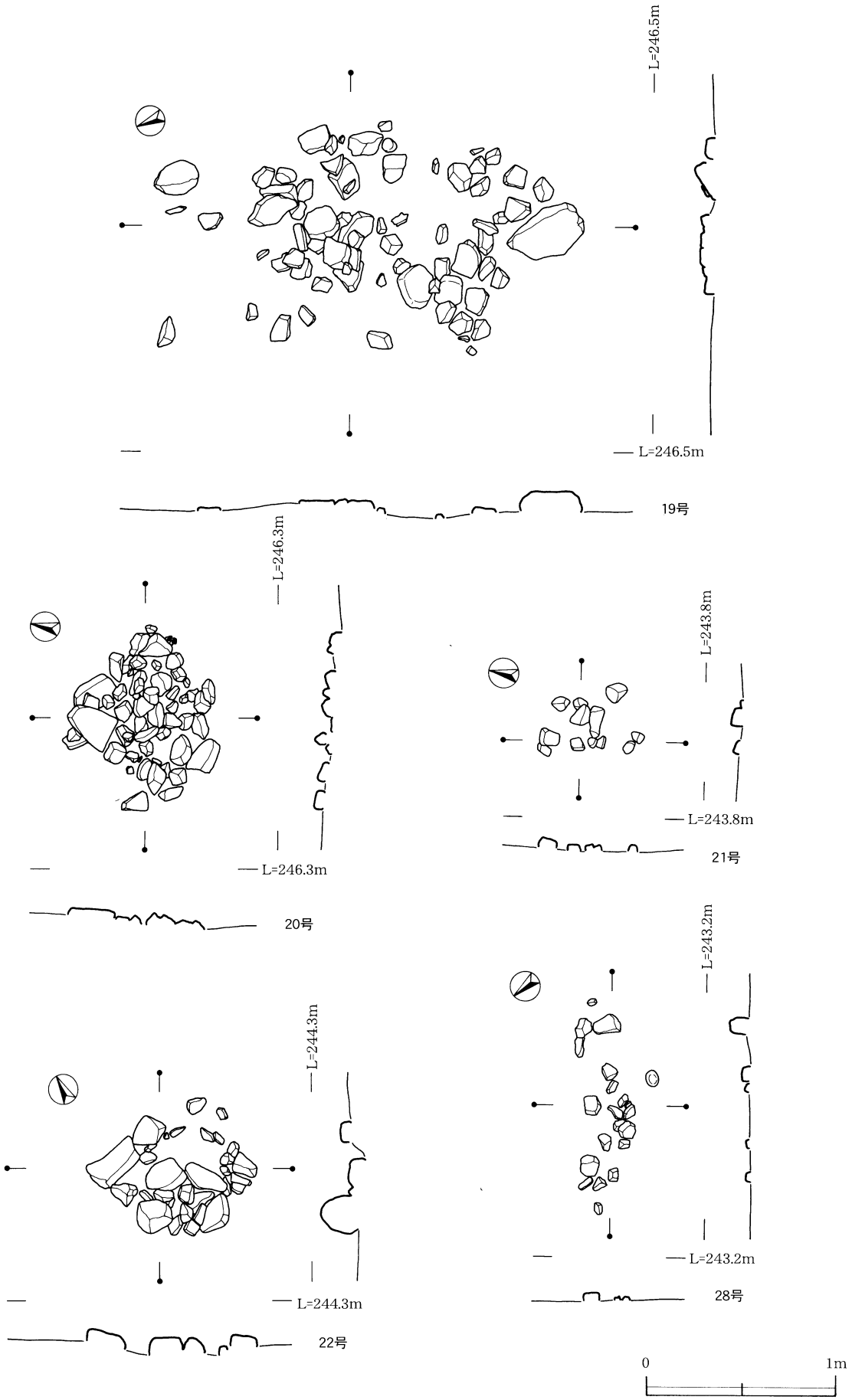
第107図　集石（1）


L=246.7m
L=246.7m
7号
L=246.3m
L=246.3m
8号
L=246.5m
L = 246.5m
9号
L=246.8m
L=246.8m
10号
L=246.6m
L=246.6m
11号
L=246.3m
L=246.3m
12号
0
1m

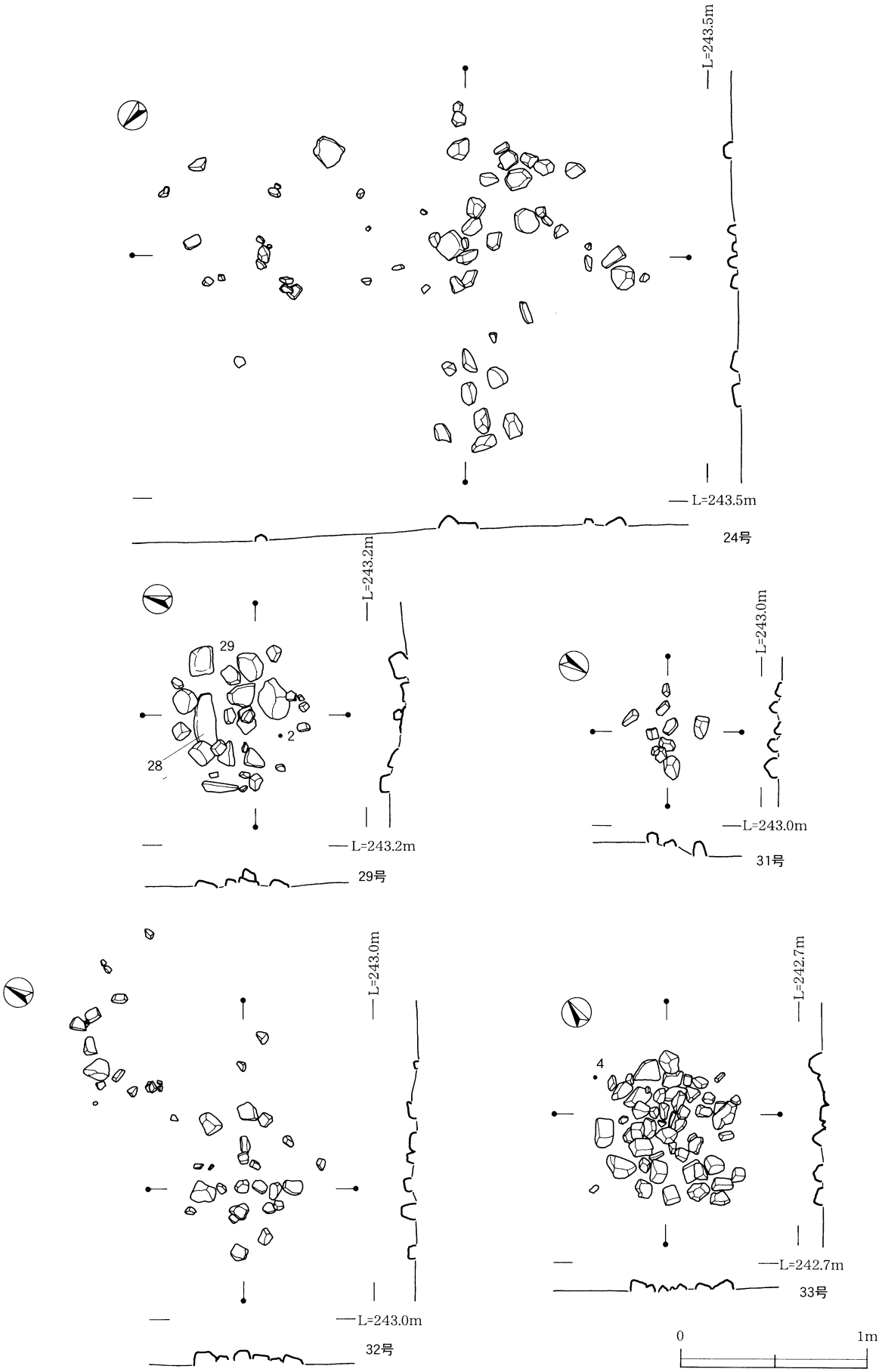
第108図　集石（2）


L=246.9m
L=246.9m
13号
L=246.4m
L=246.4m
14号
L=246.5m
L=246.5m
15号
L=246.5m
L=246.5m
16号
L=246.4m
L=246.4m
17号
L=247.3m
L=247.3m
18号
0
1m

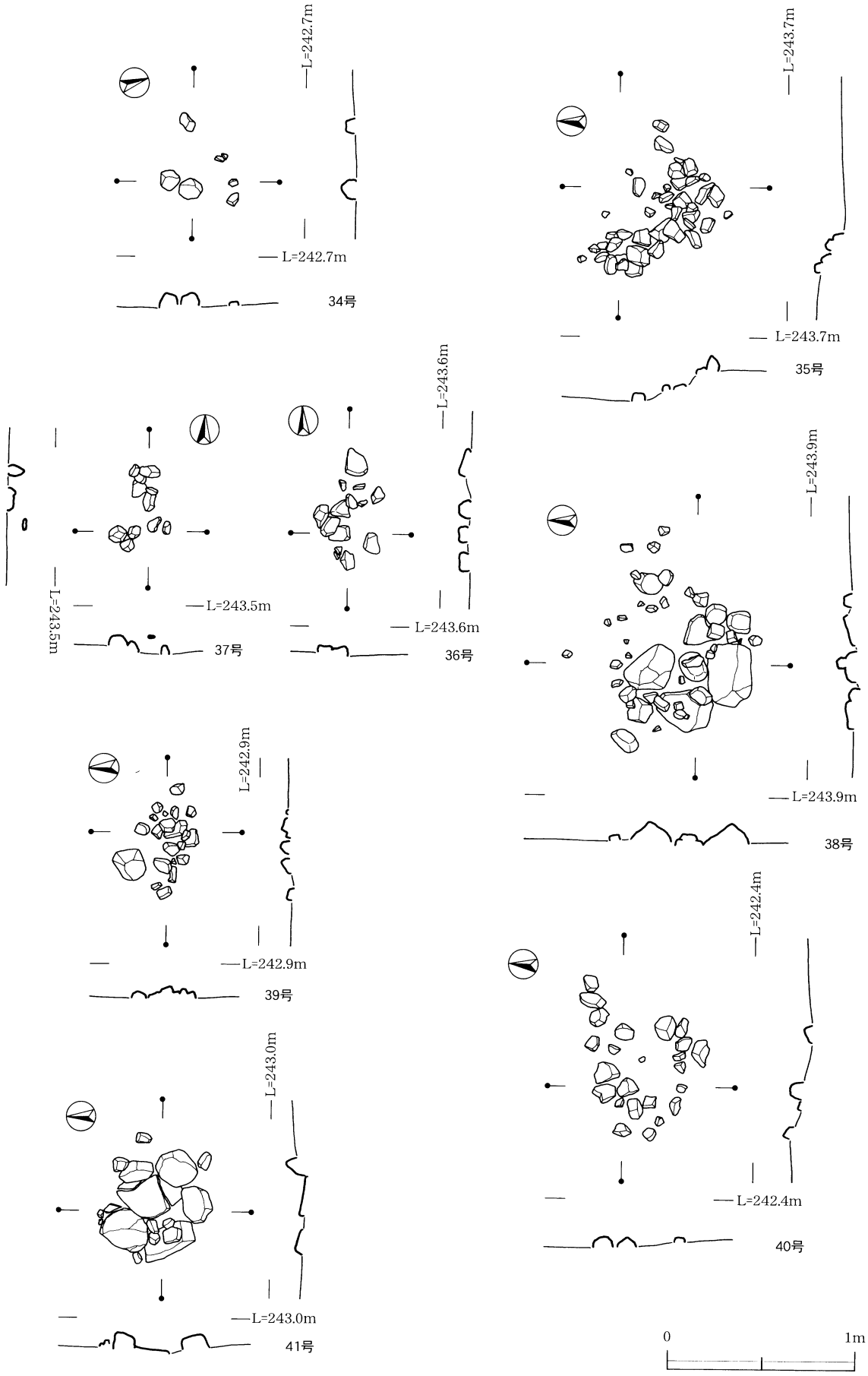
第109図　集石（3）


L=246.5m
L=246.5m
19号
L=246.3m
L=246.3m
20号
L=243.8m
L=243.8m
21号
L=244.3m
L=244.3m
22号
L=243.2m
L=243.2m
28号
0
1m

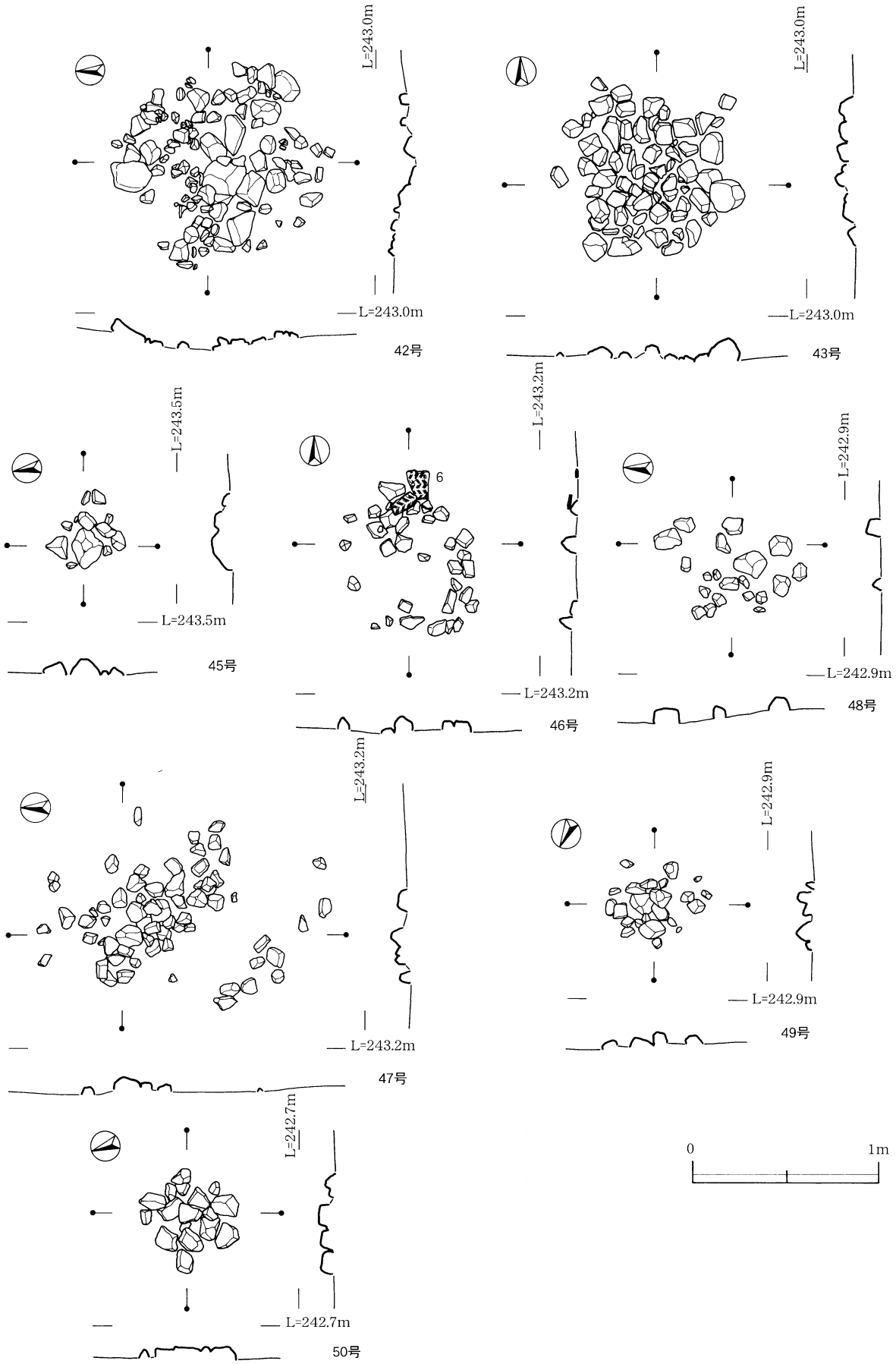
第110図　集石（4）


L=243.5m
L=243.5m
24号
L=243.2m
29
2
28
L=243.2m
29号
L=243.0m
L=243.0m
31号
L=243.0m
L=243.0m
32号
L=242.7m
4
L=242.7m
33号
0
1m

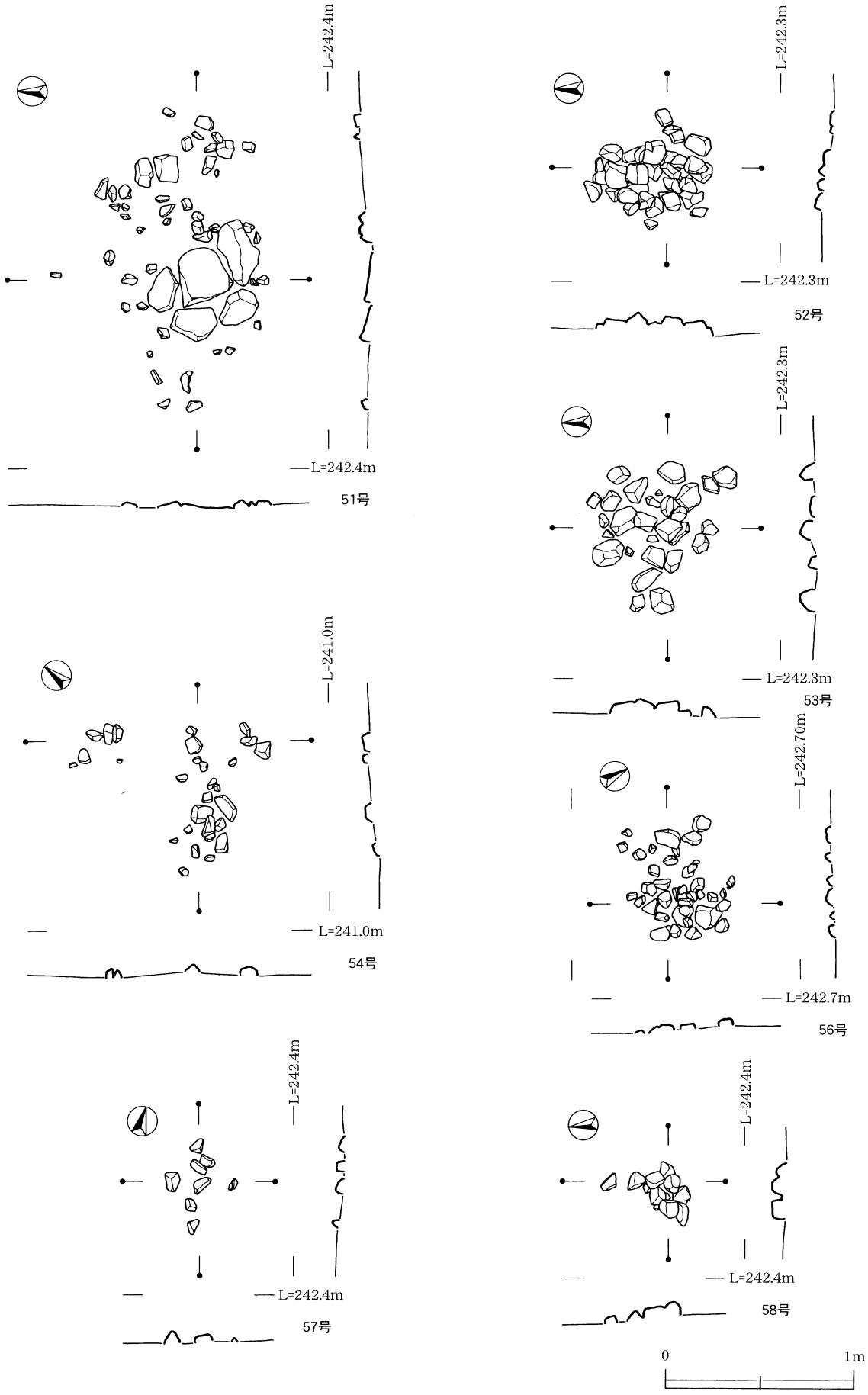
第111図　集石（5）


L=242.7m
L=242.7m
34号
L=243.7m
L=243.7m
35号
L=243.6m
L=243.5m
L=243.5m
37号
L=243.6m
36号
L=243.9m
L=243.9m
38号
L=242.9m
L=242.9m
39号
L=242.4m
L=242.4m
40号
L=243.0m
L=243.0m
41号
0
1m

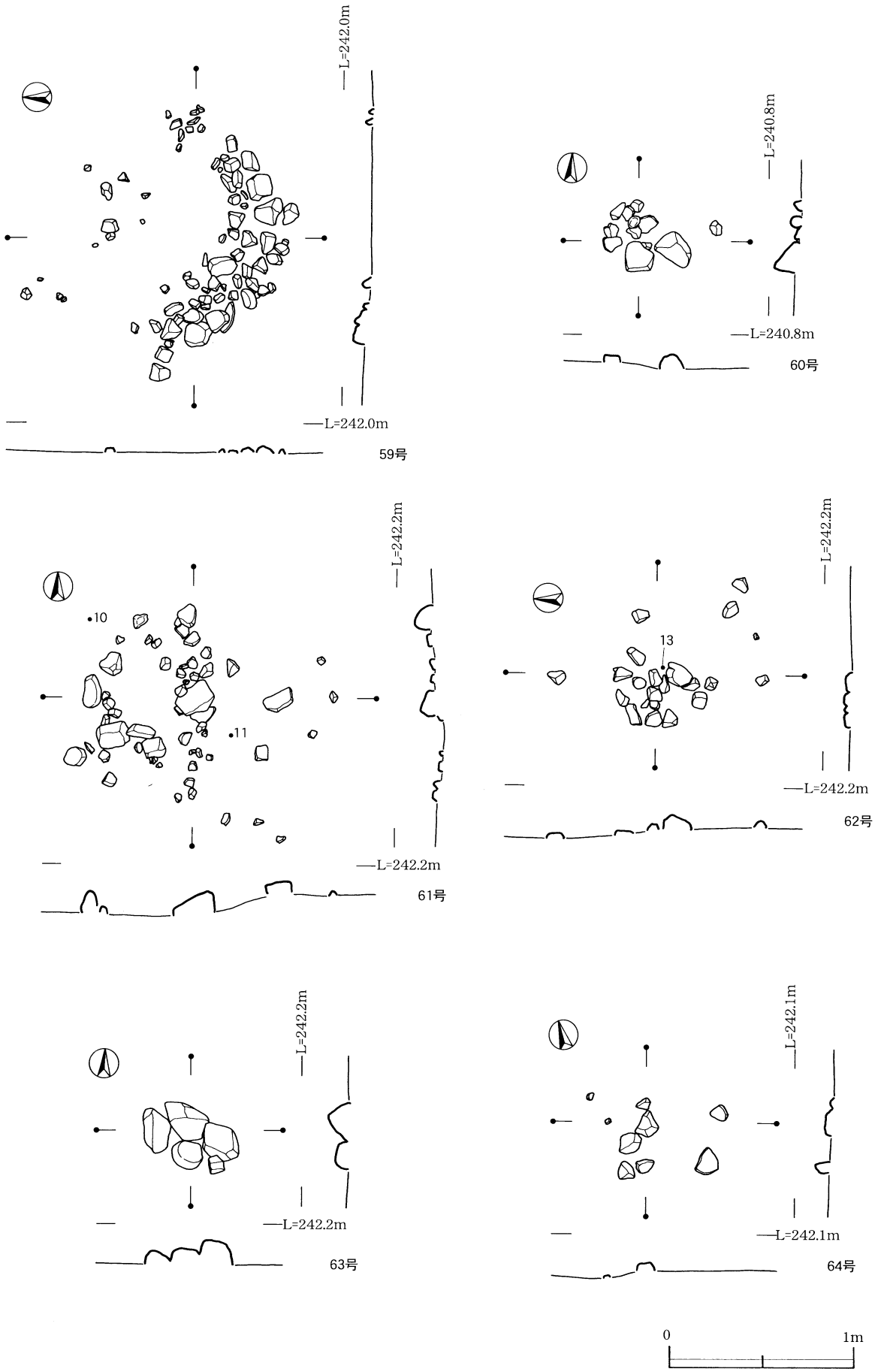
第112図　集石（6）


L=243.0m
L=243.0m
42号
L=243.0m
L=243.0m
43号
L=243.5m
L=243.5m
45号
6
L=243.2m
L=243.2m
46号
L=242.9m
L=242.9m
48号
L=243.2m
L=243.2m
47号
L=242.9m
L=242.9m
49号
L=242.7m
L=242.7m
50号
0
1m

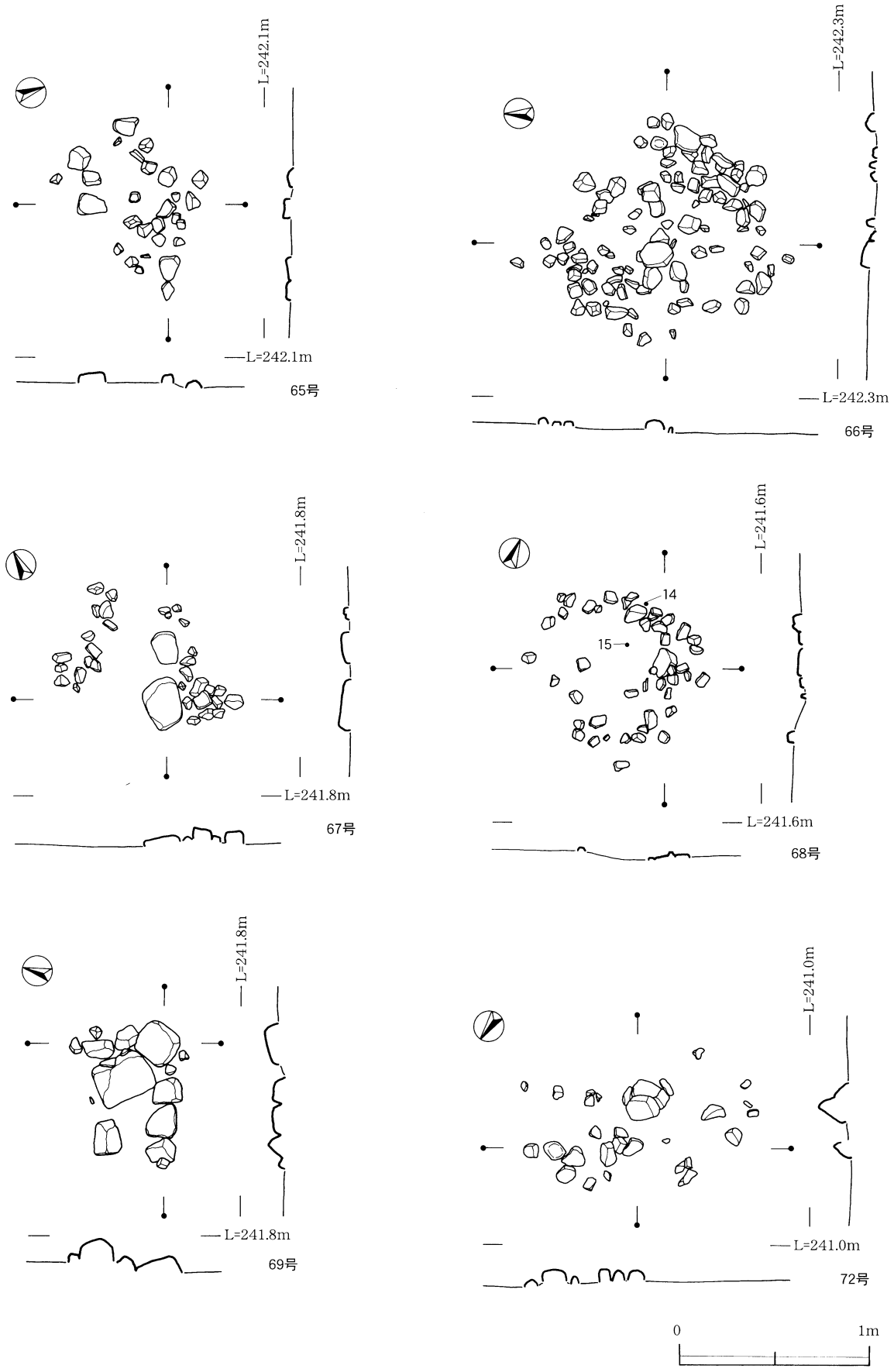
第113図　集石（7）


L=242.4m
L=242.4m
51号
L=242.3m
L=242.3m
52号
L=242.3m
L=242.3m
53号
L=241.0m
L=241.0m
54号
L=242.70m
L=242.7m
56号
L=242.4m
L=242.4m
57号
L=242.4m
L=242.4m
58号
0
1m

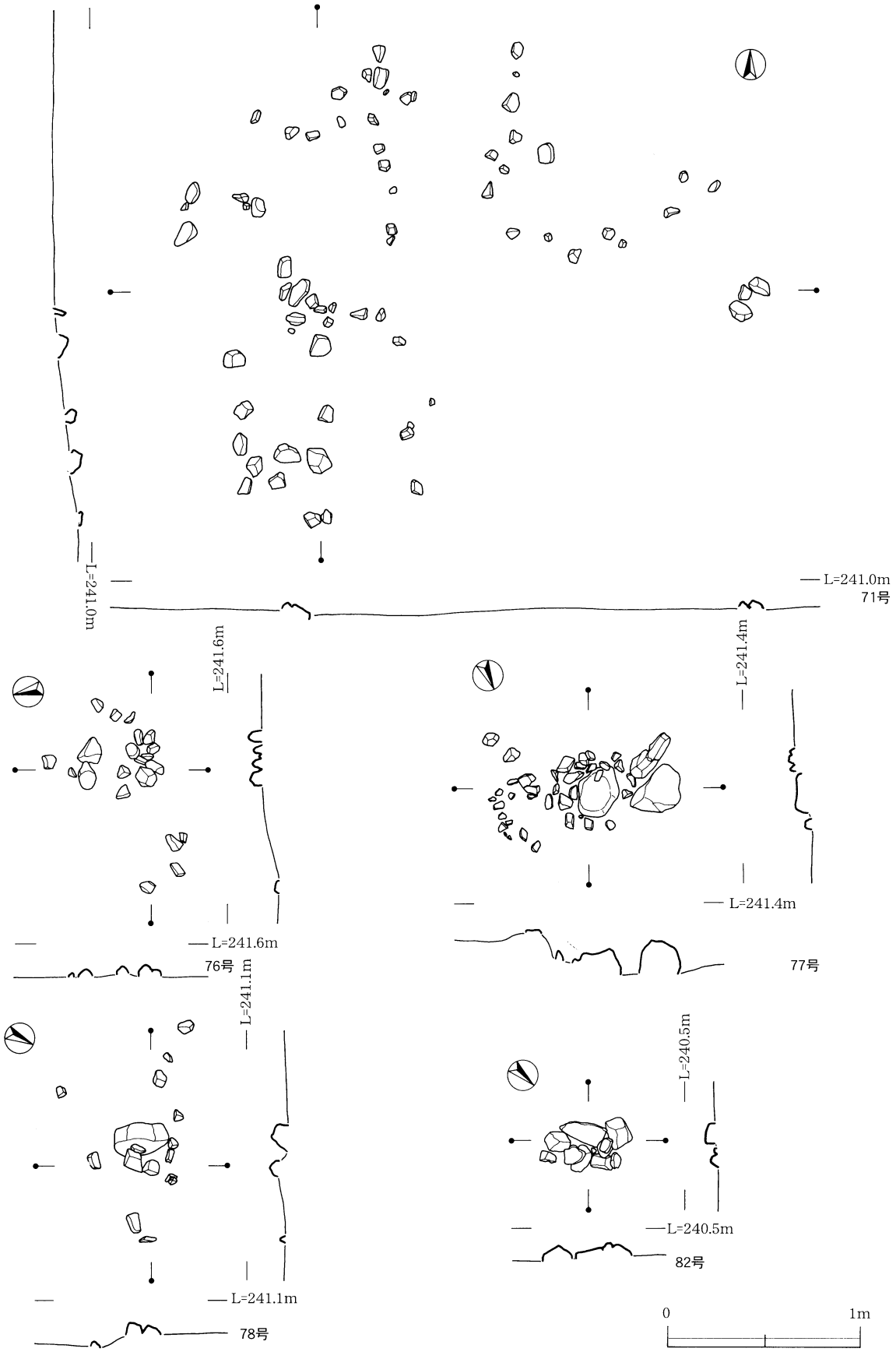
第114図　集石（8）


L=242.0m
L=242.0m
59号
L=240.8m
L=240.8m
60号
L=242.2m
10
11
L=242.2m
61号
L=242.2m
13
L=242.2m
62号
L=242.2m
L=242.2m
63号
L=242.1m
L=242.1m
64号
0
1m

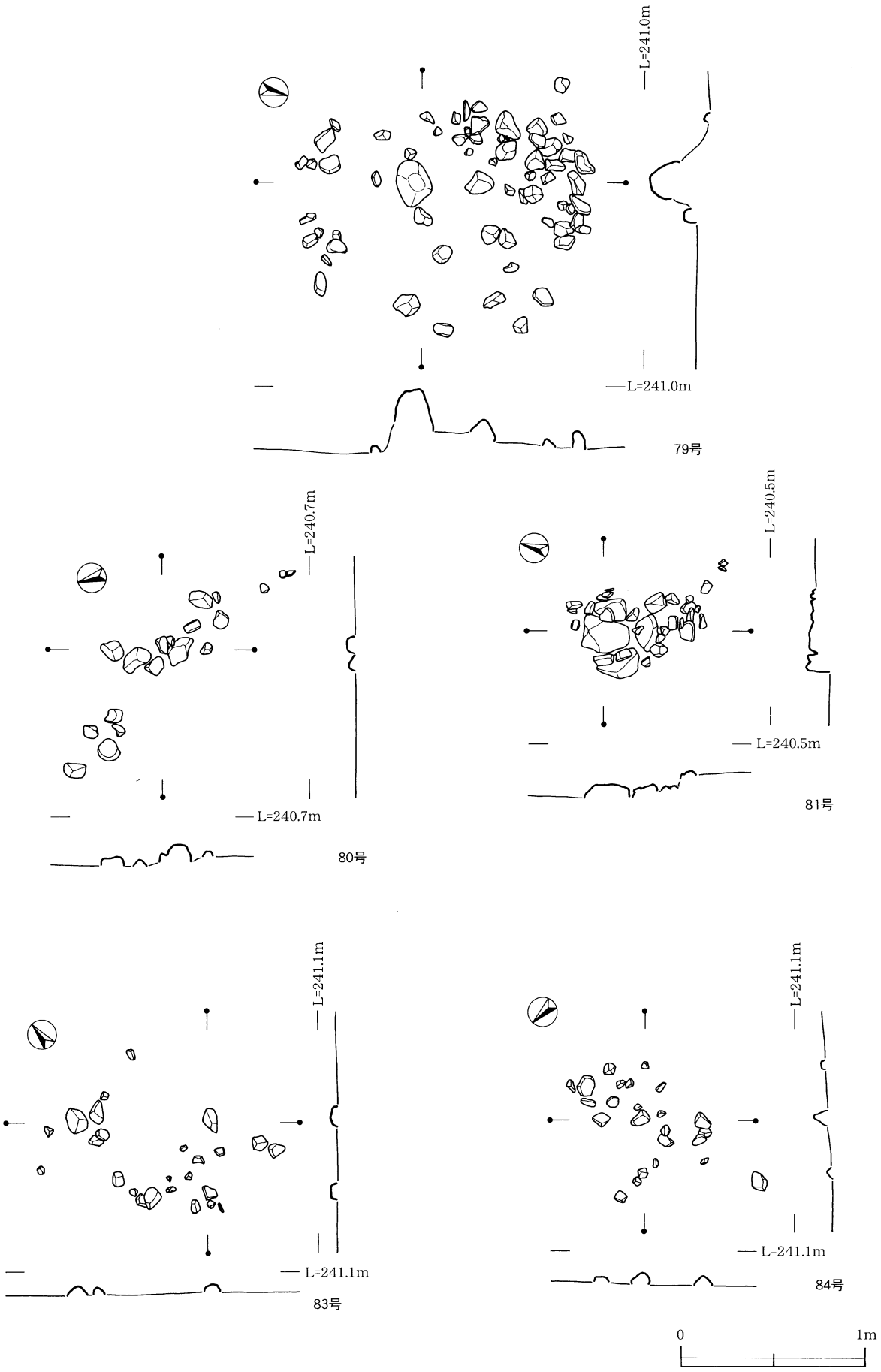
第115図　集石（9）


L=242.1m
L=242.1m
65号
L=242.3m
L=242.3m
66号
L=241.8m
L=241.8m
67号
L=241.6m
14
15
L=241.6m
68号
L=241.8m
L=241.8m
69号
L=241.0m
L=241.0m
72号
0
1m

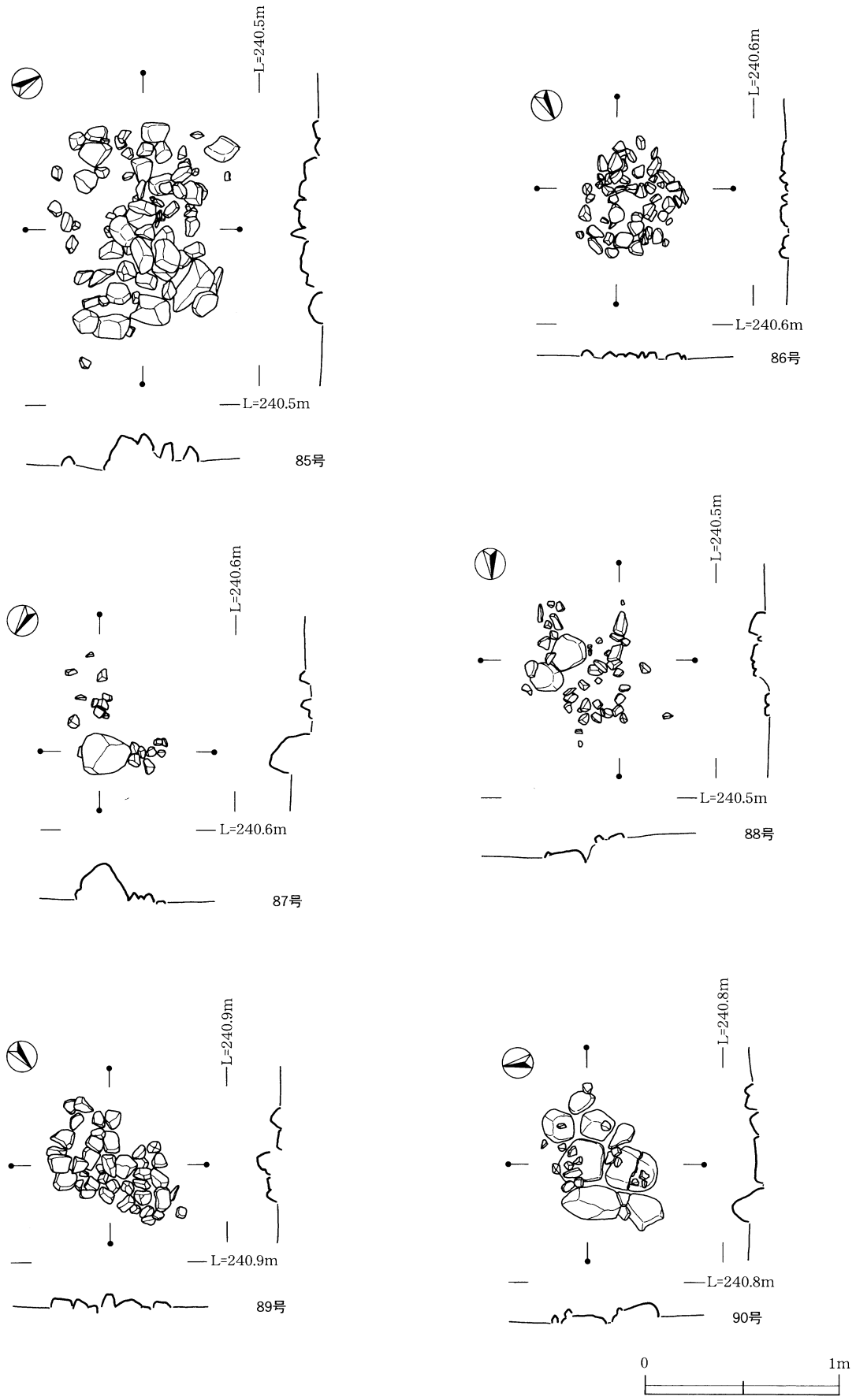
第116図　集石（10）


L=241.0m
71号
L=241.0m
L=241.6m
L=241.6m
76号
L=241.4m
L=241.4m
77号
L=241.1m
L=241.1m
78号
L=240.5m
L=240.5m
82号
0
1m

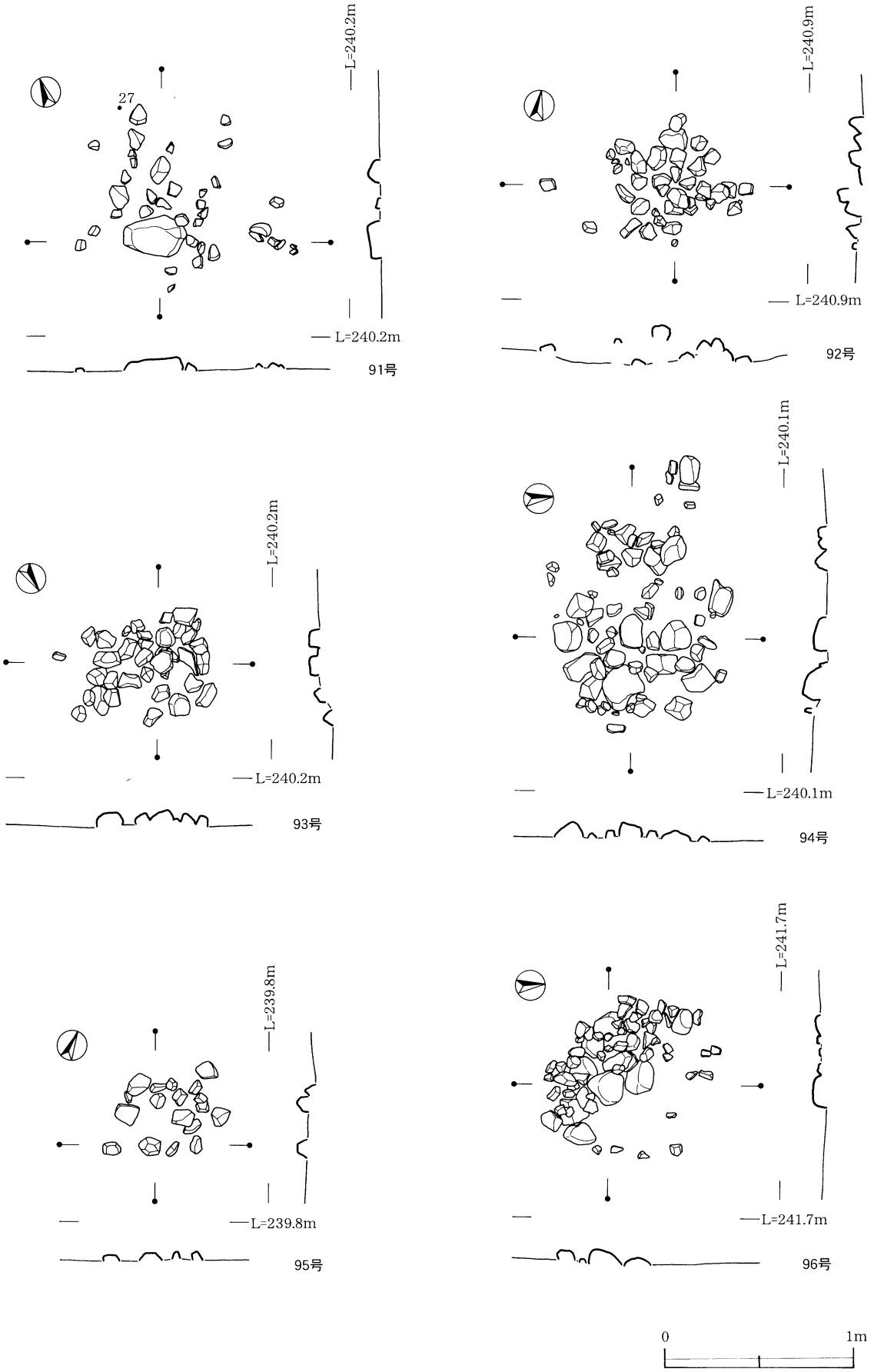
第117図　集石（11）


L=241.0m
L=241.0m
79号
L=240.7m
L=240.7m
80号
L=240.5m
L=240.5m
81号
L=241.1m
L=241.1m
83号
L=241.1m
L=241.1m
84号
0
1m

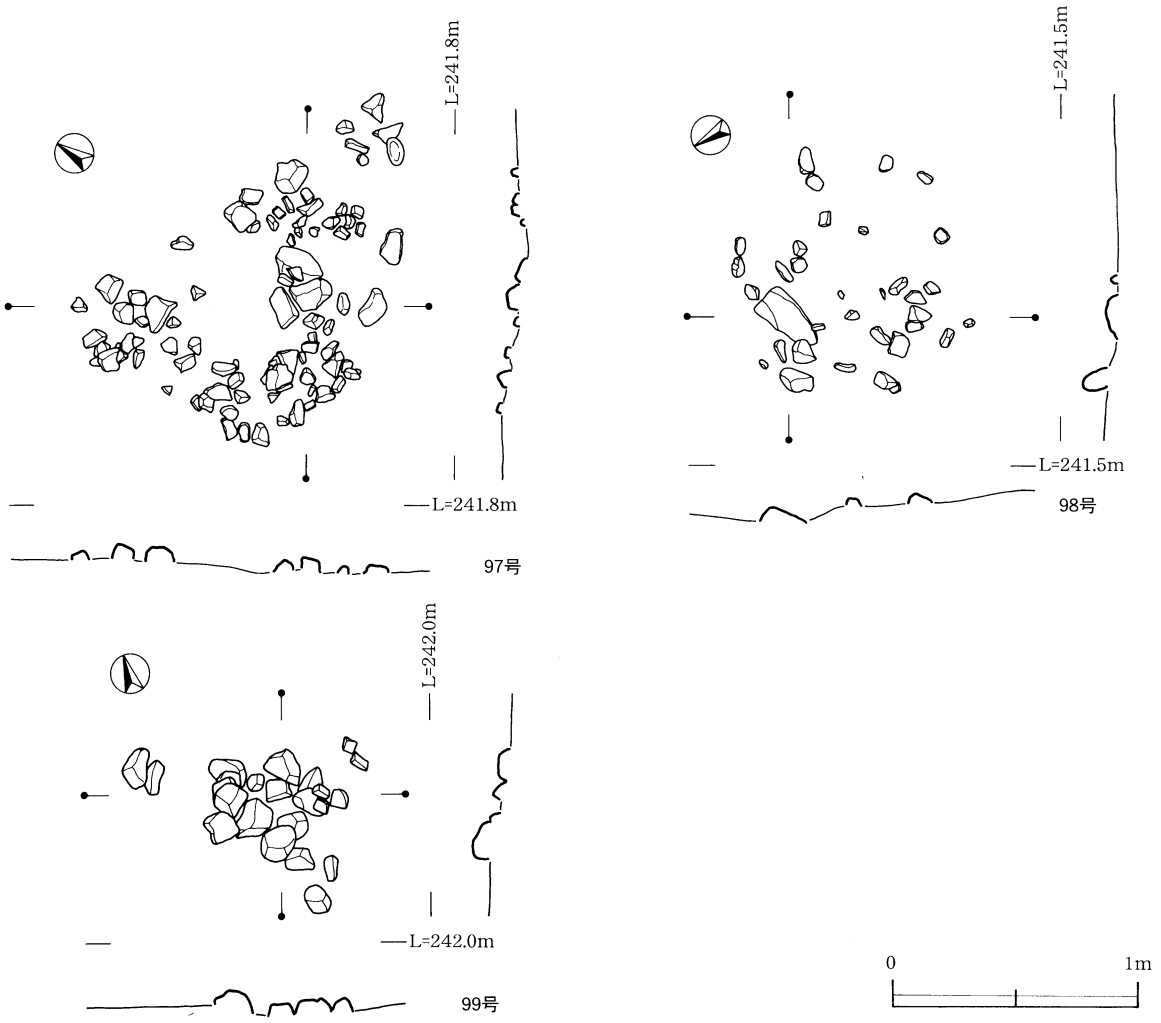
第118図　集石（12）


L=240.5m
L=240.5m
85号
L=240.6m
L=240.6m
86号
L=240.6m
L=240.6m
87号
L=240.5m
L=240.5m
88号
L=240.9m
L=240.9m
89号
L=240.8m
L=240.8m
90号
0
1m

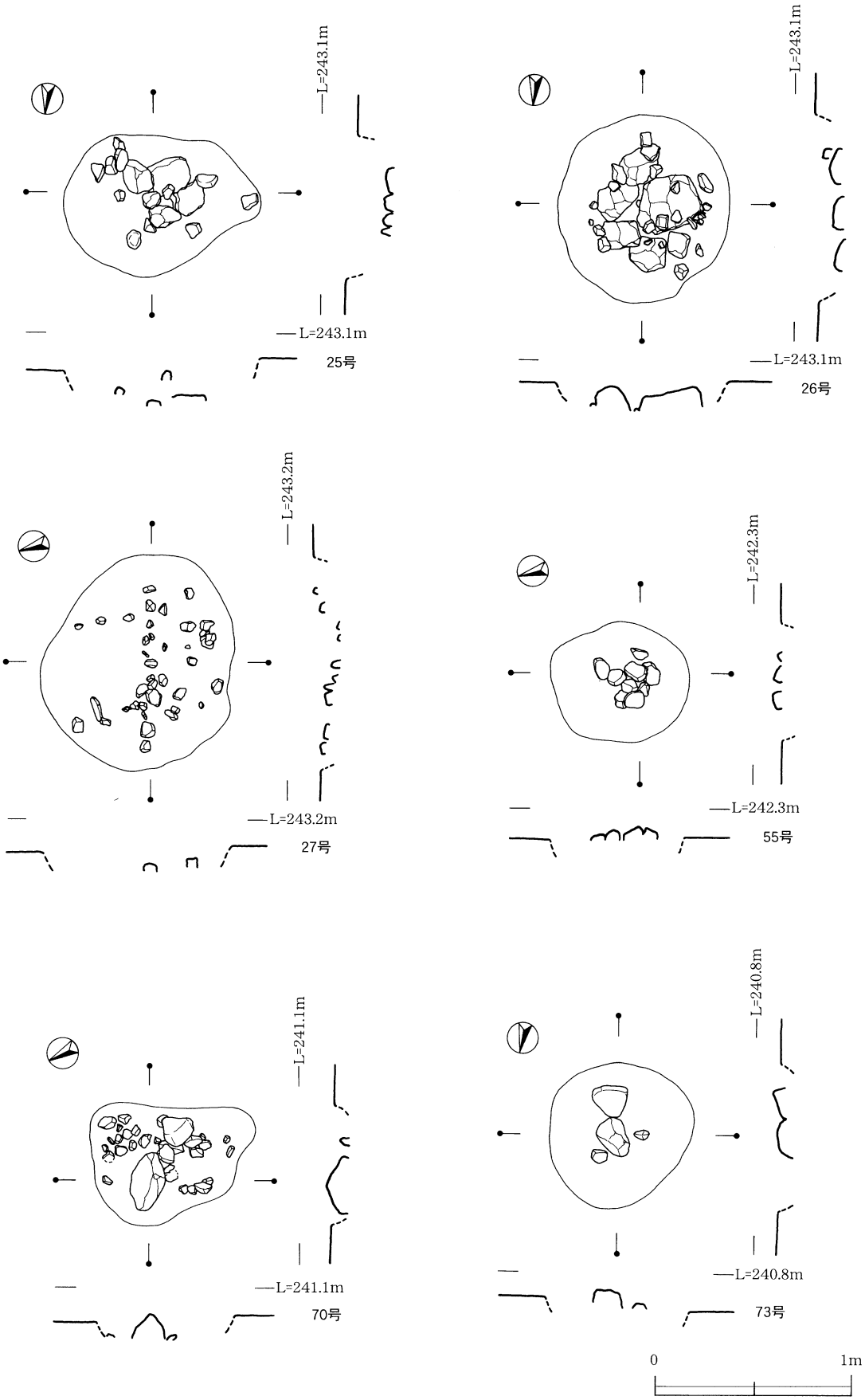
第119図　集石（13）


27
L=240.2m
L=240.2m
91号
L=240.9m
L=240.9m
92号
L=240.2m
L=240.2m
93号
L=240.1m
L=240.1m
94号
L=239.8m
L=239.8m
95号
L=241.7m
L=241.7m
96号
0
1m

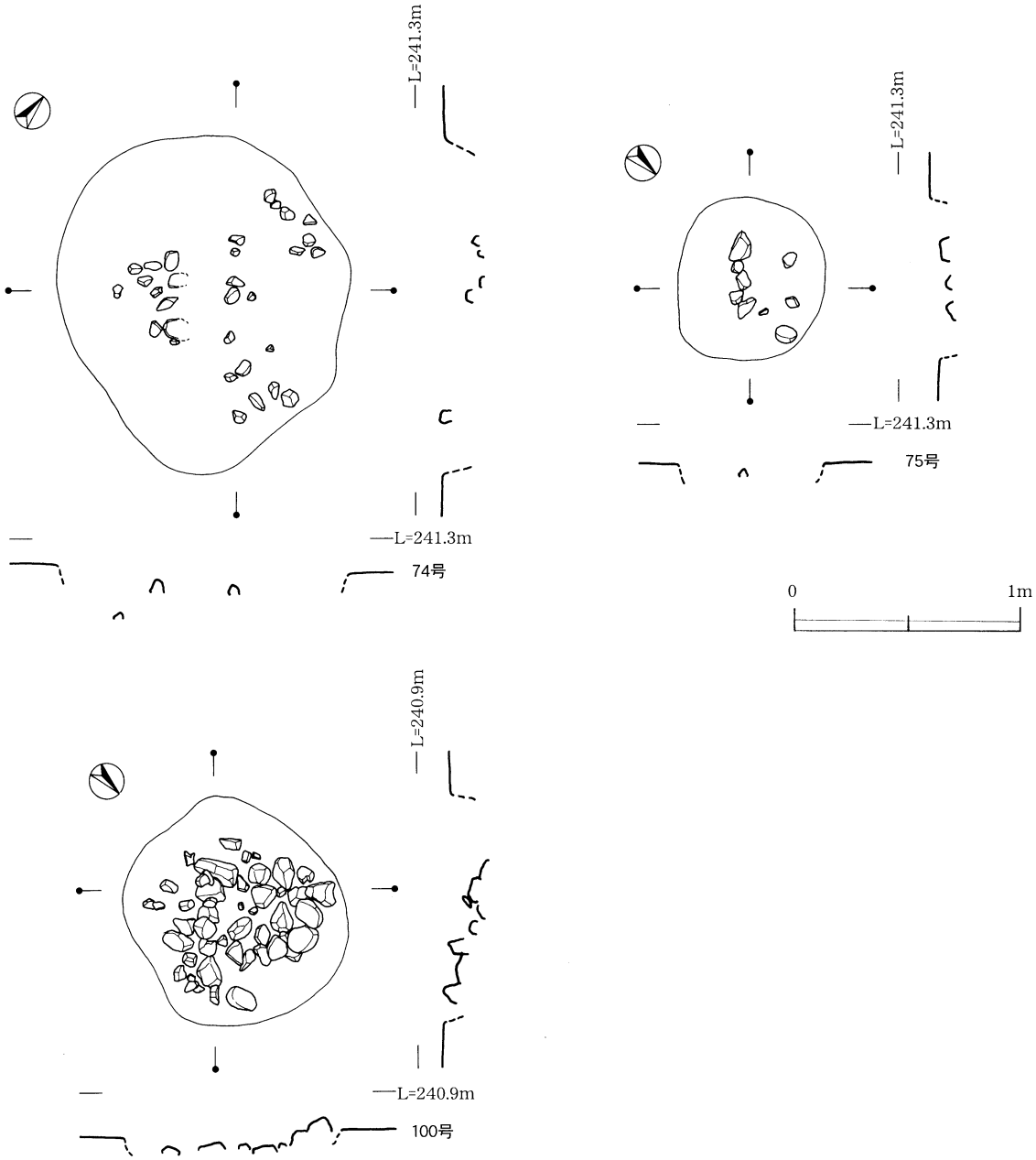
第120図　集石（14）



第121図　集石（15）


L=243.1m
L=243.1m
25号
L=243.1m
L=243.1m
26号
L=243.2m
L=243.2m
27号
L=242.3m
L=242.3m
55号
L=241.1m
L=241.1m
70号
L=240.8m
L=240.8m
73号
0
1m

第122図　集石（16）

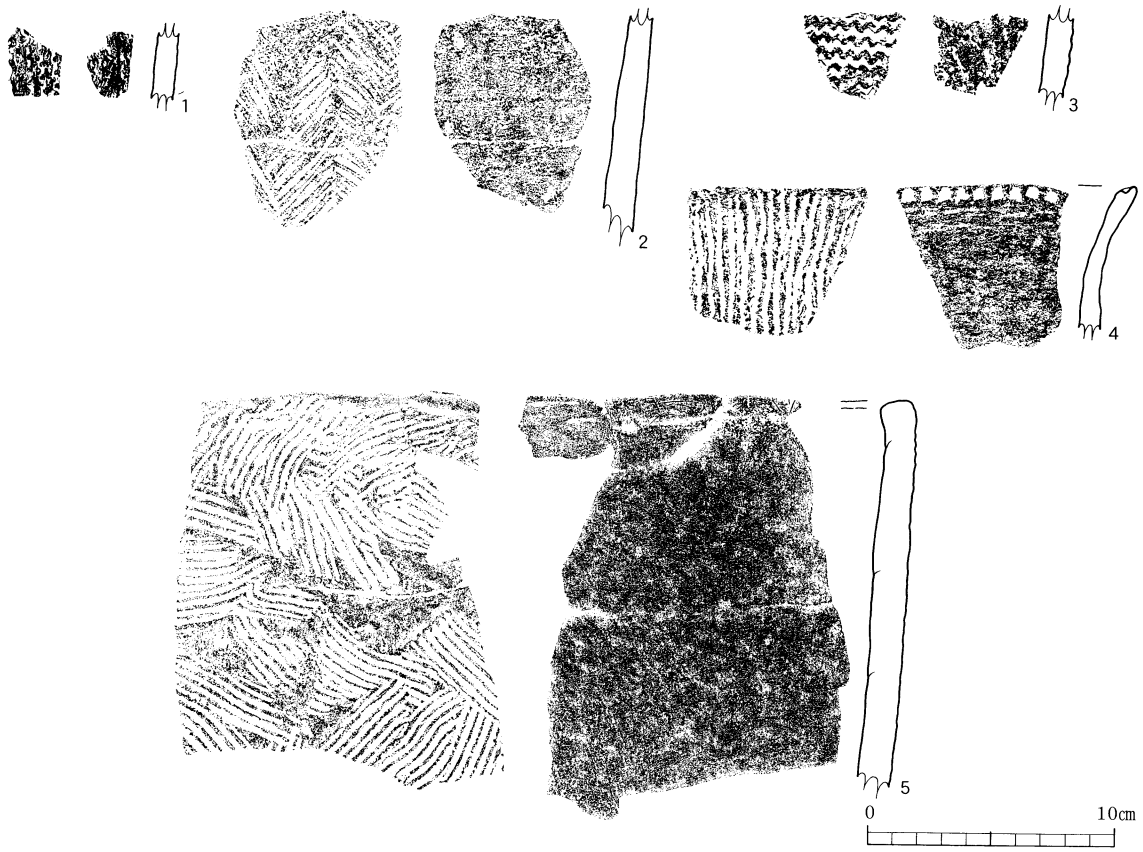


第123図　集石（17）

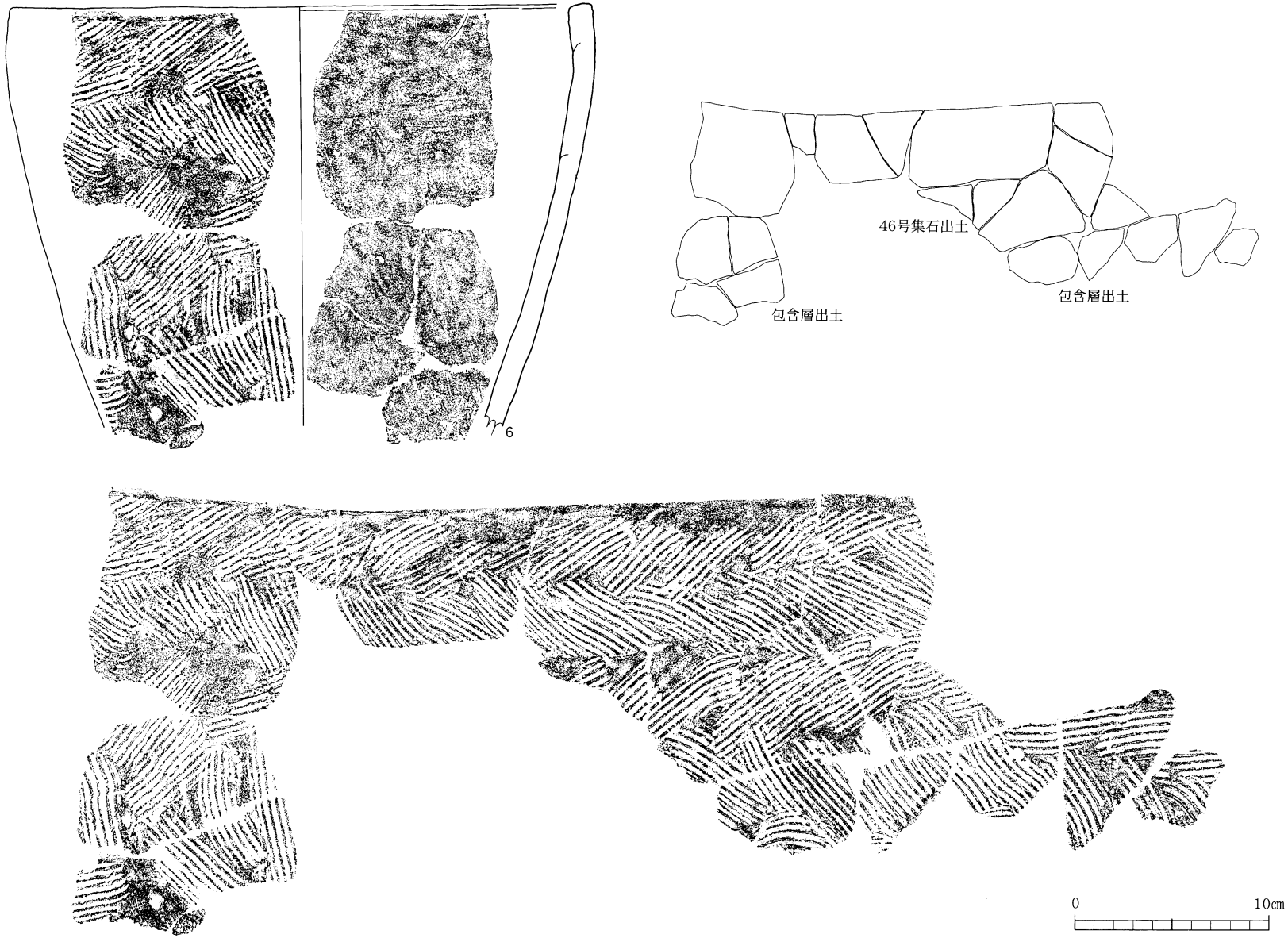
３a・３b類の可能性がある。18～21は77号集石より出土した。いずれも３類土器である。21は角筒形の底部付近の破片である。底部からの立ち上がりは，７cm程度の粘土帯を積み上げて製作されておりその上にも同様のものが積み上げられている。22は79号より出土した。間隔の広い二重施文の手法から３aもしくは３b類である可能性が考えられる。23は81号より出土した。24は82号より出土した。25・26は83号より出土した。両者共に押型文が施文されている。27は91号より出土した。器壁の薄い角筒形である。文様は斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が間隔を持ってX字状に施されている。内面にはケズリ痕が確認された。

28～32は石器である。28・29は29号集石から出土した。両者は，44号集石出土の30と接合関係にあり第129図の通り接合する。面取りを施す石皿A類に該当する。31・32は82号集石より出土した。31は方形に近い磨石で，火を受けたためか風化が著しい。32は面取りを施す石皿A類である。中央部が明瞭に窪み外側の厚さの半分程度の厚みしかない。

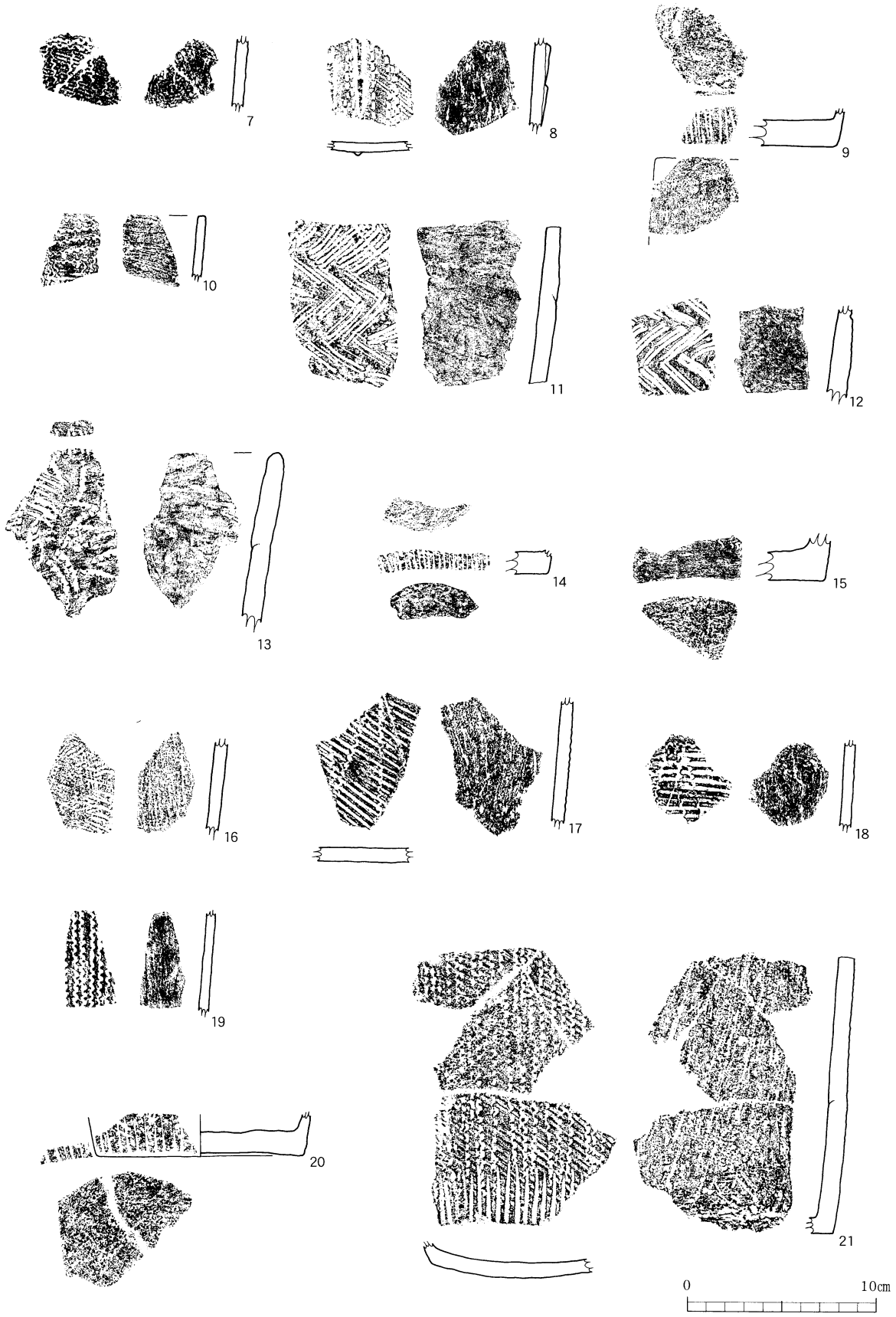
なお，第129図には６及び28～30の接合関係を示した。これで見ると，28～30の遺物は近い集石間の接合で，その距離は約10mである。６に関しては，９a類の出土状況中にも図示したが，やや広範囲に分布していることがわかる。



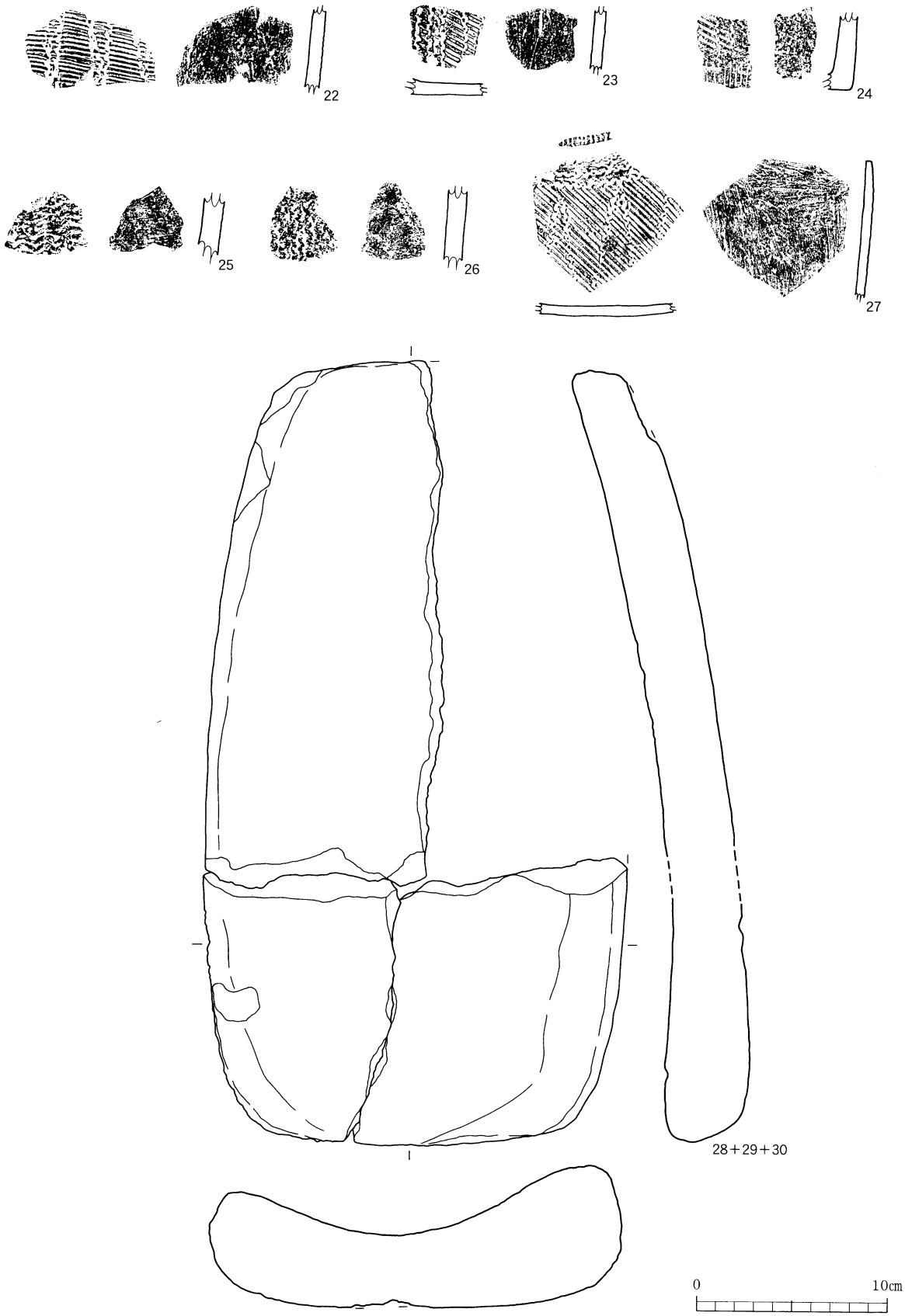
第124図　集石内遺物（１）



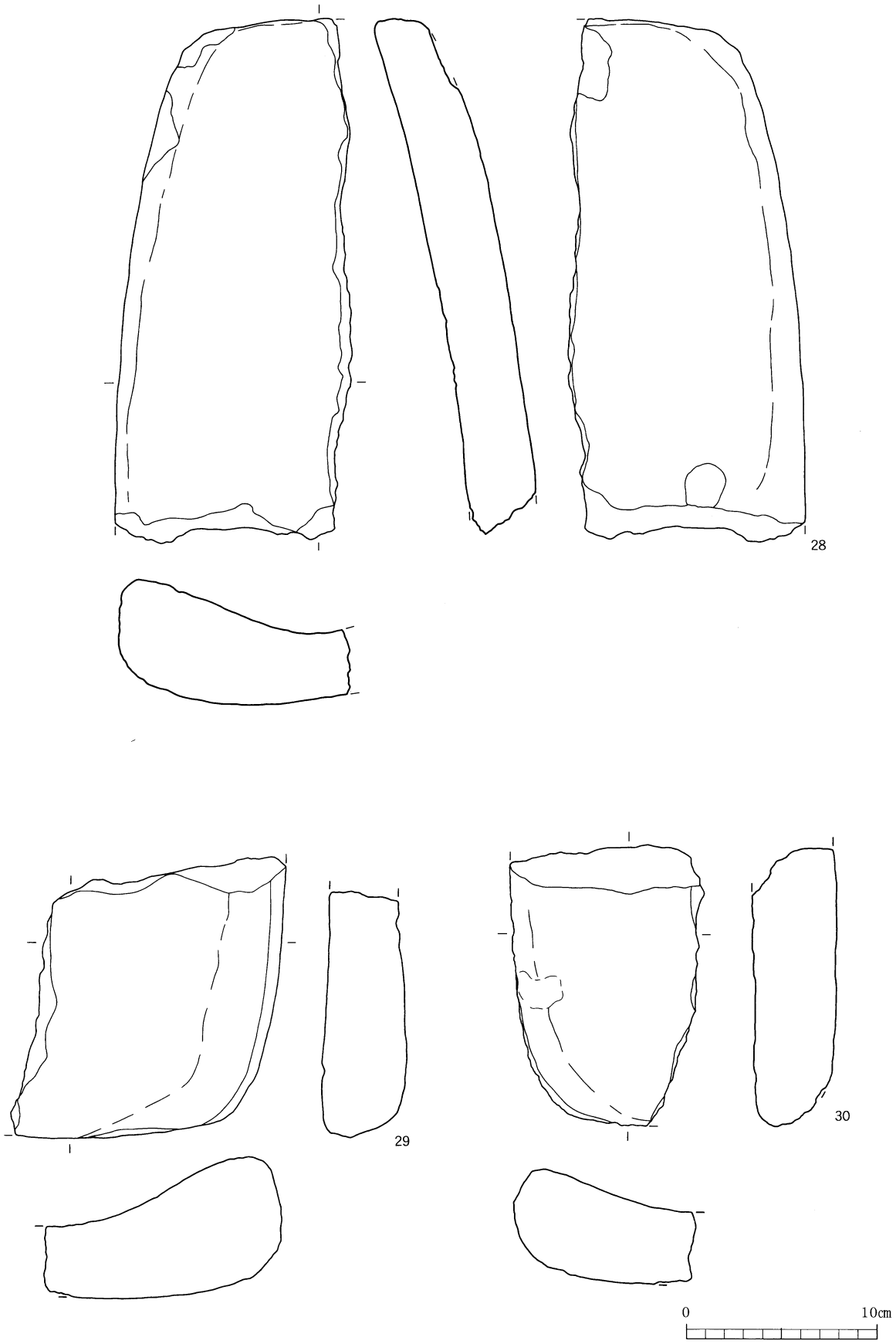
第125図　集石内遺物（2）



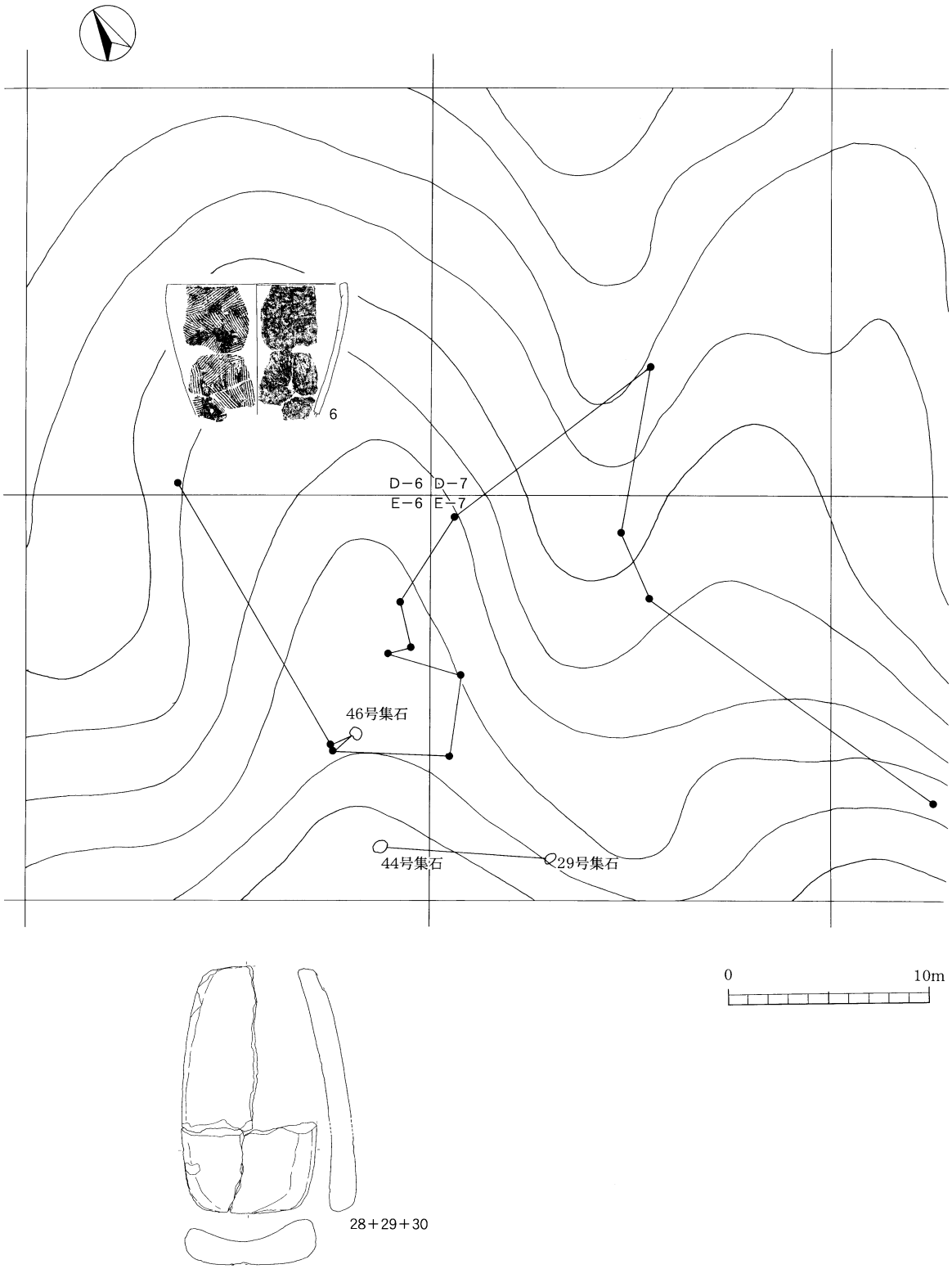
第126図　集石内遺物（3）



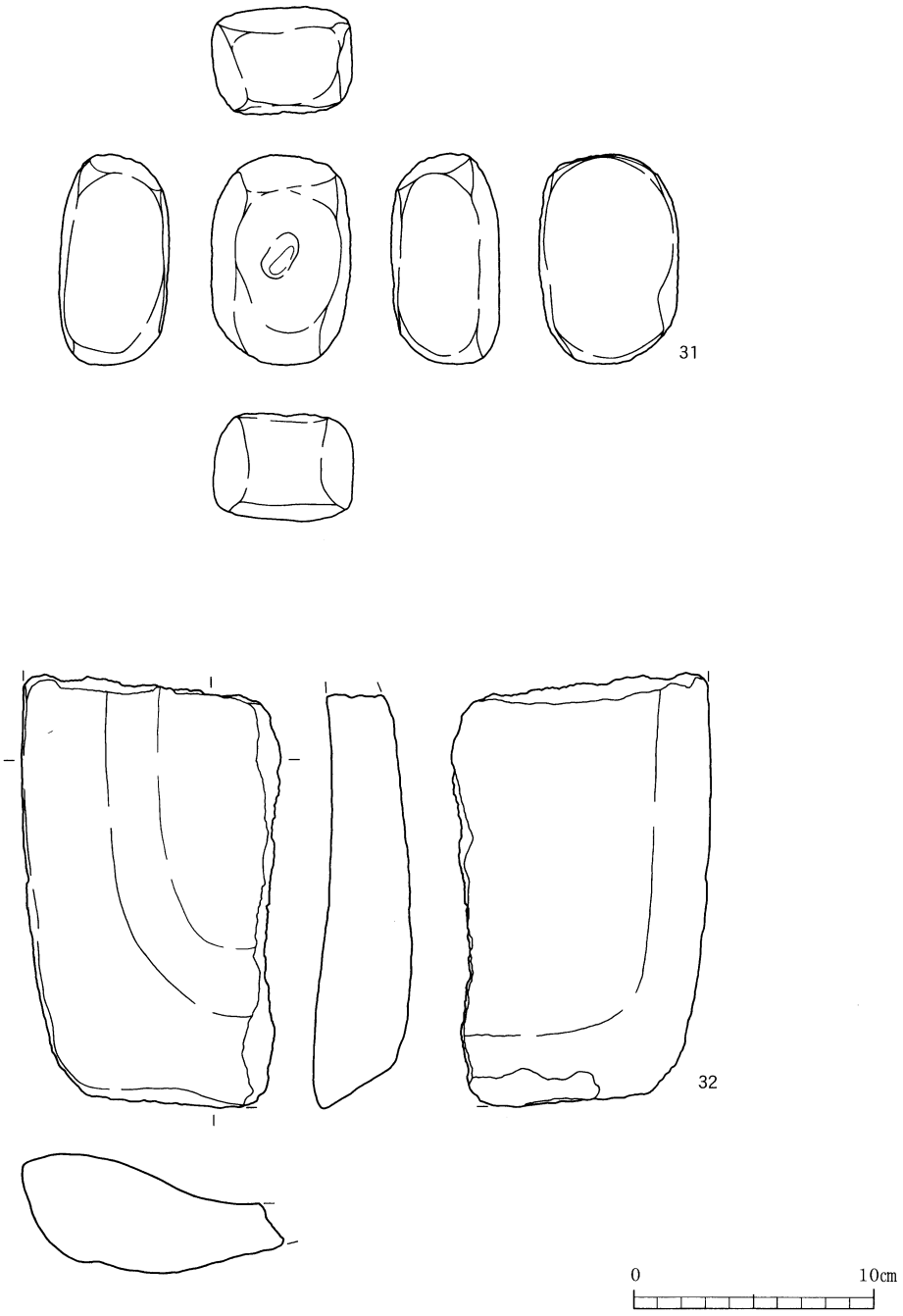
第127図　集石内遺物（4）



第128図　集石内遺物（5）



第129図　集石内遺物の接合関係



第130図　集石内遺物（6）

（4）土坑

土坑は，175基検出された。平面プランによって円形・楕円形・方形・長方形の４タイプに分類した。遺構であることのみ確認して調査を終了しているものも多く，すべてを図示することはできなかった。この点に関しては，将来の調査に委ねたい。

円形のものは，21基図示した。14号と34号は，比較的大型の土坑である。160・166号は，傾斜地での検出であり，かつ床面もその傾斜に沿うように斜位である。

楕円形のものは，22基を図示した。170号は，52号竪穴住居跡の西側に位置している。長楕円形で床面はかなり傾斜している。

方形・長方形のものは，６基図示した。40・36・174号は，小型方形である。56は角部が非常に明瞭で方形の意識が強かったことを示している。

このほかに，床面にピットを有するものや２段掘りのものなども見られた。しかしながら，これらが全体でどの程度存在しているのか，また，分布はどのようになっているのかなど未調査部分の多さから提示することはできていない。

土坑内からは，遺物の出土は少ない。ここでは10点を図化した。

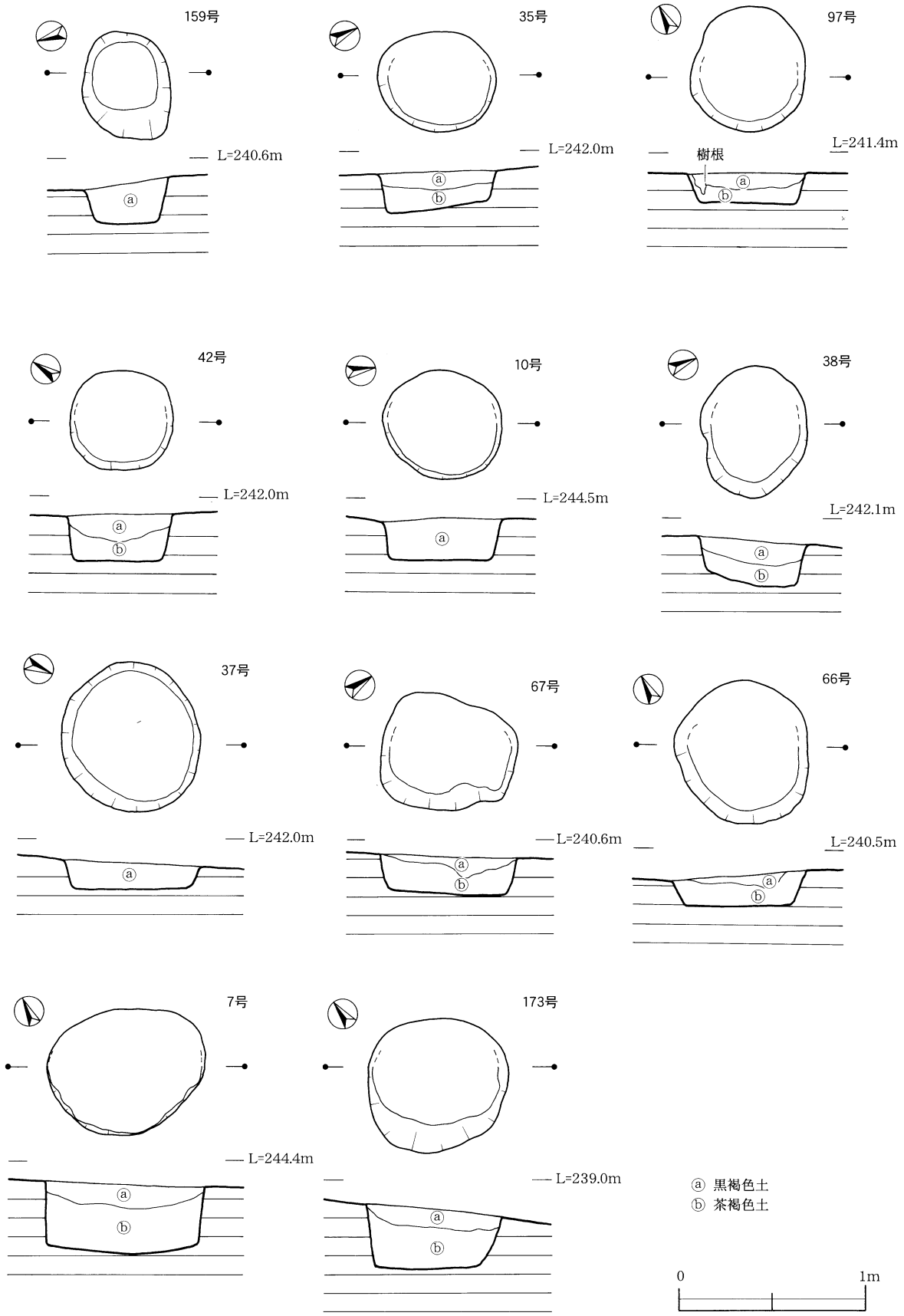
１は34号土坑内からの出土遺物である。９b類に該当する。２は98号土坑から出土した。３・４は103号土坑より出土している。いずれも９b類である。５～７は135号土坑より出土した。この土坑は，45号竪穴住居跡を切って構築されている。さらに，135号土坑は136号土坑に切られており，８・９はその136号出土の土器である。10は171号土坑より出土した10類に属する。

（5）道跡

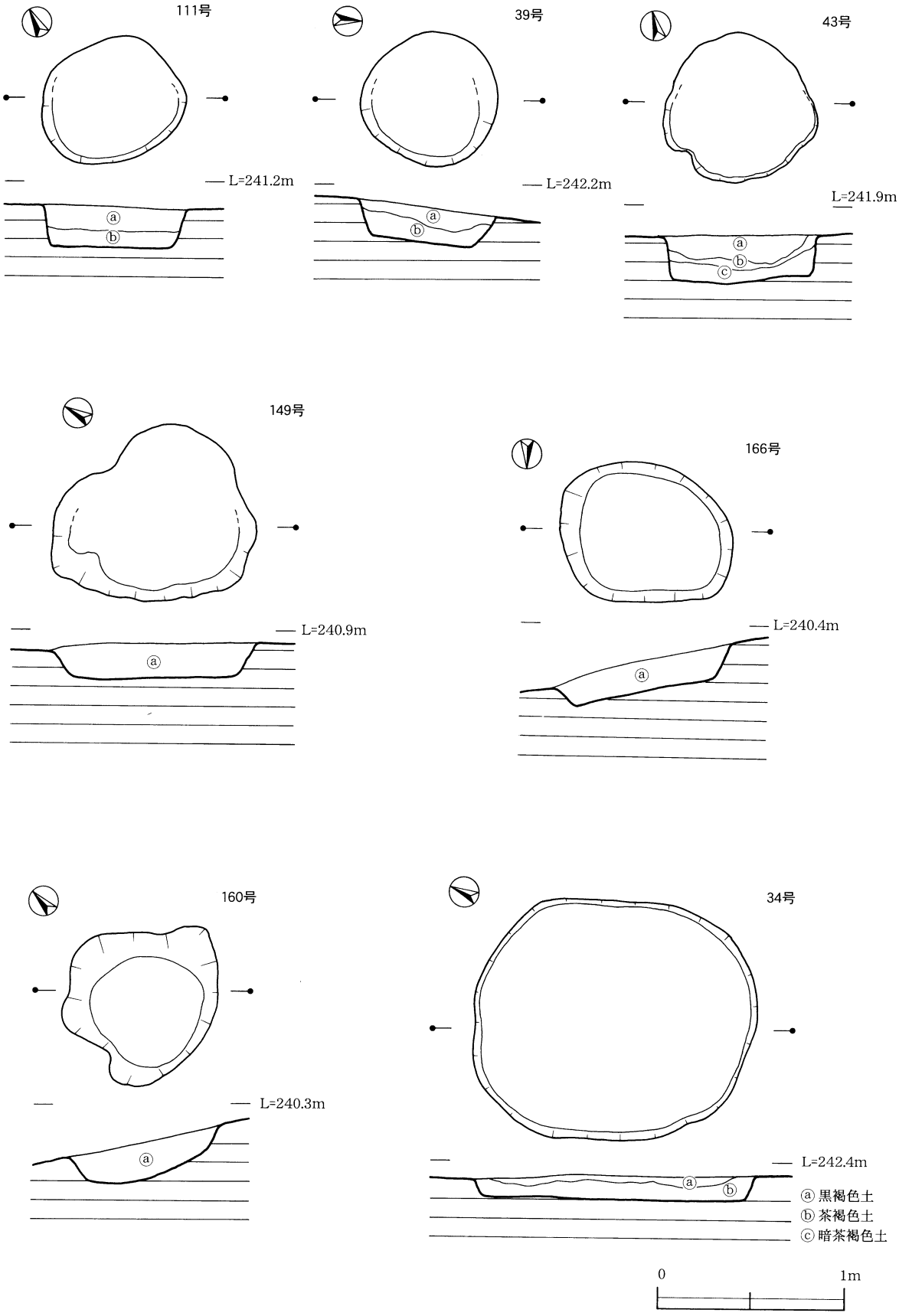
道跡としたものは，調査区内において南北に走る浅い谷状地形である。この部分は，X層がほとんど流出しており長期間の撹乱を受けていたことが遺物の出土状況などから推察できる。すなわち，３・４類などの土器のみでなく９類や10類土器を含んでいることから，この谷状地形はかなり長期間存在していたと考えられるのである。加えて，この部分には遺構の重なりがほとんど確認されなかった。この点から，道的な役割を果たしていたものであると位置付けた。

東側谷状地形は道跡１とする。この道跡１は比較的浅く，F－７区より発生している。複数の支線状に分かれており不自然さも残る。硬化面などは確認されなかった。

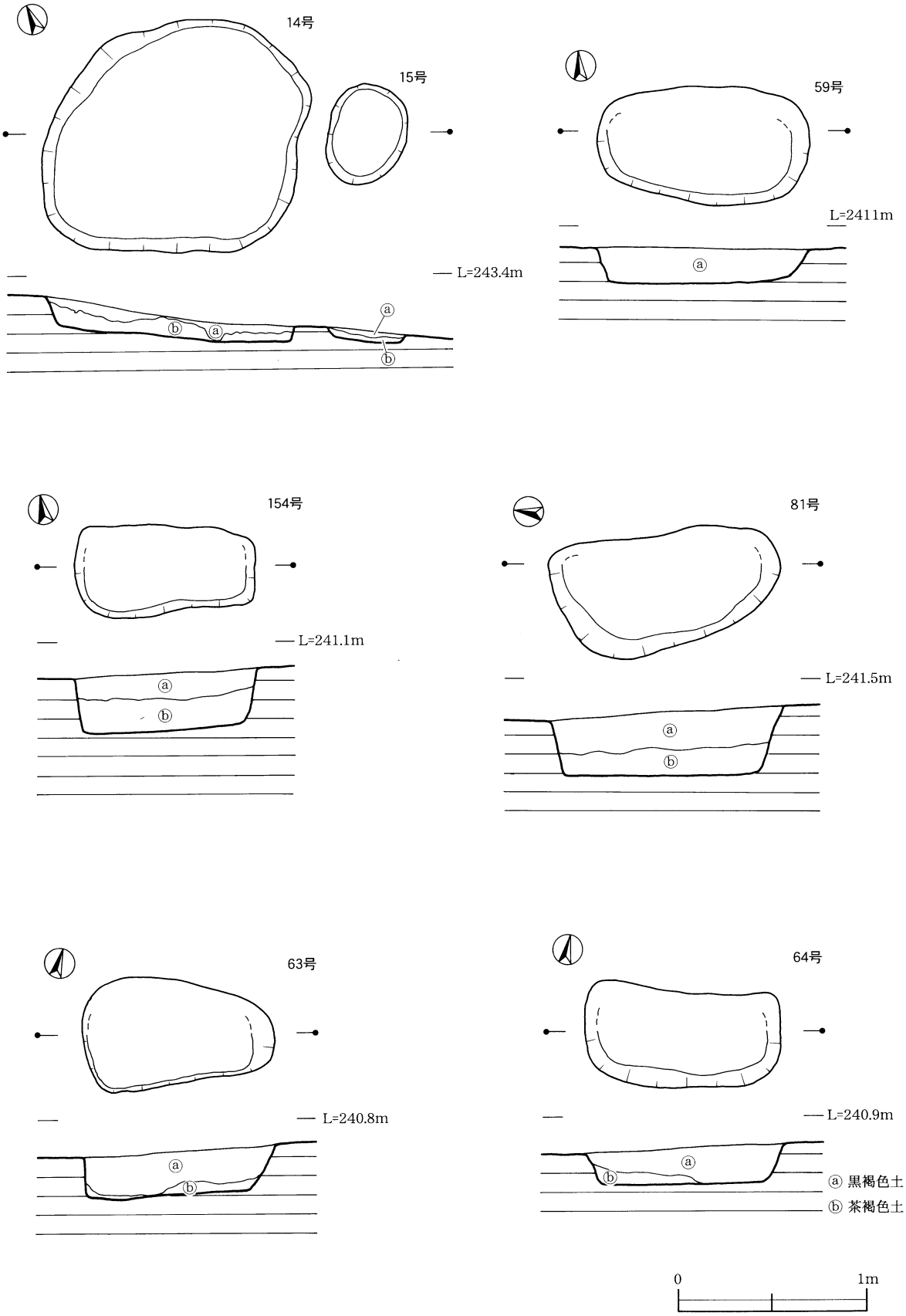
西側谷状地形は道跡２とする。かなり急勾配である。調査された範囲で推察すると，北側では追加調査cトレンチの方向へ延び，南側ではG－７区のコンターに繋がると思われる。また，D－６区で分岐している支線状のものは，E－６区に見られる遺構のない空間部分へと繋がっている可能性が考えられる。


159号
L=240.6m
35号
L=242.0m
97号
L=241.4m
樹根
42号
L=242.0m
10号
L=244.5m
38号
L=242.1m
37号
L=242.0m
67号
L=240.6m
66号
L=240.5m
7号
L=244.4m
173号
L=239.0m
ⓐ 黒褐色土
ⓑ 茶褐色土
0
1m

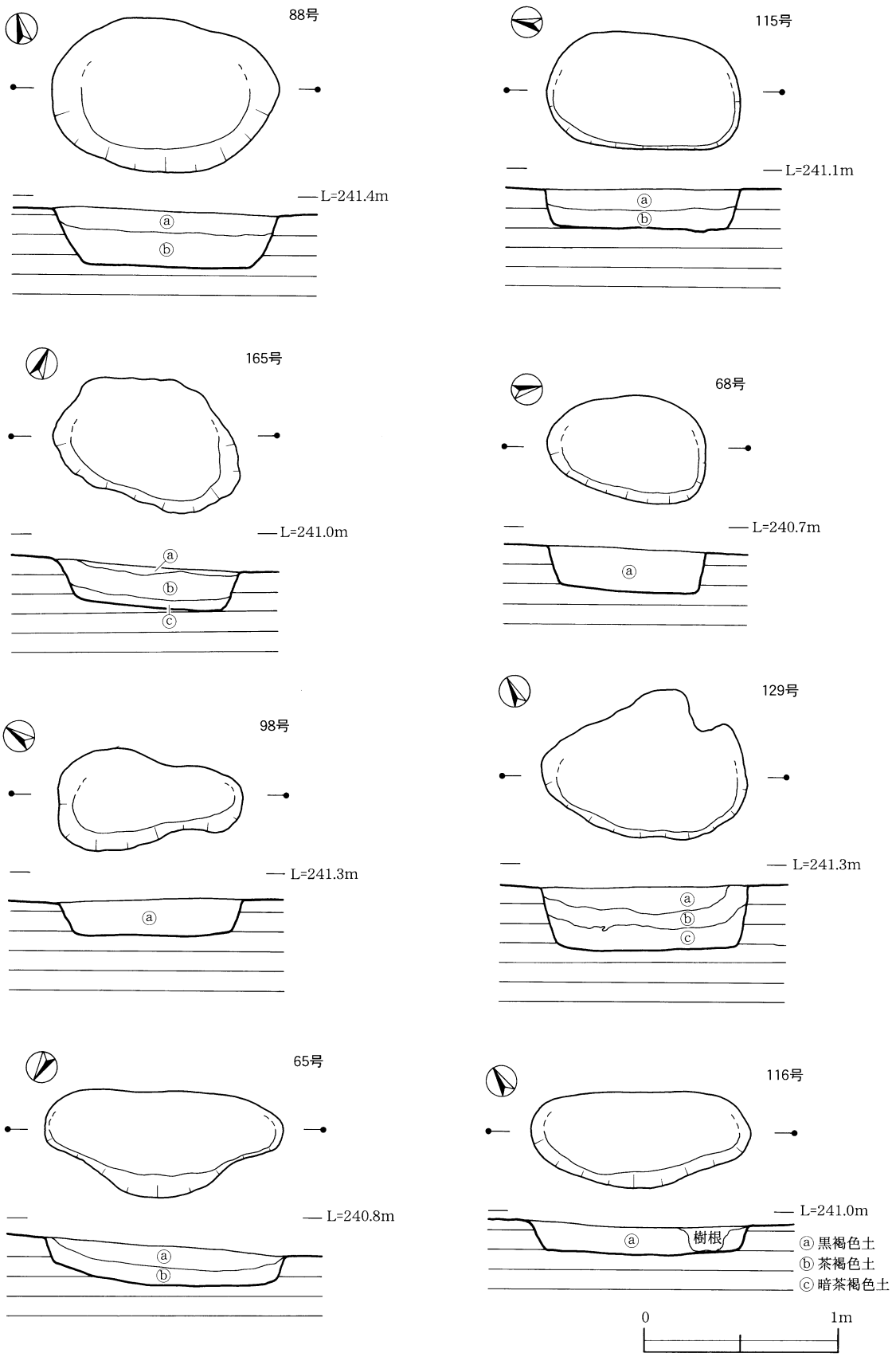
第131図　土坑（1）


111号
L=241.2m
39号
L=242.2m
43号
L=241.9m
149号
L=240.9m
166号
L=240.4m
160号
L=240.3m
34号
L=242.4m
ⓐ 黒褐色土
ⓑ 茶褐色土
ⓒ 暗茶褐色土
0
1m

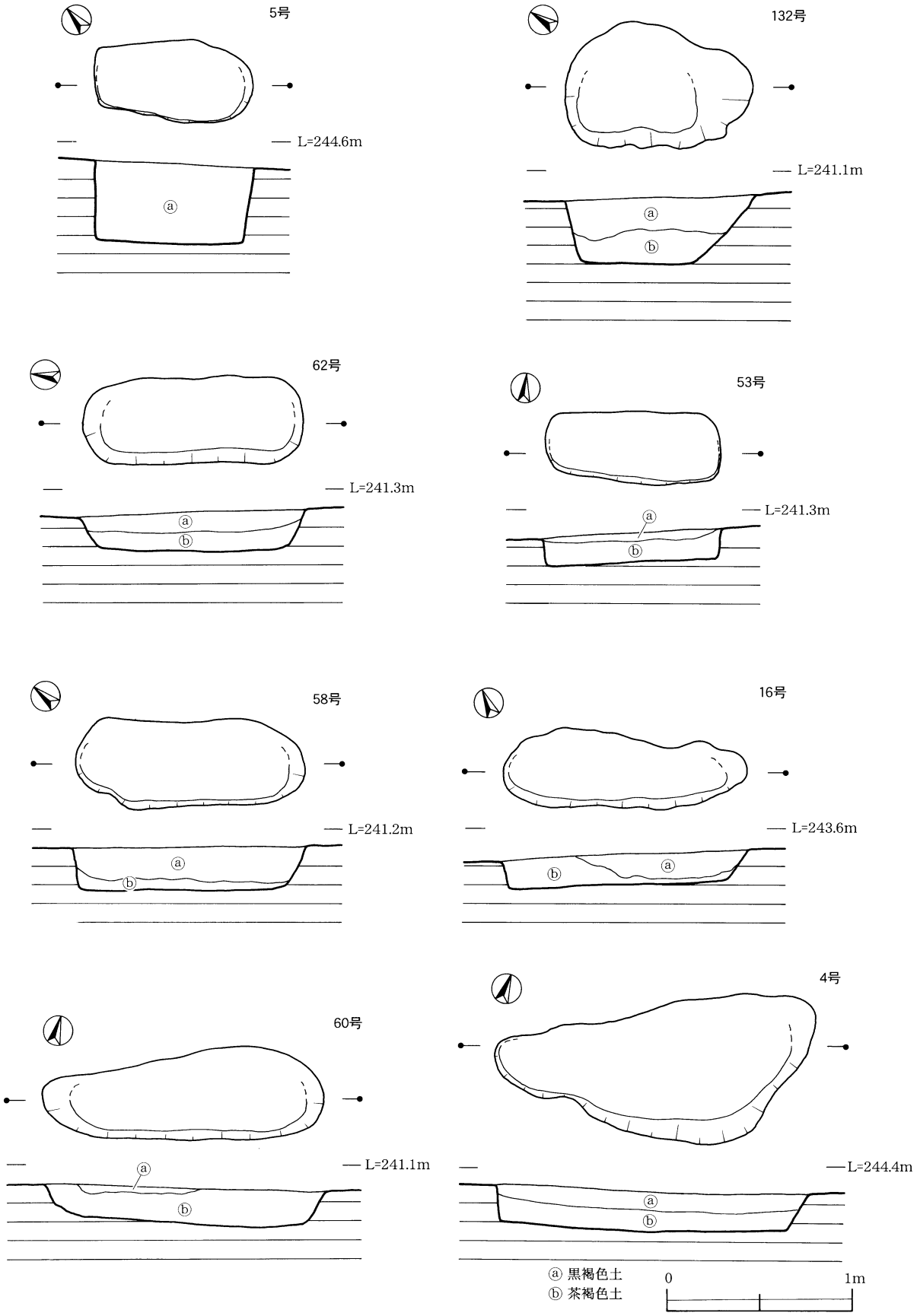
第132図　土坑（2）


14号
15号
L=243.4m
ⓐ
ⓑ
59号
L=2411m
154号
L=241.1m
81号
L=241.5m
63号
L=240.8m
64号
L=240.9m
ⓐ 黒褐色土
ⓑ 茶褐色土
0
1m

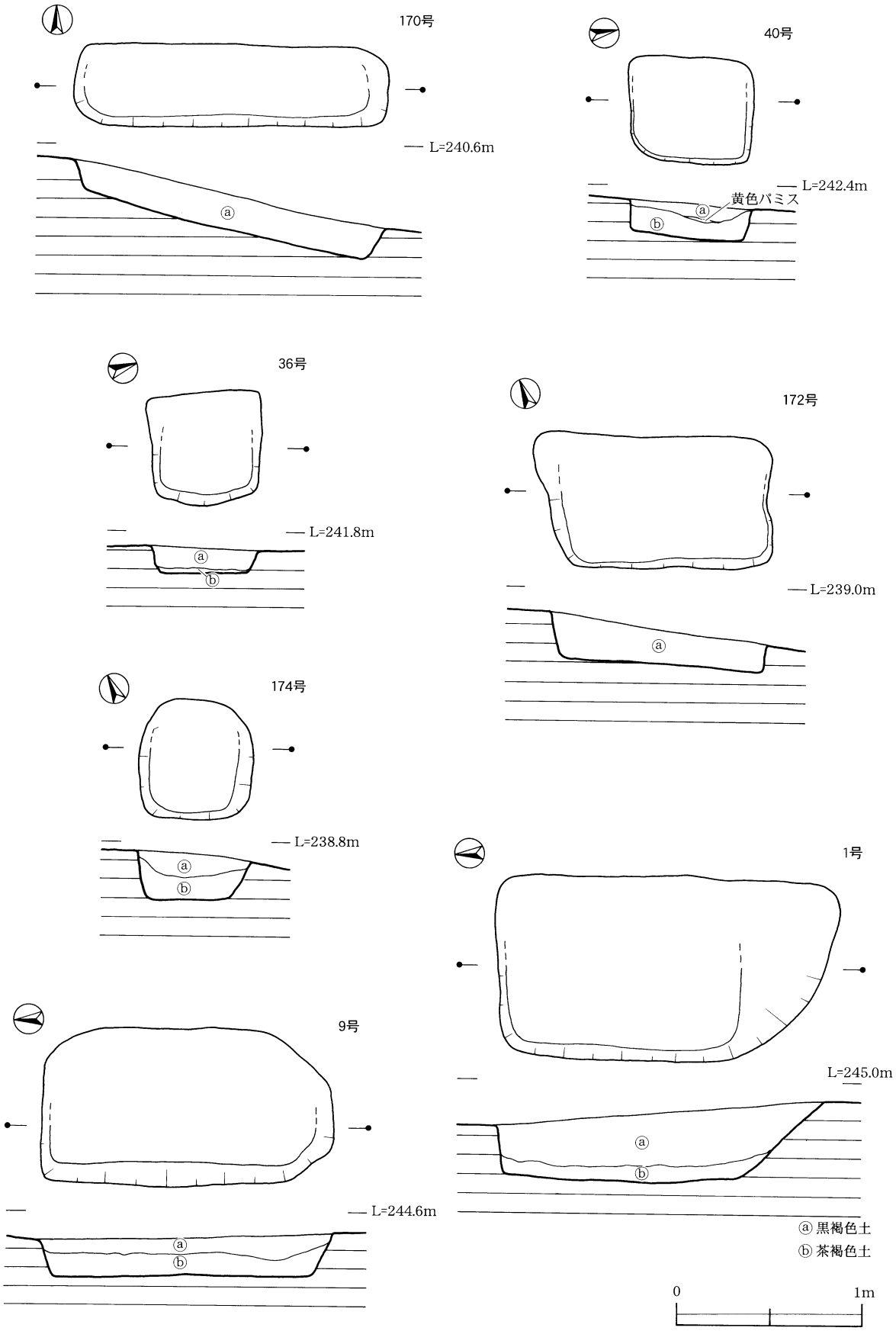
第133図　土坑（3）


88号
L=241.4m
115号
L=241.1m
165号
L=241.0m
68号
L=240.7m
98号
L=241.3m
129号
L=241.3m
65号
L=240.8m
116号
L=241.0m
樹根
ⓐ 黒褐色土
ⓑ 茶褐色土
ⓒ 暗茶褐色土
0
1m

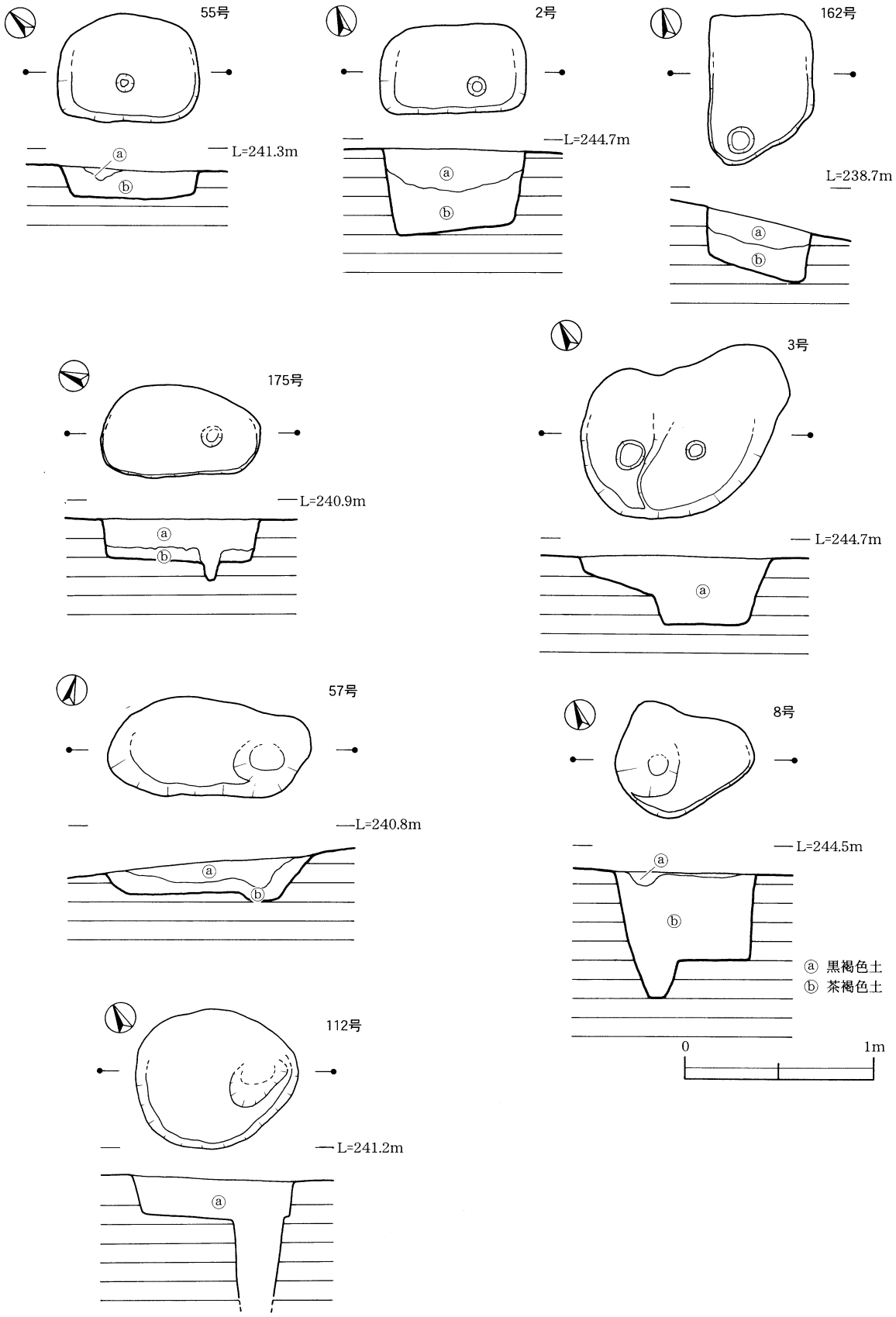
第134図　土坑（4）


5号
L=244.6m
ⓐ
132号
L=241.1m
ⓐ
ⓑ
62号
L=241.3m
ⓐ
ⓑ
53号
L=241.3m
ⓐ
ⓑ
58号
L=241.2m
ⓐ
ⓑ
16号
L=243.6m
ⓐ
ⓑ
60号
L=241.1m
ⓐ
ⓑ
4号
L=244.4m
ⓐ
ⓑ
ⓐ 黒褐色土
ⓑ 茶褐色土
0
1m

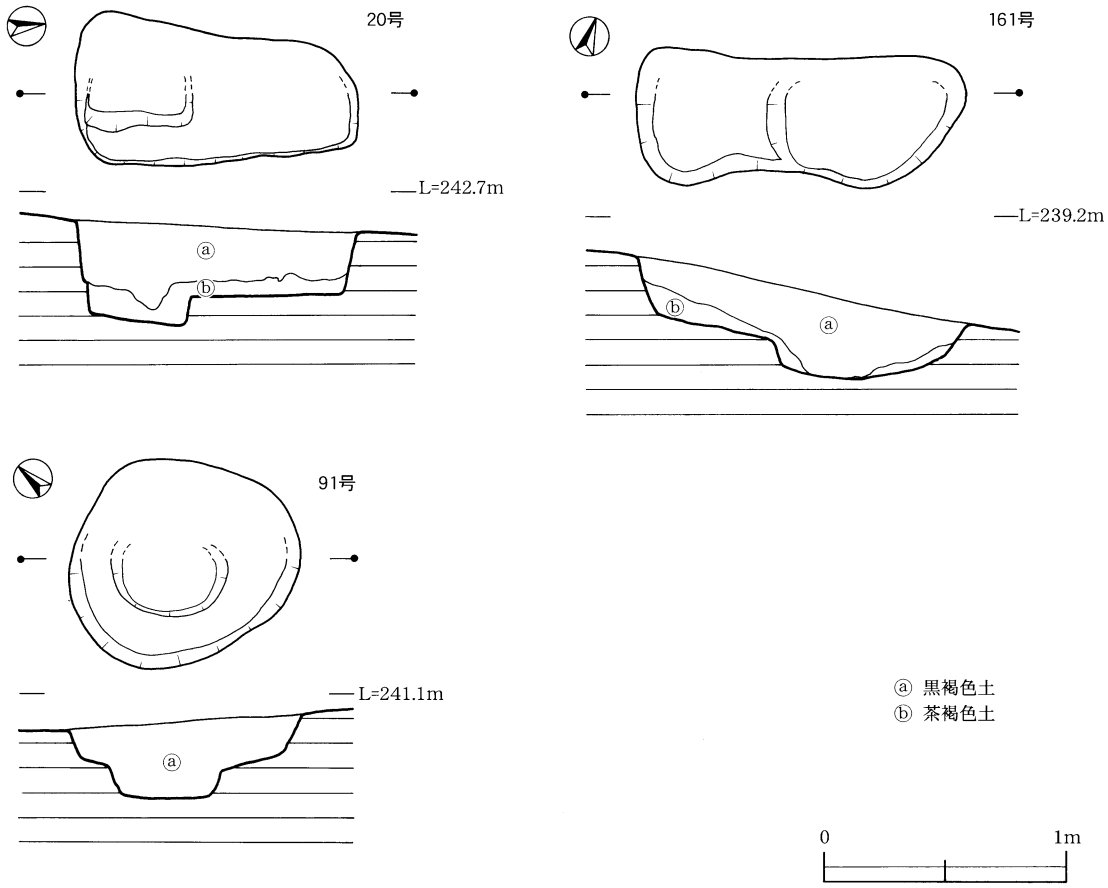
第135図　土坑（5）


170号
L=240.6m
ⓐ
40号
L=242.4m
黄色パミス
ⓐ
ⓑ
36号
L=241.8m
ⓐ
ⓑ
172号
L=239.0m
ⓐ
174号
L=238.8m
ⓐ
ⓑ
1号
L=245.0m
ⓐ
ⓑ
9号
L=244.6m
ⓐ
ⓑ
ⓐ 黒褐色土
ⓑ 茶褐色土
0
1m

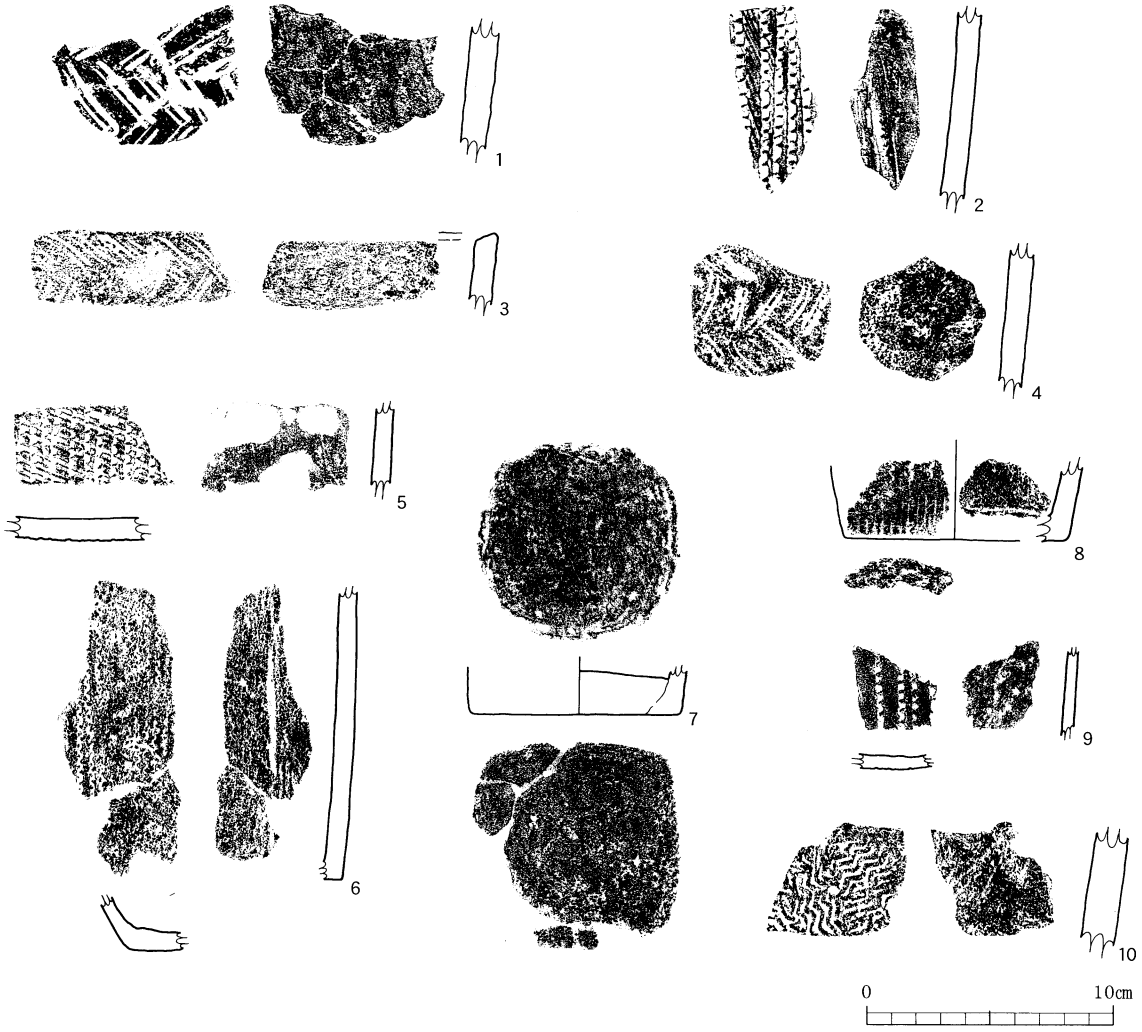
第136図　土坑（6）


55号
L=241.3m
2号
L=244.7m
162号
L=238.7m
175号
L=240.9m
3号
L=244.7m
57号
L=240.8m
8号
L=244.5m
112号
L=241.2m
ⓐ 黒褐色土
ⓑ 茶褐色土
0
1m

第137図　土坑（7）



第138図　土坑（8）



第139図　土坑内遺物

第６表　竪穴住居跡出土土器観察表（１）

挿図	住居号数	番号	分類	器形	部位	施文・調整 外面	施文・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
21	1･2	1	3e	円筒	口縁	貝刺突･貼付文	ナデ	茶褐色	灰茶褐色	石英･輝石	
		2	3e	円筒	口縁	貝条痕･貝刺突･貼付文	ミガキ	茶褐色	黄茶褐色	石英･輝石	
		3	3e	円筒	胴部	貝刺突･貼付文	ケズリ	茶褐色	灰茶褐色	石英	
		4	3e	角筒	口縁	貝刺突･貼付文	ミガキ	茶褐色	茶褐色	石英	
		5	3類	角筒	胴部	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	石英	
		6	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英	
		7	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英	
		8	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ケズリ	茶褐色	赤茶褐色	石英･輝石	
		9	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ケズリ	茶褐色	赤茶褐色	石英	
		10	3類	角筒	底部	キザミ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英	
23	3	1	3e	円筒	口縁	貝条痕･貝刺突･貼付文	ケズリ・ミガキ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･ウンモ	
		2	3類	円筒	胴部	貝刺突	ケズリ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･砂粒	
		3	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英･砂粒	
		4	3類	円筒	底部	方形刺突･キザミ	ケズリ	茶褐色	黒褐色	石英･砂粒	
		5	3類	円筒	底部	キザミ･ナデ	ナデ	茶褐色	黒褐色	石英	
		6	3e	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突･貼付文	ケズリ	茶褐色	黒褐色	石英	
		7	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	淡茶褐色	茶褐色	石英･ウンモ	
		8	3類	角筒	底部	キザミ･ナデ	ナデ	茶褐色	黄茶褐色	石英	
27	5	1	3類	角筒	胴部	貝刺突･線状痕	ケズリ	茶褐色	黄茶褐色	石英･輝石･ウンモ	
		2	3類	角筒	胴部	貝刺突		茶褐色	茶褐色	石英･砂粒	
		3	3類	角筒	胴部	貝刺突･貼付文	ケズリ	赤茶褐色	茶褐色	石英･砂粒	
30	8	1	3類	円筒	胴部	貝刺突	ケズリ	茶褐色	茶褐色	石英･砂粒	
		2	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･砂粒	
33	9	1	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突		黄茶褐色	黄茶褐色	石英･ウンモ･輝石	
		2	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突･ナデ	ケズリ	黄茶褐色	茶褐色	石英	
35	10	1	3類	円筒	胴部	貝刺突･ナデ	ナデ	赤茶褐色	焦茶褐色	石英･ウンモ･茶粒	
		2	3d	角筒	口縁	貝刺突･ナデ･貼付文	ケズリ	茶褐色	茶褐色	石英･ウンモ･茶粒	
		3	3類	角筒	胴部	貝刺突･ナデ	ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英	
		4	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	黒茶褐色	黄茶褐色	石英･茶粒	
38	11	1	3類	円筒	口縁	貝条痕･貝刺突	ナデ	黒茶褐色	茶褐色	石英	
		2	3類	円筒	口縁	貝刺突･貼付文		茶褐色	茶褐色	石英･ウンモ	
		3	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	茶褐色	黒茶褐色	石英	
		4	3類	円筒	胴部	貝刺突･ナデ	ケズリ	茶褐色	黒茶褐色	石英	
		5	3類	円筒	胴部	貝刺突	ケズリ	黄茶褐色	茶褐色	石英	
		6	3類	円筒	胴部	貝刺突･ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	石英･輝石	
		7	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ケズリ	黒茶褐色	茶褐色	石英･輝石･ウンモ	
39	11	8	3類	円筒	胴部	貝刺突･線状痕	ナデ	黒茶褐色	焦茶褐色	石英･ウンモ	
		9	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英	
		10	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ケズリ	茶褐色	黒茶褐色	石英	
		11	3類	円筒	底部	貝刺突	ケズリ・ナデ	赤褐色	黄茶褐色	石英･ウンモ	
		12	3類	円筒	底部	キザミ	ケズリ・ナデ	赤褐色	黒茶褐色	石英･ウンモ	
		13	3類	角筒	口縁	貝刺突･キザミ	ナデ・ミガキ	赤褐色	赤茶褐色	石英	
		14	3類	角筒	口縁	方形刺突･ナデ	ケズリ	茶褐色	茶褐色	石英･ウンモ	
		15	3類	角筒	口縁付近	貝条痕･貝刺突	ケズリ・ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･ウンモ	
		16	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突･ナデ	ケズリ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英	
		17	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英	
44	15	1	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英	
		2	3類	円筒	胴部	貝条痕･方形刺突	ナデ	黄茶褐色	茶褐色	石英･ウンモ	
		3	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ・ミガキ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･ウンモ	
		4	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英･ウンモ	
		5	3類	円筒	胴部	貝刺突	ミガキ	白茶褐色	焦茶褐色	石英	
		6	3類	円筒	底部	キザミ	ケズリ	茶褐色	茶褐色	石英	
46	16	1	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	黒茶褐色	茶褐色	石英	
		2	3類	円筒	胴部	刺突	ナデ	赤茶褐色	黄茶褐色	石英	
		3	3類	円筒	底部	刺突･キザミ	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英	
		4	3類	円筒	底部	刺突･キザミ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英	

第７表　竪穴住居跡出土土器観察表（２）

挿図	住居号数	番号	分類	器形	部位	施文・調整		色調		胎土	備考
						外面	内面	外面	内面		
46	16	5	3類	円筒	底部	キザミ	ナデ	茶褐色	赤茶褐色	石英	
		6	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英	
		7	3b	角筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ナデ・ミガキ	黒褐色	黒褐色	石英・ウンモ	
48	17	1	3類	円筒	口縁	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英	
		2	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	黒茶褐色	石英・ウンモ・砂粒	
		3	3類	円筒	胴部	貝刺突・ナデ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・輝石	
		4	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・砂粒	
		5	3類	角筒	胴部	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・小礫	
49	18	1	3e	円筒	口縁	貝刺突・貼付文	ナデ・ミガキ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英・ウンモ・小礫	
51	19	1	3c	円筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ケズリ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・ウンモ	
		2	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	石英	
		3	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英	
		4	3類	角筒	胴部	貝刺突	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英	
54	21	1	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・ウンモ	
		2	3類	不明	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	黒褐色	石英・砂粒	
		3	3類	不明	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	黒褐色	石英・砂粒	
57	24	1	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	石英・輝石・ウンモ	
		2	3類	円筒	胴部	貝刺突	ケズリ	茶褐色	淡茶褐色	石英	
		3	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	石英・輝石・茶粒・小礫	
		4	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突・キザミ	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英・ウンモ	
		5	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英	
		6	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英	
		7	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英	
	23・24	8	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ケズリ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・輝石	23か24
58	23・24	9	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ケズリ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・輝石	23か24
		10	3類	円筒	底部	キザミ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英	23か24
		11	3類	円筒	底部	貝条痕・貝刺突・キザミ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英	23か24
		12	3c	角筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・輝石	23か24
		13	3類	角筒	胴部	貝刺突	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英	23か24
60	25	1	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英・輝石	
		2	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	石英・輝石・砂粒	
		3	3類	角筒	胴部	貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・小礫	
		4	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	赤茶褐色	白茶褐色	石英・輝石・ウンモ	
64	28	1	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ケズリ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・茶粒	
		2	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英・砂粒	
		3	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英	
		4	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英	
		5	3c	角筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・輝石	
		6	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
		7	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	黒褐色	茶褐色	石英・小礫	
		8	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	黒褐色	茶褐色	石英	
		9	3類	角筒	底部	貝条痕・貝刺突・キザミ	ケズリ	黄茶褐色	茶褐色	石英・長石	
		10	3類	角筒	底部	貝条痕・貝刺突・キザミ	ケズリ	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
		11	3類	円筒	底部	キザミ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・輝石	
66	29	1	3類	角筒	底部	貝条痕・貝刺突・キザミ	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
66	30	1	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・砂粒	
70	31	1	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・ウンモ・長石	
		2	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・長石・砂粒	
		3	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・	
		4	3類	角筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・長石	
		5	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
71	31	6	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・ウンモ	
		7	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	黄茶褐色	茶褐色	石英・小礫	
		8	3類	角筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・ウンモ・小礫	
		9	3類	角筒	底部	貝条痕・貝刺突・キザミ	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・ウンモ・砂粒	

第８表　竪穴住居跡出土土器観察表（３）

挿図	住居号数	番号	分類	器形	部位	施文・調整 外面	施文・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
72	32	1	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黒褐色	石英･砂粒	
		2	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	茶褐色	赤茶褐色	石英･長石･ウンモ	
		3	3d	角筒	口縁	貝条痕･貝刺突･貼付文	ナデ	黒褐色	赤茶褐色	石英･長石･ウンモ･輝石･砂粒	
75	33	1	3類	円筒	口縁	貝刺突･貼付文	ナデ	茶褐色	赤茶褐色	石英･砂粒･小礫	
		2	3類	円筒	口縁	貝刺突･貼付文	ナデ	茶褐色	赤茶褐色	石英･砂粒･小礫	
		3	3類	円筒	口縁	方形刺突･貼付文	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英･砂粒	
		4	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英･砂粒･小礫	
		5	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ケズリ	茶褐色	暗茶褐色	石英･ウンモ･長石･砂粒	
		6	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	茶褐色	赤茶褐色	石英･砂粒･小礫	
		7	3類	円筒	底部	貝刺突･キザミ	ケズリ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英･長石･茶粒･砂粒	
		8	3類	円筒	底部	貝刺突･キザミ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	石英･長石･ウンモ･砂粒	
		9	3類	角筒	口縁	貝刺突･貼付文	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英･ウンモ･砂粒･小礫	
		10	3類	角筒	付近	貝刺突･貼付文	?	灰茶褐色	灰茶褐色	石英･	
		11	3類	角筒	口縁	貝刺突	ケズリ	茶褐色	茶褐色	石英･長石･茶粒･砂粒	
		12	3類	角筒	付近	貝刺突	ケズリ	黒茶褐色	茶褐色	石英･ウンモ･砂粒	
		13	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突･貼付文	ケズリ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･	
76	33	14	3e	ﾚﾓﾝ形	胴部	貝条痕･貝刺突･貼付文	ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･輝石･長石	
		15	3類	ﾚﾓﾝ形	口縁	貝条痕･貝刺突	ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･輝石･長石	
79	35	1	3類	円筒	付近	貝条痕･貝刺突	ナデ	茶褐色	黒褐色	石英･砂粒	
		2	3類	円筒	口縁	貝刺突	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英･砂粒	
		3	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	茶褐色	赤茶褐色	石英･砂粒	
		4	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･長石･ウンモ･砂粒	
		5	3b	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英･長石･ウンモ･砂粒	
81	36	1	3類	角筒	胴部	貝刺突	ケズリ	黄茶褐色	茶褐色	石英･長石･ウンモ	
		2	3類	角筒	胴部	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	石英･長石･砂粒	
		3	3類	角筒	口縁	貝条痕･貝刺突	ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･砂粒	
83	37	1	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突･貼付文	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英･砂粒･小礫	
		2	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英･輝石	
		3	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英･輝石	
		4	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ケズリ	黄茶褐色	灰茶褐色	石英	
		5	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英	
		6	3類	角筒	口縁	貝条痕･貝刺突	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英	
		7	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英	
		8	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	石英	
		9	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	石英･ウンモ	
		10	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英･ウンモ	
84	38	1	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英･長石･砂粒	
		2	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突･貼付文	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英･長石	
85	39	1	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	灰茶褐色	石英･長石･ウンモ	
		2	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	黒茶褐色	茶褐色	石英･長石･砂粒	
		3	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	茶褐色	明茶褐色	石英･長石･砂粒･小礫	
		4	3類	角筒	胴部	貝刺突	ナデ	茶褐色	黒茶褐色	石英･ウンモ･小礫	
		5	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英･砂粒	
87	40	1	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	赤茶褐色	黒褐色	石英･長石･砂粒･小礫	
89	42	1	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	暗茶褐色	赤茶褐色	石英･砂粒	
90	43	1	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突･方形刺突	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英	
93	45	1	1類	円筒	胴部	貝条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英･長石･ウンモ	
		2	1類	円筒	胴部	貝条痕	ナデ	暗茶褐色	暗黄茶褐色	石英･砂粒	
		3	3類	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	赤茶褐色	灰茶褐色	石英･長石	
		4	3類	?	胴部	貝刺突･キザミ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英･長石	
95	46	1	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突	ナデ	黒茶褐色	茶褐色	石英･砂粒	
		2	3類	円筒	胴部	貝条痕･貝刺突･キザミ	ナデ	茶褐色	黒褐色	石英･長石･砂粒	
		3	3類	角筒	底部	貝条痕･貝刺突	ケズリ	黄茶褐色	茶褐色	石英･長石･砂粒	
		4	3d	角筒	胴部	貝条痕･貝刺突･貼付文	ナデ	黒茶褐色	暗茶褐色	石英･長石･砂粒	46か47
97	49	1	3類	角筒	底部	貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英･小礫	
		2	3類?	円筒	胴部	貝条痕?	?	茶褐色	茶褐色	石英･ウンモ･小礫	

第９図　竪穴住居跡出土土器観察表（４）

挿図	住居号数	番号	分類	器形	部位	施文・調整 外面	施文・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
99	50	1	3c	円筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・ウンモ・輝石・長石	
		2	3類	円筒	胴部	貝条痕・方形刺突・貼付文	ナデ	暗茶褐色	灰茶褐色	石英・ウンモ	
		3	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突・貼付文	ナデ	暗茶褐色	灰茶褐色	石英・ウンモ	
		4	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	茶褐色	赤茶褐色	石英・輝石・長石	
		5	3類	円筒	底部	貝条痕・キザミ	ナデ	茶褐色	赤茶褐色	石英・輝石・長石	
		6	3類	角筒	胴部	貝刺突	ナデ	黄茶褐色	暗茶褐色	石英・輝石・長石	
		7	3類	角筒	底部	キザミ	ナデ	暗茶褐色	赤茶褐色	石英・茶粒	
101	51	1	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	灰褐色	赤茶褐色	石英・長石・輝石	
		2	3類	円筒	底部	貝条痕・貝刺突	ナデ	赤茶褐色	黒褐色	石英・長石・輝石	
		3	3類	角筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ナデ	灰黄茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・輝石	
		4	3類	角筒	口縁付近	貝条痕・貝刺突	ケズリ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・輝石	
		5	3e	角筒	口縁	貝条痕・貝刺突・貼付文	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英	粒子細かい
		6	3e	角筒	口縁付近	貝条痕・貝刺突・貼付文	ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・長石・ウンモ	
		7	3類	角筒	胴部	方形刺突	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・ウンモ・輝石	
		8	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・ウンモ・輝石	
		9	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	石英	
		10	3類	不明	底部	キザミ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・輝石	
102	52	1	3類	円筒	口縁	貝刺突	ナデ	黒茶褐色	灰黄褐色	石英・長石	
		2	3類	円筒	口縁	貝刺突	ナデ	黒茶褐色	灰茶褐色	石英・長石	
		3	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・輝石	
		4	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・輝石	
		5	3類	円筒	底部	方形刺突・キザミ	ナデ	灰茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・輝石・ウンモ・白雲	
		6	3類	角筒	胴部	方形刺突	ナデ	黒褐色	赤茶褐色	石英・長石・輝石	

第10表　竪穴住居跡内出土石器観察表

挿図	住居号数	番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量 (g)	備考
23	3	9	石皿	安山岩	6.4	5.9	3.8	220	
24	3	10	石皿	安山岩	22.5	22.5	6.6	2900	
27	5	4	磨石	安山岩	(6.8)	6.1	3.4	213	
30	8	3	磨石	安山岩	7.75	10.6	4.9	481	
33	9	3	磨石	安山岩	11.95	6.65	4.75	437.2	
35	10	5	磨石	安山岩	10.15	4.5	3.8	203.4	
46	16	8	石皿	安山岩	8.3	8.8	6.6	815	
48	17	6	磨石	安山岩	5.6	4.15	3.05	92.2	
51	19	5	石皿	安山岩	8.4	7.1	2.6	210	
54	21	4	磨石	安山岩	6.0	7.25	3.95	232.9	
58	23・24	14	石斧	頁岩				15.5	
	23・24	15	礫器	安山岩	22.7	10.35	5.45	1460	
60	25	5	磨石	安山岩	9.5	6.35	4.85	447.9	
	25	6	磨石	安山岩	17.75	9.4	9.15	1115.8	
62	26	1	石皿	安山岩	10.6	9.0	4.7	705	
71	31	10	石皿	安山岩	9.2	7.5	2.6	198	
76	33	16	磨石	安山岩	7.95	5.8	4.3	284	
	33	17	砥石	安山岩	8.05	6.0	3.65	217.9	
78	34	1	礫器	安山岩	13.3	18.35	5.6	1095.7	
79	35	6	磨石	安山岩	(6.6)	(6.6)	7.85	286.1	
84	38	3	石皿	安山岩	10.8	8.1	3.7	360	
87	40	2	石皿	安山岩	16.4	16.6	8.6	2120	
90	43	2	石鏃	チャート	1.9	1.95	5.0	1.5	
	43	3	石斧	頁岩	4.95	7.15	2.0	82	
93	45	5	磨石	安山岩	4.4	4.85	2.5	67.9	
97	49	3	磨石	安山岩	16.4	9.0	4.75	932.9	
102	51	7	磨石	安山岩	(7.35)	7.05	4.5	353.6	
	51	8	磨石	安山岩	10.0	6.45	7.35	644.4	

第11表　連穴土坑内出土土器観察表

挿図	番号	号数	分類	器形	部位	施文・調整 外面	施文・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
106	1	11	3類	円筒	口縁	貝条痕・貝刺突・貼付文	ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	石英・長石	
	2	11	3類	円筒	胴部	貝刺突・貼付文	ナデ	黄褐色	黄褐色	石英・長石	
	3	11	3類	角筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ケズリ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・長石	
	4	11	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突・貼付文	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・長石	
	5	11	3類	角筒	胴部	貝刺突	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英・長石	
	6	13	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	?	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・小礫	
	7	13	3類	円筒?	底部	貝条痕・貝刺突・キザミ	ケズリ	赤茶褐色	暗茶褐色	石英・長石	
	8	13	3類	角筒	口縁	貝条痕・貝刺突・貼付文	?	赤茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・小礫	
	9	13	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石	
	10	13	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	黄茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂・小礫	
	11	14	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ケズリ	暗黒褐色	暗茶褐色	石英・長石	
	12	15	3類	角筒	胴部	貝刺突	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	石英・長石	

第12表　集石内出土土器観察表

挿図	番号	号数	分類	器形	部位	施文・調整 外面	施文・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
124	1	28	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	黒茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	2	29	6類	深鉢	胴部	綾杉文	ナデ	赤茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・カクセン	
	3	32	10類	深鉢	胴部	山形押型文	ナデ	黄茶褐色	灰黄褐色	石英・長石・小礫	
	4	33	13類	深鉢	口縁	縄文	刺突・ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・小礫	
	5	46	9a	深鉢	口縁	貝羽状	ミガキ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
125	6	46	9a	深鉢	口縁	貝羽状	ミガキ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
126	7	47	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突		赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	8	47	3e	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突・貼付文	ミガキ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	9	54	3類	角筒	底部	キザミ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	10	61	3類	円筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ケズリ	暗黄褐色	暗茶褐色	石英・長石	
	11	61	9b	深鉢	胴部	貝羽状	ミガキ	赤茶褐色	暗赤褐色	石英・長石	
	12	61	9b	深鉢	胴部	貝羽状	ミガキ	赤茶褐色	暗赤褐色	石英・長石	
	13	62	18類	深鉢	口縁	貝刺突	ナデ	赤茶褐色	暗茶褐色	石英・長石	
	14	68	3類	円筒	底部	キザミ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	15	68	9?	深鉢	底部	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	16	70	4?	円筒	胴部	貝押圧?	ナデ	灰黄茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	
	17	71	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石	
	18	77	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ケズリ	黒茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・砂粒	
	19	77	3類	円筒	胴部	貝刺突	ナデ	明灰茶褐色	黄茶褐色	石英	
	20	77	3類	円筒	底部	キザミ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・小礫	
	21	77	3類	角筒	底部	貝条痕・貝刺突・キザミ	ケズリ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石	
127	22	79	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	23	81	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	24	82	3類	円筒	底部	貝条痕・貝刺突・キザミ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・小礫	
	25	83	10	山型	胴部	山形押型文	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・小礫	
	26	83	10	山型	胴部	山形押型文	ナデ	灰黄茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	
	27	91	3類	角筒	口縁	貝条痕・貝刺突	ケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・茶粒	

第13表　集石内出土石器観察表

挿図	号数	番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
128	29	28	石皿	安山岩	27.8	12.6	6.8	2790	
	29	29	石皿	安山岩	15.1	14.6	7.5	1730	
	44	30	石皿	安山岩	15.1	10.3	6.1	1100	
130	82	31	磨石	安山岩	8.8	5.8	4.5	348	
	82	32	石皿	安山岩	18.1	10.9	4.9	1270	

第14表　土坑内出土土器観察表

挿図	番号	号数	分類	器形	部位	施文・調整 外面	施文・調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
139	1	34	9	深鉢	胴部	羽状文	ミガキ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・カクセン	
	2	98	3類	円筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ケズリ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石	
	3	103	9	深鉢	口縁	羽状文	ミガキ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・長石・小礫	
	4	103	9	深鉢	胴部	羽状文	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	5	135	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ケズリ	黄茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	6	135	3類	角筒	胴部	貝条痕・貝刺突	ナデ	黄茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	
	7	135	3類	角筒	底部	キザミ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・長石	
	8	136	3類	円筒	底部	貝刺突・キザミ	ナデ	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・ウンモ	
	9	136	3類	角筒	胴部	貝刺突	ケズリ	黒茶褐色	灰茶褐色	石英・長石	
	10	171	10	深鉢	胴部	山形押型文	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石	

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（41）

国分上野原テクノパーク第４工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）

上野原遺跡

（第２～７地点）縄文時代早期編（第１分冊）

発行日　平成14年3月29日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-5652　鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地
☎(0995)65-8787
印刷所　斯文堂株式会社
〒892-0838　鹿児島市新屋敷町14-16
☎(099)226-3747